

---

# とある無題の音響（トーンレンジ）

冷えピタ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

とある無題の音響<sup>トレンディング</sup>

### 【Nコード】

N4833P

### 【作者名】

冷えピタ

### 【あらすじ】

新章：暗部編突入 とある魔術の禁書目録の世界での話。主人<sup>オ</sup>公桐原<sup>リジナル</sup>崩は、唯一学校の寮に住まずにとあるアパートに住む学生。平和を好む桐原は、学園都市でアパートの住人たちに巻き込まれ、原作のキャラクターに巻き込まれ、彼の日常はどうなるのか？そして、彼の抱え込んでいるものは何なのか？平和な日々を求めて彼は学園都市で奮闘する。結構オリジナルキャラクターが出て来て、ストーリーが進みます。苦手な方はすみません。2011/10/8/0:29 過去の話修復中……。現在『彼女の正体』まで修

復しました。

## 始まり（スタート）（前書き）

どうも、冷えピタです。

名前の由来は、自分がどこか冷めてるから（失笑）（友達何故か爆笑）

インデックスは友達に教えてもらってから好きになりました。友達よ、ありがとう！

小説を書くことに関しては素人ですが、二次創作という形で力を借りて頑張りますので、どうぞよろしくお願いします。

## 始まり（スタート）

「アーアメン、 ジーイーインググレイース、ー」

歌い続ける彼女。

その高く、美しい声は、彼女のいる荒れ果てた地面に深く響き渡り、

彼女のそばにいる僕にも響き渡った。

それは、とても

綺麗で

優しい。

なのに、

それなのに、

彼女の出血は止まらない。

僕はただ、彼女のその美しい声を聞かず、流れ続ける赤い血に手を

染めて、泣きじゃくっていた。

「お願いだよ、止まってくれよ……」

目から流れる涙が口に入る。それだけでは止まらず、制御が効かない鼻水と一緒に、彼女から流れる血と一緒に、荒れた地面を濡らした。

「アアアイ、スイイーーー」

歌い続ける彼女のそばで、僕はただ泣き続けていた。

その時、

彼女は歌うのをやめて、僕の手を握った。

「……………」

「嫌だよ……」

「……………」

「君がいないと……僕はどっしするのぢっ。」

「」

「なあ、……おい」

「」

「返事を……してくれよ……」

「……」

彼女の手が僕の手から滑り落ちた。

甲高く、世界に終わりを告げるように、

泣き声は鳴り響いた。

キ

「うお」僕は上半身を起こす。  
自分の部屋だった。

ベッドの上から見える視界は見慣れたものだ。  
しかし、今の夢を振り返る余裕がないぐらい、僕の部屋は異常に満ちていた。

「ウオオオオアアアアア！、アアアアアア！、ア！、ウオオオオア

「アアアアアアアア！」

横に化け物がいる。

僕は無言のまま、物凄い勢いでその頭を叩く。  
すると、化け物は鳴り止んだ。

時刻は、7時30分。

「さ、最悪だ」その一言に尽きる。

とある友人からもらった、

絶叫目覚まし時計。

起きれること間違いなし。

確かに間違いではないが、これは駄目だろ。

絶対に苦情がくる。

よっぼど起こしても起きない人のために作られたのだろう。この音量がMAXじゃないだなんて……、馬鹿にされたみたいで不快感はMAXだ。発売して成功したレポートを、簡潔にまとめて見せてほしい。

起きれること間違いなし。(12字)

……言い返せねえ。

「ウオオオオアアアアアアアア！」

「うおー！」



スヌーズモードの解除を忘れていた。慌てて再び絶叫する目覚まし時計を止める。こんなものが三分ごとに鳴られたら、たまったもんじゃない。

悪霊も顔負けだ。

いや、もしかしたらこれは悪霊が取り憑いているのかも知れない。

「……………」

何だ、この違和感。

僕は、おもむろに机の引き出しから紙を取り出すと、《悪霊退散》と走り書きをして、それに叩きつけた。

ああ、もの凄い安堵感。

そして気を取り直し、朝をやり直そうと起き上がって背伸びをした。

一旦、リセットだ。

僕の日常が始まるのだから。

しかしこの時、叩きつけた衝撃でスヌーズモードが設定されていたことを、僕は知る余地もなかった。

始まり（スタート）（後書き）

いや、こんな感じかな？

どうなのだろうか？やっぱり、あまりわかりませんね（笑）

よければ、感想をください！

ありふれた日常（オーディナリイ）（前書き）

なんか…

残酷な描写があると言ったものの…

戦闘入れる機会を見失った…

では、

第二話です。

## ありふれた日常（オーディナリイ）

時刻は、8時15分。

僕は、学校の教室の扉を思いきり開けた。

勢いよく反動した扉の音を聞いて、一人の生徒がこちらを向いた。

金髪のツンツン頭、サングラスを着用した高1には相応しくない風貌であるのは確かだ。

「にやー、桐原！どうだった？朝の目覚め…」

「土御門。よくも、変なもんくれやがって！」言い切る前に僕は土御門の胸ぐらを掴む。

「お前のおかげさままで、僕の目覚めは鍋底景気よりも最悪だ」

「き、桐原、あんまり怒るなよ。でもどうだ？パンクロッカーになれただろ？」

「なれねーよ！」

本当のパンクロッカーを知らないな？

「朝から騒がしいな」土御門の後ろの席に黒髪の、これまたツンツン頭な少年が来た。という粗末な扱い方をすれば、きつとこいつは「不幸だ」とまた口にするに違いない。

僕の友達、上條当麻。いつも通り不幸に登校。

「なんだか、始まった当初から不幸な感じがする」

「いつも通りだな」

「おはよう、上やん」

「ういっす。おはよう、桐原」

「ああ、おはよう、上条」

「しかし、桐原は朝からどうしたんだ？」

「いい目覚まし時計があると、土御門がくれたやつがとんでもない不良品だった」僕は今朝の不快感を溜め息混じりに吐き出す。

「また土御門か……」

「だが、目覚まし時計としての役割は完璧だにやー」

「だからといって、悪霊つきはないぞ」

……

「にや？」

「は？」

上条と土御門は一瞬きよとんとしたが、その後、二人一斉に吹き出した。

「桐原！科学で証明された学園都市で悪霊だなんて、面白いことを言うにやー！」

「どうしちゃったんだ？桐原！」

「ほんま、変なこと言うなー、桐原」

土御門の前の席であるピアスをつけた青髪も大きくなる僕たちの話に乗ってくる。

いつもの風景だ。

「いや、確かに止めたはずなのに、また鳴り始めたんだよ！」

例の目覚まし時計を取り出して説明するが、悪霊退散の貼り紙がっぱにはまり、二人の爆笑は勢いを増すだけだった。

きつと、その紙を貼り付ける拍子にスヌーズモードが設定されたのだ、という僕より十分可能性のある冷静な理論で、クラスの三バカに、悪霊説は打破された。すでに三バカの笑い声の大きさに、他の生徒たちにも聞こえていたようで、クラス中に様々な笑い声がこだまする。

「なはは、そろそろ桐原も普通キャラを気取っているが、ボロが出てきたにゃー」

「うるせえ」

「どうだ？この際、三バカへの御入団を決意なされては？」

「何でだよ！」

「いいぜ、面白いよ。学校生活満喫は約束されてるにゃー」

「いつも補習で学校に残っていれば、学校生活をエンジョイしていると思うのは大きな間違いだ！」

「お願いだ、桐原！俺と変わってくれ！」

「上条が一番、一番抜けにくいよ」

右腕にはやにや笑いながら勧誘する土御門、左腕には必死に懇願する上条といった、端から見れば何ともおかしい凶になっていた。その時、クラスが笑いに包まれている中、扉を開けて誰かが教室に入ってきた。もちろん、今の時刻8時25分を考えれば、誰であるかなど考えることもない。

小萌先生だ。童顔で身長の低さからして、小学生とほぼ変わらない。しかし、上条情報では、お酒も嗜むし、煙草もそうだ。

見かけによらないが、生徒たちに接する姿勢は教師の鏡であり、評判はとても良い。

まとめてしまえば、いい先生なのだ。

「はい、ホームルームを始めるので席についてくださいーい」  
クラスは落ち着きを取り戻したはずだったが、  
「ではでは、今回の連絡事項は一つだけ。補習者の発表です」  
そんな始まりの挨拶に、再びクラスがどよめいた。しかし、僕の前  
の三人は違う。  
早くも落ち込んでうなだれていた。そんな滑稽な三人を見て僕は内  
心、こっそりとこいつらを笑う。  
「補習者は、ー」

発表が続く。

「ーくん、土御門くん、上条ちゃん、

土御門と上条が机の上に崩れ落ちた。

僕は笑みを隠せないまま、前の上条の肩を叩く。

「ドンマイ」

「不幸だー…」上条の弱々しい声の後、

小萌先生の声は、

終わらなかった。

桐原ちゃん。」

「あ、はい、」

「ん？」

一瞬固まった。

理解できない。

りかいできない。

リカイデキナイ。

「あー、あれね」僕は自分の席を立って、小萌先生のいる教壇へ向かう。

「どうしたのですか？桐原ちゃん」



「時が過ぎるのは早いですね。つい最近日直をやったと思えば、  
たもう一度回ってきましたか……」

「桐原ちゃんは昨日日直だったじゃないですか！補習ですよ」

「あー、先生。僕は、日蓮宗なんですけど」

「禅宗じゃありません！補習です！」

「ほしゅっっっ」

「補習！」

「捕手？」

「補習！……」

補習補習補習補習補習補習補習補習しゅっほしゅっほしゅっほしゅっ  
ほしゅっほしゅっほしゅっほしゅっほしゅっほしゅっほしゅっほしゅっ……

ドブプラー効果で僕の心に響いた……

僕は静かに教壇をあとにする。

戻る途中にニヤニヤ笑う土御門と上条がいた。憎たらしいくらい、こごぞとばかりにニヤついてやがる。

「ドンマイ」

僕はその言葉を背に受けて席に帰ると、机に崩れ落ちて、

そして上条の真似をした。

「ふ、不幸だ…」

どうやら仲間入りは確実のようだ。

序章(プロローグ)

2011/5/15/20…20修復、  
「迷惑をおかけ

あー、

なんかやっとストーリーが進みだした…

でも、ここから悩むんだよなー…

あー

皆さん、変な箇所は目をつむりましょう。

ではでは、第三話です。

「「「あー、しんどい」「」」

僕たち三人は吐き出した。

補習といつても学園都市では普通のものではなく、育脳（開発）だ。あれからの僕と上条に土御門といえば、小萌先生の一時間にも及ぶ理論科学の説明をみっちり聞かされた後、いろんなテスト漬けになる何とも言えない凄惨な結果に終わってしまった。おかげで肩が凝る。

「なあ、これからどうか行かないかにやー？」

現在時刻4時30分、

「俺はパス」

「僕も」

「にやー!？」あまりにもそっけない上条と僕の答えに土御門は金切り声を上げた。

「つれないにやー!？ 地下のゲーセンでも行こうぜ!？」

「悪い。俺、家に帰ってインデックスの飯作らねーと」

この言葉を聞いた瞬間、

土御門は絶叫した。

「あー、なんで上ちゃんにはそういうフラグばかり立つんだにやー！？」

「てめえ、俺の気持ちも知らずに言うな！！」即座に、上条は猛抗議する。

「それに加えて、常盤台のレールガンまで手中に納めやがって！男の敵だ！！」

「そいつのおかげで、俺は幾度となく死にかけてんだよ！」

インデックスはよく上条から聞くし、無論会つてもいたからよく存じあげていましたとも。ひよんなことから居候しているシスターのことだ。確にかわいいが、食費の面ではかわいいなんてもんじゃないだろう。超電磁砲<sup>レールガン</sup>は、今じゃ学園都市で言わずと知れたの常盤台中学のlevel5、御坂美琴だ。上条の 幻想殺し（イマジジンブレイカー）に負けたの余程悔しかったらしく、以来ずっと、毎日のように勝負を挑んでいる。いや、……たぶん御坂の好意を持っている……まあ、鈍感な上条にしては大変なんだろうな。

似たような境遇だから、何かわかる。

「なあ桐原！お前もそう思うよな！？」

「あ、ああ、そうだな」

「んー？　なんか煮え切らない感じだぜ！？」

「いや、まあ……上条も大変だなあと思つて」

「なっ！？」土御門がのけぞつた。

「桐原！！」ガツ、と上条は僕と肩を組んでくる。

「やっぱり桐原はわかつてくれるよな〜！！」

「大変そうだけど、頑張れよ！」

「ああ、お互い頑張ろうぜ！」

ガシツと、僕と上条は握手を交わした。

「あいつら、何て鈍感なんだにゃー!？」また、土御門が絶叫した。

その後、僕たちはいつもの場所で別れた。

上条や土御門は学生寮で生活をしているけれど、

僕は諸事情により違うアパートに住んでいる。

今考えれば学生寮の方がいくらか……いや、随分と良いものに違いない。

僕の住むアパートは学校からたいして遠くなく、かといって近くないちょうどいい距離にある。近くにはスーパーもあるので不便でもないし、安い家賃の割には一人暮らしには十分な1LDKで、意外にも満足度は高い。

ただ、

問題は住民だろう。

と、僕はそのアパートを目の前にして思う。

二階建てになっているアパート。ありたいの形で塗られていて、今は6月のため花はさいていないが、近くに大きな桜の木が立って

いる。一階には三部屋、二階には二部屋が割り当てられていて、僕の部屋は二階の奥の部屋だ。

「おい、崩」桜の木の下で僕を呼び止める二つの影があった。一人は一生懸命になって土の上に絵を描いて遊ぶ小学一年生にも満たない少女と、もう一人は僕に視線を向けて呼びかけた小学五年生だ。

エルギオンス兄妹、このアパートの住人だ。

「お腹が減った。何か食べさせる」

「食べさせる」兄のエバンスの無礼な言葉の後に続いて、妹のカルマも純粹無垢な笑い声を発した。

「お前ら、それが人にものをたのむ態度か？」

「何を言う。俺は貴族だぞ？」

「貴族だぞー」

私は貴族だ、というのがエルギオンス兄妹の、というよりは意味をよく知るエバンスの口癖だった。

「そして、妹はツンデレだぞー」

「ツンデレだぞー」

「何言い出すんだ!？」

「よし、カルマ、特訓の成果を見せてやれ」

エバンスが言うと、カルマが僕の方へと走り寄ってきた。

そして、

「べ、別に、あんたを待つてたわけじゃないんだからね!…」

フン、とカルマは後ろを振り返り走って戻ると、エバンスの後ろで恥ずかしがっていた。

「どうだ? 崩。興奮しただろ?」

「お前は、兄として失格だー!!」

結局、僕はエルギオンス兄妹のために、スーパーへ行くことになった。どうやらいつも面倒を見ている住人の扇さんは不在のようだ。カバンを自分の部屋に置いて、制服のまま出かけることにした。

「きつと上条も、こんなだろうな」とほほ、と思いながら階段を降りきる。

その時、ブワアと風が吹いた。

桜の木がサァーと揺れる。

僕には、

それがとても心地よく感じられた。

「ではでは、買いに行きますかね」



僕はスーパーに向かって歩き始めた。

今から起きることの

予想なんてつかなかった。

序章（プロローグ） 2011/5/15/20：20修復、1迷惑をおかけ

序章という形になりました。

次からやっところさ一章目みたいな感じですよ。

ここから、オリジナルキャラが続々と登場して、話が展開していきます！

次の話は、

車椅子の少女、という話が続きますので、

またぜひ、1覧下さい！

**車椅子の少女（東雲青葉）（前書き）**

新しいオリジナルキャラクターが早くも登場します。

そして、早くもそのストーリーが始まっています。

ちょっと急過ぎるだろうか。

いやまあ気にせず、行きましよう！

では、第四話です。

車椅子の少女（東雲青葉）

「んー、こんなもんか」

ありがとうございますでした、というスーパーの店員の声を背に、僕はスーパーを出た。

右手に袋を一つ。

買ったものは、

カップ麺×3

おにぎり×4

お菓子類×2

ジュース類×2

合計千三百円。

おおよそ、今を生きる高校生としては健康を全く考えていないセレクトだろう。

僕はもうこんな生活を続けて長いから、体はボロボロなはずだ。しかし、料理は全くできない。

諦めるしかないよね。

市販のおにぎりなどを食べていると保存料の効果で、死んでも胃が腐らずに残るとは本当だろうかなどとすでに手遅れな心配をしながら歩いていった。

そんな中、交差点にさしかかった。

時刻は、4時20分。

赤信号が青に変わるのを待っているのは、僕を合わせて二人。もう一人は、

車椅子の少女。

僕は彼女の後ろに立っているため前から見ることはできないが、綺麗な長い黒髪が車椅子の背もたれにかかっているのが印象的だった。

しかし、

それだけの感想じゃ終わらせてはくれない。

まだ信号は赤のままなのに、

少女の車椅子が動き出す。

(ん、信号が変わるのか?)

僕はふと、顔を上げて辺りの信号を見渡す。

もの凄く赤だ。

(少し移動するだけか)

そう思ってみるが、明らかに止まる素振りがない。

だんだん横断歩道に近づいていく。

比例して不安も募る。

そして、決定打が起きた。

彼女の頭が、

カクンと揺れた。

(寝てるじゃねえか！)

僕は彼女の車椅子を止めるために走り出す。

もうすぐで、彼女を乗せた車椅子は道路に乗り出してしまっ。

まるで見合わせたように、横からバス。

「っ！」

僕は最大限に手をのばした。

ブオオオオン、と音を立てて、

バスは何事もなく通り過ぎる。

僕の手はかろうじて、彼女の車椅子の押し手を掴んでいた。

「危ねえ……」

僕は彼女の乗っている車椅子を引いて横断歩道から離れる。

一件落着。

なんだが、

「嘘だろ」

彼女はまだ眠っていた。

「これはどうするべきか……」僕は彼女の正面へ回る。

その時、初めて彼女の顔を見た。

長い黒髪がよく似合う優しい顔つきで、少し口を開けて眠る姿は何とも言えない。

しかし、

僕の視線は彼女の膝にそつと重ねて置いている手にいった。

彼女の手はひどく汚れてボロボロで、所々切れて血が流れ固まった部分もある。

だが、まずは起こすことから始めようか…。

「すうー、すうー」と小さな寝息を立てている、

彼女の頬をつねった。

「むむっ…」彼女は呟くと、意識を取り戻していく。

「おーい、寝過ぎだ」

「ふうえ？」

彼女と目が合った。

しばし沈黙。

「あの、…誰？」

当たり前の反応だ。

「あー、つまりだなー…」そう言えば、どう説明したことが。

「もうすぐ、車にひかれる寸前を助けたみたいな感じだ」

「そ、そうなんですか?!」

「何も覚えてないんですか?!」

そっちの方がおかしい。

「すいません、寝ていたもので…」あはは、と彼女は僕に笑って見せた。

信号は青になる。



「どうもありがとうございました。では、私は…」  
「僕が送りましょう」

「へ？」彼女は唐突な僕の提案にきょとんとした。

「いいですよ。そんな心配は…」

「でも、その手を見なかつたふりなんてできないな」

あつ、と彼女は慌てて自分の手を隠そうとする。しかし傷を隠そうとした手までもがボロボロなことに気付き、あぐねた様子で、僕を見て苦笑いした。

「大丈夫。野暮なことは致しません。心配なので、送らせてもらうだけです」僕は執事の真似事をして、深々と頭を下げる。そして、彼女に笑って見せた。

「ぷ、ふふふ」と彼女が笑った。

何故かそのとき、

その顔が、僕には少し違うものにも見えた気がした。

「じゃあ、お願いする」

「ん、ああ…。任せなさい」

僕はそう言つと彼女の後ろに回つて、車椅子を押して横断歩道を渡りきる。

「どこに行こうとしてるんだ？」

「えーっと、じゃあ駅までお願いしようかな」

「はいよ」

ん、そういや…。

「名前は何て言うんだ？」

「しのめあおは東雲青葉。君の名前は？」

「桐原崩。よろしく」

「崩？なんか変な名前」東雲はクスツと笑う。

「よく言われるよ」ははは、と僕は苦笑いした。

「しかし、そんなに急いでどこに行こうとしたのさ」

「え、あ、うん。別に何も無いよ。ただ帰ろうとしただけ」

「そうなのか？」

「うん、ただそれだけ。君は？」

「買い出し。下の階の住人に腹減ったってせがまれて」

「えっ、そんなことがあるんだ！」

「ああ、大変でさ。うちのアパートは変わり者しか住んでないよ」

「じゃあ、君も変わり者なの？」

「えっ！いやいや、僕は…」

「ふふふ、君面白いね」

「あはは、…よし、少し寄り道していい？」

「ん、どうしたの？」

「ちよっとしたことだよ」

僕が彼女と共に向かった先は、

自分の家だった。

別にいやらしい気持ちはない。

「ここは？」

「僕の住んでるアパート」

「へえー、意外だな。想像してたのと全然違った」

「そうか？」

「うん、とつても素敵だね」

「んー、まあ…大変だけどね」

アパートに近づくと、まだ桜の木の下にエルギオンス兄妹はいた。

エバンスはこちらに気づき、

「おい、崩。食べ物は…」と言いかけ、一緒にいる東雲青葉に気付いた。

「あ、あ、…」

「どうしたんだ？」

「たいへんだ、譲姉！崩が、女の子を連れてきた！いやらしい展開に発展しそうだよ！エロゲーの展開だよ！」

「意味不明なこと言い出すな！」

緊急事態と言わんばかりに、エバンスは部屋に駆け込む。

この空気が、なんか気まずい。

それを解消したのは、カルマだった。

「おかえりー、崩兄！」

「ただいま、カルマ」

「……………、だれ？」カルマの興味は東雲に向けられる。

「あ、えつと、……………」彼女は少しおどおどしながらも、自分の名前を言った。

「東雲青葉って言うの…」

「あおば？……………あおば！いいなまえ！」カルマはそう言うと、ぎゅつと東雲の足に飛びついた。

最初は少しびっくりした様子だったが、あはは、と笑ってカルマの頭を撫でようとした。だけど、その手は引っ込められる。

「おっと、そうだ。ちょっと待っててくれ」僕は思い出したように、二階の自分の部屋に行くと、救急箱を持って彼女のもとへ戻った。

「手、貸して」

「う、うん」

僕は彼女の手には消毒をして応急処置をした後、包帯を巻いた。

「これで、大丈夫だ」僕は笑うのを見て、彼女は少し間の抜けた声で喋る。

「これのために？」

「ああ。手、動かせる？」

「うん」

そして、恐る恐るカルマの頭を撫でて

笑った。

「おい、なんだなんだ？」一階の部屋から、ある女性が現れた。黒のジーンズにカットシャツといった仕事帰りの後のような姿に、長い茶髪を後ろでくくって煙草をくわえている。スラリとして背が高く、僕よりも少し高い。

「あ、扇さん」

「なにやら、エバンスから、お前が女の子を誘拐したと聞いたのだが…」

「それはエバンスの妄想です」

「崩が女の子を…。僕は夢を見ているのか？ 目が腐ってしまったのか？」

「さらりと酷すぎだろ！」

「で、こちらは…？」

「交差点であつたんですよ。手を怪我してたんでちょっと応急処置を」

「そっかい。扇議（ougiyuzur）だ」

「どうして名字がローマ字なんですか」

「キャラ替えだ」

「あんた初登場だよ！」

「し、東雲青葉です」彼女はおずおずと挨拶する。

「崩になにか粗相なことをされたらすぐに言いなさい。すぐにでもあいつを消してあげるからね」

「怖いのでやめて下さい。って、そんなことしません」

「絶対、部屋で間違いが起きるパターンだよ」

「お前は何でさっきからエロゲー的観点なんだ!!」

くすくす、っと僕たちのやりとりを聞いて東雲は笑う。

ふと、僕は会話の中で、彼女が笑う度に、笑ったことがなかったのだろうか、と思った。

それぐらい彼女の笑った顔が初めてであった僕にさえ驚く程新鮮に感じられた。

「じゃあ、駅まで送り届けてきます」

「ああ、しつかりな」

「皆さん、おじゃましました」

「お茶も出さず、すまなかつたね」

「いえ、そんな」

「あおば！またあそびにきてね！」カルマはまた東雲の足に飛びつく。

「……うん、ありがとう」もう一度、彼女は優しくカルマの頭を撫でた。

「しつかりな、エロ崩」

「帰ったら覚えておけ、エロンス」

そして、また僕たちは駅への道を進み始める。

「ふふふ、みんな面白い人達だね」

「変人ばかりだよ」

「でも、楽しかったよ」  
「まあ、そうとも言えるけど」  
「君、ちょっとひねくれ者だね」また東雲は笑った。  
君、いや、お前、違うな。しの、しのの、……  
「青葉はどうなんだ？」  
「ふえ?!」東雲は驚くような声を上げた。  
「あ、ごめん。東雲ってなんか言いにくくて。やめようか?」  
「あ、いや、その、青葉でよろしくお願いします……」青葉の顔は赤  
くなっていた。

なんだ、この展開は!!

「じゃあ、私は崩って呼んでいい?」  
「もちろん」  
「崩。あはは、崩だ」  
「なあ、これって馬鹿にされてるのか?」  
「ねえ、崩」  
「何だ?」  
「今日は凄く楽しかったよ」  
「どうしたんだよ。いきなり」  
「うっん、なんか言っておきたくて」

何か言えない憂鬱感が漂う。横顔が何故か切ない。

「……横に大きな木があったろ?」  
「え?」唐突な言葉に青葉は振り返る。  
「あれ、桜なんだ」  
「桜?」

「春になれば、薄桃色の花を咲かせるんだ」  
僕の方を振り向く青葉に僕は言った。

「春になったらまた来いよ。みんな喜ぶ」  
その言葉を聞いて、青葉は

笑った。

普通に、笑った。

何事もなかったように、

ただ単純に、笑った。

「うん、そうするよ」

そう答えて、

動き始めた次の瞬間だった。

僕の左肩に激痛が走った。

**車椅子の少女（東雲青葉）（後書き）**

唐突ですが、

もう東雲青葉ストーリーなのです。

主人公の紹介もろくにしないで始まっています、

後にはひけません（汗）

ここから、東雲青葉の話と桐原崩の正体などが徐々に現れていきます。

次回から急展開なので、

またぜひご覧下さい！



**襲撃（アンチ）（前書き）**

いせー、

冬休みです。

はい、暇です。

ではでは、第五話です。

## 襲撃（アンチ）

ピュン、という小さな音の後に、僕の左肩が急激に熱くなった。ぐらあつと体が前のめりになる。その激痛に僕は右足で踏ん張ることで精一杯だった。

「ぐあー！」

「どうしたの?!」

青葉が振り向いて僕を見る。

僕はとつさに左肩を押さえた。

手には真つ赤な血。

「銃撃…!!」

また、金属音。

今度は足に激痛が走った。

「ぐあー!!」

「崩…!!」

「……見つけた」

誰もいない小さな道にぼそつと呟くような声が響いた。

現れたのは、白衣を着た男だった。身なりはきれいに整えられて、いかにも科学者のような雰囲気。オールバックにした髪の毛で、限りなく無表情な顔がこちらを正確に捉えている。

「逃げても、無駄だ」

その声に、視界の隅に見えた青葉の足下から、横で青葉が小さく震えているのがわかった。

「さあ、早くこちらへ」

男の声を示す相手、恐る恐る僕は彼女の方を向く。

青葉はただうなだれていた。

「おい、待て！」

「……何だい？」白衣の男はまるで僕を無視していたかのような口調で対する。

「一体、どういことだよ！」

「何がだい？」

「なっ……！」予想外の反応だ。

「お前は青葉とどういう関係なんだよ?!」

「……別に君が知ることはないだろ。しかし、あまり自分の名前が知らないが、妄言はやめておけ、演算回路フィンベル」

「妄言…なんかじゃ、ありません…」青葉は震える声を絞り出した。

「おい、聞いてるのか!」

うっ。

途切れ途切れに、少し視界がぼやける。二つの銃痕から、おびただ夥しい血の量が左手を伝い、足を伝い、地面へと流れ始めていた。

「君には無関係だと言ったはずだが」

「無関係だと…!よく言うよ。何発撃つたと思ってんだ…」

「そういえば、そんなこともあったかな」

(こいつ…) 言いようのない怒りが蓄積していく。

「だから、君には関係ないんだ。これは、私たちと研究材料の問題なんだよ」

「研究材料だと?」

「私は…: 違う!」 青葉が白衣の男に叫んだ。

「私は、研究材料なんかじゃない!」

「…今回は、少し度が過ぎるんじゃないか」

右手を構えた男から発せられる乾いた金属音。

「ぐああ!」

僕の左腕に銃弾が突き刺さった。

「崩!」

「この少年を死なせたくなければ、自らこちらに來い」

それが、白衣の男が提示した彼女への選択だった。

一瞬の沈黙を破って、青葉の掠れた小さな声が僕の耳にとどいた。

「崩……」

「青葉………？」

「私、………行くよ」

「………」

「ごめんね、………桜見に行けそうにないや………」

「何で………だよ」

「帰るんだよ………、崩が家に帰るみたいに、私も帰るんだよ」

「どこに………帰るんだよ……？」

「私が………いるべき………場所だよ」

「嘘だ」

僕は、はっきりと言えた。体は重たい。肺が苦しい。一言喋るだけで、呻くだけで、筋肉の収縮が手に取るようにわかって、そしてそれに連動するように肩口の傷口からどくどくと血が流れ出す。でも、そんな状態であっても、これだけは言えたのだ。

「帰ってしまったえば、…もう二度と約束を果たせなくなるなんて有り得ない。そんな重々しい別れの挨拶をしないと、…帰れない場所はない。俯いて、…歯を食いしばって、…涙ポロポロ流しながら、…かすれた声で言う…《私がいるべき場所》なんて、あるわけないだろ」

青葉が顔を上げた。

その顔は涙でぐしゃぐしゃだった。

「泣くなよ……」

僕は、よろつきながら立ち上がる。

「うう、うう、うう……」と、泣きじゃくる青葉の前に立った。

「しっこいな、君も」白衣の男が、ため息を吐くようにもらす。

「そういう人間なんで……」

(今ならあの男は銃を手に持っていない。銃をとるまでに早く行けば、大丈夫だ)

相手の意表をつくために見計らって、僕は突然最大速度で走り出した――

(いける！)

「どこを見ている？」

横からそんな声が聞こえる。

目をそらせば、黒服の男が立っていた。

「なっつ！」

いつからだ？

しかし、そんな事を考える暇もなく、僕はコンクリートの壁へと飛ばされた。

「があっ！」

大きな音が鳴り響く。

(能力者が…！)

「くそっ……っ！」

すぐに立ち上がろうとしても、体は鉛のように動かなかった。明らかに出血量が一定ラインを越していた。視界だけがどんどん霞んで奪われていく。

「残念だったな」

意識が朦朧とするなか、視界に捉えたのは白衣の男だった。

「何もしなければ、死なずに済んだかもしれないかったのにな」  
そう言って白衣の男は、

僕の頭に、銃口を向けた。

甲高く響いたのは、青葉の叫び声。



そうか、

あの時と同じように

また僕は

誰も守れずに死ぬのか

「……せめてえ……」

二秒後

乾いた銃声が響いた。

僕は

闇に呑まれた。

**襲撃（アンチ）（後書き）**

今回ぐちゃぐちゃになったような気がする…

ぜひ感想ください。

彼女の正体（ディテイル）（前書き）

連続です。

では、第六話です。

## 彼女の正体（ディテイル）

テン、テン、テン、……

近くで機械音が鳴っているのに気づいた。

僕は思い瞼を開く。

視界一杯に、見慣れた天井。

「家？」

確かに、アパートの僕の部屋だった。

辺りを見回してみると、病院で使うような医療器具が僕の傍に数台ある。

「痛っ！」

無理に体を動かしたせいか、左肩が激痛を伴った。

それがかぎ刺激になって、ようやく僕は思い出す。

青葉は連れて行かれたのだ。  
また、だ。

僕は何か耐えきれなくなつて、天井から目を離し、頭を横に向けた。  
するとそこに位牌があつた。

「……何で横に位牌が？」  
僕の生徒帳と一緒に置かれていて、果物、カップ麺などが、供えられてる。

あれ、やっぱり死んでるのかな？  
不安になつてきた。

「目が覚めたな」  
扉が開いて、誰かが入ってくる。  
声からして扇さんだった。

「扇さん」  
「よお、元気か？」  
そう言いながら、僕の寝ているベッドの前にあぐらをかいた。  
供えられていたカップ麺のフタを開く。  
ホワッと蒸気が上がった。

「お湯入れてたんかい！」

死んでいないが一つ言わせてもらつと遺憾である。

ふっと笑う扇さんは、出来上がったインスタントラーメンをすすりながら、「んで、どんな感じだ？黄泉の国から帰ってきた感想は」と僕に聞いてきた。

「まだ死んでませんよ。確かに死んだとは思いましたけどね」

「そりゃそうだ。左腕に二発、右足に一発、腹部に一発、計四発も食らえば、出血多量で死んでもおかしくないからな。現に、お前からは二リットル以上の血液が失われていた」

「……………そうですか」

「ん、どうも腑に落ちなさそうな顔だな。死にたかったのか？」

「……………いや、何でもないです」

「お前が出て行った後雨が降り出してな、傘を持って迎えに行ったんだ。そしたら、駅に着く前に血まみれのお前を見つけたわけだ」  
「そうですか」

「青葉ちゃんはいなかったが」

「……………」

「連れ去られた、か」

「……………はい」

そうしか言えなかった。

「そうか」扇さんは、たいして驚かなかった。

「あまり、驚かないんですね」

「まあね」

「何か知ってるんですか、扇さん」

「おお、崩君。君は私の心が読めるのかい？」

「わざとらしいですよ」

「そうだな。お前が寝ている間に少し調べさせてもらったんだ」

食べ終えたカップ麺の容器を、箸をきちんとそえて横にどけると、扇さんは話し始めた。

「彼女はいわゆる実験体だ」

いきなりシリアスだ。

「この前、学園都市の人口衛星おりひめが破壊されたのは知ってるな？」

「はい、確かニュースで流れていましたよね」

ニュースで報道しているのをちらつと見た覚えがある。

「実は、あれには秘密裏にあるものも搭載されてたのさ」

「え？」

「……さらつと言ってるが、結構なカミングアウトなんじゃ……」

「それを樹形図ツリーダイアグラムの設計者と言う。私たちの聞いている予言のような天気予報をするのがそれだ」

扇さんは話を続ける。

「まあ、ツリーダイアグラムは簡単に言うと、とっても大切な演算機だ。私たちの生活にも直結しているしな」

演説口調の扇さんは次の言葉を強調した。

「だが、科学者達の間では、ツリーダイアグラムは違うことにも利用されている」

「」

扇さんは矢継ぎ早に質問を繰り出した。



「ツリーダイアグラムが天気予報を計算する単位は何だと思う？」

「……一日一日なんじゃ」

「1ヶ月単位だ」

「しかし、僕にはあまりその凄さがわからない。それを明確にしたのは、次の言葉だった。

「つまり、一日で1ヶ月先までの天気予報を演算するんだ。当然、そうなれば日にちが余らないわけないよな？その時間を使って科学者達は実験のシミュレーションを行うのさ」

僕は少し、背中にひんやりしたものを感ずる。

「そんな二重の意味で大切な演算機がなくなつた今じゃ、困ること限らないよな。だから、する事は一つだけ。

替えを用意するのさ」

「それが、彼女……」

「その通り」

扇さんは溜め息を一つつく。

「彼女は何だか知ってるか？」

「どういう意味です？」

「彼女はな、原石なんだよ。演算回路<sup>フィンベル</sup>。それが、彼女の能力名。人間が絶対不可能と思われた計算さえ、ものの数分でやってのけてしまふ。普通とは一線も十線も越した存在だ」

「……………」  
「そんな彼女を使って、新たな演算機を作る。これが私の調べたことだ」

僕は黙って、体を起こした。

「はい、これ」

扇さんは僕に向かって紙切れを渡した。

「ん、何です？これ」

「知想大研究所。東雲青葉の居場所だよ」

扇さんはポケットから煙草を取り出し火をつけた。

「どうせ、助けにいくんだろ？」

「……お見通しですか」

「当たり前だ。だからこそ、私は救急車も呼ばずここでお前を治療したんだし、お前が寝ている間に現状を調べたんだからな。それに、私は何も知らないでお前が黙って勝手に助けにいくなんてされたら、とても気分が悪い」

「うっ…申し訳ないです」

本当に頭があがらない。

僕は立ち上がると、下が制服のままであったのもあり、カッターシヤツを着た。

「動いても大丈夫なはずだ。5日間も寝ていたんだからな」

「5日間も寝てたのか！」

自分では全くの自覚なしだった。

僕は玄関に向けて歩いていく。

「なあ」

扇さんは僕を呼び止めた。

「お前どうして、この前たった一回会っただけの少女を助けようとするんだ？」

「……」

「それにお前、能力ちからを使うつもりだろ。苦しい過去を思い出したりしないのか？」

「…しますよ」

正直に言えば、今まで通りにしたい。でも何より、いつかのあの言葉が僕を突き動かした。

「この能力は、誰か苦しむ人を、あなたが守る為に使って」  
「……」

「最後に彼女が僕に言った言葉です」

「ふっ、お人好し」

「ありがとうございます」

「夕飯までには帰ってこい」

「わかりました。、扇さん」

「何だ？」

「ここ、禁煙です」

僕にふふっ、と扇さんは笑った。

いつてきます、と僕は扉を開けて外に出る。

「おっ、崩じゃねえか」アパートの階段を下りてすぐ、エバンスに会った。

「なんだ、悶絶して死んだんじゃないの？」

「お前か、位牌を持ってきたのは。どっから持って来たんだよ」

「とある墓から」

「それ絶対駄目じゃん！」

最近の子供はマナーがなってねえ！

「返しとけよ！」

「わかってるよ」エバンスは笑う。

「なあ崩」

「ん？」

「貴族って何だか知ってるか？」

「そのまんまだろ」

「違う。俺が言う貴族ってのはな、

誰かを守るうとする者のことだ。

金持ちでも、貧乏でも、子供でも、大人でも、そんなことは関係ない。たった一つの正義の信念に基づき、誰かを守ろうとする者を貴族って言うんだよ」

「……ははっ」

僕は笑ってしまった。いきなり小学生が、なに小恥ずかしい講釈を垂れているのだから。

「本当に生意気だわ、お前。どこでそんな教育受けたんだよ」

「もとからだ。俺は貴族なんだぜ？」

「そうですか」

そう呟いて、僕はまた歩き出した。

「おい、崩。何しに行くんだ」

「散歩」

行く場所は、もう決まっている。

彼女の正体（ディテイル）（後書き）

……

感想をください！

思考（フリクション）（前書き）

では、第七話です。

思考（フリクション）

彼女は、

東雲青葉は、

研究材料であった。

本当に、

それだけだった。

「ここか」扇さんにもらった紙切れにかかれた地図を頼りに、僕は

目的地に着いた。

目の前には、大きな建物がそびえ立つ。

知想大研究所。

「かなり、でかいな…」

警備がきつそうだ、と僕は少しうろたえる。

まあしかし、どうするべきかという手強い障害が悩みの種。

「あー、これならかつこつけずにもう少し考えて行動すべきだった」と僕は扇さんにもらった紙切れをぐしゃぐしゃにしようとした。

「ん？」

よく見れば裏にも何か文字が書いてある。

『正面から、建物左側4つ奥の窓。更衣室。』

扇さんの字だった。

(さすが、扇さん)

ありがとうございます、と小さく呟いて僕は行動に移った。



- 知想大研究所内部 -

「上手い具合に入れたな」

僕は更衣室にあった白衣を着て知想大研究所内部を歩いていた。内部構造はいたって単純だ。一階と二階が筒抜けの状態になっていて、僕が今いる場所がどうやら中心のようだ。

青葉はいつたいたいどこにいるのか。

「あのーすいません」

僕は通りすがりの、同じ白衣を着た研究員に話しかけた。

「東雲青葉ってどこにいましたっけ？」

「ん、誰だ？それは」

「あっ」

そうか、青葉は名前を知られていなかった。

彼女は

ただの研究材料。

実験体。

フィッセル  
演算回路

その能力としか見なされていない。

僕は彼女のことを実験体の名称で呼ぶのに、抵抗を感じずにはいられなかった。

「……………演算回路の居場所はどこでしたっけ」

「何だ？お前新人か？」

「はい」

「しょうがないな。その角を右に曲がった一番奥の部屋だ」

「どうもありがとうございます」

「おい、お前」

急いで立ち去ろうとした時、その研究員は僕を呼び止める。

「何か用でもあるのか？」

「……………ええ、まあ。彼女の健康状態を調べるので」と僕はてきとつな理由を出任せに言った。

「なら、今はその部屋には今いないぞ」

「え？」

「今なら実験室にいるはずだが」

「それは、どこにあるんです？」

「そんなことも知らないのか？」

「あはは、すみません」僕は簡単に相づちを打つ。

「まあいい、地下一階だ。エレベーターで行けるぞ」

「ありがとうございます」

僕はその場を離れた。

急いで実験室へ向かうべきなのだが、この研究所ないにいる研究員達をどうするべきかまだ考えていない。

そんな中、僕はある部屋で立ち止まった。

青葉の部屋だ。

扉を開ける。そこは、とてもシンプルで、椅子と机とベッド、そして幾つかの本棚とクローゼットが並べられていた。窓はなかった。些か生活感に欠けている。

「ここが……、青葉の……」

ふと、僕の視線は机に向く。

机の上には何冊かの本とノートが置いてあった。

「これは……」

ノートに綴られた、文。青葉の日記だ。

僕はそれを見て、

胸が張り裂けそうだった。

奥歯をぐっと噛みしめる。

手を強く握ることで、何とか自分を押さえつける。

僕は早く、青葉のもとへ行くために部屋をでた。

しかし、どうする？

こんなに研究員がたくさん居るのに、バレずに青葉のもとまで…

そんな中、研究所内部に鳴り響いた。

「研究員に通達します。今から300号室で会議を……」

研究所のアナウンスだった。

「これだ」

アナウンス室はおそらく二階の突き出している部分だろう。  
僕はアナウンス室へ急いだ。

トントン、と扉をノックして中に入る。

「はい？どちらさま」

アナウンス室にいた研究員は僕を見る前に膝から崩れ落ちて、床に倒れた。

僕はその研究員をわきによけると、マイクの前に立った。

ボタンを押す。

マイクが繋がった。

そして僕は、

顎の下にある喉元に手を当てて、

声にならない

音をだした。

†

2月15日

外は凄く寒いみたい。

学園都市の人々は何をしているだろうか？

私はずっとここにいるから、あまり四季というものを感じたことがない。

3月4日

実験の成果を上げたので、少しの外出許可が出た。私はまた逃げ出してみようと思う。もし日記がここで終われば、成功したことになる。なんか、こんなためにつける日記なんて寂しい。

4月18日

実験がどんどん苦しくなってきた。頭が割れるように痛い。

5月15日

足が動かなくなった。

もう歩けない。

車椅子の生活になってしまった。

こういうときに限って何故だろう？諦めていたのに逃げたくなる。

6月7日

たぶん、これが最後の逃亡になりそう。

車椅子だから失敗しそうだ。

全力で逃げよう。

ふと、

僕は白衣を脱ぎ捨て、研究員全員が床に気絶して倒れている中を歩いているとき、

青葉の日記を思い出した。

僕はそれで、

横断歩道であった時、送りましょうという僕の言葉に、優しく笑った彼女の顔が、どこか違うものに見えた理由がやっとわかった。

彼女は

諦めたんだ。



何度も逃げ出して、何度も捕まった。

それでも、彼女は逃げ出したかった。

でも、

僕に会って

言われたこともない優しい言葉を言われて、

もう、いいかって思ったんだ。

どうせ捕まるんだから、

最後くらい、

こういつのもいいかもしれない

彼女はそう思ったんだ。

僕はそう思わせてしまったんだ。

彼女の、たった一つの微かな光を、

僕が消してしまった。

無責任に

優しさをばらまいて

僕が消してしまっただ。

なんてことを、僕はしてしまったんだろう。

悔やんでも悔やみきれない。

日記はまだ続いていた。

まるで、僕を庇うような文章に感じた。

6月11日

最後の逃亡は失敗に終わってしまった。でも、いつもとは違うことが起きた。

初めて声をかけられた。

交差点で私の車椅子を止めてくれたのだ。最初はちよっとうさんくさかったけど、彼の笑顔はとても優しくかった。

彼は私の怪我している手を見て、とても心配してくれて、家まで行って治療してくれた。

家は素敵な場所だったな。大きな桜の木がとても綺麗だった。

あ、そうそう。住民もみんな個性的だった。茶髪が綺麗な二人の兄妹。たぶん、外国人。どこ出身か凄い気になる。お兄ちゃんの方は特別変わってたなあ。妹のカルマちゃんは人なつっこくて、とても可愛いかった。

そして、扇譲さん。モデルみたいに背が高く、かつこいい印象が残ってる。あれこそ、クールビューティーって言うのかな。煙草の吸いすぎには気をつけて欲しいと、一人で思ったりもした。でも

みんな楽しそうだ。

帰るときは、少し寂しさも感じた。そうだ。

私は、下の名前で初めて呼ばれた。ちよつとドキドキしてしまった。

彼は、私にいろんなことを教えてくれたと思う。どれも新鮮で忘れられない。

でも、そんな彼が、追ってから私を守るために怪我をした。

何も知らない私を守るために、重傷を負ってしまった。それが、悔い。

あの時関わってしまった自分を呪いたくてたまらない。もし、神様がいるなら、もう抵抗はしないから、楽しかった思い出も返すから、私の命ももう好きにしているから、だからどうか、

崩だけは助けてください

彼女は、そう思った。

涙を流しながら

震えた鉛筆で

そう書いて、

願った。

こんなの、あんまりじゃないか。

トーン、と  
エレベーターの扉が開いた。  
地下一階のボタンを押す。

「青葉」

僕はぼそつと彼女の名前を呟き、

そして、大きな声で言った。

「必ずお前を助ける」

エレベーターの扉が、地下一階と僕を繋いだ。

思考（フリクション）（後書き）

.....

ぜひ感想をください！



無題（ノーネーム）（前書き）

ではでは、第八話です。

## 無題（ノーネーム）

地下一階の床には光が差ししているのがわかった。

そこは、横幅15メートル、高さ20メートル、奥行き100メートルといったところだろうか。少し学校の廊下を大きくしたような空間だ。両側の壁には飾りの窓がつけられていて、窓の外側から光を太陽に見立てて当てているため、床には規則性のある影が出来ていた。

地下一階だというのに、何故か地上を思い出させる幻想的な空間だった。

どうやら、向こうの空間をつなぐ廊下のような。

廊下の終わりには、扉があり、

そして、

一つの人影もあった。

門番。

どうやら、地下まではマイクは繋がっていないなかったみたいだ。

僕は、黙って歩き続ける。

近づくにつれて、相手のシルエットがはっきりし始める。

黒服の男。  
あの時の男だ。

僕はある程度の距離まで来ると、止まった。そして目を合わせて対峙する。

「おや、君は以前の」

余裕のある紳士口調で、黒服の男は僕に話しかけてきた。

「どうも」

僕はてきとうな相づちを打つ。

「おかしいな…死んだと思っていたんだが…まさか生きていたとはね。君もなかなかしぶといんだね」

「はっ、常識並みだ」

「しかし、君は何故ここにいるんだ？ 研究員じゃあるまいし…。まさか…？」

僕は答えない。

すると男は、いきなり褒め称えるような口調で喋り出す。

「いや、実に素晴らしい心構えだね！ 現代では稀にしか見れない男の子だよ、少年。彼女を助けに傷を負ってでも来るなんて素晴らしい、実に素晴らしい」

「あまり棚にあげるな」

「その上格好もつけないとは、ますますいい子に見えるじゃないか」  
僕の言葉にも、大げさに手を広げたりして、男は対応する。

だが、一変。

「……でも、それをさせる訳にはいかないんだよ。この場合、私の仕事は君を殺すことになるからね」  
冷やかな笑み。

まあ、そうなるわな。

「いいから、そこどけ」僕は淡々と言った。

「そうか、なら殺すことにしよう」「そう言って、男は手の関節を鳴らす。

僕も軽く身構えた。

「ああ、一つ親切心から言っておくよ」

「何だ？」

「私の能力は肉体強化だ」  
アブリティイ

「そんなこと、あの時で大体予想がつく」

「それが大きな間違いなんだよ、私が一番誇るのは怪力じゃない」

「は？」

そんな僕の声をよそに男は走った。

それはものすごいスピードで。

男の体からは考えられないような速さ。

気付けば、男は僕の前で拳を振りかぶる。

僕は両手で守ろうとするが、むなしく、体ごと勢いよく飛ばされ、

壁に激突した。

音が響く。

壁は崩れる。

その煙が辺りに広がった。

「速さだって、言うのが遅かったかな。少し緩めたつもりだが、大丈夫かい？」男はからかうように言う。

「問題ない」

「！」

僕の声を聞いた男が驚く。

「何驚いてんだ？」僕はけむりから抜けて男の視野の中に出た。

「一度も僕が能力者じゃないなんて言っていないだろ」

僕は、壁が崩れて出てきた鉄パイプを拾い上げる。

「どくなら今の内だぜ？」

「ふっ、たった一本の鉄パイプ持っただけで何をいきがっている…」

男はいたって冷静であるかのように装うが、

動揺は隠しきれしていない。

「いいからどけよ」

「図に乗るな！」

男は走りだそうとした。

「遅え！」

僕は鉄パイプで思い切り壁を叩く。

音が、

空気を抉って

壁を抉って

反響する。

「チエスト！」

それは何よりも速く、

壁を抉り続けて、

男へ到達した。

「がああ！」

鳩尾を抉られた激痛に、男は悲痛な声を上げると後ろへ吹っ飛ばされる。

「な…何だ、今のは……」

「おい、」

僕は男の前に立つ。

「わるいが、僕は向こうに用がある」

「調子に乗るなよ……」

男の低い唸り声が聞こえた。

「いきなり強くなったからといって調子に乗るな!!」

男は内ポケットから拳銃を取り出し、前へ突き出す。

しかし、

そこには誰もいない。

「なっ……!!」

「終わりだ」

僕の声は

男の後ろから響く。

「な……どうやって……?お前は……一体何の能力なんだ……」

「教えるか、馬鹿野郎」

「……………く…くそがあああー！ー！」

「キャラ、壊れてる」

僕は、高い音を奏でた。

意識が途切れたように、男の頭は地面に吸い込まれた。

「……………ふうー」

こうしておけば、ものの数時間程で意識を取り戻すだろう。

僕は、男のもとを離れて扉へ向かう。

扉を開けると、5メートル程の床を挟んでまた扉があった。

僕は歩いていき、



扉に手をかける。

この向こうに青葉がいる。

僕は、

扉を開けた。

「え……」

僕の目に飛び込んできた映像は、信じられないものだった。

驚愕。 呆然。 見ているものに、まったく現実味を感じられない。

地下にあるとは思えない、巨大な半球形の空間。

そして、目の前にはその空間に負けないぐらい大きな機械があった。それは大きな黒い装置。

その機械は遣伝子の配列のように、まるで階段のように大きな螺旋を成していて、その上で様々な色に輝く光が点滅し、上から下へと

蛇のように行き回っている。そしてそれを支えるようにそれぞれの場所から4本の支柱が突き出していた。

そして僕は

彼女を見つけた。

僕の目線の上方、その機械の一部螺旋が崩れた場所に、

得体の知れない液体の中で、

何本ものコードを張り巡らせ、

上下繋がった服を一枚だけ来て、

静かに瞳を閉じて

彼女は

収納されていた。

埋め込まれていた。

「あ、青……葉……」

「何だ、また君か」  
誰かの声が響いた。

コツコツと、歩く音。

僕は、その音のする方向へ目を向ける。

あの時の白衣の男だった。

二人(･･････････) (前書き)

連続ですが、第九話です。

二人(……………)

「本当にしつこいね、君も」

白衣の男は僕に言った。

無表情は変わらない。

「私はしつこい奴は大嫌いでね」

「そうかい」

「そこに門番をつけていたはずなんだが。もしかして、君はそいつを倒してきたのか？」

「ああ、悪かったな。お前の研究所の研究員だったか？」

「まさか、あんな体力だけの奴が研究員なわけないだろ。上からの支給だ。それより、なかなか君もやるんだね」

「どうでもいいだろ、そんなこと」

「ふん。確かに、どうでもいい話だな」

そう言つと、男は僕に背中を向け、歩き始めた。

「おい、どこに行くんだ！」

僕は慌てて男を呼び止める。

「言つたら？私にとって君はどうでもいい。研究の邪魔だ。悪いが帰ってくれ」

「なんだと……」

「言つたら。帰ってくれ」

そのままの無表情で、男は戻っていく。

「お前は彼女を使って何をしてるんだ？」

「……実験のシミュレーションさ。彼女は今莫大な計算をやっている。人間では不可能とさえ思われていた」

「そんなことして、何が楽しい！」  
僕は大声で怒鳴った。

男は歩みを止めた。

「高校生のような女の子に、コードを何本もつけて、何回も実験させて、苦しませてまで計算をさせて、その結果を得て何が嬉しいって聞いてんだよ！」僕は男に向かって歩き出す。

男は無言だった。

「お前は知ってるのか！ あいつはな、すぐに悲しそうな顔をするんだ！ すごく楽しかった後に、まるでこれは一時の夢だっというように、すぐ悲しむんだよ！ 笑ったってどこか悲しげな表情しか出来ないんだよ！」

あの時、

僕の約束に笑ったのがそうだった。

すぐに自分のことを思い出して、

どっと溢れるつらさを

誰にも悟られないように

こらえて、

笑ったんだ。

「お前に青葉の何がわかるんだ!!」  
僕は拳を握る。

「……………うるさいなあ」  
その時、男は低い唸り声のような声をあげた。

「楽しいわけないだろ…。嬉しいわけないだろ…。お前に何がわかるんだ!!」  
男は怒鳴り声とともに僕の方に振り向く。

手に拳銃が握られていた。

「あああああああああ!」  
「あああああああああ!」

バン、と乾いた銃声が一発。

男は勢いよく床に倒れこむ。



僕は腹部を押さえて床に膝立ちでしゃがみこんだ。

「ぐっ！」

幸い銃弾は貫通していたが、傷口から血が溢れ始めていた。

「何が、わかるんだ……」

男が小さな声で呟いた。

「お前に、何がわかるんだ……」

その声には、今までなかった感情が滲み出ていた。

「お前に、

私と……私の娘の何がわかるんだ……」

「…………え？……………」

今、何て…………。

「今、…………何て…………娘…………？」

「そうだ……」  
男はこちらを向いた。  
その顔は、

今までの無表情ではなくて、

感情が映った顔で、

あの時、

銃口を僕の頭から腹部へ変えた時の顔で、

青葉の叫び声を聞いた時の、

あの苦しそうな顔で、

僕に言った。

「東雲青葉は私の娘だ……」

二人(････････････) (後書き)

今回、

一つ一つが短いので、まとめて載せました。

ぜひ感想ください！

## 物語(サッドストーリー)(前書き)

またもや連続します。というか、連続しないとだんだんわからなくなるんで…

ではでは第十話です。

## 物語（サッドストーリー）

語り。

これはある物語。

これはある家族の物語。

ある親子の物語。

ある所に一人の男がいました。彼の名前は、東雲静波。ごく普通の、まじめで優しい性格です。そんな彼は、ある大きな研究組織に就職し、そこで寝る間も惜しんで研究に打ち込んでいました。とある日のことです。彼は一人の女性に出会いました。彼女の名前は、暮春紅葉。そして彼は紅葉と一緒にいる中で、とても優しく、辛い時はいつもそばにいてくれる彼女にだんだん惹かれていたのです。また、紅葉もそっと優しくしてくれる、そんな彼を好きになっていました。

そして彼らは結婚しました。

子供も生まれたのです。

その子供の名前が、

東雲青葉。

幸せが訪れるはずでした。

誰もが一様に得ることができ、

誰もが切に欲しがっている、

幸せが訪れるはずでした。



しかし、それは

来なかったのです。

生まれて来た彼女は、

特殊でした。

変わっていて、

外れていて、

普通とは、違っていたのです。

彼女にあらわれた力こそが、

フインベル  
演算回路でした。

これに気づいた研究者たちは、小さい頃から彼女を幽閉しようとして  
ました。

それに彼らは反対したのです。

研究者であるからこそその決意で、彼らは青葉を守っていました。

しかし、ある日、

青葉を守り続けていた暮春紅葉は、研究者たちによって

殺されたのです。

邪魔だから、殺されたのです。

青葉は、むなしくも研究者たちの手に回ってしまい、静波はただ悲しみに暮れるだけでした。それでも彼は諦めませんでした。紅葉と交わした約束があったからです。

必ず青葉のそばにいる。

彼は、彼女の研究者として、研究を始めたのです。

少しでも、青葉を助けるため。

しかし、いつの間にか彼の中にはこの想いもなくなっていたのです。

青葉は実験の後遺症で記憶をなくし、

青葉には、もう静波の記憶すらなかったのです。

なら、もう娘と言えるだろうか。

青葉は私の娘だろうか、

そんなことなら、もういいじゃないか。

そうして彼は青葉を研究材料としてしまったのです。

もう彼には、

約束すら、

青葉さえもいなく、

取り返しのつかないことをした絶望感に浸って、

彼の心は

死んでいたのです。

やり直し（リバイス）（前書き）

では、第十一話です。

## やり直し（リバイス）

「え…娘ってどういうことだよ？」僕は男に聞き直す。

「そのままさ。青葉は私の娘なんだよ」

「じゃあ、何で…何でお前は助けねえんだよ！」

「うるさいな！しょうがないんだよ！」男は怒鳴った。

「私だって、努力したんだ！彼女のそばで、できる限りのことはしてきた！でもな、彼女には記憶がないんだよ！私が親だっていうことさえもう覚えてないんだ！彼女に対してできることが私にはもうないんだ！研究者と恐れて、心を開かない彼女に、私が、親として、何が出来るって言うんだよ！」男は僕に向かって、まるで吐き出すかのように怒鳴り散らした。

でも、その後の男の顔は、

苦痛に歪んでいた。

そんな男の言葉を聞いて、

僕はうるたえた。

僕には何もわからなかった。

男の苦しきだけが、僕に直に突き刺さる。

絶対苦しい、

だけど、これが正解なのかも、僕にはわからなかった。

「だけど、本当にそれがあってるのか？」

「男の悲痛な顔が僕に向いた。」

「お前が苦しいのは凄いわかる。でも、青葉はもっと苦しいんじゃないのか……？」

僕の想いは確信に変わった。

「お前が諦めてどうするんだよ！お前が見てないふりし続けて、青葉が苦しむなんて、それは絶対間違ってるだろ！」

「もう……！」ドン、と床を拳で殴る。

「もう……どうしようもないんだよ……」男は、床にうずくまった。



「……………まだだ」  
僕は呟いた。

「まだ、終わってない」

「……………何がだ……………」

「まだ、間に合うだろうか」

「…ふざけるなよ、私はもうあの娘に」

「謝ればいい」

「男は伏せていた顔をこちらに向ける。涙の後が残っていた。」

「何、諦めてんだよ。見えないのか？あいつは、青葉は、まだ苦しんでるだろうか」僕は立ち上がった。

「そんなところで突っ立って、絶望してどうするんだよ！なら、謝ればいいじゃねえか！今まで守れなくて悪かったって！そしてもう一回、やり直したらいいじゃねえか！あいつはまだ苦しんでるだろ」

うが！お前がそんなところで諦めてどうするんだよ！あいつを助けられるのはお前しかないだろ！

あいつの家族はお前だろうが！」

男はぐつと涙をこらえるように下を向く。そして、ゆっくりと立ち上がった。

「そついや、…名前を聞いてなかったな。君の名前は？」

「桐原崩」

「ふっ、変な名前だな」

「そう言われたのは、二度目です」僕はクスツと笑う。

「やはり似てますね、お父さん」

「……ははは、そうか。だが、「男はこちらを向く。確かに笑っていた。」

「君にお父さんと言われる筋合いはない」

「元気になって何よりですよ、」

僕と男は青葉の方へ向く。

「さあ、青葉を助けま」

その時だった。

耳をつんざくようなサイレンが鳴り響いた。

決断と結果（リザルト）（前書き）

やや、完結気味です。

## 決断と結果（リザルト）

サイレンが僕の耳をつんざく。

「な、何だ！？これ？」

「緊急用のサイレン！？」男はすぐにコンピューターが多く立ち並んだ場所に走り寄る。

「何があつたんだよ！？」

「わからない！だが、閉じ込められてしまった！」

僕はさつき通ってきた扉を開けようとする。確かにドアは開かなかつた。

「防御システムが作動したんだ」男はコンピューターと向かい合いながら言った。

黒い機械にも異変がおきた。

青葉がいた場所がすっぽりと隠されていく。

「おい！青葉が！」

「わかってる！」男は素早くキーを打つ。しかし、何回やっても出てくるのは、赤いエラーの文字。

「くそっ！駄目だ！防御プログラムが独立している！干渉が出来ない！」ダン、と男はキーボードを叩きつけた。

「どうすればいいんだ！時間がないのに…！」

「おい、僕にできることはないのか」

「今最大限のことをやっているが、駄目だ！もうあの機械自体を壊すしか…」

「壊せば、何とかなるのか？」

「へえ？」男は僕の方を向く。

僕は青葉が埋め込まれた機械をずっと見続けていた。

「あれを壊せばいいのか」

「何言ってる！？あんなの壊せるわけないだろ！」

僕はもう一度鉄パイプを握る。

そして床を叩いた。

音が響いて

床が削れる。

「き、君は、能力者なのか？」

「ええ、一応」僕は苦笑しながらも、しかし、僕のぶれない答えを言った。

「誰かを守るために手に入れた力です」

僕は思い切り地面を叩く。

音が響き渡る。

反響して

反響して

僕に集まる。

「今、助ける！」

反動をつけて青葉のもとへ飛び上がる。

「聞こえるだろ、青葉！僕の声が！この音響が！」

僕は勢いよく鉄パイプで黒い機械の表面を殴りつけた。

音が響き渡った。

ぐずっ、ぐずっ……

真っ白な世界。

私のすすり泣きしか聞こえない。

もう、自分の運命は

わかってる。



わかってるけど、

心残りが二つある。

一つは、彼に怪我をさせてしまったこと。

何も関係ない彼に

重傷を負わせてしまった。

私は何てことをしたんだろう。

私のことで誰かが傷つくことなんて、絶対許されるはずなのに。

だから、もう私には何も要らない。

もう、

全て要らないから

彼が助かって欲しい。

でも、

一つだけ言うなら、

矛盾してもいいなら、

想いを一つだけ言っていいなら、

彼と桜、見たかったな

少しでいいから見たかったよ

「……ばー」

「……あおばー」

誰だろう。私を呼ぶ声がする。

もう、いいのに。

目を開けるのがしんどいよ。

「青葉」

ムニツと頬をつねられた感覚がした。

目を開ける。

すると、彼は笑っていた。

「また寝てんのか？」

その笑顔は、私が嬉しく思ったもので、

その声は、私が聞きたかった声で、

そうだ。

目の前にいる人は、

私が、

彼はすつと手を伸ばす。

「約束したろ？」

会いたかった人だ。

「崩…！」

私は彼の手には飛びついた。

†

僕は眠っている彼女を抱えて、黒い機械から飛び降りた。上手く着地する。

青葉は目を閉じていた。

「君は…一体…？」男は、黒い機械のばらばらに砕けた部分を見て、次に僕の方を見て言った。

「……ただの学生です」僕は苦笑する。

「それよりも、青葉を助け出しました」

僕は青葉を抱えて男のもとに走り寄る。



「謝って、白紙ですよ…と言っても寝ちゃってるけど」

「…いや、いいんだよ」

男は笑うと、青葉の手に自分の手を重ねて言った。

「ごめんな、青葉…。今まで、本当にごめんな」

語りかけるように男は青葉に話かける。

それはとても近いものに見えて、  
たぶん、

父親なのだろうと、

僕は思った。

「さあ、時間がない。早くこっちへ」男は僕を隅の空間へ誘導する。

男がタイルをどけると隠れていた取つてのついた扉が出てきた。

男は扉を開ける。地下へ繋がる空洞が現れた。

「さあ、早く入って！」

「あんたも早く！」

「…私は残るんだ」僕の言葉に返した答えは意外なものだった。

「な…何言ってるんだお前！？あんたが残ってどうするんだよ！」

「私はやることがある」

「やることって何だよ！それなら、僕も手伝うか…」

「これは私にしか出来ない」

男が優しく笑った。

「でも、君にしか頼めないことを私は君にするよ。これは、父親、  
東雲静波としての願いだ」

そして、男は僕に言った。

「青葉を頼む」

僕は、何か堪えきれなくなった。

それが、最善の策で、

それ以外方法がないことに、

自分の無力さを呪った。

でも、それが自分のせいでもないことを知っていて、  
抗えないことが悔しかった。

僕は唇を噛みしめて、男に言った。

「わかった」

その言葉を聞いて、男は、笑った。

その時、

青葉の手が、重ねてあった男の手を握った。

軽くだが握ったのだ。

男は驚いて青葉を見る。青葉は眠っていた。だけど、無意識だろうか。唇が少し動いていた。それは、声はないが、口の動きでわかる。

お父さん、だった。

男は、涙が流れるのを必死にこらえて、青葉に笑いかける。

「ありがとう、青葉」

そう言うと、すぐに僕の肩を押した。

「青葉を頼んだぞ！」

「……はい！」

僕は、闇に消えていった。

\*

周りにはもう火の海になりつつある。男の仕掛けた爆弾が次々と爆破しつつあるのだ。しかし、男はコンピューターから離れることはな

い。

これが、男にできる

父親、東雲静波ができる

最後のことだと確信していたからだ。

静波は、想う。

これから青葉に生きて欲しい。

今まで、私が縛ってしまった分さえ、露とも思わないくらい、

楽しく生きて欲しい。

私にできるのはその手助けしかない。

そばにいらなくても、

これからは彼が、きっと青葉を助けてくれるだろう。

安心して、私にしか出来ないことができる。

男はパン、とエンターキーを押す。そして、コンピュータの電源を切った。

そして、胸元にしまっていたものを取り出した。

それは静波、紅葉、青葉の写った三人の家族写真。三人全員が笑っていた。

ははは、と笑みが静波からこぼれる。

「やっと、君との約束が守れたよ、紅葉。遅くなってすまない」

静波は写真をしまつと、横に置いてある起爆装置を握る。

「青葉」

静波は、

優しく、微笑んだ。

「ありがとう」

空間は光に包まれた。

**決断と結果（リザルト）（後書き）**

あと、もうちょっとです…

荒いですが、

ぜひ感想や指摘ください！

後日談（スタート）（前書き）

では、東雲青葉編最終十二話です。



## 後日談（スタート）

「気分はどうかね？」

僕が、目を開けたときに聞こえた第一声がそれだった。見慣れた天井もなく、僕の横には一人の男が立っていた。どうやら医者みたいだ。

「ここは…？」

「病院だよ」医師は端的に答える。

「記憶はあるかい？」

「……………ああ、はい……………っ！」僕は急に思いだしたように医師に訪ねた。

「青葉は！？」

「青葉？…ああ、あの車椅子に乗った子かい？彼女なら今席を立っていると思うよ。この部屋にいないし」

「そ、そうですね…」僕は、ほっと一息つく。

「まあ、ゆっくりするといいよ。体はまだ少し痛んでるからね」

「治療してくれたんですか」

「僕を誰だと思ってる？」

おう、医師ですね。

まだ頭が回ってないな。いまいち感じがつかめない。前に立つ医師がカエルに見える。いやカエルなのか。いや失礼だろ。さすがに命を助けてくれた人にそんな態度は駄目だ。

「いろいろあるようだから、私はこれで失礼するよ」

「はい、ありがとうございます」  
そう言うと、カエル似の医師は病室から出ていった。

実は嫌なくらい覚えていた。  
あのまま走って、逃げて、  
家について、そのまま倒れ込んだんだ。

窓の外に目をやる。  
いつもの学園都市だ。  
何も変わらない日常の風景。

その時ガラガラと扉が開く音がした。  
見慣れた人物。  
扇さんだった。

「おーっす」

「ども」

軽い挨拶をいつものように交わした。扇さんは僕の横に椅子を引っ張り出して座る。

「えらい怪我してたからびっくりしたよ。まあ、何とかなったからよかったけどな」

「ええ、そうですね」

「ん、どうかしたのか？」

僕のつかない表情を見て、扇さんは聞いてきた。

「…いや、何でもありません」

「そうか」

一瞬何とも言えない沈黙が挟まる。

「そういや、いい報告があるぞ」先に話したのは扇さんだった。

「あのあと、知想大研究所は閉鎖になった」

「へ？」

「お前が、青葉ちゃんを抱えて逃げてきた後もの凄い爆発があつてな。大惨事だったんだよ。研究所はもはや修復不可能。そして、青葉ちゃん、まあいわゆる演算回路の成果が不確かで確立されたものでないという残った実験結果から、この計画はおじちゃんになったんだよ」

「そ、そんな……」

「青葉ちゃんはもう、誰にも追いかけられずに、縛られずに生きていけるんだよ」

僕は驚きを隠せない。

そんな僕に扇さんは笑いかけた。

「ははは、よかったじゃんか。お前は、誰かを守れたんだよ」

「そうですね……」

「ま、今はゆっくり休みといいよ。お前も成長したってことだ」扇さんは椅子から立ち上がると、椅子をもとの場所に戻す。

「では、私はこれで。仕事に戻るとするよ」

「わざわざすみません。ありがとうございました」

「かまわん」

「あつ、扇さん」

「何だ？」

「青葉は」

「心配するな」扇さんは僕の言葉を遮る。そして笑った。

「青葉ちゃんはずちの家族だ」

はい、

と僕は笑い返した。

「何から何まで、本当に…」

「いって言うてるだろう。じゃあな」

僕は扉が閉まるまで、扇さんを見送った。

僕は悟っていた。

あの男が、自分の命を懸けて

青葉の未来を守ったんだ。

僕は、

何も助けちゃいない。

ガラガラ

と、

また扉が開いた。

僕はゆっくり目を向ける。

それは、

車椅子に乗った、

彼女だった。

“青葉を頼む”

そつだ。

僕には守るべき人がいる。

今落ち込んで、どうするっていうんだ。

「ちょっと寝てたわ」

これからは

僕が青葉を守るんだ。

そんな決意を胸に秘めて、

僕は青葉に、

笑いかけた。

その後、青葉が「ありがとう」と僕に抱きついたことを、多くは語らないことにする。

読者もあまり、こころいう気恥ずかしくなるものは読みたくないだろう。

第一、



僕が恥ずかしい。

後日談（スタート）（後書き）

東雲青葉編が完結しました。

荒いですが、終えられてよかったです。

感想、指摘などぜひください！

## 後日談退院日（前書き）

ちっちゃな番外編にしようと思ってたら、今まで一番長くなっていた。

なんか傷ついた。

だらだらですが、では、後日談です。

## 後日談退院日

「スーパー　　の蟹は〜腐ってる〜」

「冒頭からもの凄いことを童謡のメロディーに乗せて歌うな、エバンス」

もしかして、と思った皆さん。その名前を口に出すのは控えてください。

実在していないことにしてください。

「ふふふ」と青葉は笑う。

カルマも青葉と顔を見合わせて、にっこり笑った。

「仲がよくて、結構なことですよ。桐原ちゃん」僕の横で小萌先生が嬉しそうに頷く。

とある道で、  
僕。

青葉。

エバンス。

カルマ。

小萌先生。

今の状況を説明するには少し前に戻らないといけない。

実は今日が僕の退院日だ。

扇さんは今日休暇を取って青葉と迎えに来てくれたんだが、事情を聞きつけた、というよりは扇さんが呼んだであろう小萌先生もが同行していた。僕は小萌先生から一時間みっちりと数多くの説教をくらい、出鼻をくじかれたのだが、扇さんの提案で今日一緒に夕飯を食べようということになり、一旦家に戻って、何故かさつき退院したはずの僕が買い出しとして任命され、家を出ようとすると、私も行く、と青葉が申し出て、先生には教師として桐原ちゃんと青葉ちゃんについて行く責務がありますと小萌先生までもが同伴することに自主的に手を挙げ、それを横で見ていたエバンスが何か面白そうだと極めて看過できないような理由からついてくることになり、カルマは何もわからないまま青葉に抱きつき、買い出し班に加わることになった。

そして買い物済まして、帰路についているのが今の現状である。

扇さんは家で待機中である。

「さあ、買い物も住んだことですし、あとは帰るだけなのですよ」「そうですね」

僕は青葉の車椅子にかかるビニール袋と青葉がもつビニール袋に目

を向けながら言った。

次々と買っていると、かなりの量になってしまった。

「楽しみだな」と青葉は嬉しそうな顔をする。

「青葉姉ちゃん、楽しみだね！」カルマが青葉に笑いかける。

「うん、そうだね。私、こんなに多くの人達とご飯食べるなんて初めてだよ」

「じゃあ、これからは私が一緒に食べる！」

「ふふ。ありがとう、カルマちゃん」

青葉もすっかりアパートの住民たちと打ち解けている。

僕は、その会話を微笑ましく後ろから眺めていた。

「何にやけ顔で青葉を見つめてるんだ？キモいぞ」

「お前前文読んでねえだろ。微笑ましく後ろから眺めてんだよ。一つもあつてねえじゃねえか」

次はエバンスが、にやけ顔で僕を見て、僕にこっそり話しかける。

「またまた、そんなことをおっしゃって。もうフラグ立ってるんじゃないですか？」「何のフラグだよ？」

「死亡フラグ」

「一体今までどこにそんな要素があつた!？」

「知ってましたか？エバンス君。桐原ちゃんは学校では、恋愛フラグが立ちっぱなしなんですよー」

「先生、根も葉もないことを言わないでください。こいつがさらに調子に乗ります」

「嘘じゃないですよ。桐原ちゃんは優しいですからね。ふとしたきっかけで、恋に落ちる女の子も少ないのです」

「えー、なんだよそれ。俺には全然優しくないぜ？」  
「お前の今までの所業を振り返ってみろ」

お前、悪い子。

「でも、桐原ちゃんは鈍感ですからね……」ボソッ。

「ん、何か言いましたか？、先生」

「何でもないですよ」

「今ので大体わかったな」

「あつ、エバンス君はわかりますかー」

「はい、どうやら厄介な奴のようで」

「そうなんですよ」

「…なんだよ、二人そろって…」

なんだか取り残されている感覚しかないな。

僕は、笑うエバンスと小萌先生を横目で見ていた。

………

身長が変わらねー。

「しかし話は変わりますが、桐原ちゃん」

「あ、先生。それって、今回の件ですか？」

「そうですね」

「なら、場所を変えませんか？」

僕の提案から、帰路の途中にあつた公園に立ち寄つた。

「エバンス。ちょっとカルマと遊んでこい」

「今遊びたくねー、って俺は貴族だぜ？公園なんかには惹かれる程子供じゃないね」

可愛くねー。

「それより何か喉が渴いてんだよなー。あー、自販機がむこうにあるし、お金さえくれれば、この場を離れて小萌先生と二人だけにしやれるのになー」

さらにマセガキ。

「くっ、わかつたよ。ほら、」僕はエバンスに小銭を渡す。

「はいよ」小銭をもらつと、エバンスはカルマのもとに走り寄る。

「カルマ、お兄ちゃんとジュース買いに行こう」とカルマの手を握つた。

「ほら、青葉姉ちゃんも」と青葉にまで声をかける。

「あ、うん」と頷いて青葉は僕の方を向く。

「悪い。ちよつとついて行ってあげてくれ」

「うん」青葉は僕に笑顔で答えると、車椅子を自分で押してエバンスたちとジュースを買いに行った。



「すみません、座って話をしましょう」僕と小萌先生はベンチに座った。

「それにしても、エバンス君は優しいですね」

「え、どうしたんです？いきなり、」

「ふふふ、桐原ちゃんは周りに優しい人ばかりでいいことですね」

「え、ええ、まあ……。あの」

僕は話を切り出した。

「今回の件ですが……」

「今回の件とは？」

「へっ？」

「先生はもう怒り疲れたのですよ」

「ということは、見逃してくれるんですか？」

「見逃すわけではありません。もともとその話は桐原ちゃんたちの中で解決しているのでしょうか？なら、私がとやかくすることは無いということなのです」

「……ありがとうございます」

「礼を言われるようなことはしていませんよ。ただ、次のスキルスキヤンの時は異常がないか、体調を調べますからね」

僕の方を見ないで、小萌先生が「ふく」としたふくれっ面で公園の遊具を見ていた。

「でも、よかつたじゃないですか。誰かを守れて」

「いや、誰も守ってませんよ」

「？」

「これから、僕が守るんです」

「優しいですね、桐原ちゃんは」

「あ、こもえなんだよ！」

小萌先生を呼ぶ大きな声がした。ふと目を向けると向こうから女の子が走って来ている。修道服を来た銀髪の少女。上条の居候のインデックスだった。後ろから上条の姿も見える。

「インデックスちゃん」

「こもえ、とうまがけちなんだよ。アイス一つも買ってくれない」

「まあ、上条ちゃんもまだ学生ですからね。全部OKてわけにはいかないですよ。わかってあげてください、インデックスちゃん」

「むー、しょうがないかも」インデックスは少しシユンとする。

「おーい、インデックス！」上条が遅れて到着した。

「また、今度買ってやるから。お願いだ、今日は我慢してくれ」

「もういいんだよ！」少しふてくされたような顔をインデックスは見せた。

やっぱり、アイスは欲しいんだな。

「しかし、こんなところで小萌先生に会うなんて奇遇だな」

「今日は私だけじゃありませんよ」

「おいつす」

「桐原！」上条はものすごく驚いていた。

それも当たり前か。なんせ入院で五日も休んでいたしな。

「お前、もう大丈夫なのか？」

「ああ、すっかり。今日退院した」僕は上条にそう言うと、インデックスの方を向く。

「どうも、インデックス」

「む、ひさしぶりなんだよ、きりはら」インデックスは僕に挨拶を

した。

「にゆういんしてたみたいだね、だいじょうぶ?」

「おう、心配してくれてありがとう」

「よかったな。能力は大丈夫なのか?」

「問題ないさ」

上条は僕の能力を知っている唯一の人物でもあった。

…まあ小萌先生が喋ったんだけど。

でも決して口が滑ったなどではない。これは小萌先生の気遣いだ。決して本当のことを誰にも喋らない僕に、何でも喋れる友達を作ってくれた。その他にも小萌先生のおかげで、クラスに馴染めたことも忘れてはいけない。

僕にとって上条も小萌先生もこの上なく僕を支えてくれた大切な人達でもある。

「ところで、上条。お前こそこんなところで何してんの?」

「いや、夕飯の買い出しに来ててな。今その帰り道」

「なら、うちで一緒に夕飯作って食べないか?」

「え、いいのか!」

「おう、もちろん。インデックスも賛成?」

「うん、すぐいききたいかも!」嬉しそうにインデックスも答える。

「決まりだな。どうぞ寄っていつてくれ」

ちようど、青葉達も戻ってくる。

「お、上条だ」

「ういつす、エバンス」

「お久々」エバンスに続いてカルマも真似して挨拶する。

「カルマちゃんも久しぶりだな、って、？」上条の目は青葉で止まった。

「こちらのかわいい娘さんは？」

「し、東雲青葉です」青葉は顔を赤らめて答える。

「うちのアパートの新住人にして、明日僕たちのクラスにくる新しい友達だ」

「うおっ、そうなのか！おれは上条当麻、よろしくな」

「わたしはインデックスなんだよ」インデックスも上条の横に並ぶ。

「はい、よろしくお願ひします」

「あー、敬語とかやめてくれ。同級生だせ？普通でいいよ」「そうなんだよ」

「あ、うん、よろしく」

「緊張しなくて大丈夫だよ。僕たちのクラスは比較的いいやつばかりだし、きつとすぐ馴染める」僕は青葉に笑いかけた。

「うん、そうだね。ありがとう」

「ほんじゃまあ、家に向かいますか」

「あ、じゃあわたしがあおばの車椅子を押すんだよ」

僕たち一行は、青葉の車椅子を押すインデックスを先頭に僕と上条の間に小萌先生、カルマ、エバンスを挟むような形で動きはじめた。しかし、小萌先生がエバンスとカルマと遊んでいる姿は、一個上の姉さんにしか見えない。下手をすれば次女だ。

「ってことは、今回は東雲ってお前の入院と関係あるんだな？」ふとしたところで上条は核心を突く。

「ああ、そのとおり」

僕は頷いてみる。

「いろいろあったんだよ」

「そっか、いろいろあったみたいだな」

「……深くは聞かないんだな」  
「だって、必要ないだろ？結果、よくわからないけど、ほら、あんなに楽しそうにしてるじゃねえか」

やっぱり、

いい友達を持ったと思った。

「だな」

僕の答えに上条は横で笑った。

ものの数分で僕たちの家に着くと、扇さんが外で煙草を吸っていた。

「おつ、帰ってきたな」

「扇さん、ただいま」と口々にみんなが言う。

「友達とあつて、連れてきちゃいました」

「うん、いいよ。多い方が楽しいのは自明の理だからね。それより、青葉」

みんなが夕飯の支度に散っていったあと、扇さんは青葉を呼び寄せた。

「お前の部屋の話なんだが」

「私のですか？」すると、青葉は少し慌てるような素振りでも僕の方を見た。

「ん、どうした？」

「いや、あの、崩はどこなのかなー、と」「僕は二階だけど」

「そ、そうなんだ」

「……」

「やっぱり青葉は一階の方がいいんじゃないか？」

「う、うん、そうだね」

「よし、じゃあ二階で」

と扇さんは言った。

「へ？」僕と青葉は呆然とする。

「扇さん、今の話聞いてましたか？」

「ああ、よく考えたら一階の残り一室は夕食部屋みたいになってるし、やっぱり無理だし」

「でも、青葉は車椅子ですよ？どうやって二階まで上がるんです？」

「お前が上げる」

そりゃ、ナイスな考え。

「力あるだろ？お前」

「大丈夫ですけど、青葉が……」

「わ、私は、」青葉が恥ずかしそうに答えた。

「私は、崩さえよければ、だ、大丈夫だよ」

「ふふふ、決まりだな」扇さんは青葉に近づく。

「よかったな、崩と隣の部屋になれて」ボソッ。

急に青葉の顔が赤くなったのがわかった。

「なんなら、部屋も繋げてやるよ？」

「ゆ、ゆ、譲さん!!?!」顔が真っ赤になっていた。

「ははは、冗談だよ」

「……………二人とも何はなしてるんです？」

「ああ、何でもない。崩、青葉を少し部屋に連れて行ってやれ」

「わかりました」僕は、青葉の車椅子を押して階段前まで行くと、

「よっこいせ」僕は青葉を車椅子ごと持ち上げる。

「うわぁ!?!」

「あ、大丈夫？」

「青葉重たいな」

「これは車椅子のせい!」少しムキになる青葉。

「冗談、冗談。ほい、着いたぞ」

「あ、うん」

階段を登って二階の廊下についた。

奥の部屋は僕なので、手前の部屋を開ける。

「はい、こんな感じ」

「うわぁ!」青葉は驚きの声を上げた。

部屋に入って一言も喋らずに青葉は周りを見渡す。目が輝いていた。

「気にいったかな？」

「うん、すつごくー！」

「それはよかった。まだ欲しい家財道具とかがあったら一緒に買いに行くよ。まあ、生活に困らないだけのものはあるから、少しの間なら大丈夫かな」

「こんな部屋もらっていいの？」

「もちろん」

「お金は？」

「要らないよ」

僕は家賃とられてるけど。

「ありがとう」

「どういたしまして。じゃあ、下に降りるか」

青葉と一緒に部屋を出る。

「おっと、そうだ」

僕は自分の部屋の鍵をあけると玄関から、一つの鍵を取った。そして、青葉にその鍵を渡す。

「これが鍵」

「うん、青葉は自分の手で鍵を閉める。」

「これが私の鍵」

「そう」

「これが、私の家」

「ああ」

青葉の声が、震えているのがわかった。でも、それが嬉しいからであるのも僕にはわかっていた。

「さあ、下に行くぞ」

「崩」



青葉が僕を呼び止めた。

向き合う形をとる。

「どうした？」

「これから、よろしくね」

その時、風が吹いた。

青葉の髪が揺れる。

その笑った顔に、

僕は、笑って答えた。

「ああ、よろしくね」

いつか僕は、

彼女に言わないといけないことがある。

彼女の家族のことを。

そして、僕のことも。

それは、まだ言わない。

知る時が来たら、言おうと思う。

でも、それまでは

たとえ、わずかな時間だけでも、

こうやって

向き合っていたいと

僕は願った。

こんな日常が、

僕の夢。

「行こう！夕飯だ」

「うんー」

僕たちが笑う隣で桜の木が、静かに揺れていた。

「って今日の夕飯何？」

「聞いてなかった？すき焼きらしいよ」

「暑っ！」

そんなとある

六月二十日。

後日談退院日（後書き）

書くことなくなっ たんでね…

感想や、指摘、

アイデアでもいいんで、（欲しいので）

コメントお待ちしてます。

日常(いつも通り)(前書き)

新しく新章と言うか、なんとと言うか、主人公の日常から発展しようかと。では、第十五話です。

## 日常(いつも通り)

ブブブブ

携帯のアラーム音がなった。僕はそばにある携帯電話をとる。

我ながらいい考えだ。普通の目覚まし時計なら表面に付いてあるボタンを押せば、すぐに止まってしまいが、携帯電話は違う。画面が出るとそこからアラーム設定へと手順をふまないといけない、また画面から発せられる光によって次第に目が覚める。まあ、むかついて携帯を投げたりやつ当たりして壊すような不幸なことさえなければ、まさに、いい方法と言えよう。

つまり、快適な朝を迎えられるのだ。

「って今まで気づかなかった僕はどうなんだよ……」

時刻は6時40分。

学校が始まるのが8時半。

学校まで行くのにかかる時間が10分と考えるとかなりの早起きだ。

まあ、決まってることはないんだが。

僕は台所に行って、麦茶を飲むと、夏の暑さが早くも忍び寄ってきていたこの部屋の空気を換えるために窓を開けることにした。

風が入り込む。朝は特別涼しく感じた。大きな桜の木が二階の小さなベランダの近くにまで枝を伸ばしている。新緑が清々しい。

「早起してよかったな」僕はベランダに出て頷いた。

「あ」その時、横で声がした。ふっと向いてみると、青葉だった。車椅子に寝間着を着たまま座って、ベランダに出ていた。なんだか新鮮な感じがする。

「おはよう、崩」

「おはよう、青葉」

「朝、早いなだね」

「今日だけは早起しようと思ってさ。そういう青葉も早いなだね。何時に起きたんだ？」

「6時」

「早いな！」僕は驚く。

「もしかして、慣れてなくて寝にくかったのか？でも、それならすぐに治るよ」

「あ、うつん、違うんだ。ちょっと、ね……」

「……まさか……」

「あ、あははは」と青葉は恥ずかしそうに笑った。

どうやら緊張して眠れなかったらしい。

今日は青葉にとって初めての学校登校日だった。

うって変わって、時も過ぎ、僕は自分の教室に向かうべく学校の廊下を歩いていった。

簡単な話で、転校生の青葉は手続きなどいろいろしなければならず、小萌先生同伴のもと今それをやっつてる次第で、僕は青葉を送った後何もやることがないため、先に教室に向かっている始末だった。

しかし、青葉のことが少し心配だ。あれからも緊張はどんどんひどくなっている。さっきだって僕が声をかけたら、うん、とは反応していたものの、顔が青白かった。本当に、大丈夫だろうか？

そう思いながら、はははと僕は笑ってしまった。僕もこの学校に入る時、後込みしていたから、青葉とよく似ている。そんな青葉が微笑ましく思えた。

教室の扉を開ける。

もうだいたいの生徒が来ていて、それぞれがどこかに集まったりして楽しそうに話をしていた。

「おっ、桐原ー！」いつも通り、土御門が僕を呼んだ。僕も、いつも通りのペースで自分の席に行く。

「どうしたんだにゃー？立て続けに休んじまって。大丈夫か？」

「ああ、おかげさまでこの通り。心配してくれてありがとな」

「ふふふ、そんな桐原には、この土御門様が学校を休んでいた間に決まった重大イベントを報告をしてやるにゃー！！」バツと、椅子から乗り出して、語りだそうとする土御門。

すでに知ってる僕。

「今日、何と転校生が来るんだぜ！！」



「知ってるよ」

悪いが、ぶち壊した。

へっ、と一瞬きよんとする土御門だったが、すぐにさっきよりも高いテンションで僕に話かけてきた。

「どういうことだにゃー？！何で知ってるんだにゃー！」

「実は、僕のアパートの隣なんだよ。だから」

「にゃー！！羨ましいわ！しかも、女子なんだろう！？なあ、可愛い？可愛い？」

「え、まあ、その…」何だか僕が青葉のことを可愛いと言うのが躊躇われた。一気に体温が上がる感じがする。

「何とか間に合ったー！」そんな時、上条が荒い息でやって来た。

「よお、上条」

「おっ、桐原。もう元気そうだな」

「ああ」

「上ちゃん！！なんと、桐原が今回の転校生と知り合いなんだにゃー！！！」

「あ、そうだ！今日は東雲の登校日だな」

「なっつ！？」土御門が上条の反応にハイテンションというハイテンションを通り越して、真っ白な驚愕の顔をする。そして、大人しくなったと思えば、ふふふと不気味に笑い始めた。

「ふっ、そういうことかにゃー…。本当、上ちゃんの周りには女の子が集まるな…。フラグ立て放題女つたらし野郎が！！」

「ひどいぞ、土御門！！今回、上条さんは何もしていないんですよ！桐原が東雲と仲良くしているところに遭遇して、一緒にご飯を頂いただけだ！」

「おい、上条!」

「次はとうとう桐原なのかにゃー!」土御門の怒りの矛先が僕に向いた。

「お前は、まだ仲間だと思っていたのに!」「ち、違う!土御門。話を聞いてくれ!」

「問答無用……!」

その時、僕を救うチャイムが鳴る。

「っ、お前を殺すのは後だにゃー!」

「なんかキャラ変わってねえか、土御門!?!」

お先真っ暗。

ガラガラ、と教室の扉が開いた。小萌先生がひよこつと顔を出す。

「さあ、みなさん。首を長くして待ちに待った待望の転校生ちゃんですよ!」

そう言つと、また扉の向こうに消える。

そして、転校生を連れてきた。

緊張している顔。

クラスは、ひそひそと思ひ思ひの言葉を口に出す。

小萌先生は黒板に名前を書く。

「東雲青葉と言います。…よろしくお願いします!」緊張して震えた

声でせいっぱいの声で自己紹介をする。そして、深くお辞儀をした。

フラッシュバックだな。

自分の入学式の時を思いだす。

あの時、声を掛けてくれたのが、

上条と土御門だった。

それに僕は、少し冷ややかに答えただけ、とても嬉しいことだった。きっと今、それを僕がする番だ。

勢いよく、手を上げる。

それは、僕だけじゃなく、

上条と土御門も。

そして笑って答える。

「「「よろしく」」」

僕たち三人の声に、

クラスの声も繋がった。

小萌先生が安堵の表情を浮かべる。

頭を上げて呆然としている顔と目が合う。

とても嬉しそうな表情だった。

「はい、では青葉ちゃんの席はあそこにしましょう」「小萌先生が指差したのは僕の隣の席。

青葉の学校生活は無事に始まった。

キ

「いやあー！東雲青葉ちゃん！よろしくだにゃー！」  
ホームルームが終わって休み時間、土御門はご機嫌で青葉に話しかけていた。

なんか豹変してるな…

「こいつは、土御門元春」そう思いながらも僕が代わりに土御門を紹介する。

「よ、よろしく！」青葉が嬉しそうに笑う。

「おい、桐原」

土御門が僕に耳打ちした。

「めちゃくちゃ可愛いじゃねえか！」

「あ、ああ、うん」なんか反応に困る。

その後も土御門はどこかうかれていた。

「上条はこの前会ったばかりだもんな」

「うん、よろしくね、上条君」

「おう、よろしくな」

「あのー、東雲さん？」僕たち三人に話しかけてきた人がいた。

「吹寄か」

「何よ！上条当麻。私は声をかけちゃいけないの？」

「ああ、いや、上条さんは…」

「吹寄が積極的過ぎなんじゃねえか？」

「桐原！私は、仲良くなりたいたけなんだけど！」吹寄はぐいっと詰め寄ってくる。

「うっ、すみません」

吹寄は男気が強い。芯があるのは良いことだが、少し女気も気にしたほうがいいのにな。せつかく、きょ……………ここは控えるべきだ。

「よろしくね、東雲さん」

「うん、よろしく！吹寄さん」

「私のことは制理で言いよ。じゃあ、私は青葉って呼んでもいい？」

「え、うん。私、制理って呼んでもいいの？」

「勿論、よろしくね青葉！」

「うん！制理！」

青葉と吹寄は楽しそうに笑っていた。

「もうすっかり仲良しだな」上条が僕に言う。

「ああ、良いことだよ。ほんと、良かった」

「きつとすぐ馴染めるだろ……ん？」上条はすつと僕たちと離れたかと思うと、姫神を連れてきた。

「そんな遠くで見てないで、喋りかけてみるよ」

「いや。私は。」

「僕からも頼むよ、姫神。青葉と友達になってやってくれ」

「そんな。友達になってほしいのは。私の方」そう言うと、姫神は青葉と制理のもとに歩み寄る。

「私は。姫神秋沙。よ よろしく」

「うん、ありがとう。話してくれて」

「私こそ。あの。私も東雲さんのこと。青葉って呼んでもいい？」

「うん！じゃあ私も、秋沙って呼んでいいかな？」

「私もいいかしら？」

「うん」

「ははは、もしかして東雲は人を引きつける力でもあるのか？」

「いいことだよ」

「またまた。上条さんには、桐原が何だか寂しく見えますがー？」

「何だよそれ。僕は……そんなことない」僕は一応そう答える。

「あつ、そうだ。今日はシステムスキャンの日じゃねえか」上条が頭を抱え込んだ。

上条はlevel10の能力者。スキルスキャンはとても苦痛に感じるのだろつ。だが、上条はただの無能力者ではない。

その右手。イマジンプレイカー。

どんな異能でも全て打ち殺してしまう異能の力。知っている人はごくわずかしかない。

「上条さんは不幸続きなんですよ」

「元気出せよ。お前の力でしか出来ないことがあるだろ」

「あー！せめて幸福を打ち消さないでほしいわ！このままじゃ、不

幸に溺れて死んじまうよ」

「あ、あはは」僕は横で引きつる笑いをするしかなかった。

「おーい、桐原ちゃん」小萌先生が僕を呼んでいた。

「ん、何です？小萌先生」

「聞いてなかったんですか？この前、身体検査しますと言ったはずですよ」

「あ、そうでした。すいません。どこの教室に行けばいいんですか？」

「それがこの学校じゃないんですよ。場所変更になりましたのです」

「え、どこですか？」

「常盤台中学校です」

「……あー」

僕は唸ってみる。

「ん、どうしたんだよ桐原」戻ってきた僕に上条は言う。

「お前の不幸体質って移ったりするのかな」

「ん、そうだな……」そう言うと、上条は僕の肩に右手をポンと置いた。

「ん？何だ」

「はい、不幸移った」

「やめい」

何だか不幸が移った気がした。

日常(いつも通り)(後書き)

全部入りきらないと思ったので、

主人公の能力は次回にしようかと。

またぜひ呼んでください。

感想ももらえると嬉しいです。



## Level 1 (音) (前書き)

今回は少し長くなりましたが、最後まで読んでもらえるとうれしいです。

## Level (音)

「くっ、不幸だ」

さっそく上条の不幸が移ってしまった僕は、決まり文句を呟きながら常盤台中学校へと足を運んでいた。

青葉はいない。小萌先生のところに着てもらった。理由は、単についてくるのはめんどくさいだろうと思ったからで、それにせつかく友達もできてきているのだからそっちの方がいいだろう。

しかし、本音を少し言ってしまうえばあまり僕の能力について知ってほしくなかった。青葉は多少、僕が能力者であることはもちろん知っているに違いない。

ただ、できるだけ深くは知ってほしくなかった。それに、青葉に余計な負担もかけたくなかった。

「つとまあ、ついた訳ですな」

僕の前に大きな学校が建っていた。  
目的地。

常盤台中学校。

学園都市指折りの名門校であり、お嬢様学校。校舎からそれが伺える雰囲気か嫌というほど溢れ出ていた。

女子校か。

何だか肩身がせまいな。

せめて上条と一緒に来てもらうべきだったな。  
なんてったって、女子校だし。

女の子しかないし。

女子校だし。  
女子の学校って書いて、  
女子校だし。  
女子校だし、  
女子校だし。  
うへ、うへへへへ。

「おい、エバンス。お前勝手に僕の語りスペースを使って話すんじゃない。僕が止めないでこのまま行けば、完全に僕は変態じゃねえか」

「ちっ、バレてたか」と横でエバンスが舌打ちした。横には、笑顔のカルマもいた。

帰り道のエルギオンス兄妹と遭遇した。

「何だよ。俺はただ、常盤台中学校の前で突っ立ってニヤニヤ笑って、何もしゃべらないロリコン変態M男の変わりに、心の中を事細かく描写して、言葉にしてるだけだぜ？」

「僕のキャラ設定をぐちゃぐちゃにするな！」

「はっ、真実じゃねえか」

「あれ？崩兄ってペドじゃなかったの」

ガシッ（エバンスの襟元を掴む音）

「お前小学一年生に何て言葉教えてんだ？」  
「やだなー、崩さん。少し早い保健の授業ですよ」  
「どんなカリキュラムだ！早すぎなんだよ！」  
「あつ、私『ゆとり教育』には反対しておりますので」「だいたい小学四年生にしてそんなこと考えるお前は、ゆとりがなさ過ぎんだよ！」  
「ちなみに、崩はゆとり教育ど真ん中だからなあ。知識の少ないウブなちゃらんぽらん崩に偉そうなこと言われてもな」  
「うるせえ！俺だつてだいたいのは知ってるわ！高一だぞ、なめんなボケエ！」  
「おつ、言うね〜」

「もはや、絡みがおっさんじゃねえか…」  
何かこういふとき苦労を感じる。

「気をつけて帰れよ」  
「そういう崩は何してんだ？」  
「今からシステムスキャン身体検査」  
「どこで？」  
「どこって、ここにいるんだから常盤台中学校に決まってんだろ？」  
「ふう〜ん」  
「？、何だよ？」  
「別に。ただ、頑張れよ」  
そう言ってエバンスは何かを指差す。

警備員がジト目で僕を見ていた。

誤解が甚だしい。

「ま、そういうこと。ロリコン？」

「ロリコンをOK代わりに使うな」

「ま、そんじや」

「じゃあねー」

エルギオンス兄妹はさっさと逃走してしまふ。

残された僕は、

無実の説明と許可証を持って

警備員に立ち向かう。

+

かなり変態扱いの目で警備員に見られながらも、僕はなんとか常盤台中学校敷地内を歩いていった。

何か大切なものを失った気が。

そう思いつつも、僕は前向きに紙に書かれている場所を探す。

保健室。

つて、初めてきた僕にこんな具体的な場所へ一発で行けなんてむちやだろ。

もう、警備員の人には聞けそうにないしな……。というか、保健室なんて言葉を出せば次こそアンチスキルを呼ばれてしまう。

どこかに知り合いがいないだろうか？

そんな時。

ドオオオオオオン！

大きな音が鳴り響く。

水しぶきが高々と上がっていた。そして電気のバチバチっという音。

「ああ、いたいた」

僕はプールの方へ足を向けた。

「はあ？、何であんたがいるのよ！」御坂美琴はプールへと向かう僕を見つけるやいなや、自分から走ってやってきた。

「ちよつと野暮用で。ってほんと大した用事じゃないんだけど」

「へえー、そうなの」そう言いながら、御坂は辺りをちらちらと伺っている。

僕はそれをニヤニヤ笑いながら、ひやかした。

「残念だが、上条はいないぞ」

「な、な、な、何で私が、あああんな奴のことを、気にしなきゃいけないのよ！！」

急に顔が真っ赤になる。わかりやすい。

「だだだいたい、あいつなんかそんな、その、仲良いとか、友達とか、そそそんなんじゃない」

「大丈夫。端から見ればとても仲良しに見えるよ。痴話喧嘩みたいだ」

「あ、あんたねえー…：やや、やめなさいよ！！」

「うおっ！」

御坂はためらいもなく、僕に電撃を打ち込む。

「お前、相手考えろ！」

「もとはと言えば、あんたが原因でしょ！！」

こ、こいつ、デレデレしながらでも電撃を撃つのか。

未恐ろしいツンデレ。

「って、話戻せ！僕は保健室の行き方を聞いたかったんだよ」

「ああ、ならその校舎の入り口からすぐよ」

「それを早く言えよ…」

「う、うるさわいわね！あんたが変なこと言うからでしょうが！」

「それは悪うござんした」僕はそそくさとその場所を離れようとした。これ以上の電撃は体に毒だ。

「ありがとう、御坂。ほんじゃ、僕行くわ。あまり目立つのも嫌だしな」

「女子校で男子が目立たないなんて有り得ないわよ」

「ははは、確かに」

「ねえ、それより、何の用事なのよ。気になってしょうがないわ」

「んー、まあ予想も立てて言っ飛ばせば、『お迎え』だな」

「？」御坂はわけのわからないというような表情を浮かべる。

「それだけだよ」僕は御坂と離れて、校舎へと入っていった。

保健室は御坂の言う通り、すぐの場所にあった。

扉に手をかける。

女子校の保健室ってどんなだろう、

なんて思いを一切抱かずに扉を開けたとまでは言わないが、それぞれの思いを胸に秘めながら保健室に入れば、そこにはいつも見慣れた顔の人がいた。

白衣を着た扇さんだった。

「よっ」

「もしかして僕の学校に行くのがめんどくさいから僕を呼んだんじゃないでしょいね？」

「ははは、バレた？」

「まったく…」僕は深いため息をつく。

おかげでいろいろあったよ。

「常盤台中学校でのシステムスキャンが思いのほか延びちゃってね。疲れてめんどくさくなったんだよ」

「めんどくさいを理由に使う大人なんて絶対子供に見せちゃ行けま



せん！」

模範的な行動をお願いします。

「ははは、まあ気にするなよ。そしたらとっと始めるか」  
そう言うと、扇さんはカルテのようなものを取り出す。

「食欲は？」

「ありますね」

「頭痛は？」

「問題ないです」

「腹痛なども？」

「はい」

「手や足に痺れは？」

「まったくないです」

「よし、健康体」

僕のシステムスキャンが終了した。

「あとは、こっちでバンクにアクセスしてやっつくよ」

「いつもすみません」

「気にするな」

僕の力がバンクにのらない理由がこれだった。僕的能力は、データベース上微弱な精神感知能力となっている。もちろん、これも僕が扇さんに頼んで伏せてもらっているのだ。

「さて、帰りますかね」仕事を終えた扇さんはぐっと背伸びをする。

「そうですね」やはり、僕はお迎えだな。

「ちょうどいい。私はもうこれで仕事も終わりだし、崩、一緒に帰ろう」

「ええ、なら青葉を学校で待たせているので少し寄ってもいいですか？」

「もちろん」

そうして、僕たちは帰路についた。

十

「久しぶりですね。一緒に帰るのは」街中の道で僕は呟いた。

「そうだな。もう三年ぶりぐらいだ。懐かしいな。あんなに小さくて手を繋いで帰ってた奴が、もうこんなにでかくなりやがって」

「いやー、いいことですよ」

「生意気いいやがって」

「いててて」扇さんは僕にヘッドロックを華麗に決める。

身長上、僕は170センチ、扇さんは175センチ。ちょうどいい感じに決まってしまふのだ。これがまた、痛いこともある。

端から見れば、僕たちはどんな風に見えるだろうか。恋人同士は有り得ないな。

お姉さん。

はたまた、

母親に見えるのだろうか。

「何笑ってるんだ？」

「いえ、何でもありません」

「そうだよな。思春期だもんな」

「あんたの思考回路はどうなってるんだ」  
いや、ほんと

ヘッドロックのときに少し胸が当たったからって興奮してないですよ？

「最近バタバタしてて、ゆっくりする時間がなかったんじゃないのか？」

「そっぴやそうですね。でも、今までゆっくりしてたんで別にこれくらいのことは気にしませんよ」

「そうか…、なら今度、青葉ちゃんどこか出かけてみたらどうだ？」

「？、急にどうしたんです？」

「青葉ちゃんをみんなの輪の中に入れようと努力することはいいとだが、お前だって頼りにしてるんだから、忘れないようにな」

「…頭が上がりません」

扇さんは見てないようで、しっかり見ている。これはこれで、僕たちを暖かく見守っているんだな。

「さて、帰って寝るかなー」

「お疲れ様ですね」

その時、

爆音が鳴り響く。それと同時に火が燃え上がった。

「な、何だ！？」

「こりゃまいったな」僕と扇さんは、同じ方向を向く。

「おまえら、動くな！」

覆面の男二人が銀行から出てきた。  
強盗。

一人は発火能力を使って、周りを脅している。

「扇さん下がっててください」

「どこ行くんだ？」

「少し手を加える……」

「待ちなさい!!」

普通なら、ここで僕がかつこよく強盗を蹴散らして終わりみたいな感じに行くところが、一人の女の子に遮られた。

中学生くらいの身長に、ツインテールの髪の毛。制服はあの常盤台中学校のもので、腕には緑の腕章。ジャツジメントの証。

「ジャツジメントですよ!」女の子は高らかに宣告する。

「はっ、何だよ!こんな中学生のガキが、ジャツジメントオ!?!」  
ははははは、強盗は鼻で笑っている。

「そんな余裕がいつまで続くかしら?」

「なんだと、コラア!!」男の一人が手から炎を見せつけて言う。

「俺は、発火能力level3だ!!お前なんか簡単に殺せるんだよ!」男は炎を投げつける。

「そうですね…、でも」

少女は、男の視界から消えた。

「なっ、どこだ」

「向ける向きを間違っていますの」

少女は男の後ろに現れた。

即座に男の手を押さえ地面に叩きつける。そしてその少女の太ももについてある白い針のようなものに少女が触れると、それは男の四肢を奪うために服に刺さって地面に貫通した。

「ひいひい！」もう一人の男はたまらなくなつて、車に乗り逃走を図る。

「逃がしませんの」

少女はまた白い針に触れると、それは、車のタイヤに突き刺さる。ハンドルがとれなくなり、車は横転した。

結局少女一人で、全てが収集ついでしまった。

「お前の出番はないようだな」扇さんが僕の横で笑う。

「いや、それどころじゃありません」僕は冷静に判断した。それはおそらく、その少女も同じ考え。

「早く避難してください、扇さん！」

男が放った炎に、

横転した車。

いつガソリンが気化して、爆発してもおかしくない。

「みなさん、安全に避難してくださいですの！」

ジャッジメントの少女も避難警告をしている。慌ただししい避難が始まっていた。

「さあ早く、逃げましょう！」 僕たちは最後尾となって走る。  
「もう、全員……」

「ママー」

「！」

「どうした、崩」

「声がした！」

間違いない。声がした。  
どこだ？どこにいる？

「ママー、どこ？」

「いた！」

銀行の近くにある植木の影から一人の小さな女の子が出てきた。  
泣きじゃくって母親を探している。

「ママーどこ？」

「やばい……」

「崩！」

そして、次の瞬間、

爆発が辺りを包み込んだ。

キ

「本当にお前は人がいい」

「皮肉めいてます。命をかえりみず、少女を救った青少年と呼んでください」

「それは、自分で言う価値がなくなるんだよ」

僕と扇さんは軽やかに話す。僕は小さな女の子前で膝立ちになっていた。

「うええーん！」

「ああ、ー大丈夫、大丈夫。ちょっと暗いところだけど我慢してくれ

よ。ほら、飴ちゃんあげるからな」

僕は大阪のおばちゃんか。

「うん、ありがとう」

泣き止むお前も素直だな！

「さあ、外に出ような」そう言って、僕は女の子を抱え、光の差す方向へ歩く。

道はやはり爆発の衝撃で壊れている部分があった。人は誰もいないが、近くでサイレンが鳴っている。

「アンチスキルが来るな」

「誰もいませんの!?!」

気づけば、先ほどの少女が辺りを必死で探していた。たぶんこの子だろう。

「お兄ちゃんはここで帰るよ。一人であそこのお姉さんのところまで行けるかな?」

「うん、お兄ちゃんありがとう!」

「次はお母さんと離れないようにな」

女の子は、少女めがけて走っていった。

「一件落着いですね」

「いかすねー」



「扇さんもじゃないですか。一番先に、僕に鉄バット投げたのは誰です?」「さて、何のことやら」「扇さんはふふふ、と笑う。

「さあ帰ろう崩。ロリコン?」

「デジャヴ!?!」

つて、扇さん何で知ってるんだ。もうみんな自由過ぎ…。

「とつと帰りましょう」

「お兄ちゃん!」

さっきの女の子が遠くから僕を呼んでいた。後ろにはあの常盤台中学校のジャツジメントの少女も一緒だった。

「ありがとうねー!」

僕はそれに、恥ずかしそうに手を振るだけで答えた。

「すみません、僕青葉を迎えに行ってきます。あとで、学校の門で会いましょう」

「わかった」

そして、僕はその場所から姿を消した。

崩は、それがまあいい判断だな、と思っていた。

第一、こんなことしておいて、何もならないなんて言い切れないと、事件現場を見て考える。

それは、道路が隆起していた。崩は、鉄パイプで地面を殴りつけて、

その反動の音を使って地面の内部から力を加える。そしてその変形で爆発から身を防いでいた。その大きさは道路一杯。まるで核シエルトーのようだ。

しかし、その凄さはそこにはないと扇は考える。

「たった、鉄バットで一回殴っただけの音で、ここまでの衝撃を生み出すとは」

音は反響する。これだけの衝撃を生み出すには、跳ね返った音をどれだけ拾い集めればいいのかなんて予想もつかない。

「ああ、いつも通り」

そして彼女は呟く。

「level 5、元気そうで何よりだ」

彼女も崩の言う通り、学校を目指して歩き始めた。

†

「遅くなりました」

「あつ、崩」

青葉は、職員室で小萌先生と吹寄と一緒にトランプゲームをしていた。ほんと、自由だなあ。

「遅かったじゃない、桐原！青葉が心配してたわよ！」

「いや、ごめんな。ちよつと長引いて」

「何もなかった？」

「うん、大丈夫」僕は笑って、答えた。

「よかった！」青葉に笑顔が咲いた。

「妬けますね」

「せ、先生！！」

「へ、何か焼いてるんですか？」

(何ていう鈍感なんです…)

という、小萌先生の声も、もちろん僕には聞こえなかった。

隣でなんだかわからないような顔をした吹寄に僕だけじゃないと安堵していた。

「か、帰ろうか！崩」

「そうだな。吹寄は？」

「私は、学校行事の話し合いでもう少し残るわ。小萌先生と決めないといけないし…」

じゃあ何でトランプやってたんだ？

「それじゃあ、バイバイ。制理」

「じゃあね、青葉」  
すっかり仲良しになっていた。

「学校初日はどうだった？」

「凄く楽しかった！友達もできたし」

「そりゃよかった」僕は青葉に笑いかける。

「どれも、崩のおかげだよ。ありがとう」

「ありがとう言い過ぎ。気にしないでいいんだよ。これからは、青葉は青葉なんだ。好きにしていいいんだぞ」

「う、うん、そうだね……」

「ん、どうしたんだ？」

「あ、あ、私。これからも一緒にいたいので……だから、その……気にしないでいいなんて言わないで……」

「そうか、」

僕はいらぬ心配をしていたみたいだ。

彼女の自由を考えるばかりに、彼女の気持ちを考えていなかった。

「ごめん、青葉。ありがとうな」

「ううん、私もありがとう！」

「ああ」

僕は素直に頷いた。

「おい」

校門で僕たちを扇さんが呼んでいる。

それに、二人で手を振って答えた。

そして気づけば、1日も終わりが近かった。

Level 1 (音) (後書き)

結局、崩の能力をいまいち説明できなかったような…

まあ、いつか繋がるでしょう(笑)

読んでいただきありがとうございます。  
指摘や、感想もください！

甘い罖(引っかかる僕)(前書き)

短い更新です。

甘い罖（引っかかる僕）

「ジャッジメント風紀委員になれ！崩！」

「あんたは冒頭から前の話を無視して何わけのわからないことを言ってるんだ」

週末の土曜日。

一階の食卓部屋となってしまった部屋で朝食を食べ終わり、少しの休憩を取っているときだった。

扇さんが突如、僕に一つの提案を持ち上げた。

「何でだ？この前の話はジャッジメントだろ？もうあれでフラグ立ったじゃん」

「あれをフラグと言わないし、前の話はジャッジメントの話ではなく僕の能力の話でしょうが！さりげなく僕の話飛ばして話すのはやめろ！」

そういうのが一番傷つく。

「って、いきなりどうしたんですか？ジャッジメントに入れなんて

…」



「いや、冷えピタがネタないって嘆いてたから」

「あんたは何でそういうことに介入してんだ!？」

「まあまあ、ほれこれ」そう言っつて、扇さんはひとまとまりになつた広告の束を僕に渡した。

「こついうのに、よく求人広告とか入つてるしさ。お前も何か見てみたらどうだ？」

「アルバイトならもうしてるじゃないですか」

僕は中学二年生から週3で喫茶店でアルバイトをし続けている。

「しかし、それも高校生となれば、結構苦しいのじゃないか？」

「まあ、そりゃそうですね…」僕は、じつと広告の束を睨む。

「負担が軽くて時給の高いアルバイトなんて夢の見過ぎですよ」

「わからないぞ。地獄に仏つてのもあるしな」扇さんは言う。

「それに、最近崩がお金持つてないからせしめられないんだよなあ」

「あんたが一番の地獄だ！」

まあ、家賃は仕方ないんだけど…何せ、このアパートの住民ピラミッドの中では、僕は底辺であり、エバンス・カルマの食費やもろもろを僕の家賃の上に付け足されるし、タダと言っていた青葉の家賃まで知らぬ内に僕に上乘せされている。

それがアルバイト代から引かれるため、僕の可処分所得は極めて低い。

そんな僕には、負担が軽くて時給の高いアルバイトなんてオアシスだ。

だんだんと広告が気になつてしまう。

「ま、まあ、一応もらつておきます」

「かはは、素直じゃないな」

僕は広告の束を強く握りしめた。

僕は立ち上がって、台所の方に行く。そこでは青葉とカルマが食器を洗っていた。

「青葉、手伝おうか？」

「ううん、大丈夫だよ。今終わったところだしね」

「そうか。なんだか悪いな、一人で全部やらせちゃって」

「気にしないで。それに、一人じゃなくてカルマちゃんも手伝ってくれたし」

「そうだよ！崩兄！カルマも手伝ったんだよ！」

「ああ、悪い悪い。カルマ、ありがとう」

「うん！」

「青葉もありがとな」

「うん」青葉も僕に笑って答えた。

「僕はもう上上がるうと思っっているんだけど。青葉も上がる？」

「あ、ううん。私…今日は……」僕の問いに青葉は少し顔を赤らめて戸惑っていた。

何か困らせる質問だっただろうか？

「ん？、どうしたんだ？青葉」

「あ、いやその、今日は……」

「私と買い物に行くつもりなんだよ」扇さんが青葉より先に言った。

「今日青葉の身の回りの物を調達しようと思っただけ。女性特有の物も買おうと予定してたから、青葉は少し言い出しにくいんだよ」

「そうだったのか」

「うん、…ちよつとね……」

「青葉、別にそういうことで僕に気を使わなくていいぞ。いいじゃないか、楽しんでこいよ」

「ごめんね、崩」

「謝る必要は一切ないよ」僕は笑って答える。

「それじゃ、ごちそうさま」そう言って、僕は部屋を出た。

外は快晴。

最高のお出かけ日和だ。

「そっさいや、僕暇だなあ」

しかし、階段を上がりながら

はっ、と僕は気づく。

右手に持つ広告の束。

ゴクリ、と唾を飲んで、僕は足早に自分の部屋に入った。

そして小さなテーブルの上にはばらす。

「よし、何事も試した。探してみるか」

僕は、広告を一枚一枚吟味し始めた。

「んー」

広告を見続けてはいるものの、やはり今のアルバイトとあまり変わらないものばかりだ。

「やっぱり、あまい考えだったかな」

そうして全て見終わる。

「ん、？」一枚だけまだ残っていた。というよりは、紙が小さいサイズで大きいものに挟まっている状態。

僕はそれを気になって、見てみる。

求人広告。風紀委員。

「これって、扇さんが……………!!!!」

僕はあまりの驚きに絶句する。

「な、何だ……………と!!」

手が震えている。

こ、こんなに……………?

何度も広告を見直す。うん、夢オチのパターンじゃない。これは現実。

お、オアシスだ!!

「神よ!!ありがとう!!」

僕はすぐに制服に着替える。

「おっと、これは持っていかない方がいいな」僕は住所を覚えると、その広告をぐしゃぐしゃに丸めてゴミ箱に捨てた。

「ふ、ふふふ。はははは」自然に笑いが込み上げてくる。

「待ってるよ、ジャツジメント!!今すぐ行ってやるからなあー!!」

そう。

おかしく思う所はたくさんあった。

ジャケット  
風紀委員は、志願制。

しかしこの時、僕は正気を失っていて、それにさえ気づかなかった。

一つだけ言いたいことがある。

いや、これから言うことを僕が言うのは説得力がないと怒る人々も出てくるだろうが、きつとなってしまった僕だからこそ言えることだと思うので言わせてもらう。というより、言わないとやっていけない。

皆さん、

お金に目を奪われてはいけません。

どこかで、扇さんがいたずらに笑っているような気がした。



甘い罖(引つかかる僕)(後書き)

なんか書いていて、

扇さん怖えと思いました(汗)

ぜひ、感想や指摘もください！

**風紀委員（嵌められた僕）（前書き）**

原作のキャラが続々と登場するんですが…

少し書き方が下手で、不安です。





倫理的に今、僕は最悪な立場にいる。

「あの」

そして、今がその最悪の瞬間だった。

僕は、はっ、と 後ろを振り向く。

そこには、ある一人の女性がいた。セミロングヘアに眼鏡の似合う、プロモーションのいい女子高生。腕にはジャッジメントの腕章。

そして、彼女の目が嫌疑に染まっていた。

勿論、そんな相手は、このジャッジメント第177支部の扉の前で一人不気味に笑った後、高らかに倫理、道徳、

教育精神を悉く背徳した物言いでもなく狂ったように叫び出す、

この僕以外有り得なかった。

目が合っただけからの沈黙が重たい。

僕は咄嗟に白目をむく。

「ぐわあああああああ………ああ！はあはあはあ………今とてつも

なく悪いものに取り憑かれていた気がする」

「ごまかせるかい！」

そうやって生きのいいツツコミが決まっていた。

+

「それで、君の名前は？」扉の前で会った彼女が僕に尋ねた。

「桐原崩です…」僕は頭を下げた。

むしろ正座したいくらいだ。

「金の亡者君ね」

「そう言いたいあなたの気持ちも分かるんですが、今はやめてください」誠心誠意でお願いする。

心が引きちぎれそう。

一時のテンションは身を滅ぼす。

「私は固法美偉。見ての通り、177支部のジャッジメントよ」

「もう、ほんとすみません」

「誤り過ぎね」ふふふ、と固法さんは笑った。

「ちょっと、待ってて」そう言うと、固法さんは僕の前から席を外し、パソコンのある場所で調べものを始めていた。

そんな中で、一人そわそわしている僕の目の前にコトツと小さな音を立てて麦茶の入っているコップが置かれた。僕は手の伸びた方向に目をやる。

黒髪のショートカットに花飾りをつけた女の子が少し緊張気味に俯いていた。

「あの、よかったです、これどうぞ」

「ありがとうございます。助かるよ」そう言うと、女の子は安心したように笑った。

「私は初春飾利です」

「どうも、桐原崩です」

「えっーと、高校生ですよね？」

「うん、高校一年生」

「やっぱり。私、中学一年生なんで先輩ですね」

「あ、敬語とかは気にしなくていいよ」僕なんか、きっと年下だと思っただけ敬語をやめていたし……なんか申し訳ない。

「いいんですよ。私はこっちの方がなんだか落ち着きますし、これから私のことは、気軽に初春と呼んでください！」と笑った。

「うん、そうするよ。でも、僕はまだジャッジメントになるって決まったわけじゃないしな」

「あれ、そうなんですか？」

「もしかしたら、無理かもしれないしね」

「どうしてですか？」「倫理的問題」

「？」

「はい、お待たせ」固法さんが調べものであるう、僕の書類を持って戻ってきた。

「えっーと。桐原崩君、能力はlevel2の精神感知能力だね」

「はい」僕は頷く。

「ふうーん…まあ、大丈夫っちゃ大丈夫ね。あなたの能力はうちにはないものだし、きっと役立ちそう。って、それより私はこれにびつくりしたんだけど」と固法さんは僕を見た。

「何、この運動神経の良さ」

実際、運動神経というものはないのだが、と思いながらも僕は少し照れて答える。

「ええ、その、運動だけは僕出来るんですよ」

「百メートル走11秒」

「すごい早いじゃないですか！」横で初春が驚いていた。

「あとの種目も、どれも平均値を大きく上回っているしね。桐原君、凄いわ」

「えっ、あ、ありがとうございます！」

何か新鮮だなあー。

こんな反応、まずあのアパートでは有り得ない。僕は、今まで罵倒されてきた数々の毒舌の限りを尽くされた言葉を思い出すと、涙腺が緩んだ。

「えっーと、それじゃあここからは真剣な話」固法さんが姿勢を正した。

「私たちジャッジメントは、市民の安全を守る者。生半可な覚悟じや駄目よ。それをあなたはわかっているのよね」

あれ、何か話が噛み合っていないような…。

「えっーと、その、これって……」

「はいかいいえ。私はあなたの誠意を聞いているのよ」

「は、はい!」

僕は勢いで返事をした。

「よし。ではようこそ、 ジャッジメント第177支部へ」

「よかったですね、 桐原さん!」

「へっ? どういうこと?」

「採用決定ですよ」

「まだまだ、 確実に採用とは決まっていないわよ、 初春」

「あ、 そうでしたね。 でも、 まずは第一歩ですよ」

「ちょ、 ちよつと待ったあ!」

「ん?」と二人はこちらをむく。

どうなっているんだ? 雇用がどうの、 採用がどうの、 第一歩って?

「さあ、 今から少し長い規定があるけど頑張ってるね」

「あの、 これってアルバイトじゃ?」

「へえ?」 固法さんは思わず、 そんな声を洩らす。 初春も横で要領を得ない表情を浮かべる。

初めて、 齟齬が表に現れた。

「何言ってるの? 風紀委員にアルバイトなんてないわよ?」

ジャッジメント

「へえ？」僕も思わず、声を洩らす。

「えっ、でも求人広告出してたじゃないですか」

「ジャツジメントは志願制よ」

「へえ？」

その時、僕の中で今までの出来事に一連性を見つけた。そう、そしてその原因とも言える始まりはきつとあの言葉からなのだろう。後ろからたどっていけば、明瞭にわかってしまった。

214

『それに、最近崩お金持っていないからせしめられないしなあ  
だから、』

『ジャツジメント  
風紀委員になれ！崩！』

全て繋がっていた。

「あんのおやろつううがああああああああああああ！……！」

まんまと扇さんに嵌められた。



風紀委員（嵌められた僕）（後書き）

ぜひ感想や指摘ください！

予兆（分岐点）（前書き）

新キャラを登場させて見ました。原作キャラにオリジナルキャラが  
いい感じに絡んでいければいいなと思っています。

ではでは

## 予兆（分岐点）

「がぁー、終わったぁ！」

僕はそう叫ぶと同時にペンを放り投げる。

「ふふふ、お疲れ様」と横で固法さんが牛乳片手にパソコンをいじりながら言う。

「まさかこんなに大変とは……」

「見くびってもらうと困るわね。それに、入る前にしんどいなんて言っていたら、ジャツジメントの仕事はきつくて音をあげてしまうわよ」

「はぁ、そうですね。頑張ります」

負担が軽くて時給の高いバイトなんてあるわけない。

おっと、これは扇さんのダメーだった。一話まるごとで騙されたから結構浸透している。

「ま、はれてジャツジメントになれたわけですし、いいか」

「何言ってる？君には4ヶ月の研修期間があるんだぞ」

「ええ！？4ヶ月！？」僕は仰天する。

「私だつて、ちゃんと受けましたからね」と初春がにこつと笑った。

「そんな……きついなあ」

「はいはい文句言わない！男の子なんだからしっかりしなさい」と固法さんは僕に喝を入れる。

「あなたは唯一の男手だからね。いい労働力になってくれそう」

「結局いつも、僕はそういう役回りなんですな。くっ………不幸だ」と僕は上条の真似をした。

「ということは、第177支部って固法さんと初春の二人だけのこと?」

「あと、一人いますよ。私と同じ中学1年生が」

「ただいま、戻りましたですの」と少女の声と扉の開く音。

「あ、噂をすれば…お帰りなさい、白井さん」

その声と一緒に、僕も初春と同じ方向へ何げなく顔を向ける。

そこには、一人の少女が立っていた。

中学生くらいの身長に、ツインテールの髪の毛。そして、あの常盤台の制服。

見覚えがある。

それは、あの時のジャージメントの少女。

「あらっ」

そして僕と目があい、彼女は呟いた。

僕は何も言わない。

ここで、「あっ」と言ってしまえば、確実に負けた。

しかし、そう思いながらも心の中ではピンチという言葉が幾度となくよぎる。これほど冷や汗をかいたのは初めてだった。

「確か、あなたは」  
「初めまして」

僕は全力で隠し通す。

「えっ、あなたはあの爆発の後に会いしたはずでは」

「……………いや、あの時の爆発って何です？」

「とぼけないでください！」少女は僕に詰め寄ってくる。

「うい！？」

「あなたはこの前、強盗事件の後に起きた爆発事故で、女の子一人を助けたはずですよ！この目でちゃんと見ましたわ！あなたですよね！？あの莫大な隆起を起こしたのは！！」

「だ、だから、何です？爆発って。隆起って一体何なんですか？」

「とぼけるのもお辞めなさいな！私はちゃんとこの目で見たと言っていますの」

「こら、白井！」

見かねた固法さんが僕たちを、というよりは一方的な白井を止めに入った。

「知らないと言っているんだ。彼じゃないはずだろ」

「しかし、私は確かに！」

「それに、彼の能力はlevel2の精神感知能力。物理的接触は無理なはずだ」

「……………確かに、そうですが……………」何か納得いかない表情な少女。しかし、段々と腑に落ちたのだろう。少しずつ表情は柔らかくなってきた。

「そうですね、私の勘違いかもしれませんが。いきなり詰め寄って、すいません」

「あ、いやいや。そんな…謝らないでください。間違いはしょうが

ないですから「騙している分、自分の良心が痛んだ。

「って、こちらはどちら様ですか？」と少女は固法さんに聞き直す。  
「白井、あんたが一人でヒートアップしていたから何も知らずに今に至るんだろ」

「うっ、すみません」と痛い所を突かれたような顔の少女。

「彼は、桐原崩君。今日から第177支部に加入の研修員ジャッジメントよ」

「どうも、桐原です」

「それはそれは、私は白井黒子と申します」と丁寧に白井は自己紹介をする。

「どう見ても私より年上でしょう。私のことは敬語など使わずに、白井とお呼びくださいですの」

「えっと、それじゃあそうさせてもらうよ。よろしく、白井」

「こちらこそ」そう言って、軽く握手を交わす。

常盤台のお嬢様って感じた。御坂とは大違いだな。

「よし、じゃあ見回りに行こうか」そう言って固法さんが席を立つ。

「そうですね」と初春も固法さんに賛同する。

「さあ、ごめんだけど、白井も一緒に行くわよ」

「ええ！私もですよ!?!」

「つべこべ言わない！さっきの罰としてついてくるのよ」「そして、うー、と唸る白井を片手で捕まえ、僕を呼ぶ。

「桐原君、行くわよ。ジャッジメントの研修が始まったわ」

「はい、よろしく願います」

そうして僕たちは、第177支部を後にした。

「まさかのゴミ拾い」

僕はボソツと呟く。もしかしたら、いろいろな所に行ったり、はたまた事件を解決したりするのかと思いきや、最初に僕も含めた全員でやる仕事は公衆衛生の保持、つまるところのゴミ拾いだった。

なんだか意外だったなあ。

素直に言えば、少し残念だ。

「ゴミ拾いも大切なジャツジメントの仕事の一環なんですよ」と初春は僕の横で同じようにゴミを集めながら言った。

「そうだな。こういうのって、やったことなくてさ。いい経験だ」

「いつもありがとうね」

不意にそんな言葉が横から飛んできた。

僕は思わず、前を向く。

そこには、老人夫婦が微笑ましく僕たちを見入っていた。

「あなたたちのおかげでいつも道がきれいだよ」

「いえいえ、これが仕事ですからね。ありがとうございます」と初春は、優しく返事をする。

僕は答えられなかったが、それはもちろん僕にもかけられた言葉だった。

「うん！何かやる気が出るな。頑張るか」  
「その調子です」

ジャツジメントの仕事はやりがいがあるな、と違って仕事を始めた時だった。

「ねえ、お兄ちゃん」

一人の男の子が、僕のズボンを掴んだ。

「どうしたんだ？」僕が尋ねてみると、男の子は悲しそうに一本の木を指差した。

それは僕たちの掃除をしている道端の背丈が高い街路樹で、何ともないように見えるが視線を上上げると、小さな赤い風船葉っぱの間に挟まっている。それを僕に見せた後、男の子は僕に言った。

「あれを取ってほしいの」

なるほど、ジャツジメントの腕章を付けた僕を見て頼みに来たのか。

「ありゃー、これは届きそうにないですね」そう言って、初春はその木の下まで行きぐうっと精一杯手を伸ばす。もちろんそれは届くわけがない。風船まで残り、2メートルといったところ。

「私が違うの上げるから、駄目かな？」

「……あれがいい」男の子は初春の提案に少し小さめの声で答えた。

「うーん、困りましたね」

「よし、わかった」

「へえ？」

「僕が取ってやる」

ただそれだけ言うと、僕は木の下から距離を取る。

「だ、大丈夫なんですか！？」心配になって僕に尋ねる初春。



「たぶん、ギリギリね」それにこう答えて、僕は走り出した。

最初だけ早く、

間合いを図って、

一歩目はスキップ。

二歩目はついた瞬間にふわっと上がるイメージ。

少し上がった三歩目は、

街路樹のそばにある手すりを

少しの音ともに

ダンッ、と踏み出す。

「うわぁ！」声を上げる男の子の横にゆっくりと着地する。  
そして僕は笑いかけた。

「はい、どうぞ」

「お兄ちゃん、凄い！ありがとう！」嬉しそうに少年は風船をもら  
う。

「次は離すなよ」

「うん！ほんとにありがとう！」

そう言つと、男の子はバツと走って、それこそさっきの僕を真似す  
るように、飛び跳ねて帰って行ってしまった。

あれぐらいの能力なら、使ってもバレないだろう。

「凄いです！桐原さん！」間髪入れずに初春が詰め寄ってきた。

「どんな運動神経してるんですか！」

「い、いや……ちょっとな。僕も一瞬無理かと思ったけど、届いてよかった」

バレてなくてよかった。

「さあ、まだ続けよう。ゴミ拾い」

「桐原さん、初日なのにもう立派なジャツジメントみたいですよ」

「お褒めの言葉。ありがとう」

「ゴミ拾いはここまでにしましょう。だいぶ片付いたことですし。私、白井さんと呼んできますね」もう、どこ行ったんですかぁー、と初春は白井を探しに行ってしまった。

「ふうー、これで一段落か」

僕はそう言いながら、ゴミ袋の口を縛る。

今となっては、ジャツジメントに入ったことに関して何も思わないようになっていた。確かにきついこともあるだろうが、その分以上にやりがいがある。むしろ、入って良かったんじゃないだろうか。おっと、忘れてはいけない。扇さんには、必ずや制裁を下してやる。

「あの一」

そんな事を考えている時、僕は後ろから声をかけられた。はい？、



する。

「すみません、わからない質問をして困らせてしまいました」少女はすんなりと謝った。低姿勢な彼女。

「ところで、あなたは？」

「ああ、僕は桐原崩。君は？」

「私は絵合萩えあわせはぎと言います」

「あれ、一人称某じゃないじゃん！」

「あ、キャラから素に戻ってしまいました」

こら、そんなこと言うんじゃない！

「とりあえず、絵合だな？」

「はい」

「えーっと、僕にできることはあまりないんだが……。絵合はどこに向かってたんだ？」

「それも忘れてしまいました」

「こりゃ困ったなあ」うーん、と頭をかきむしる僕。

「んじゃあ、軽い質問をしよう」昨日見たテレビでやっていた記憶に関する番組が言うには、簡単な相手のことを聞き出すだけでも、脳の刺激になるらしい。これでまずは様子を見よう。

「好きな食べ物は何？」

「イナゴ」

「OKわかった話を換えよう」

あー、そうだよ。戦国時代の人だった。あのご時世にはいろんな食文化があったんだなあ。……あれ、でもこれはキャラなんだよな。もう何がなんだかわからねえ。

「あ、間違えました。アナゴです」

「ややこしいわ!」

「す、すみません」

すぐに謝られたら、怒るに怒れない。というよりは怒ったわけではないんだが…。

「あ、あの、これって何の意味が?」

「……何でもない」

んー、どうやら不発だった。

「ご、ご迷惑はかけられません。某はもう行くことにします!」

「いや、大丈夫だよ。僕は一応ジャツジメントだし、見捨てられないよ」

「で、ですが」

「桐原さん!」僕を呼ぶ声に一度絵合から目をそらしてふり向く。初春と白井だった。

「あ、ちょうどよかった。おい、初春、白井!今、この女の子が……」

ふつと振り向いたその場所には、

いたはずの絵合はいなかった。

「あれ？」

「すみません、遅れました。白井さんが遠くに行き過ぎてて」

「私は近くにいましたの。初春が変に遠くまで探しに行ってたんでしょ？」

「う、しょうがないじゃないですか！って桐原さん、どうしました？」

「ついさっきまで、絵合ってやつと話していたんだけど、振り向いたらいなかったんだ」

「何ですの、それ？まるで幻想を見ていたような感じですよ」

「いや、確かに喋ってたのに」

「きつと、猛ダツシユで帰ってしまったんじゃないですか？」

「んー、そうなのかな」

確かに、絵合はもう行きますって言ってたし…

「帰りましよう、桐原さん。ゴミ拾いも終わりましたし、次はデスクワークが待ってますよ」

「……うん」

「きつと、用事を思いだして急いで帰られたのですよ。あなたが気に病むことはないはずですよ」

「そうかもしれないな。じゃあ、行くか」

僕たちは、結局戻ることを選んでいた。

この時、そんなに深く彼女のことを考えてはいなかった。

「ぐっ……」僕はふらふらになりながら、自分のアパートの階段を上がっていた。

夕方5時半。

固法さんに、かなりの重労働を課せられた気がしてならない。結局疲労が重なったせいで、扇さんには制裁を下せず空回りに終わってしまい、この話全体での僕を見たとき、きつといい所が一つもないような気がする。

「これは、僕の立場を考え直す必要があるな……」

僕の部屋に行く途中にある、青葉の部屋は静かだった。

扇さんは、どうせ次話にでもなればわかると設定がぐちゃぐちゃになるような物言いで僕に行っていたが。

はたして何をしているのか。

模様替えとかなら手伝っただけだな。

ということとは、次の話で僕は青葉の部屋に行くのか。そうとなれば次が気になって仕方ない。

「でも、何かをやるってことは大切だし。邪魔しないでおこう」  
気になる心を抑え、僕は青葉の部屋を通り過ぎ、自分の部屋の扉に  
手をかけた。

しかし、

ふと頭の隅を、

今日出会った彼女のことだよぎった。

絵合萩。

僕に声をかけた彼女。

自分は何をしていたか、わからない彼女。

それは、彼女にとってもものすごく恐ろしいことに感じるのだろう。

今までのことが全て嘘になって、

まるで、今、世界に産み落とされたような感覚。

意味をなくして、

世界をひたすらさ迷う感覚。

「あの時、ちゃんと話せばよかった」



僕はそんな後悔をしてみるけれど、

きつと、そんなことは何の意味も持たず、

運命が変わるわけでもなくて、

そしてそれは彼女にとって、

最も失礼な言葉だったかもしれない。

予兆（分岐点）（後書き）

新章にして見ました。

名称をつけるなら、

ジャッジメント編です。

今回はインデックスの方ではなく、レールガンの方で発展させてみようと思います。

感想、指摘ぜひください！

絵合わせ(二人)(前書き)

すごく長くなってしまった。

途中、だれた部分もあるかもしれませんがぜひ読んでください。

絵合わせ（二人）

「おい、青葉。行くぞー」

「ちょっと待って!」

といった、どこにでもあるような高校生の日常を僕は演じていた。

しかし、青葉が遅れているなんてめずらしい。いつもなら僕より先に部屋を出て僕の部屋の前で待っているのだが、今回は逆の立場だ。

何かあったのだろうか。

「青葉、大丈夫か?」

「うん、」

「もし、車椅子じゃ不便なことしてるんなら、僕も手伝うから」

「えっ、いや、いいよ!入ってきたら……炙る!」

「炙る!?!」

なぜに炙るをチョイスしたんだ…。

ほどなくして、青葉は部屋から出てきた。いつもの制服姿に膝には鞆が置かれている。

「何かあったのか?」

「な、何でもない!早く行く」

「んじゃまあ、行きますか」

僕は勢いよく青葉の車椅子を持ち上げた。階段を少しずつ降りていく。

「あれ?、青葉」

「何？」

「今日は何だか重い気がするんだが…」

「えっ」

「太っ、いてえ！」

「そういう言葉は、女性には控えるべきだよ！何で簡単に言うかなー！」

「ちょっと待って、これは冗…、ごめん、謝るから今は暴れないでくれ！」

朝から僕たち二人はぎゃあぎゃああと楽しそうに笑っていた。

まるで台風の目のように、穏やかな朝だった。

+

「やっと、一段落だにゃー」昼休み前の授業が終わってすぐ、土御門がぐつと後ろに姿勢を伸ばしながら言った。

「上やん、飯食べに行こうぜー」

「そうだなあ。桐原は何にするんだ？」

「んー、無難に定食で行くか、それとも奮発して上に行くか」

「とほほ。今月の残り、上条さんは昼飯はパン一つで生きていかないと行けないですよ」

「にゃー！なら、俺は上やんの前で定食を食べてやるにゃー！」

「僕も、定食にラーメンをつけて腹一杯食べてやるっ」

「お前ら、友達を助ける気はねえのか！」

「泣きつ面に蜂作戦だ」

「最悪じゃねえか！」

「ねえ、……崩」

そうやって僕たち三人が騒いでいる時、僕に青葉がおずおずと話かけてきた。

「ん、どうしたんだ？」

「あの、昼食の話なんだけどね……」

「ああ、もちろん忘れてないよ。青葉も一緒に食べにいくんだからな」

「えっと、そうじゃなくて……」

「うん？何だ、何かあったの」

「桐原！」

見るにみかねた様子で吹寄が乱入してきた。いきなり僕の胸ぐらを掴む。

「え、な、何だよ！」

「察しなさい！」

吹寄の頭突きが僕の額に炸裂した。

「ぐえっ！」

あまりの激痛に声を洩らしてしまう僕。

「これだから、鈍感な駄目なのよ！」

「お前に言われると、なぜだかかなり傷つく……」

僕は額を抑えながら、もう一度青葉と向き合う。  
「えーっと、何だっけ？」痛みを隠すように笑いながら僕は青葉に尋ねた。

「あのね、その……」いつそう顔を赤める青葉。

「この前、制理と愛沙とお弁当を作るうって話になってね。それでお弁当作ったんだけど……」  
そう言っつて、すつと両手に可愛い布でくるまれた小さな箱を取り出した。

「ちよつと作り過ぎて余っちゃつて、よかつたら……食べてほしいな、と」

「へえ？」

少し驚く僕。

昨日部屋から出て来なかったのは、それだからだったのか。

「これ、僕がもらつていいのか？」

「う、うん。初めて作つたから、味には保障がないけど……」

僕はそつと、青葉のお弁当を受け取つた。

心から嬉しい。

誰かにお弁当を作つてもらつうなんて初めてだった。

僕も少し恥ずかしくなる。

「あ、ありがとな、青葉。いただきよ」

「ほんと？ありがと！」嬉しそつに青葉は頷き返した。

「それじゃあ、……つて」  
今更と言つよりは、

触れなかつたというのが正しいのだろう。

僕は後ろから並々ならぬ殺気を垂れ流していた存在に目を向けるこ

とにした。

「やはり上ちゃんよりも先に、のこのこと出て来た簡単に消せる桐原から殺していくべきだにゃー」

「な……！待ってくれ、土御門！これには……」

「深いわけなんてないよなー！簡単明瞭！今度こそ、問答無用！殺させてもらうにゃー」

「うわあああああ……！」

「あ、あの……」

土御門の拳が僕の目の前で止まった。

「よかつたら、まだお弁当の残りはたくさんあつて……」と青葉は鞆を開く。そこにはお弁当がいくつも入っていた。

あんだけ重たかったのはそのせいか。

「だから、土御門君も、よかつたら上条君にもあるから」

「……いやー、それは嬉しいにゃー！」と土御門はまたもや機嫌を取り戻す。

青葉の笑顔に救われた。

「それじゃあ、早速みんなで食べますか！」

みんながそれぞれの椅子や机を集めて大きなテーブルができる。そこには、青葉、吹寄、姫神たちが作ったお弁当が広がっていた。

「いやー、上条さんは助かりましたよ」

「だな、後で金を取ろう」

「何でだよ！」

「さあ、みんなで食べましょうぜ！」



いただきます。

「お、うまいにゃー!」

「よかった」

「やっぱり。私は影が薄い。話の中に出てこなかった」

「いやいや、姫神落ちこむなって!みんなわかってるよ。名前は出て来てたし!」

「じゃあ、いただきます」

「どうぞ……」

「……おいしい」

「ほ、ほんと?」

「うん、初めて作った料理とは思えないくらいおいしいよ」

「よ、よかった!」

今日、昼休み。

とある教室の一角は、

花見の席ぐらい賑やかだった。

+

「さあて、もう一頑張りしますか」僕は街中の道で一人意気込む。

今までなら、学校が終われば家に帰っていたが、ジャッジメントになった、というよりはジャッジメント研修員となっている今、僕には立派な職業があるわけで、簡単に家へと帰ることは出来ない。青葉には申し訳なかった。扇さんもこんな時間じゃ帰っているわけもない。よければ、177支部に連れて行ってあげようかと提案を持ち上げたのだが、『邪魔になっちゃうからいいよ。それに、エバン君やカルマちゃんと一緒にいるから大丈夫』と青葉は優しく断ってしまった。

「そうだ。青葉にお礼をしよう」今日、お弁当を作ってくれたお礼。突然渡されたらびっくりするだろうな、と想像してにやにやしながら考えたものの、今は177支部が目の前であったため後に回すことにした。まずは目先のことからこなしていこう。がちやんと扉を開けた先では華やかな会話がされていた。

初春が扉を開けた音に気づいて僕の方に向いた。

「あ、桐原さん」

「ごめん、遅かったな」

「いえいえ、まだ何も起きてませんし、こうやってのんびりしていますから」

「それは、あまり言うことじゃないな」

その時、僕は見かけない顔があるのに気づいた。初春と同じ制服をきた女の子。けど、初春とは違って髪は長い。

ぱっと目が合う。

「あ、紹介しますね。こちらは私の友人、佐天さんです」

「どうも、佐天涙子です。初春と同級生なんです」

「僕は桐原崩。よろしく。っということとは佐天さんもこのジャッ

ジメント?」

「いやあ、私は違いますよ。ここによく遊びに来るんです」と元気よく答える佐天さん。

「ここは、そういう所じゃないんだけどね」とその横で咳く固法さん。

「私のことも、初春や白井さん同様に佐天って呼んでくれちゃっていいんで。桐原さんは先輩ですしね」

「それじゃあ、お言葉に甘えてそうさせてもらおうよ」

「よろしく願いますね」と佐天は笑った。

「桐原さん、ここにくるまでに何か変わったことはありませんでしたか」唐突に白井が僕に尋ねてきた。

「え、まあ何にもなかったけど」

「そうですよ…」

「何かあったのか」

「さっきもその話をしていたんですよ。なんせ、学園都市七不思議の候補となっていますからね」

「ジャツジメント内では、不安の種」

佐天と固法さんが両方の見解を述べた。

どうやら、僕の想像していたような華やかなガールズトークではなかったらしい。

「ここ最近になって、夜に襲われて怪我をするっていう事件が多発しているんですの。しかも、急激に」

「ならわかってただろ?今は昼だし」

「それが違うのですよ」

「ん、どういうことだ?」

「まだ証言は一つしかとれていませんが、この前、襲われて怪我をし、病院に搬送された人に詳しく聞きに行きましたの。まあ、恐怖

のためあまり多くは話してくれませんでしたけど。その中で、一つ気になることがあります、それが日中に会ったことのある人だということですよ」

「なるほど……ということは、白井は犯人が日中に会った人の中から襲う相手を決めていると考えたのか」

「そうですね」

「それに加えて、今度は悪質だね」固法さんがさらに付け足した。

「この一連の事件、使われた凶器が全部刃物なのよ。どれも軽い怪我で済んでるんだけど、恐怖はそれぞれの心に染み付いているみたいで」

「相手の姿とかの証言はあるんですか？」

「それが全く。ただ凶器を持っているとしか」

「うーん、手も足も出ないですね」

「そう。早急な解決を求められているんだけど、難航しててね」考え込むような仕草を見せる固法さん。

「やっぱり、昼の警戒を強くするしかないですよ。夜はアンチスキルに見張ってもらうのが最大の策ですわ」

「そうみたいだな」

「後は、監視カメラの増設とか」

「とにかく夜の外出を控えるとかですかね」

初春や佐天もいろいろな案を出して、一緒に考える。

「まずは、僕たちがやることからやりませんか？何か仕事が残っていたら、僕が手伝いますんで」

「それが今日はヒマでねー」と固法さんはらしくない発言をした。

「やること全部やっちゃったし」

「そうですね」

意外だ。

こんな日もあるんだな。

「あ、それならちょっと相談があるんですけど」

「ん、何？」

「女性にプレゼントするのってどんなものがいいんですかね？」  
女性について聞くなら、やっぱり女性だろう。

「おっと、桐原さん！今の言葉は聞き捨てなりませんね！女性にプレゼントですと！」佐天はここぞとばかりに噛みついてきた。

「ええ！桐原さん、まさか恋人がいるんですか！？」

「あら、これは意外ですこと」

続いて初春と白井も興味津々になって話に入ってくる。

気付けば、全員参加になっていた。

「いや、その…恋人とかじゃないんだけど…」

「顔が少し赤くなってますよ！桐原さん！」

「わあー、やっぱり恋人なんですね！」

「へえー、ね、どんな子なの？」

「私も気になりますわ」

「ちよっと待ち。人の話聞ってる？」

僕一人の言葉に、四人一気に言われると勝ち目がない。僕は一旦四人を落ち着かせて、事の説明をした。

「ほほー、隣人にお弁当のお礼をしたいと」

本題に行くまで10分かった。

「そういうこと。でもいまいち何をあげたらいいかわからなくてさ。質問した次第なんだよ」

「そうですか。なら、やっぱりお花とかいいんじゃないでしょうか？」

「そうだな。近くで手頃に採れるし」

「…はっ！これは本物の花じゃありません！」と初春は慌てて、頭を隠す。

「やっぱり日用品なんてどうでしょう。役に立ちますし、結構いいと思いますよ」

「うん、そうだな。帰り見てみるよ」

「それなら、帰りにみんなで見に行きましょう」

「そうね、何だか面白そうだし」

「え、ち、ちよっと」

「いいですわね」

「賛成です！」

「いや、その！別についてこなくていいですから！」続々とその気になっている中、僕は必死でくい止める。

「最後まで悩みを解決しましょう」

「ふふ、高くつくわよ。桐原君？」

僕には、

四人の笑い顔がもの凄く恐ろしく思えた。

†

「ありがとうございます」

という店員の声は、驚くことに僕が青葉にプレゼントをかったお店からではなく、クレープを売るワゴン車からのものであった。クレープを食べながらそれぞれの感想を述べる四人の姿。

横には、寂しそうに財布をみつめる者が一人、という構成だ。勿論、僕は後者。

「くっ、はめられた」

「ひどいわね。買ってほしいなとみんなでお願いしただけよ」  
あれは脅迫でしたね。

『あー女性にお金を出させるとは、罪な男ですねー』×4  
気付けば、強迫観念のように感じて財布からお金を出している僕がいた。

「でも、納得いくものが買えてよかったじゃないですか」

「それは、佐天が言えることじゃねえ！」僕はツツコミをしたものの、どこからともなく湧いてくるポジティブシンキングに心が落ち着いた。右手に持っている袋を目の前まで持ち上げて、少しにこやかに言った。

日用品というアイデアから僕は雑貨屋さんで何を買おうか探す中、やたらと女性用下着を勧めてくる白井を除いた、初春や佐天に固法さんは僕にいろいろアドバイスをしてくれたのだが、なかなか決まらずどうしようかと悩んでいた時、戸棚の端にあったマグカップに僕の目は止まった。それは薄いピンクのストライプ模様をしたマグカップで、これがいいと思った僕は4人に意見を聞くと『それ可愛い』という返事が揃って返ってきたので、このマグカップを買おうことにした。しかし、未だに謎なのが、雑貨屋の主人が僕の買い物の理由を聞いて『これはサービス』とこれと対になっていた色違いの青いマグカップをただでもらったのだ。どういう意図なのか？もしかしたら、ただ可愛い女性陣に『太っ腹！』なんて言われたくて無理をしたのかもしれない。

何はともあれ、無事に青葉のプレゼントは買えたというわけだ。

「ん、まあ確かに……」

「顔がにやけてますよ」

「にやけてねえ」

辺りは少しずつ暗くなってきていた。

「では、解散にしましょ」固法さんの一言に全員が賛成する。

「暗くなってきたきているということは、事件の多い時間帯になってきているということですよ。お気をつけて。初春は佐天さんをちゃんと送るのですよ」

「はい、大丈夫です！」

「それでは、皆さん。さよならー」初春と佐天は手を振って僕たちと別れた。

「さて、私たちも帰ることにしましょう」

「そうですね」

「では、少し周りに注意を払ってパトロールという形で帰ることにしますの」

「そうね。じゃあ、また明日」

「はい」

「また明日ですの」

そう言っつて、僕たちも別れていった。

既に僕の帰る道には人影もなく、閑散としていた。空は、濃い藍色が支配する。

「早く帰るか」

そう呟いて帰路に行く途中、僕は近所にある公園の前で足を止めた。

「ん？」ベンチに誰かが伏せていた。暗くなってきたため、ここからでは姿しか見えない。

「誰だ？」パトロールも兼ねて帰っていたので、見捨てるわけにはいかず、僕は公園内に入っていく。

それは、近づくにつれてだんだんとわかってきた。

見覚えのある少女がうつ伏せになっていた。



「絵合？」

それは昨日会った少女、

絵合萩だった。

「何してるんだ……」僕はため息混じりに彼女に近寄る。

昨日何もわからずさまよって、今もこうやって公園のベンチに寝ているということは、やっぱりまだ彼女は迷い続けているのか。

外で無防備な状態をさらすなんてことは非常に危ない。それに、今は夜に襲われるケースの事件が多発している。

「おい、絵合」僕は彼女のそばで声をかけるが、反応はない。

「こんな所で寝ていたら風邪ひくぞ」

僕はそう言って、彼女の肩を揺すろうとした、

その瞬間だった。

ガバッ。

それは、まるでマントのようにカーディガンが僕の前で翻った。

そして、布を切り裂くような音。

「っ！」右手に目をやれば、まるでぱっくり裂けたような傷口から、赤い赤い鮮血が滴り落ちる。

その翻ったマントの先には、数メートル上空に人影が宙を舞っていた。

勢いよく公園の遊具に、叩きつけるように着地した。

「え、絵合………?」

彼女は何も答えない。

「お、おい、絵合……、」

動揺で声が震える。

それなのに、

彼女は何も答えない。

「え、絵合……どうしちゃったんだよ……！」

「ははは……」



僕をあざ笑つかのような、

世界を吐き捨てるような、

恐笑。

「な………！」

僕は息を詰まらせる。

「え、絵合………」

「ああ？さっきから絵合絵合つるせえなあ………」

それは、僕の知ってる絵合じゃない。

まるで、器はおなじで、

中身が違う。

「あんまり言われると、むず痒くてしょうがないだろうが！！素敵だねえー、あんたの愛情表現ってやつかい！？痺れるうー！！」

「お、お前……誰なんだ……？」

「はははははは！やっと、気付いたのかよ！！とろい、遅い、のろいの三拍子だなあ！脳味噌が溶けちまってなくなっただんじゃねえのか！！よく考えてみる！お前の出会った絵合萩はこんなだったかあ！？」

そう彼女はあざけ笑う。

そして、

宣戦布告をするように、

右手に持った日本刀を鈍く光らせ、

彼女の声が高らかに響いた。

「俺の名前は、絵合雑。絵合のなかのもう一人の絵合。絵合雑だ！  
！」





絵合わせ(二人)(後書き)

絵合さん。

今回は、絵合さんがヒロイン?ぽくなります。

ぜひ、感想や指摘をください。

源平合戦（幕開け）（前書き）

なんかきるところ間違えて長くなりました。最後まで読んでいただけるとありがたいです。

## 源平合戦（幕開け）

ピピピピッ、と

携帯のアラーム音が鳴った。

僕ははっ、と目を開ける。いや、これは眠りからさめるのではなく、閉じていた瞼を開く感覚。

体を起こしてみる。横には救急箱から取り出した包帯が転がっていて、それと同じ包帯が僕の右手に巻き付けられていた。

まあ、自分でやったのだが。

『お前なんかと、殺ってらんねえ』  
僕は昨日を思いだす。

その言葉が僕と絵合雑の最後の会話だった。

『お前は殺すに値しねんだよ』  
そう言つて、絵合薙は僕の前から消えてしまった。  
僕はその後も、必死で彼女を探したのだが、結局見つからず終い。  
犬のマーキングも顔負けな血のマーキングを施して、近隣一帯に多  
大な迷惑をこうむるだけに終わった。

「ふうー」僕は息を吐き出して、すぐに新しい空気を取り込む。  
脳味噌をフル回転。

もう、今日は勉強に身が入らないだろうな。

そして、僕の導き出した結論はいたって単純明快なものだった。

ジャツジメントのメンバーには伏せておこう。

青葉にも言わない。

もちろん、ここの住人も同様に。

この問題は、

僕一人で解決する。

そう決意した時、チャイムの音が扉の方から聞こえてきた。  
そして、いつも通りの声。

「崩、学校行くよ」

「おう、今いく」

僕は、素早く学校に行く用意をすると、  
玄関へ走っていく。

そして、扉を開けると、

『あはは、昨日こけちゃったよ』と包帯に巻かれた右腕を見せて、  
普段通りの僕を演じた。

+

「それじゃあなー、上やん、桐原、東雲ちゃん」

「「おう」「」

「じゃあね」

僕たち三人は土御門と校門で別れた。なんでも、外せない用事があるらしい。

「今日は三人か」

「愛沙と制理もいないしね」

「ま、帰りますか」

そう言いながら、帰路に行く僕たち。

「そう言えば、崩。その包帯どうしたんだ？」

僕が、うっ、となるような質問を何食わぬ顔で上条は聞いてきた。

「それね、昨日階段でこけて、一面すりむいたんだって」

「そう、お恥ずかしながら」

青葉のナイスタイミングの言葉に便乗して、僕は話を進める。

「へえー」と上条は僕の右腕を見る。

「ドジっ子属性だな」

「ぶち殺すぞ！」

変な誤解はされたものの、何とか隠し通した。

「それでは、上条さんもスーパードの特売という戦場へ飛び立つとしますか。じゃあな、桐原、東雲」

「そうか、じゃあな」

「うん、バイバイ」

早くも青葉と僕の二人だけになってしまった。

「上条君は、私の事青葉って言わないんだなあ」

「どうしたんだよ、いきなり」

「みんな、私のことは青葉って呼んでくれればいいのに」

「女子同士だと違和感ないかもしれないけど、男子が異性のことを下の名前で呼ぶのは何だか言いにくいんだよ。下の名前で呼ぶって、それだけ親しくて特別な意味があるんだよ、きつと」

「えっ、えっ!?!」

青葉が突然、もの凄く動揺し始めた。

「ん、どうした？」

「いや、その……そうなんだ……」

「うん、多分だけどね」

「じゃ、じゃあその……」

「？」

「崩は、…私の事を……」

青葉の顔が紅潮していく。

僕にはそれが具合が悪いように見えた。

「お、おい！青葉っ！」

「ふ、ふえ！？」

「熱でもあるんじゃないのか?!大丈夫か?しんどくないか?」

「うっ」青葉はまるで詰まらせるような声を出す。すると次には、少し怒った口調になった。

「な、ないよ！ないから大丈夫！」

「そうか……、なんか怒ってないか？」

「怒ってない！」

何だか確実にタイミングを外してしまった。

「鈍感なんだから」ボソツ。

「？」

そんなこんなで、青葉と話している内に家に着いていた。

「ねえ、崩」

「何だ？」

「その怪我って本当に転んだの？」

まるで核心を突くような問い方。

「そうだよ、痛かったんだから」と僕はその素振りをする。

青葉は心配そうな目で僕を見つめていた。

「本当に?でも昨日の夜、転倒したような音なんてしなかったよ」「確かにそうだ、転んでいないのだから。」

「一番最初の段で転んだから聞こえなかったんだよ」

「そうなのかな」

「心配し過ぎだ。何かあったのか?」その僕の質問に、青葉は本当に心配な顔をして僕に言った。

「私の知らない所で、何だか崩が苦しんでいるような気がして」「……………」

いらぬ気が使われ過ぎてしまったな、と思うと、僕はすぐに青葉の正面に回った。膝を曲げて同じ視線になる。少し、泣いているよ

うな顔にも見えた。  
そんな青葉に僕は笑って答えた。

「大丈夫！何があっても、ちゃんと横にいてやる。だから、心配するな」

その答えに、青葉は暗い表情に笑顔を取り戻して、うんと嬉しそうに頷いた。

「じゃあ、僕はジャツジメントに行ってくるよ。二階に上げようか？」

「ううん、カルマちゃんとエバンス君と一緒にいるよ。頑張ってるね」  
「ああ、任せとけ」

僕は、青葉を家に残して177支部へと向かった。

「おい、桐原」

歩き始めて数分、僕は声をかけられた。  
聞き覚えのある声に、僕は振り向く。

上条だった。

「あれ、スーパーの特売じゃなかったのか？」

「負けたんですよ。とほほ…」

「お気の毒に。で、どうしたんだ？こんな所で」

「いやまあ、お前のその傷に關してのことは、俺もよく知っておかないとなって思ってたさ。少なくとも、大事な友達だから」

「……………なるほどな」

お見通ししてわけだ。

「何でそう思った？」



「その傷口、東雲からは見えないかもしれないが、俺からは丸見えだ。それに、また傷口が開いて血が滲んでる」  
確かに包帯にはうつすらと赤色が浮かび上がっていた。

「よく見てるわ、やられたな」

「お前もしかして、一人で行くんじゃないだろうな？」

「…、そこまで言われるとは。お前いつから預言者になったんだよ」

「俺だったら、そうしてると思ってたんだ」

「かはは、そういうことか。当たってる」

本当に、似た者同士みたいだ。

「でも、すまないがここは僕一人で行かせてくれ」

「それ、やばいんじゃないのか？」

「ちよつとね。やってみないとわからない」

「そんなことに、お前一人で行かせるかよ」

「上条なら、そうしているんだろ。なら、人には言えないよな」

「うっ、それとこれとは」

「同じさ」

僕は上条を言いくるめる。

「だから、行かせてくれ」

「…わかった」上条は頷いた。

「あら、案外素直だな。僕はてつきり、お前の熱血な言葉が来ると思っていたんだが」

「しねえよ。俺だってこれ以上、何か厄介事を抱えるのは御免だ。

何もない平和を好むんだからな。ただ」

上条は強調した。

「必要になったら、いつでも俺を呼べ。必ず駆けつけてやる。絶対にいなくなったりするんじゃないぞ、桐原」

「ああ、僕はしぶといからね」

いつも、こういう上条の優しさに感謝している。本当に、いい友達

を持った。

「それじゃあ」

「ああ」

僕は、そのまま上条の横を走り抜けた。

+

「遅れました！」僕は勢いよく、第177支部の扉を開ける。

昨日のメンバーが勢揃いだ。しかし、この前とは違い、それぞれが仕事をしていた。佐天さんは、相変わらずお茶を飲んでまったりとしていた。

「ああ、桐原さん！」元気のいい、僕に対する第一声は、察しの通り佐天さんだ。

「今日はみっちり、プレゼント攻撃の結果に関して聞かせてもらいますよ…って」佐天は僕の異変に気付く。

「どうしたんです？その右手の包帯」その言葉に反応して、白井に初春、固法さんまでもが、僕の右手の包帯に目をやった。

「桐原君、あなたまさか」

「桐原さん、もしや……」ピンと糸を張ったように、緊張する空気。

「ええ、実は……」

僕は、重い口を開いた。

「階段から転げ落ちたんです」

「はあ？」とそんなあほ可愛らしい顔が二つ。

しかしそれも長くは続かず、途端に白井が姿を消した。

「あれ白井が消え、ぐえあー！」

後ろから跳び蹴りの制裁を食らった。

「変に心配したではないですか」

「なぜ、お前はそこから安堵の表情をすることができないんだ…」

「もう、ひやっとしたじゃない」固法さんは、ほっとため息一つついて、横にある牛乳パックを口に運ぶ。

「とりあえず良かったです」と初春が僕の机にお茶を運んで来てくれた。

「お、ありがとう」

「で、どうなっただんですか？プレゼント攻撃の結果は！」

「私も気になります！」

僕はそれで、あのマグカップを思い出した。

「あ、忘れてた」快晴並みに。

「えー！ちよつとどういうことですか！まだ渡してないんですか！？」佐天が不満の表情を浮かべる。

「いやー、渡そうと思ってただけだなあ」

「忘れるなんてひどいですよ！せっかく買った物なのに、有り得ないです！忘れるってことはよっぽどのチキンか、最上級のチキンだったかのどちらかです！」

「どつちみちチキンじゃねえか！」

僕の地位、ただ下がりだな。

「あ、そう言えば、今日の仕事は何かある？」

「残念ですが、今のところは私たちで足りていて…あまりないってというのが現状です」

「そっか、」

「丁度いい。」

「なら、僕は巡回に行ってくるよ。今日は運動する時間がなくて、」

何だか体がなまってる感じだし」

「はい、ではお願いします」

僕は初春の淹れたお茶を飲むと、ありがとつと言って席を立つ。

「桐原さん、お気をつけてくださいですの。被害はひどくなる一方ですから」

「ああ、わかってる。それを止めるために僕が行くんだから」  
そう言つて、僕は足早に177支部を後にした。

ここからが、問題だ。

と、僕は歩きながら考える。

彼女、

絵合にどう会つのか。

ここで、萩なのか籾なのかは別として、まず彼女自体、つまりは絵合自体に会わないといけない。

しかし、

「何の手掛かりもないんだよなあ」

彼女は、

いわゆる通り魔的存在。

昼間に獲物を下見して、

夜に狩る。

できるだけ日没前に探し出すに越したことはない。

だが、通り魔故に神出鬼没。

探し出すのはなかなか厳しい。

とりあえず、巡回を兼ねて、ルートにそった道を歩きながら匂う場所には立ち寄り、人の群れからはできる限り目をそらさず、じっとその中から彼女を探す。けれど、成果は全くだ。

「くっ、どうすればいいんだ……」

時計に目をやる。

時刻は午後5時半。探し始めて、およそ2時間が立とうとしていた。

「そういえば、」

僕はふと思いたった。

絵合雑との邂逅に近い時間帯。

もしかしたら、彼女はまたあの公園にいるかもしれない。

むやみやたらに探すよりは、いささか可能性が高い賭だ。

「行ってみるか」

僕は、足をあの公園へと向けた。

僕のいる道には人影がなく、閑散としていた。空は濃い藍色が支配する。

公園にはもちろん僕一人だった。昨日彼女が飛び移った遊具の一部が歪んだまま残っている。

やっぱりハズレだったか。

そう思いながら、僕は彼女の寝ていたベンチの前に立つ。

どんな思いで寝ていたんだろう。

どんな思いで座っていたんだろう。

哀しんでいたのだろうか。

悲しんでいたのだろうか。

一人であることに、

一人で泣いていたのだろうか。

「なんだろうな…、」

きつと放ってはおけないんだ。

みんなを守りたいから。

そして、

僕自身もその孤独をよく知っているから。

「一体どこへ？」

「お前って、馬鹿なのか？」

その声は、突如として僕の後ろから降り注いだ。  
すぐさま振り返る。

すらっと立っている、電柱の上。

不敵に笑う彼女、

絵合薙がいた。

「そんなに俺が恋しかったのかあ？寝ていた場所を愛おしんで見やがって」

「最近、どうも誤解されがちだな。ここでははっきり言っておくぞ。

僕は変態じゃない」

「はっ！どうも信用の足りない言葉だ」

絵合薙は重力に従って地面に降り立つ。その右手には、僕を切り裂いたあの刀が握られていた。

「そんな物騒な物持ち歩いて、ましてやそれで斬りつけるなんて、大変なことしてくれるよ」

「ああ、これな。とつてもいい名刀なんだぜ。名は『髭切』って言うんだ」

「へえ、源氏の宝刀じゃんか」

「お、わかるんだねえ。嬉しい限りだ」そう言って、絵合薙は鞘から刀身をさらけ出して、妖艶に見つめる。

「それで、僕と同じように違う人々も斬ったのか？」

絵合の手がぴたりと止まった。

「なんだあ、知ってんのかよ」僕をジロツとみる。

「もしかしてと思っただけさ。ただ、今はつきりしたけどね」

「……ああ、そうだよ。俺が通り魔」絵合が淡と言った。まるで、当たり前のように。

「俺が斬りつけたのさ。怖がって逃げる奴らに素早くズバッとね」と絵合は愉快に語る。

「お前、何で楽しそうに話してんだよ」

「あちら、怒ってますう？もしかして正義の味方気取りですか？」  
揶揄する絵合。

「ふざけるなよ」

「ふざける？俺は至って真剣だぜ」僕の凄んだ声に少しもひるむことなく、言葉をつむいだ。

「今すぐ、やめろ」

「ははっ、言うねえー。まさに正義の味方ってわけだ」

「いい加減にしろ。こんなことして何が楽しいんだ」

「楽しい？、はっ！、お前に、何がわかるんだよ」

「どういうことだ？」

「お前は、何を基準として、何を正義として、何を正解として、俺



「たちを裁いてるんだよ」  
そして、絵合は、

絵合薙は、吐き捨てた。

「お前には、何もわからねえ。俺から見ればこんな世界、ごみくず  
同然、消えればいい世界なんだよ」

「いったい、どういう意味だよ？」

「知っても知らなくても同じことだ」そう言うと、絵合は刀身を戻  
して僕と向き合う。

「お前と殺り合うつもりはねえが、どうしてもって言うなら、殺し  
てやってもいいぜ」絵合は不敵に笑った。

「僕は殺し合うつもりじゃない。ただ、穩便に和平交渉をしに来た  
んだ」

「ははっ、今何ってった？」

「ただ、和平交渉に……」

「なめてんのか」

それは一瞬だった。

恐怖。

体が戦慄する。

指の先まで、小刻みに震えた。

絵合薙が僕の目の前で、

勢いよく刀を抜く。

「!?!」

いつ僕の前に来たのか、そして、いつ刀を構えて僕に向け抜いたの  
かなんて考える暇はない。僕は刃が当たる寸前で避けきる。

「何安心してんだ」

そのまま、彼女は一步踏み出していた右足に重心を預け左足を大き  
く回した。しなる鞭のような足が僕の腹をえぐる。

しかし、

彼女はそこから空きになっている僕に攻撃を仕掛けてこなかった。

僕は慌てて、距離を取る。

「たいしたことねえな。お前」

「何だよ、それ…」

ここまで、劇的に変わるのか。  
まだクタクタする。腹筋が全く意味を持たない。

「ま、俺のキックをあんだけまともに受けて立って居られるなら、  
たいしたもんだって褒めるべきだなあ」

そう言うと、絵合は刀身を鞘に収める。

「じゃあな、お前ももう帰れ。俺はお前を殺す気なんて失せてんだ  
よ」

「どこいくつもりだ」

「はあ、どこでもいいだろ」

「また、誰かを傷つけるのかよ。そんなことして、何になるんだよ」  
「うるせえなあ、何回も言わせんなよ」絵合の顔には怒りの表情があつた。

「俺はこんな世界、大嫌いなんだよ。俺はそんな世界に復讐するん

だ。俺たちを弄んで捨てた、この世界にな」

彼女はそう言い残す。

「追いかけてきてみる。次会ったら、確実に殺す」

そして、絵合薙は僕の前から姿を消してしまった。

取り逃がしてしまった。

かっこよく和平交渉なんて言うてみたが、怪我してさらに逃げられた。状況は、最悪の極み。

「どうすりゃいいんだ？……って、」

考えたところでどうとなるわけでもなくて、僕の意味は変わらなかつた。なにせ、しぶといので。

「まずは、態勢を立て直そう」

僕は一旦家に帰ることにした。

+

世界に嫌われる。

こんなことは、起こり得ないのは確かだ。世界が僕たちに対して話しかけてくるわけでもなく、実在もしない。

ならば、

世界とは何なのか？

見えるもの。  
聞こえるもの。  
触れるもの。  
感じるもの。  
全事象全て。

世界とは、僕たちだ。

僕が世界を形成して、あなたを僕の世界に見る。

あなたが世界を形成して、僕をあなたの世界に見る。

ならば、世界に嫌われるということは、その人の世界に誰もいなくなることを言うんじゃないだろうか。

例えば、

ずっと一人とか。

誰かに拒絶されるとか。

もしかしたら、愛の反対が無関心のように、

生きているの反対は、

世界に嫌われる同義語は、

誰にも愛されないことかもしれない。

絵合雑に蹴られた腹部の痛みも取れている僕は、家まで戻ってきて

いた。

時刻は、8時半。  
もう真つ暗だ。

階段を上がって、僕の部屋の前に行く。

「青葉、大丈夫かな」

申し訳ないなあ。今日は全然出番がない。

僕は扉を開ける。

すると、煙草の煙が鼻をつく。

「よう」

扇さんが不法侵入をしていた。

「自由過ぎでしょ!」

「何言ってるんだ。私はお前の帰りを待っていたんだぞ。青葉ちゃんの手作り料理を作ったにも関わらず、いつになっても帰って来ない罪な奴をね」

「そうだったんですか……」手作り料理を、か。

「青葉は今どこに?」

「待ち疲れて寝てしまった。下にいる」

「そうですか」

「なんか、いろいろ大変みたいだな」

「うっ。ええ、ちょっと」

扇さんのジト目が僕を威圧する。

「ま、いいけど。お前が決めてやってることなら文句は言わないさ。

その代わり、これは青葉ちゃんの気持ちも代弁してのものだ」

「え、何ですか?」

「必ず帰って来い」

「……了解です」僕は深く頷いた。

「すぐ行くのか?」

「はい、取りに戻ってきただけなんで」そう言って、僕は細長い棒の入った袋を取り出し肩にかけた。

「すぐ戻ってきます」

「一人でいいのか？」

「誰も巻き込みたくありませんし。これは僕が終わらしてきます」

「ふうーん、だとさ。みなさん」

「みなさん？」

「そういうことですよ」

僕の前に現れたのはテレポートしてきた、

白井と固法さんだった。

「し、白井に、固法さん!？」

「私たちは置いてけぼりですよ?」

「いや、これは、ぐええ!」今度は固法さんから強烈な頭突きを食らった。

「私たちがジャジメントよ。あなた一人で行かせないわ」

「しかし、今回は危険で…ぐええ!」次は白井からキックをもらった。

「私たちをなめていますの?あなたよりずっと先輩なんです」

「それに、私たちだけじゃないわよ」そう言って固法さんは僕に携帯を差し出す。

「僕にですか?」そう聞きながら、携帯を耳に付ける。

『一人で抜け駆けなんてずるいですよ、桐原さん!』

「う、初春!？」

『私たちも、ついていきますよ!』

『そして、私もです!』

「佐天さんも!？」

固法さんが誇らしく笑った。

「私たちにも頼りなさい。あなたの力になれるんだから」  
「固法さん……」

「崩、いい人たちに囲まれたな」  
横で扇さんが笑った。

「そうですね」  
本当に上条といい、僕は幸せだ。

「固法さん、白井、初春、佐天」僕ははっきりと答えた。

「よろしく願います！」

僕は今から

大切な人たちとの、

この日常を守ろうと思った。



## 源平合戦（幕開け）（後書き）

次からは戦い重視で行こうかと。

絵合さんの設定なのですが、これ全部授業で出てきた奴なんですよ  
ね（笑）

ただ、神裂とキャラクターがかぶりそうで、二重人格という特徴を  
足してみました。

馴染んでいれば嬉しいです。

感想、指摘ぜひ下さい。

評価も遠慮なくしてもらって構いませんので、お願いします！

## 屋島の戦い（衝突）（前書き）

ただ、タイトルに戦いの名前なんてかっこいいなあと思ってつけてみただけなんです。なんかすいません。最後まで読んでいただければ幸いです。

## 屋島の戦い（衝突）

『ほうー、なるほど。となると、私たちは平氏ってわけですね』

「ん、まあそういう感じかな」

家を出て歩きながら一通りの説明を終えた後、佐天が僕に言った。

『今日の源平合戦ですね』

「大袈裟だよ。相手は一人だし」

「では、桐原さん。私たちはどのような作戦でいくつもりですか？」

「えっ、作戦って…」

「といますか、あなたは最初、一人でどう戦うつもりでしたの？」

「い、いやそれは…」

よく考えてみれば、level 2の精神感知能力者がどうやって戦うかなんて、ほとんど皆無じゃないか。

「まさか…」

「ちよつと慌てて来たから、あまり考えてなかったりする」

何か白井に言われそうになるのを避ける。

「もう、だから177支部に巡回に行っただけ一度も帰ってこないなんてことがあるのよ」

それですっかり忘れていた。

「じゃあ、こうしましょう。私は後衛に回る。あなたは自分の能力を駆使してその子と戦いなさい。白井があなたのサポートをしてくれるわ」

「はい。頼んだ、白井」

「わかりましたわ」

「で、場所の特定だけど、初春何かわかった？」僕の手持っている携帯に顔を近づけて、初春に尋ねる固法さん。

『今、防犯カメラの映像システムにハッキングしたのはいいんです

が、怪しいところは特にはないですね。もう少し調べてみます』

「そう、何かわかったら教えて」

『はい』

「まずはこれまで」

打てるだけの手を打った。

「しかし、今回の犯人が女の子だなんて…考えられないわ。なんて名前だったっけ？」

「絵合です。でも彼女は恐らく違います」僕は固法さんの質問に答える。

絵合萩。

絵合薙。

二人で一人。

一人で二人。

「絵合は二重人格者です。僕はどっちとも会ったんですが、事件に  
関与しているのはどうも絵合薙の方ですね」

「二重人格ですか。また、厄介そうなことですよ」

「暴走つてやつかしら」

「いや、それが…」

それは、きつと違う。

彼女は、絵合薙は明確な理由を持っていた。

《世界が憎い》

彼女は、明らかに向ける対象を決めている。

そう、世界とは僕たち。

でも、ここに何の理由が…

……ツ、ザツ……

「！」僕はとつさに前を見る。

そこには、ただ深く広がる闇のみ。

「どうしたの？」

「誰か来ます」

「何でそう思いますの？」

「能力のおかげだよ」

勿論、嘘ではない。僕の力は《音関係》。響いてきた音で何かをお見極めることができる。

恐らくその状態は人。

だけど、今問題なのは、そんなことじゃない。

「何でこんなに沢山いるんだ？……」

「どっぴいっこと？」

『こ、固法さん！！大変です！！』  
携帯電話が震えた。

「何かあったの！？」

『スキルアウトです！ざっと30人！』

それは、闇から這い出てくるようだった。ゆっくりと、まるで当てるのようには歩いてくるが、その虚ろな視線は確実に僕たちを捉えていた。

「何、こいつら……」固法さんは一歩引いて答える。

「まるで、ズンズンじゃない……」

「精神操作……」

間違いない。

誰かに操られている。

「どつちやらそう簡単には通してくれなさそつだ」

「計画変更ですの」

「そのようね」

「どつちします??」

「もちろん、決まってるわ」

各自撃破で

その言葉と同時に僕たちは散らばって、

スキルアウトの群れに突っ込んだ。

僕が先陣をきる。

スキルアウトの一人を殴り飛ばしたことを合図に戦闘が始まった。片っ端から殴り飛ばしていく原始的な手法。

「もしかしてあなた、昔は相当悪かったのでは!？」

「まさか、少し鬱憤がたまってたただけだ!！」

的確に且つスムーズに蹴りをおりませで、スキルアウトを蹴散らしていく。

数人がまとめて僕に襲いかかってきた。

「白井!」

僕は手を伸ばす。

「はいですの!」

白井が僕の手を握って、

その場から消えた。

一瞬止まるスキルアウト。

「どっち向いてんだよ」  
相手の頭上で踵を持ち上げ、一気に振り下ろす。呻き声とともに相  
手は地面に吸い込まれた。

「決まったな」

「ええ」

「ぐわああ!」

白井の後ろから突如、スキルアウトが襲いかかる。

「白井後ろ!」

「っ!」

「もう、二人とも」固法さんがそのスキルアウトの腕を掴んだ。そ  
して、流れるように鳩尾に蹴りを叩き込む。

「まだ、気を抜いちゃだめよ」

「さ、さすが…」

固法さんは一番戦闘とは縁のない能力者だが、確実に僕たち以上に  
スキルアウトを撃退している。

「みなさん、大丈夫ですか!？」

「ああ、なんとか。あと少し」電話に繋いだイヤホン越しから聞こ  
える初春の声に、僕は答えた。



「そっちはどうだ？」

『すいません、まだ見つかってなくて。今、上空からの監視システムにアクセスして……』

『ドカン！』

電話越しに向こうから効果音が響いた。

『バン、バン、バン！』

「おい、何があったんだ！？」

『あ、……』

「おい、初春！」

『スキルアウトが……こちらにも……』

「……」

まずい。

向こうにいるのは、

初春と佐天だけだ。

「逃げろ！初春！！佐天を連れて逃げるんだ！」

「どうしたの！？桐原君！」

「初春たちがスキルアウトに襲われています！！」

「何ですって！？？」

『きゃあぁー！！』

何かの割れる音。

「おい、初春！！」

携帯は繋がっているが、応答がない。

「桐原君！あなたは先に行きなさい！」  
固法さんが叫んだ。

「ですが、まだ！」

「桐原さん、お願いしますの！！私の友達を！」

「っ！後はよろしくお願いします！！初春、佐天、今行く！」

「桐原君、頼んだわ……」

トーン、と響き渡る音が固法の耳に入った時には、

もう桐原はいなかった。

†

「くっ、そ……」

佐天は必死に扉を押さえる。周りには堤防をつくろうとしたのか、机が乱雑に転がっていた。

「あ、あ……あ……ああ……」

恐怖のあまり、初春は椅子から転げ落ちたまま、ガタガタと震えていた。

まるでゾンビのようなスキルアウトが初春と佐天を襲おうとしている。

「う、初春！しっかりして！」

「え、あ……ああ……」  
恐怖から逃げられない初春。その青ざめた表情はいつそう佐天の気持を焦らせる。

「あんたがしつかりしないでどうすんのよ！ジャッジメントでしょ！」

「で、でも……私なんか……」

「そんな最初から見切りつけて、何もできないなんて言う初春は、私は大嫌いだ！」

「さ、佐天さん……」

「私は、level 10だけど、それでもむちゃ言うてここに来させてもらった。何もできないかもしれないけど、それでも絶対何か出来るんじゃないかと思って、ここに来たの。私が諦める前に、あんたが諦めたらどうしようもないでしょうが……！」

佐天は思いをぶちまける。

それは彼女がずっと苦しんで来たことなのだろう。

周りほとんど前へと進むのに、自分は一人は何もできない劣等感。いつも一緒にいる友達なのに、どことなく感じてしまう孤独感。

他人を応援することしかできない。

横で笑うことしかできない。

そんな自分の情けなさを呪って、

もしかしたら、周りを憎んでしまったこともあるかもしれない。

だけど、もう彼女は疲れたのだ。

劣等感に耐えるのも。

孤独感に浸るのも。

応援するだけの自分に。

笑っているだけの自分に。

だから、たとえどれだけ長くかかろうとも、

彼女は変わることを決意した。

そんな彼女は大きな声で叫ぶ。

初春に対して。

自分に対して。

「だから、最後まで諦めないで！！」

初春はゆっくりと立ち上がる。パニックになった際外れたイヤホンを片耳につけた。

そこから、ずっと呼んでいたであろう少年の声が聞こえてきた。

『初春、おい、初春!!』

「はい……桐原さん……」

『大丈夫か!?!、今向かってるからな!』

「このまま、携帯は切らないでください」

「わかってる!どうしたんだ!?!」

「今から、上空からの防犯カメラシステムにハッキングして、犯人の居場所の特定を行います」

『おい、何言ってるんだ!早く逃げるんだよ!』

「嫌です…私は最後まで諦めません。私だって、立派なジャッジメントなんです!」

初春は強く言った。

「必ず、見つけだします!それまでは電話を切らないでください!」  
そう言い残すと、初春は乱暴にイヤホンを外す。椅子に深く座り直し、パソコンに向かい合った。

そして、キーボードの上に、指を走らせた。

もの凄い速さでの確にキーボードを叩く。パソコンがそれについて

いくようにも見える。

「ハッキング成功！」

バン、とエンターキーを強く押すと、

画面が広がった。

「え、嘘……」そこで初春は啞然とする。

そこにあるのは、およそ百個はあろう防犯カメラの映像。

ここから探しだすなんて、

「時間が、ないのに……むちゃで……」

「そんなことない!!」

がつ、と後ろから初春の肩を佐天が掴んだ。

「私もついでる！」

「はい!!」

二人は、パソコンに目を向けた。

怪しい防犯映像を端から調べ倒す。

汗が玉になって落ちて、

瞼が痙攣して、

眼球が右往左往する。

「「あつた!!」」

二人の声が同時に響いた。

一つの映像がアップにされる。それには確かに、人影が映っていた。

「これです!」初春は瞬時にイヤホンをつける。

「場所はセブンスミストのビルの屋上で……」

「アー」



すぐ横で声がした。

まっすぐ立っているのは、

虚ろな目をしたスキルアウト。

「ひっ」と二人は小さく声を洩らす。

その男の手には、

鈍くひかるナイフ。

高く上げたその腕は、

呻き声とともに振り下ろされた。

「うっ！！！！」

トーン、とまた音が響いた。

その音は、目をつぶっていて視覚のない今の二人の耳に、確かに響き渡る。

そう、まるで水の波紋のように、

深く、

広く、

静かに響き渡る。

初春と佐天は、目を開けた。

まるでスロー再生されているみたいに、

ガラスの破片が空中に飛び散っている中で、

一人の男性が立っていた。

灰色の長い棒を背に預け、スキルアウトの刃物を止めて、

こちらを向いていた。

「全くむちゃくちゃがって、ひやっとしたよ。でも、」

彼は笑う。

「ありがとう。助かったよ」

「桐原さん……遅いですよ……」

「悪い悪い」

彼は、灰色の棒で振り払い、  
スキルアウトに向き合った。

「お前らには、ガラスの割れる音だけにしといてやる」

そう言つと、

彼は雑払った。

まるで悪い夢を、

消してしまつたかのやうに。

+

「へえ、来たんだ」

とあるビルの屋上、

月の浮かぶ空と地上の間に挟まれた空間で、

その刀『髭切』を不気味に輝かせ、不敵に笑う、

絵合薙は言った。

「お前か、あのスキルアウトを操ったのは？」

「ははっ、御名答。俺は何でもできるからねえ」

「僕以外にも手を出しやがって」

「言ったろ、俺は世界が大嫌いなんだ。何もかも壊したいんだよ」  
そう言うと、彼女は僕と向き合う。

「言ったよな。次は確実に殺すって」

「そっぴゃ、そうだったっけ」  
僕はとぼけてみたりする。

「はっ、まさか、そんなちっぽけな鉄の棒持っただけで強くなった  
とでも思ってたのか。お前は小学生かよ」

「お前は、僕的能力を知らないから言えるんだよ」

「……ほう」彼女は不敵な笑みをやめる。

そして次は、僕が不敵に笑って答えた。

「次こそ、お前を止めてやるよ」

「ははっ、面白いねえ。傑作な言葉だ。録音して何度も聞きたいよ、お前を殺した後でなあ」

そう言うと、絵合薙は『髭切』を持ち上げる。

刀を右肩口に。

鐔が唇の横にくる。

「ではでは、簡単に死ぬんじゃないかねぞお!!」

「僕はしぶといんだよ!!」

絵合薙は間合いを急速に縮め、

僕は強く、灰色の棒で床を殴った。

戦いが始まった。



屋島の戦い（衝突）（後書き）

ということ、いきなり屋島の戦いから始まったジャッジメント編は次で終盤です。次のタイトルはみなさん御察しのとおり、

壇ノ浦の戦いでいこうかと（笑）

ぜひ、感想や指摘ください。  
待ってます。

壇ノ浦の戦い（絵合の思い）（前書き）

やっぱり戦闘を書くのは難しいです。今回は、戦いの終着点までを書きました。絵合編最終話の一つ手前となっています。ではでは。

壇ノ浦の戦い（絵合の思い）

音は実体がない。

音は感覚がない。

僕たちは知らず知らずに音を生み出し、音は僕たちに返ってくる。

音が鳴り止むことはない。

もちろん、この場合も例外でなく、人間離れた絵合雑であっても、僕の放った音撃に反応ができなかった。

「!?!」

刹那的に異変を感じて前に突き出した両手が防御代わりになる。しかし、後方に飛ばされる形。

上手く態勢を立て直し、絵合雑は僕をいぶかしげに見た。

「何だあ？今の」

「さあね」

「その棒にでも、トリックがあんのか？」

「まさか、これは単なる棒さ。まあ、名前をつけたいなら…そうだ

なあ、『泉水』にでもしようかな」

「ははっ、いいねえ。源氏に騙された平家の宝刀ってわけだ」

もう一度構え直す絵合。

「だが、次は無しだ」

モーションなしのスタートダッシュ。

急速に僕に近づく。

「おせえ」僕は床を軽く『泉水』で叩く。

音を反響させ、

収集させる。

音撃。

「ははっ！」

しかし、絵合はそれを避けた。いや、避けるというよりは、僕が床を叩いた瞬間、僕が方向を決める瞬間に、少し自分の位置をずらしたのだ。

絵合はバツと飛び上がる。

「まずは、第一段階クリアってわけだあ！」

「それは早いな」

僕は泉水を持ち替え、絵合に向ける。

「まだあるぜ！」僕は音撃を放つ。

今度は彼女に命中する。

「っ……」空中でバランスを取れず、絵合はただ単にぶっ飛ばされる。

「……、ああなるほど。そういうことかあ」

彼女は着地することなく、

そのままビルから落ちていく。

「逃がすかよ」

僕はまた音を奏でる。

そして、地上に降り立った。

「へえ、便利だなあ。その音」

絵合が僕に突然話しかけた。

「瞬間移動もできるわけだ」

「……ばれちゃった、みたいだな」

「はははっ、あんだけ使えばわかつちまうよ、じゃあそ」

肩口を抜けて、

刃を下へ。

後ろ手に構える。

「俺の能力は知らねえだろ？」

スタートダツシュ。

「同じ手は無理だって言ってるんだろ！」

僕は音撃を繰り出した。

しかし、それは、

高く高く突き上げた、

絵合の刀が切り裂いた。

ブワン、と空気が揺れるような錯覚。

「な、…」

「音を伝えるのは空気だ。なら、その空気さえ切ってしまうば、簡単なことだよなあ！」

絵合は、刀を僕に向けた。刀身の周りの空気が、振動している。

「大気使い（エアロギスト）……」

「御名答。いちいち感情の起伏に浸ってる暇は与えねえぞ！」

接近戦に持ち込まれるとこっちの分が悪い。

僕は音撃を放つけれど、絵合はそれを切り裂き、接近戦へと突入した。

僕が後退していく展開。

「俺の方が一枚上手だ」

流れるような剣裁きが僕を圧倒する。

「おせえんだよ！」絵合の刀が僕の左肩を裂いた。

「っ！……」

傷口を抑えながら後退しようとした時、

冷やっとした感覚を背中に覚えた。  
僕は振り返る。

壁。

窓。

巨大なビル。

逃げ場なし。

「しまっ……」

「疾っ」

絵合が大きく切り開いた。

一瞬白い線のようなものが走って、

静寂の中で、ビルがスライドする。

次の瞬間、爆音と伴に倒壊した。

「はっ、上手く逃げたじゃねえか」倒壊したビルから目を離し、絵合は僕の方を見た。

「命拾いしたなあ！」



「おい」

僕は声をかける。

「感情の起伏に浸る暇なんて、与えねえぞ」

「ああ……？……！！」

絵合が突如、ふっ飛んだ。

勢い良くビルに突き当たる。

またもや爆音が響いた。

「……はははっ。なるほど……応用問題ってわけだあ」  
土煙を薙払って、絵合は姿を見せた。頭から一筋だけ血が流れている。

「お前の能力は音。絶えることのない音を使う能力であるのは、わかっていたが……まさか、その音に触れないでも、操ることができるとは思ってたなあ」

「今のじゃ、少し語弊があるかな」そう言って、僕は自分の耳を指さす。

「正確には、僕が聞きとれる音なら自由に扱える、かな」

「どのみち、同じ意味だろうが。変な能力だ」はあー、絵合はとため息をついた。

そう、まるでうんざりだと言っように。

「……お前、そろそろ真面目にやればどうなんだ？」  
今までとは違ったトゲトゲしさが含まれている。

「お前の能力だったら、今ので俺は死んでたはずだぜ？なんせ、ビルが派手に倒壊したわけだ。出てきた音は爆音に決まってる。それが、俺にまともに当たっていいりゃ、こんな傷じゃすまなかつたはずだ」そう言って絵合は流れる血を指差した。

「僕はお前と話合いに来ただけなんだ」僕はきっぱりと答える。

「まだ、そんな戯れ言をほざくのかよ」

「違う、僕はお前が苦しんでいる理由を聞きたいだけなんだ。どうして、そんな苦しいことしたって意味ないだろうが」

「……………」

「それに、お前が苦しいからといって他人を苦しめていいわけないだろ」

「……………」

「だから、もうこんなことはやめろよ。まだ、今なら……………」

「うるせえなあ……」

ボソッと、

唸り声がした。

「しちやしちやと、偉そうにぬかしてんじゃねえよ!!」

絵合は爆ぜた。

もう、総てを壊すように、

何も要らないとこころを、

周りを削って

自分を削って

血走った目で僕を睨みつけ、

刀を振るった。

「お前は、俺たちの何を知ってそんなことを言うんだよ！！何も知らないくせに、のこのこと、正義論語ってんじゃねえよ！！何が間違いで、何が罰なんだよ！！お前の決める悪いことって何だよ！！」

怒りに任せて

狂ったように、

僕に刃を斬りつけた。

「っあ！………」

「鬱陶しいんだ！！耳障りなんだ！！目障りなんだよ！！気持ち悪いんだよ！！何も無い、何も持たない、私たちには関係ないんだよ  
お！！！」

そう、

その刃はまぎれもなく、

僕の胸を切り裂いた。

暖かい、

温かい、

血が、

彼女に飛び散り、

僕にも飛び散る。

晒された傷口が、妙に冷たかった。

異様に感じた。

それはもしかしたら、

学園都市を吹き抜ける

冷たい冷たい風のせいかもしれない、

彼女の、

ツメタイ風に当たって、絵合薙の顔から落ちた、

一粒の滴かもしれなかった。

僕と一緒に切り裂いた、ただの鉄パイプの音だけが、

無残に響いていた。

+

音は、全てを支配する。

僕たちの腕も、足も、そして

心さえ支配する。

この感覚は、青葉の時と同じだった。

音が何かに共鳴して、

僕に伝わるような感触。

まるで、

誰かと世界が繋がったような気がする。

それをもし、他人の世界と名付けてしまえばなら、

あの白い世界は、

あの時の青葉の世界で、

そして、今感じているのは



絵合の世界なんだろう。

†

「うっ、ば、がはぁ！」

その室内に少女の苦しそうな声が響いた。といっても、彼女は液体の詰まったカプセルの中でむせかえっただけである。しかし、それを合図に、液体がすーっとひいていく。カプセルが開いた。

「……何？」

少女は震える声で呟く。

「……どこ？」

たった一枚の患者着で部屋をうろつく少女。部屋を出て廊下を歩いていても、人の姿が見えなかった。

そう、

あの忌々しい研究者たち。

彼女を縛り付けていたあの研究者たちも。

少女は困惑した様子で建物の外へ出た。  
太陽が眩しかった。

学園都市は夏なのだろう。半袖姿の学生が沢山いる。

「どうすれば…」

一人、混雑の中でうろたえる少女。

周りはまるで気づかない。

「うっ、どうすれば…」

話かけようとするも、誰とも視線が合わない。

その時、少女は目があった。

少女たちを見ていたのは、複数の中学生。

笑っていた。

「あ、」

少女は少し笑みがこぼれた。自分を見ていることに好印象を持つ。

「あの、すみません…」

何も知らずに、

彼女は彼らに声をかけた。

「うわっ、本当に来たぜ！」一人の中学生が叫んだ。

「お前が喋れよ!」「えー、やだよ」と彼らは口々に話す。

「あ、あの…!」

「無理無理、気持ち悪い。あいつ」

少女には、それが重々しく響いた。

「じゃあねー」とおちよくった口調のまま彼らは少女の前から去っていく。

また一人、少女は残された。

「あの、すみません」

手当たり次第に、少女は声をかけ始めた。

「あの、すみません!」

それでも周りの人々は、彼女を無視して通り過ぎる。

「ねえ!!!」

彼女は、叫んだ。

その時には、

もう誰もいなかった。

叫び疲れた少女は、膝を抱えてうずくまった。

「……ねえ、どうして……」

彼女は震える声で呟く。

かすれた泣き声で呟く。

「どうして、誰も助けてくれないの？」

「苦しいよ」

「悲しいよ」

「痛いよ」

「ねえ……」

「……嫌だよ」

「もっ……」

「こんな世界嫌だよ」

†

「……はらくん、きりはらくん、桐原君、桐原君……」

ぼやけていた音が鮮明になっていった。

うつすらと視界が戻る。

「桐原君!!」

「桐原さん!!」

「……………あ……………」

そこには見慣れた顔が並んでいた。

「みんな……………大丈夫…でした?…」

「そんなことより、自分の心配をしてください!!」初春が涙に濡れた顔で言う。

「今救急車も呼びましたからね!」佐天も僕に訴えかけるように言った。

「こちらです!!」

どこからともなく声がして、数人が僕に駆け寄ってくるのがわかった。

そこには、白井と固法さんの姿があった。

「…ああ…、固法さんに白井……………」

「大丈夫ですよ、桐原さん!？」

「桐原君、今救急車も読んだから安心して!!」

「すまないが、ちょっといいじゃん!?」アンチスキルの武装をした一人の女性が僕に話しかけてくる。それは、学校で見かけたことのある先生だった。

「黄泉川…先生…」

「小萌んとこの生徒じゃんかよ！」驚く表情を浮かべる黄泉川先生。しかし、直ぐに一般人と同じように扱い、僕に避難を命じた。

「救急車が来るまでにも、ここから離れるじゃんよ！もうこれも、危ないじゃんよ！」

僕はその言葉で、はっと目が覚める。

記憶が、甦った。

「え、絵合は……」僕は周りにいる全員に尋ねた。

「絵合は……どこです?」

僕の言葉に全員が押し黙った。誰も喋ろうとしない。

「絵合は……」僕は、ここでやっと異変に気づいた。

夜なのに少し明るい。

それは、太陽の光とかじゃなくて、単なる光。

夜を照らす街灯のような光。

僕は、その方向へ目を向けた。

「え……」

そこには、ビルぐらいの大きさに膨れ上がった光があった。眩しく、学園都市を照らす。

「な…何だ…」

コツ、と横で、僕の手になにかが当たった。

そこには、

血のついた日本刀があった。

絵合薙の使っていた、

『髭切』

「まさか、絵合は……」

固法さんは頷いて、重い口を開いた。



「あの中よ……能力暴走してるの……」

僕には、大きな光が周りをどんどんと削っていく音が絵合の悲鳴に聞こえた。

「さあ、早く逃げるじゃんよ!!」

僕はゆっくり、上半身を起こした。

横にあった『髭切』の鞘を握る。

「桐原…さん？」佐天が横で呟いた。

「みなさんは、……ここにいてください」

「むちゃですよ、桐原さん！そんな傷で一体どうしようと言っただすの!？」

「そつよ!、あなたはもう出血が多すぎるわ!」

「お前、本当に死んじゃまうじゃんよ!」

「……知ってますか？絵合が……こんなことをしている理由……」

僕は呟いた。

彼女の真実を。

「とても、とてもしょうもないことなんです…。僕は、たったそれだけのことで、あいつに…世界を嫌いになってほしくないんですよ……」

僕は立ち上がって、ゆっくりだけど、絵合に向かって歩き始める。

「むちゃです！桐原さ…いたっ！」

僕を止めようと追ってきた初春が、何かにぶつかった。

「…何ですか、これ…」

何も見えないのに、何かにぶつかったのだ。

「少し、待っててくれ…すぐ戻るから…」

僕はそう言い残す。

歩くと、傷口が広がるのがわかった。綺麗に裂かれた皮膚が、振動で小さく上下に揺れる事に、少しずつちぎれていく。キリキリと痛い。

その痛みを抑えて、僕は歩く。

絵合のいる場所へ向かった。

+

絵合は、叫んでいた。

いや、悲鳴を上げていた。

何で？

わからない。

誰もそんなことはわからない。

たとえば、心が読めたからといって、

相手を理解したわけではない。

そもそも、

心はどこにもない。

「何だよ……てめえ……」

絵合は、あの血走った目でまた僕を睨みつけた。

「しつげえなあ、そんだけやられたのにまだ向かってくるなんてよ  
お！」

ブワァ、ときつく風が吹き荒れた。

「……話がしたいんだ……」

「まだ言うのかよ!!」

絵合はぱつと手を振り上げた。空気の塊が勢いよく僕の横ギリギリ  
を通り過ぎた。

「次は外さねえぞ!!」

「……、話がしたいんだよ……」

「しつげえな!!」  
放たれた空気が左手を掠めた。すーっと血が流れ落ちる。

それでも、僕は彼女に近づこうとする。

「何で……何で、止まらねえんだよ!!」  
動揺した絵合は、もう一度、空気を放つ。次は片口に当たり、僕は  
よろめいた。

赤い血が流れてくる。

それでも僕は、彼女に近づこうとする。

「やめる……、来るな、来るなって言っただらあがあ!!」

乱発する空気が辺り全域に広がった。

苦しいんだよな。

きつと、苦しいんだよな。

今まで、悪いことだとわかっけていて、

それでもやり続けた自分が、

優しくされるのが怖いんだよな。

「絵合…!!」

傷が増えていくのを無視して、僕は彼女に近づこうとする。

「俺たちは、俺たちは、俺たち……!!」

もがくように訴えかける絵合。

僕は、彼女の目の前まで来た。

「なあ……」

「うるせえんだよ!!俺たちは……」

僕は膝から崩れ落ちた。

前のめりに倒れていって、

全体重を絵合に任せる形。

絵合の体が震えているのがわかった。

誰かを傷つける時の絵合からは、想像できないくらい、小さく小刻みに震えていた。

傷口に何か水滴り落ちてヒリヒリとしてみた。

まるで、絵合をわかったような錯覚が僕を襲った。

僕は、ただ一言。

彼女に近づいて言いたかった一言を

僕は呟いた。

「ごめんな」

その言葉に、

時が止まったように、

彼女の震えが止まった。

うっ、うっ、とむせび泣く、

彼女の声が耳元で聞こえた。

それはまぎれもなく、

二つあった。

「寂しかったよ……」

決して、通り魔としての絵合ではなくて、

ただの、

友達のいない

中学生としての本音だった。

「寂しかったよ……」

「ああ、……ごめんな」



やっと聞けた、絵合の悩みだった。

やっと解けた、絵合の苦しみだった。

やっと、心が通じ合った。

「大丈夫…だからな……。もう……」

それに僕は、

小さな背中二つを見据えて、

答えた。

「寂しくさせないからな……」

意識が朦朧とした。

視界がぐらあつと揺れた。

僕は途切れてしまったように、

崩れ落ちた。

壇ノ浦の戦い（絵合の思い）（後書き）

いかがでしたでしょうか？

感想などは気楽に書いてくださいな。

後日談（スタート）（前書き）

これで、ジャッジメント・絵合編終了です。

## 後日談（スタート）

「もしかして、君は病院が好きになったのかな？それは、言い換えで見れば、この病院のサービスが良いってことになるから、病院側としてはそりゃ嬉しいことになるんだろうけど、少し今回はやり過ぎじゃないかね？僕はここまで過度なマゾを見たのは初めてだよ」

僕がとある病院で目覚めた直後に聞いた言葉がカエル似の医師の言ったそれだった。

「……、あのですね、先生。僕は、この病院に來たいからわざわざ日本刀を持ち出して体中の至る所を斬りつけたわけでもないですし、思い誤って、マゾに至ったわけでもありません。って言うか、僕急患で運ばれてきたはずですから、大体の理由はわかっていてるでしょう」

「あれだね。自分の住居で一人楽しく楽しんでいただけ、やり過ぎて助けを求めたパターンだね」

「僕はなんて恥ずかしいんだ！」

まあ、何はともあれ、こんなことを出来るようじゃ、僕の容態はさほど心配するものでもないらしい。

「でも、むちゃやし過ぎだね。もう少しで出血多量で死ぬところだったよ。まあ、胸にできた大きな傷が浅かったのが幸いだね。傷跡も残ることはないだろう」

「そうですか。それは何よりです」

「それにしても、沢山の女の子が見舞いに来ていたよ。羨ましい限りだ」

「ああ、彼女たちは仕事仲間です。ジャッジメントなんですよ」

「そんな仕事場なら、どっちみち羨望が募るばかりだね」カエル似の医師は僕の隣に来た。

「ところで、今回は誰を助けたんだい？」

「いや、助けたんじゃないんです」

「？」僕の答えにカエル医師は首を傾げる。

「ただ、話をしただけです。話をして友達になった、ただそれだけです」

「へえ、至極単純だね」

「そう、単純です」

本当にそれだけだった。

「まあ、入院したからには全力で治療させてもらっよ。あと二週間ぐらいで退院できるかな」

「ありがとうございます」

「いえいえ。ああ、もう一言。これはおせっかいかもしれないけど

ね。えっと、東雲青葉ちゃんだったかな、あの車椅子に乗っていた子は」

「ええ、そうですけど」

「彼女にあまり心配はかけない方がいいんじゃないかな。彼女、君の事を随分心配していたからね」

「げっ…」

思い出した。

青葉を家に待たせていたんだ。

「それから、これは扇からの伝言だ」まるでたたみかけるようだった。

「嘘つき」

「ああー、…ほんとすみません」

そんな僕を見て、ふふっと笑うと背を向けた。

「それじゃあ、僕はこれで。お大事に」

僕の病室からカエル医師は去っていった。

開けた窓から涼しい風が吹き込んできた。実は、ここからあの現状を確認できる。今では、びるの復旧作業が行われ、舗装も忙しそうだった。

そう、これで一件落着。

とまではいかない。

まだ大事な事が残っている。

「来ると思ってた」

僕は振り返った。

そこには、僕と同様、綺麗な患者着を着た一人の女の子が立っていた。いつもの服装とは違うが、藍色の髪の毛は忘れるわけがない。

「絵合…萩だな？」

「はい…」僕の答えに絵合萩は静かに頷いた。

「本当にすいませんでした」彼女は深々と頭を下げた。

それは、昨日の事と、一連の傷害事件に関するものだった。

絵合萩は日中の役割。

声を掛けて、自分たちに気に入らない態度をとれば、そいつらに目をつける。



夜になれば、

絵合薙がそいつらを狩る。

二人で一人の復讐。

一人で二人の復讐。

そして昨日、スキルアウトを操ったのは、絵合萩だった。

「でも私…許せなくて……私たちを馬鹿にした奴らを…許せなくて…私たちを無視した人たちを許せなくて……、」

下を向いてぐつとこらえていたが、それでも絵合の涙は流れていた。

「凄く、寂しかったんです」

これが、真実だった。

「わかるよ」

涙に濡れた顔がこちらを向いた。

僕は、おじいさんのように

昔を思いだす。

そこには確かに孤独はあった。

嫌という程感じた。

「でもな、絵合」

僕はここで、彼女の間違いを指摘した。

「寂しいって言えば良かったんだよ」

そう、あの時、

彼女は、

世界が嫌いな彼女は、

だから他人を傷つけた彼女は、

他人から優しくされるのをいきなり恐ろしく思い、

矛盾に思い、

最低に思い、

逃げ出したんだ。

「そうでしたね」彼女はまた、静かに言った。

「私、変な言い方になりますが、とても嬉しかったです。あの時、声を掛けてもらえて。薙もきつと、今は出てこないですが、あんなに人と喋ったのは初めてだと思います。本当にごめんなさい。そして、

本当にありがとうございました」

僕は、ははは、と笑った。

「何か勘違いしてないか？」

「へ？」

「僕は確か、もう寂しくさせないからって言ったはずなんだけどな。よし、そろそろかな。出てきていいよ」

その声と同時に僕の寝ているベッドの横のカーテンから勢いよく誰かが飛び出した。

まあ、言う必要もないが、

初春と佐天だ。

「あ、あなたたちは…」

驚く間もなく、今度は扉を開けて固法さんと白井が入ってきた。

「ジャッジメントの…」

困惑する絵合に、僕は笑って答えた。

「えーつとだなあ、お前確か中学一年生だろ？初春に佐天に白井と同じだ。きつと話合つと思うよ？ま、僕はガールズトークに関しては全くだからさ。学校は初春と佐天の所で良かったんだっけ？」

「はい、はい！そうです！」初春が元気よく答える。

「よろしくね、絵合さん！」佐天は嬉しそうに笑って見せた。

「えっ…」驚いて止まる絵合。

「そして、白井に固法さん」

「よろしくね！」

「よろしくですのー！」

「まだ僕の学校の友達も紹介したいんだけどな…不幸な大親友に、青髪ピアス、金髪シスコン野郎に、あ、ちなみに義妹な。それと、健康オタクの男勝りな女子に、影が少しう…つな女子と、それに僕のご近所さん。でもよくよく考えればそれ以外はあんまりいないよな…。結構僕も寂しいやつだったりして」

「どうして…」 啞然としている彼女に最後、

僕はこう付け足した。

「友達なんだから、当たり前だろ」

絵合は、その言葉を聞いて、

涙でぐしゃぐしゃな顔を、

確かに笑わせた。

「ありがとうございます」

「違つよ」

僕は笑って言った。

「よろしくだ」

「はい…よろしくお願ひします！」

もう、

彼女は寂しくなくなった。

その後、彼女は一応、アンチスキルの事情聴取に行った。どうやら、

情緒酌量の余地があるそうだ。

そして彼女は研究所の実験サンプルでもあった。

青葉と同じ。

そこに関しては何もわからなかったが、これはこれで良かったと思う。

もう、あいつは寂しくないのだから。

さあ、本当に一件落着…

と、思った時、

ガラガラと扉が開いた。

ふっと視線を向けた先には、

青葉がいた。

あっ、と心の中で呟く。

もちろん、青葉はご立腹だった。

何も言わずに僕の横に來ると、花を替えてきたであろう花瓶をそっと置く。

「あー…、青葉」

……

すごい気まずい。

「心配した」

その時、青葉が小さな声で呟いた。

「えっ？」って聞くより以前にもものすごいスピードで青葉は僕に向き直した。

「心配したの！！」

ぷくつと膨れ上がった表情に涙を少し貯めている目は、なんて可愛いんだ！なんて事を言った時点で僕は死んでしまっただし、場違いであることもわかっていたが、なにしろ青葉の勢いが僕を制した。

「知らない間にどっか行ってしまっし、慌てて駆けつけたら、崩すごい怪我だし、何が何だかわからなくて……」

「青葉……」

「私、すごい心配したんだよ……」

「…ごめんな」

そうだった。

あの時、ジャッジメントのみんなが心配したように、

青葉も僕を心配していたんだ。

「でも、無事で良かった」それでも青葉は笑った。

沢山心配して、精神的重荷まで背負わせていたのに、僕が無事なだけで、たったそれだけで彼女は笑い飛ばした。

「話は聞いたんだ。絵合さんを守るために体を張ったんでしょ。なら、しょうがないよ。もし、私に相談されていたとしても絶対守ってあげてって言ったと思う」青葉は花瓶の花を見つめながらそう言った。

「だから、いいんだよ。無事だった、それだけで私は嬉しい」

「…、青葉、心配かけてごめんな」

「謝り過ぎだよ」青葉は笑って答える。

「ただ、…ちゃんと帰って来てね」

「ああ、約束する」

そんな小さな約束と、

大切なこの日常を、



僕は守っていらこうと思って、

優しく笑った。

花瓶に咲いた綺麗な花が、優しい風に揺られていた。

## 後日談（スタート）（後書き）

出番がなかった青葉を終盤で詰め込む形になってしまいました（泣）

絵合編終了です。

ご覧になった皆様、ありがとうございました。

最後にちよつと付け足すことが多かったですが、無事、絵合も笑えて良かったと思っています。

次章に関してはまだ少ししか決まってませんが、また更新した時はぜひ読んでください。

次の話ですが、普通の小話を書こうと思っていますのでこれもどうぞ読んでください。

感想待ってます。

## 後日談余韻（前書き）

無駄になげえー（嘆）

一番長くなりました。やっぱり日常を書いているとほのぼのしますね。最近、妄想癖が強くなってしまっ…。

今回はゆるりライフです。最後までどうぞお付き合いください。

## 後日談余韻

「…はっ、はっ、はっ……………」

僕は荒い息をしている。

さすがは、ここら近辺では指折りの《心臓破りの坂》であり、春には綺麗に桜が咲いていかにも初々しい高校生たちが好んで通りそうな場所であり、夏になれば友達とどれだけ早く登ることができるか競争になってしまい、結局はしんどさと虚しさしか残らないよく出来たトラップ坂で、冬ではクリスマス、初詣、バレンタインデーとドキドキに胸躍らせる一大イベントを悉く外してしまつて一人寂しく帰る男達を、より哀愁を漂よわせ、どこかの安っぽい恋愛映画のワンシーンに映えるようにしてしまう哀しみ溢れる坂、といったふうに季節と人々の心境に合わせて変化していく場所である。

そんな坂を僕は自転車に乗ってさらに全速力で登っていた。

「がああああー！！なんでだああー！！」

僕は自分の身に降りかかった不条理さを叫ぶ。

「はいはい、青春しているのはわかっていますから、とりあえずつる

さいので黙りなさい」

そう僕に何とも冷たい言葉を贈ったのは、まぎれもなく自転車の前カゴに乗っているエバンスだった。

「何でお前はそんな余裕こいた王様気分なんだよ！学校に遅れてるのはお前だろうがぁ！」

「まあ、諦めも肝心と言うか何というか、今の世の中の汚い側面に直面してしまったら、やる気の一つや二つどころか全部取られちゃうよね」

「弱冠10歳にして何があっただんだエバンス！？」

なんだか行く末が思いやられる。

「崩兄頑張れえー！！」後ろでトントンと、カルマは僕の背中を叩く。

自転車の前と後ろに小学四年生と一年生を乗せて走るって、

「僕は二児の父親かー！！！」

何とか根気で坂を登り切った。またスピードを上げて道路を駆け抜ける。

「っていつか、エバンス、お前下りろよ！前カゴに乗られちゃ、ハンドル取りにくいんだぞ！」

「嫌だねー。しんどいのはごりごりだ。こんな日ぐらい楽しんで学校

に行きたいたんだよ」エバンスは前カゴに入らなかった、まあ当たり前なんだが、自分の足をバタバタとさせる。

「こんな日こそ、学校行くのがしんどいんだ」  
走って行くのが鉄則。

「それじゃあ、カルマと代わってくれよ。少しは楽になるはずだし」

「バカ、カルマを前カゴにして万が一事故でも起こってみろよ。カルマにそんな危ないところへ行かせてたまるか。ただでさえ、危険な自転車の乗り方してるっていうのによ」

「どうやら、兄として、妹を守ることににおいては一人前ようだ。なんやかんや言って、この兄妹はいつも仲がいい。」

それに、エバンスは小学四年生にしてはどこか大人びていた。

危険な乗り方ならやめておくべきだろ、とつつこむのはやめておく。

「お、着いたー！ー！」

僕は、エバンスたちの学校の前で急ブレーキを踏む。

「だあああー！ー！」エバンスは柄に似合わない悲鳴を上げた。

「崩、何で急に止まるんだよ……尻が……俺の尻が……う……ごあ  
あ……」

「どうやら急停止が災いしたようで、前カゴで一人悶絶するエバンス。」

「……何やってんだお前……。ほら、着いたぞ。さっさと降りろ」

「抜けねえ……。助けてくれ」

「しょうがねえな」

僕はカルマを降ろすと、両手を引っ張ってエバンスを降ろした。

「あ……、これまずいな。もう学校休もうかな」

「バカ、もう学校は目の前だ。わざわざ人の安静日を使って送らせただからちゃんと行け」

エバンスはそのあと、うずくまりながらもカルマに手を引っばられ、学校へと入っていった。

「よっしゃ、終わり終わり」

僕は頷いてみる。

学園都市は人通りが少なかった。

それもそのはず、名の通り学生の街であるここでは、平日のお昼過ぎと言えばまだ授業中である。

寝坊したエルギオンス兄妹と、

僕を除いて。

まあ、ついさっきエルギオンス兄妹は学校に行ってしまったから、

残ったのは僕一人。という僕は急いで学校に行かないといけないよ  
うな状況ではない。

退院後の安静日だ。

僕は昨日病院を退院したのだが、傷口が開いては行けないため一度  
普通の生活に戻って様子を見ようというもの。だから絶対安静で、  
学校に行くことはできない。エバンスの無理強いがなければ、今こ  
ろはまだ布団の中だったというのに。

僕はおもむろに傷口を服の上から触ってみる。

「まあ、開いてないか」

痛感もないから当たり前だが、そんな確認を一人行う。この調子な  
ら明日はきつと学校に行けるだろう。

「うがぁー」と背伸びを試みる。ここ最近、ゆっくり出来てな  
かった。

「たまには、こういうのもいいかもしれないな」

そうやって一人で頷いて、僕は自転車をゆっくりこぎ始める。

今から何をしようか、とか

青葉を迎えに行こう、とか考えながら。

今日は雲一つない快晴だ。



「ふうー」なんて溜め息をついて、僕はベンチに腰掛ける。いつもは、カッブルが占領している場所に一人で堂々と座れることに優越感を感じれるのだが、どこことなく寂寥感が忍び寄って来ている気がしてならない。

「…やっぱり、一人は寂しかったりする」隣にある自販機で買った『ヤシの実サイダー』を片手に遠い目になる僕。

まあ、そんな時になればお決まりのように過去を振り返ってしまうもので、僕は回想したりする。

大変だったよなあ。

今の高校に入学してから2ヶ月。

その間にいろいろあった。

青葉のことに。

絵合のことにと、

予定ぎつちりだったじゃねえか。

その他にも、

不幸な大親友との話や、

ジャッジメントの件、

小話を入れれば数え切れない。

こんな生活は、

あの時

考えられなかった。

「ははっ、不幸なんてのは失礼だな」

「おい、」

僕は不意に声をかけられた。まさか声をかけられるなんて予想もせず、一人言を呟いていたから、少し驚いてしまう。僕は声のした方向に目を向けた。

女子中学生としては少し身長が高く、だからといって横に太いのではなくスラッとした体型。今では、そんな体のどこからあんな鋭い武術が飛び出してきたのかわからない。初春と佐天と同じ制服を着ていて、ただの中学生に見えてしまうが、藍色の髪の毛は依然として異風を漂わせる。

「何してんだあ？こんな所で。もしかして、見かけによらず、お前は不登校だったりするわけ？」

「僕はまさか、お前からそんなことを言われるなんて夢にも見なかったよ。絵合薙」

僕が逢ったのは、絵合薙だった。

「けつ、ひどい言いようだ。俺だって、好きで学校に行ってるわけじゃねえ」そう言いながら、絵合は自然に僕の隣へ座ってくる。

「でも、どんな感じだ？学校は良かったか？」

「どいつもこいつも馬鹿ばかりで困る。勉強は疲れるし、宿題は追い討ちをかけるしと最悪ばかりだ。……まあ、悪いってわけじゃねえけど」

最後の所をごまかした絵合にニヤニヤと僕は笑って見せる。

「結構、様になってるよ」

「う、うるせえ！」恥ずかしそうに否定する絵合だった。

しばしの沈黙。

「あのさ、」

「何だ？」

絵合はおそらく、僕に話しかけたであろうきつかけを話し始めた。

「傷、大丈夫なのかよ」

「ああ、大丈夫大丈夫。今日は一応安静日ってだけ。明日には普段通りになるさ。何だ、心配してくれたのか？」

「一応、俺がつけた傷だからな」

「時間が経てば、傷も消えるってよ」

「そうか、それはよかった」顔が綻んだのもつかの間、僕にその顔を見られるのがよっぽど嫌なのか、慌てて顔をいつもの表情にもどす。

「意外に優しいんだな」

「意外につてなんだ、噛み殺すぞ」

……

その凄んだ顔故にの《意外に》です、絵合さん…

「そついや、お前こそ何でここにいるんだよ」

「いや、あのまま行けばどんどんストーリー進んでしまいそうだから、止めてきてくれと冷えピタに言われて来たんだ」

「お前も作者事情に介入するのかよ！」

これ以上好き勝手やられては、物語としても語り手の僕としても収集がつかない。って、僕にはどうして情報が回ってこないんだ！？

「今日は、学校が昼までで終わりだったんだよ。帰ってもすることがないし、どうせなら家財道具でも買いに行こうと思ってな。萩が殺風景な部屋は嫌だっつるさいんだ」

「ふうーん、そうなんだ」

「何だ？その変哲もない返答はよ……そうだ、お前、俺に付き合え」  
「！」

「何だ？その友達の見方とはかけ離れた言い方はよ」

「どうせ、暇なんだろう？いいじゃねえか」

「ま、いいけどさ。でも、僕は勿論こういうのには疎いぞ。僕はお力になれそうにもないけどな」

「大丈夫、それは萩と俺で話し合っつて決めるさ。お前は何も心配しなくていい。ただ……荷物さえ持つてくれればなあ」

「あ、昼ドラの再放送があつたん……」

ガシツと、それはそれは丁寧な腕を組んでくれた絵合さん。

「時すでに遅し、つてな」

「後悔先に立たず、つてか」

僕はそのまま、絵合の買い物デッドヒートの生贄となった。

+

「ぐはあ……」

僕は自分からそんな効果音を立てて、とあるファミレスの席に崩れ落ちる。家財道具のあれやこれやを背負わされた僕は、このまま持つて行ってもらおうかなと言う恐ろしい一言に身震いして、宅配サービスに託してきたのだ。何故かそのお金は僕の財布から支払われていたのだが。

「だらしねえな」ははは、と僕の前の席に座った絵合は笑っていた。

「間違いがないように言っておく。あの買い物はただの改行10行では表せない！」

「しょうがねえだろ！？ちゃんと生活するのは初めてなんだよ！」

ムツとした顔を僕に見せる絵合。

「じゃあ、今までどうしてたんだよ」

「野宿でも何なりとあるさ。まあ、それをやってたのは一週間だけだけどな。後は研究所暮らしだったんだよ」

「そうなのか」

「大して驚かないんだな」

「別に、…ただ…似たような経験があつてな……」

「……聞かない方が良さそうだな……」気付けば、絵合が僕の顔を察してか、丁寧な言葉を選んでいた。

「あ、悪い。なんでもないよ、忘れてくれ」僕は慌てて、変な雰囲気を取り払う。そんな空気は誰よりも自分が嫌いだった。

「それで、生活は上手くいってるのかよ」

「ま、まあな、その……」

「ん？」

「う、初春さんや…さ、さ、佐天さん…に手伝ってもらってるからな」

「あ、あはは…何でいきなり不器用になるんだよ」

なんか極端だ。

「さん付けしなくていいんだよ。友達なんだから」

「わ、わかつてるよ！えつとだな……初春と佐天が…手伝ってくれてるから大丈夫だ…」

「そりゃよかった」

「まあな…」

絵合、特に雑は、たまに何故か大人しくなることが多い。

そんな時店員がナイスタイミングで一番最初に注文していたコーヒ  
ー二つを持って来た。

「あ、そういや、まだ何か見るのか？」

「ん、ああ…えーつとだな……」何故か一人モジモジした絵合。

「……何でモジモジしてんだ？トイレか」

言うやいなや、僕の顔面にファミレスのメニューがいい音を立てて  
ヒットした。

「……雑様はどちらに行かれましたか？」赤くなった鼻をお  
さえながら、僕は絵合に尋ねる。

「いや…そのだな…」絵合は恥ずかしそうに答えた。

「服を買いに……」

「何だ、それならセブンスミストで見りゃよかったのに」



「う、うるせえなあ！俺だって、別に絶対見たいわけでもねえんだぞ！ただ、萩もうるさいし、今は少し買った方が助かるかなと思っただけだ！」ぐっとコーヒーを飲み干す絵合。明らかに量からして一気飲みには不向きだが、何事もないようにこなしてしまう。

「そんなあからさまに否定しなくても、」

僕は笑いながら、コーヒーはまだ残っていたがレシートを手にとつて立ち上がる。

「思いたつたが吉日、善は急げつてやつだ。僕も少し用事があるから早めに済ませないといけないしな」

時計は2時をさす。

「何だ、用事があつたのかよ」絵合は少し驚いた表情で僕を見た。

「いや、大した用事じゃないんだ。青葉を迎えに行こうと思つててさ。あいつ車椅子だから、何かと不便なはずだし」

「ふうーん、そうなのか」

「おいおい。何だよ、その返事は……つておい！」

絵合は知らない内に席を立っていた。

「一体どうしたんだ…、おーい、待ってくれ」

「ぐずぐずするなよ。服見る時間がなくなるぜ」

ぶすつとした表情の絵合は、僕が横に行くまでずっと早歩きだった。

+

「んー、…んーん、…んー」

「……あのさ、絵合さん」

セブンスミストのとある衣料品店。

絵合はひっきりなしにうなっていた。彼女の前には、歳相応の服がズラリと並んでいる。

「なんかもう、あの怖いキャラが完全に跡形もなく消えています」

「なんだと！……はっ、こんな下らねー店、潰してやりてーなあ！」

「それが、今手に何着も服を持ってあれもいいこれもいいと悩んでる人間の言うことかよ。それより、そんなに大きな声でもの凄いことを言うな。さっき店員が僕たちを見る目は並々ならぬものだったぞ」

ちよつと怖かった。

「いやー、悩むんだよ。萩とも話し合ってるんだけどさあ」と言う  
と、さつきからぶつぶつと一人言を続けていた。まあ、実際は二人  
言なんだけど。意志が通じ合ってるってどういふ感じなのだろう。

「絵合は……」

そのとき僕は思ってしまった。よく考えたら絵合は二重人格だ。絵  
合萩と絵合薙。萩は女性だけど、薙はどうなんだ？喋り口調は男み  
たいだし、力も女性より遥かに強い。

まさか…男なんじゃ…

待てよ。僕、あの時あいつに体預けて倒れちゃったじゃねーか！嘘  
だろ、僕は……

ゾクゾクツと身震いをしてしまう。

これは、

僕の貞操に関わる！

「薙！」

「へえ！？」僕の突然の呼びかけにらしくない変な声を出す。

「い、いきなり、名前って…一体何だよ！？び、びっくりするじゃ  
ねえか……」

「お前の性別って男!？」

「なっ……っ!!」

さっきまで赤かった顔色がいきなり真っ青になったかと思うと、また急に赤くなる。最初と違うのは、今は肩が震えていることぐらい。異変に気づくも、もう遅かった。

「俺は女だああー!!」

「ぐほお!」

その叫び声とともに放たれた握り拳が、僕の右頬を捉えた。勢い良く地面に倒れ込む。

すく、

すごく痛い。

けど、

「ひ、一安心……」

「お前まさか、マゾなのか!？」殴られた頬に手を当て微笑んでいる僕を見て、今度の絵合は恐怖で震えていた。

「んで、決まったのかよ」優しくスルーしてくれた絵合に僕は尋ねる。

「んー、まだ……」

さっきよりはしぼったようだが、まだ悩んでいるようだった。

「それなら、試着してみたらどうだ？」

「な、恥ずかしいだろうが…！」

「とは言っても試着しないとわからないだろ？」

「む、確かに…そうだな」そう言うと、

絵合は服を脱ぎ始めた。

「ここで脱いでどうすんだよ…！」僕は絵合を試着室に押し込んだ。

少し経って、試着室のカーテンが開いた。

「どうだ？」

少しダメージの入ったジーンズに、ストライプのTシャツ。上には淡い色のシャツをもう一枚来ていた。

「ん、いいんじゃないのか。かつこいいじゃん」

「そうか…よし、これにしよう。…っとまだあったんだっけ」絵合はまるで一人言のように喋り出す。どうやら、萩と話しているようだった。

「どうしたんだ？」

「あともう一つあってさ、着ないでいようと思ってただけど、萩がうるさくて」

「着てみるよ。萩も着て欲しいって言ってんだろ？」

「……これはちょっと、俺に合わないというか、何というか…」  
ぶつぶつと呟きながら、絵合はまた試着室に戻って行く。

まるで、

まるで、普通の中学生だ。

生活を楽しみ、

勉強を苦手とし、

友達と遊ぶ、ただの学生。

「様変わりだ」

僕はそう笑って、自分の手をじっと見つめる。

自分の能力をじっと見つめる。

『その力は、誰かのために使って』

そんな言葉を思いだし、

そんな過去を思いだし、

僕は呟いてみた。

「今なら、生きてる意味があるかな」

「着たぞ……」

「おう………!!」

振り向いた瞬間、僕は驚いた。

いや、不意をつかれたというか何というか。

絵合薙が着ているのは、薄緑と青が入り混じってコントラストを作っている上下一貫性のある服。色合いから言っても夏にピッタリで、涼しげな雰囲気为好印象を与える。

普段の彼女からは想像できない服装。

「やっぱり…スースーする。なんか気持ち悪いんだよなあ…これ…」  
絵合はそう言いながら、膝より少し上にある緩やかな生地のスカート  
の端を、恥ずかしそうに手で押さえつける。

「ど、どうだ…？」

「……可愛い」思わず、口走ってしまっ。

その言葉を聞いた絵合は、よりいっそう顔を赤くした。

「お、お世辞がうまいんだよ…バカヤローがあー!!」

「何でえぐほお!!」

理不尽にもかなりの力で殴られた。

ほんと、

どういっわけか忙しい安静日だ。

+

「ちょうどいいタイミングなんじゃないか」

僕と絵合は最初に会った場所であるベンチに座っていた。

「そうだなあ」

時計は4時を指す。日付は6月下旬であることもあってまだまだ日は落ちない。学園都市は徐々に学生たちの活気を取り戻しつつあった。

「今日は何かと疲れた……」

「おい、まるで俺が疲れさせたような言い方じゃねえか」

あながち間違いではない。

絵合は、片手にさっきの店で買った服の入った袋を持っていた。

「今日はありがとよ」

「いいよ、僕も暇だったし」



「安静日だったんだろ？」

「もう治ったさ。僕はそんなやわじゃないぜ」

「……………」

「おいおい、そんな深く考えなくていいよ」

「はっ、そんなんじゃないよ。たださ、「そうやって絵合は続けた。

「夢みたいだ」

「……………」

「こんな生活、想像すらできなかった。ずっとあのまま、世界を恨み続けるんだって思ってた。そんな俺が、少なくとも人を傷つけた俺が、幸せになっていいのかな」

それは絵合の罪の意識だった。自分に対する戒めだった。きっと彼女は、これからもその罪は背負い続けなければならない。

「いいんじゃないの？」

でも、これだけは言えることだった。

「誰もやり直したらいけないなんて、言っていないんだから」

その言葉を聞いて、絵合はふふふ、と笑った。その表情は雑にも萩にも、どちらにも見えた。

「何かっこつけてんだか、あー恥ずかしい恥ずかしい」絵合は何かごまかすように立ち上がる。

「そんなこと言うと、誰もいなくなった後一人で恥ずかしくなるからやめる」僕もそう言ってゆっくりと立ち上がった。

「僕もそろそろ行くよ。それじゃあ、またな」

「ああ、今日はありがとうよ」

「いいよ、じゃあな」

「ああ」

そう言って僕たちは別れた。

「おい、桐原」

五歩歩いたところで、僕は絵合に呼び止められる。

「ん、？」振り返った僕に絵合は何かを投げた。僕は何もわからないまま、それを受けとる。

『ココアスプライト』

「何だ？もしかしてこれ、ドラゴンクエストで言う、『ザラキ』ってやつ？」

「バカ、飲んだことないだろ？」

そう言っつて絵合は、

淡い夕日が当たっているような顔をほころばせた。

「意外にうまいんだぜ？それ」

僕は今日、

意外な味を知った。

+

僕は学校へ、青葉を迎えにいくために向かっていた。続々と僕たちの学校の制服を着た学生が横を通り過ぎる。その中に青葉がいないのを見て、少し不安になった。

「あいつ、大丈夫かな？」

小走りで学校へ向かう中、僕は青葉を見つけた。

「青葉！」

「崩！？」驚いたのは青葉の方だった。

「一人で帰ってたのか？」

「うん。みんなとは途中から道が違つから。わざわざついてきてもらうのも悪いしね」と青葉は笑った。

「でも、危ないだろ……」その時、後ろの角人影が見えた。

曲がり角からひよこつと頭が三つ飛び出している。

上條、吹寄、姫神だった。

三人は僕と目が合うと、ニヤニヤと笑っていた。

僕は青葉にバレないよう、三人にありがとうとジェスチャーする。それに三人も笑って返した。

「それより崩、安静日でしょ！？家でいなきや駄目だよ！」

「大袈裟だな。僕はもう平気だよ。そんなことより、僕は青葉がちゃんと帰ってこれるかが心配でしょうがなかったよ」

「むっ。なによ、私だってもう一人で帰れるよ！」ぶすつとした表情で、僕を見る青葉。

「悪い悪い。さあ、帰ろう」

「うん。あつ、そうだ」

「どうした？」

「ね、寄りたい所があるんだ」

「ん、どこだよ」

「秘密。着いてからのお楽しみ」

「何だよそれ」

僕たちはまず、寄り道をした。

「へえー、あんな所にコーヒーショップがあるなんて知らなかったな」

「でしょ。制理に教えてもらったの。手製のコーヒーがすごくおいしいんだって」青葉は小さな袋を二つ、膝の上に置いていた。

「あいつは確かに、こういうことにはうるさそうだな」

今日の学校のことや、そんなたわいもない話で盛り上がっている内に、いつの間にか家に着いていた。

「よっこいしょ」っと、僕はいつも通り青葉を抱えて、二階に上がる。

「よし、早速コーヒー飲んでみよ」

「飲み過ぎるなよ」

「ひどいな、崩も気をつけなよ」

「わかってるよ」そう言って、僕は部屋に入ろうとした。

「コップコップ……あ、」

それで、思い出した。

青葉にプレゼントするために買ったマグカップ。

「あー、忘れてた」

僕はその袋を持ち上げる。

「渡すか……」

そう考えるが、やっぱり何だか渡すのが恥ずかしかった。

自分を奮い立たせ、部屋を出る。

「青葉…」

「ん、何？」ドアを開けて青葉は外に出てくる。

「あ、いや、そのだな…」

いざとなると、恥ずかしい。

「こ、これ」

そう言っつて、僕はそのマグカップを渡した。

「わあ、可愛いマグカップ！」

「あの、お弁当のお礼。ずっと前に買ったんだけど、渡し損ねてて  
さ」

「そうだったんだ。ありがとう！」青葉は嬉しそうに笑った。

ほっと一安心する。

「あれ、二つももらっていいの？」

「うん、お店の主人がサービスだって。対になってるから、片方だけなくなるのはよくないと思ったんじゃないかな」

「そうなんだ…じゃあ、これ」そう言っつて、青葉は僕に青いマグカップを渡した。

「え、いいのか？」

「うん。私は一つで大丈夫だよ。それに対なら、その…崩と一緒に使って……」

「ん、今何て？」

「え、いや、何でもない！」と青葉は恥ずかしそうに俯いていた。

「そうだ、崩」

青葉は、少し赤くなった顔で僕に言った。

「せっかくマグカップもらったし、その…一緒にコーヒー飲もうよ」

「おう、そうだな」

僕が頷くと、青葉は笑って部屋に入っていく。

「きつとおいしいよー。開けたら良い匂いがしてたから」

「ああ、ほんとだ。良い匂い」

今日の事を思い返しながら、

平和な日常を思いながら、

優しく呟いてみる。

僕の鼻をコーヒーの香ばしい匂いが包んでいった。



## 後日談余韻（後書き）

一章終わるごとに『後日談』や『後日談ー』みたいな繋げようと思います。

今回は絵合、特に薙を中心に書きました。典型的なツンデレにしようと思っていたんですが、どうでしょう？

ま、そんなこんなで終わりました、名前をつけるなら『ジャツジメント』（二人の絵合と僕）編』でした。

東雲の場合は、『車椅子の少女（東雲青葉と僕）編』ですかね。

章を分けられると便利なのですが……。

次章は、もう考えてあります。そして、宗教サイドが絡んできます。

神裂やステイル、禁書の中心人物も出して行きたいなと思っています。

次の話は、まだ少し日常が続きます。

能力について説明するいい機会にもなるので、また感想であったように、まだ主人公の能力説明があまりできていなく、読む時に違和感を感じている読者の皆さんもいると思いますので、そのときに説明できたらと思っています。

後書きまで読んでくださり、ありがとうございました。

感想や指摘もぜひくださいね。

待ってます。

種 ( the seed ) ( 前書き )

もう気付けば、内容変になってました。これ以上続けると長くなるので、切らせていただきました。コメディーみたいにみてもらえると幸いです。

あと、後日談で登場人物のプロフィールを載せます。今までよくイメージ出来ずにわからなかった人もいると思います。すいません、お待たせしました。風貌や性格のことについて簡単に書いていますので、どうぞ後書きにも目を通していただけると有り難いです。

種 (the seed)

ピンポン、と車椅子に乗っている青葉はとある寮のインターホンを押していた。この部屋は、青葉の通っている学生達が住む寮の一室である。

「はいはい」

そんな元気の良い声が扉の向こうから聞こえ、すぐに扉が開いた。

「待ってたんだよ、あおば！」

「ありがとう、インデックスちゃん」青葉はインデックスと呼んだ少女に嬉しそうに挨拶した。

インデックスは、青葉の後ろにまわると車椅子を押す。

「さあさあ、入るんだよ。遠慮しなくていいんだよ」

「えっと、じゃあ、おじゃまします」

青葉とインデックス、

以外な組み合わせが、

有り得ない出会いを果たしていた。

「あ、やっちゃった」  
僕は突然呟く。

「ん、どうしたんだ？桐原」  
横を同じように歩く上条が尋ねた。

「いや、今日って7月1日だよな」

「ああ、そうだけど」

「青葉とインデックスが会うと時間軸が狂ってしまう」

「あ、そうか。俺とインデックスが会ったのは今よりもちょっと先のはずだもんな」

「やっちゃったな。原作ブレイクだぞ、これ」

「今からでも、話替えてみたらどうだ？」

「それが遅いんだよね。もう『後日談退院日』の時点で青葉とインデックスが会ってるんだよ」

「なんつーか、不幸だな」上条に言われるともの凄く傷つく。

「どーすんだよ……このままの作者の予定で行けば、僕はシスターズと会ったりラストオーダーと会ったりしてあんなことやこんなことをする筈だったのに」

「おい、作者の頭どうにかしてんじゃねえのか！」

「冗談冗談。にしても、どうしようか？」

悩み所だ。

「もう読者の皆様の目もごまかせないだろ」

「あー、誰かケーシー連れてきてフラッシュしてくれないかな」

「待て待て、何故にポケモン!？」

「知らないのか、上条。『フラッシュ』って技はな、相手の命中率を下げるんだ。『砂かけ』よりも確実に効果が上なんだぞ。命中率にかけて、注目率を下げようという意味が暗示されている」

「誰もそんなこと聞いてねえよ。ってか、何故にケーシー？」

「序盤では珍しくて誰もが欲しがるけど、後の方になると要らなくなる代表的なポケモンの一つだからな」

「おいこら、そんなこと言うんじゃねえよ！平和な世界でできてるポケモンをけがすんじゃねえ！みんなそれぞれいいんです！」

「僕の場合は、不安と好奇心に胸を膨らませて初めて入った洞窟の中で、ほぼ確実にイシツブテしか出ないときに、『おおっ、何だか

シルエツトがああ丸い奴とは違うぞ！」と出して行くわしたズバツトだね。きつとあれは、最初の方にイシツブテばかり出しておいで、良い時に出たら自分が重宝がられると思ったズバツトの作戦なんだよ。ほんと、モンスターボールの無駄使いだった。こちらら数少ない初期装備の三千円を駆使して買ったモンスターボールだつて言うのに三個も使わせやがってよ。満足感もそれまで、あいつ『きゆうけつ』しか使えねえじゃねえか。レベルアップしたら何かなと思えば、『ちよおんぱ』に『かみつく』。おかげに進化したゴルバツトは生理的に受け付けないね。あれは相手として見たときは普通だけど、味方側から見たら何だよあの後ろ姿。手の長くなったイシツブテじゃねえか！トラウマになるわ！そうなればもう愛着もなくなるし、戦闘にも出さなくなる。しかし、放っておくのも勿体ないからという理由で、ひでんわざの生贄になるのさ。行く所々でもらうひでんマシンのひでんわざはゲームの攻略には必須だし、一度覚えたら忘れられない、なかなかの難物だからな。だから、生贄になった僕のズバツトなんて最終的には、いあいぎり、そらをとぶ、かいいりき、フラッシュで、『いや、もうお前がひでんマシンだよ！』つて言う感じになってたぞ。そして時間が経てば、ズバツトは預かりセンターに行つてどこかの片隅で一人生涯を閉じたのさ」

「ズバツトおおおー！ー！ー！ー！」

上条は道路に崩れ落ちた。

「ふふふ。所詮、ポケットモンスターも人間の欲望と憎悪が交差して絡み合う、何とも汚いゲームなんだよ！！」

「何故だ、何故そんな……ケーシィだつてユンゲラーからフーディンになるし、ゴルバツトはクロバツトに進化するのに……」

「……おい待て、上条」  
僕は上条を静止した。  
自分の耳を伺った。

「何だ？そのフリーデインっていうのは…クロバットとは何なんだ？」

「何言ってるんだよ。ユンゲラーの進化形さ。ゴルバットはクロバットに進化するんだ」

「何だと……、嘘だ！僕はどれだけレベルを上げてても、ユンゲラーは進化しなかったし、ゴルバットのままだった！」

「あれは確か、通信交換すれば進化するんだぜ。ゴルバットはなつき度を上げないと駄目なんだ」

「は、ははは……嘘だ…冗談だろ…そんなわけないじゃないか…だつて…あいつらは…どうしようもないくずで…」

「お前はまだそんなことを言うのかよ…」上条はゆっくりと立ち上がった。

「あいつらは、最高なんだ。それだけじゃねえ、どいつもこいつもみんなくずな奴なんていねえんだよ！」

上条は叫んだ。

「桐原、お前がまだそんな色眼鏡をかけて見ている世界が真実だつていうんなら、俺は、その腐った幻想を跡形もなくぶち壊してやる……！」



「なんで……どうして……僕のズバットは……」

僕ははっ、と気付いた。

そっだ、

僕に足りなかったのは、

愛情だった。

使えないと決めつけて、

何もしてやれなかった。

がくしゅうそうちばかりで、

戦わせることなんてなかった。

育て屋に預けたままで、

ふれあうことなんてなかった。

あいつは、最後まで、

僕に笑いかけてくれていたのに、

信用していたのに、

きつとまた会えるって思っていたのに、

僕はそれを

嘲笑っていたのか。

なんて、

最悪なんだ。

「そんな、僕は……ズバットを……」

あの楽しい思い出が蘇った。

どんな弱くてももなんとか倒して、

強くなろうとした日々を。

コラツタに苦戦したり

キャタピーに負けた日もあった。

でもあいつは頑張っていたのに、

僕は

僕は、

「ズバットおおおー！！！」

僕は崩れ落ちた。

「やだ、何あの子たち……」

「いやねえ、あの二人、さっきからおかしくなったように騒ぎたてるのよ」

「上条」

「ああ、桐原」

まるで僕たちの半径二メートルの円の範囲から先は近づかないようにして、じっと白い目線を送る一般人。

そんな円の中心で僕たちは呟いた。

「不幸だ……」

やり過ぎだった。

+

「まあ、これといって何もないんだけどね。くつろげることは、絶対の自信を持って保証するんだよ！」と腰に手を当てて胸を張り豪語するインデックス。

「お、おおおー」

車椅子から降りて丸い座布団に座った青葉も、まるで通販番組のナレーションの後に続くような歓声を本気で出している。

天然な二人の組み合わせ。

「あ、ちょっと待つんだよあおば。昨日買ってきたお菓子を出すからね」そう言つて1人キッチンの方へ向かうインデックス。

「うん、ありがとう。…そうだ」青葉もインデックスと食べるために用意していたお菓子を思い出す。

「私も用意してたんだ…」

けど、青葉は動くことが出来なかった。足が動かない。

どれだけ力を入れてもつま先しか動かすことが出来ないのだ。

「どうしたの？青葉」戻ってきたインデックスが車椅子に向かって手を伸ばす青葉を見て尋ねた。

「お菓子持ってきてたんだ。車椅子にあるんだけど、取れなくて」

「なら、私取るんだよ。青葉はじつとしていいんだよ」

そう言つて、インデックスは青葉の代わりにお菓子の入った袋を取り出す。

それに、いいなあ、って

青葉は羨望を抱き、

何だか自分が情けなく思えた。

「何だか私…情けないな」ボロツと口をついて出てしまう本音。

「ん、どうしたの？」そんな唐突な言葉に、インデックスは尋ねた。

「私…きつと迷惑だよね。足が動かないから手間がかかってしまうし」

「そ、そんなことないんだよ」慌ててフォローに入るインデックス。

「私ね、部屋が二階にあっていつも崩に上げてもらっているの。よく考えたら、それもあつかましい話だよ。ただの私の自己満足で崩の近くにいたいってという私の勝手な願いで、崩に負荷をかけてるんだよ」

青葉は、じつと下を見たまま言った。

「私、崩に嫌われたくない。崩だけには、勿論誰かれ問わず、嫌われるっていうことは辛いことだけど、私、崩に嫌われるのは絶対嫌なのに……」

「嫌われないよ」

突然、今までとは違い優しくて大人らしいインデックスの口調に、青葉は驚いて顔を上げた。

「だって、あおばは頑張ってるもん。お弁当作ったりしてるでしょ？それは、少しでも崩に恩返しをしようとしてるってことだよ。それが、きりはらに伝わらないわけがないんだよ」

インデックスは優しく、青葉の手を握った。

「あおばは頑張ってる。今からもこれから、そうやって頑張ればいいだけなんだよ。きりはらはとうまに似てるから、きつとあおばのことを大切に思っているよ。だから、笑ってあげて。そばにいる人は、泣いているより笑っている方が、そばにいてもらう人にとって、とても嬉しいんだから」

インデックスがシスターである理由が、青葉には少し見えたような気がした。

「そうだね…ありがとう、インデックスちゃん」  
青葉は、うん、と確かに笑って答えた。

「さあさあ、お菓子を食べるんだよ！待ちくたびれてとうまだけではなく、あおばにも噛みついてしまうところだったかも」

「それはそれで怖いな」  
いつもの元気な口調になったインデックスとの差に、青葉はやっぱり可笑しさを感じた。

「あ、ねえ聞いてよ、あおばあおば！」お菓子を次々と口に運びながらインデックスは器用に話す。

「とうまがね、また私に黙って危険なことをしてたんだよ！いくらいつものこととは言っても、もう我慢の限界かも！」

「あ、私も！崩が私に何も教えないで勝手に一人で危険なことしてた！」

「ああやって向こう見ずに飛び込んでいつて誰かを助けようとすることいいことだけど、」

「心配する方にもなってほしいよね」

あまりにも話が繋がった会話に、二人は目を合わせて、ふふふと笑った。

「似た者同士なんだよ」

「本当だ」

そんな、自分の大切な人の会話は、いつの間にか愚痴になったりしていた。

+

「「ほうえつくしゅん!!」」

またもやシンクロした僕たち。それが、噂されているせいだなんて思いもしない。

「今日はいつても以上に息が合うな、上条…」

「確かにそうだな…」

どよんとした空気感が僕たちにまとわりつく。それもそのはずだった。



「俺は一体何しようとしてたんだ？」少し考えるような仕草をする上条。だが、すぐに思い出したようで、「あっ！」と小さく叫んだ。「スーパーの特売じゃねえか！何でこんな大事なことを忘れていたんだ!？」

「しょうがないよ。なんせ、ポケモンの話でメールの受容範囲の七割を占めているんだからよ…。」

もうなんか、ここまで来ると苦笑を通り越して何も感じない。ランナースハイもさながらだ。

「ズバット…。」

「おい上条、しつかりしろ!『ズ』を聞いただけでズバットが連想されるなんて、末期症状だぞ!。」

僕たちは端から見れば危ない人だった。

「そんじゃあ、俺特売に行ってくるわ」上条は一応気を取り直したのか、よしと自分にいい聞かせる。

「ああ、気をつけてな」

「おう、お前もジャツジメント頑張れよ」

「ありがとう」

僕は上条に手を降った。

残ったのは僕一人、

まあ当然、ここでは僕が進行役の主人公だからそうなんだけど。

「それではストーリーを始めますか」

そう言っただけで歩き出した。

第177支部へと。

ジャッジメント研修生としてだが、この前の騒動でいきなり抜けてしまったから迷惑をかけたに違いない。

「よし、頑張るか！」僕も上条と同じように気合いを入れ直した。

久しぶりの感覚が僕を高揚させた。

今では、なんて馬鹿なんだろうと思う。

最初の草むらでケンタロスが待ち受けているのを知っていたながら、ランニングシューズで走って草むらに入っていくようなものだった。

もし、

もし、僕がもうちょっと考えていたら、

今から起こることに、関心さえ持っていたら、

何か変わったのだろうか。

幸せになったのだろうか。

でも、今からずっと先に続く不幸を嘆いてもしょうがないから、

まずは目先の不幸から始めよう。

そう、

ケンタロスから。

## 種 (the seed) (後書き)

ポケモンしつこかったですね… (謝罪)  
では、プロフィールです。

きはらぐすね  
桐原崩

身長 170?

体重 56?

髪の毛は黒色。さらさらとくせ毛の間の質感。上条とは正反対で、ツンツンではなく髪の毛は収まっている。性格は比較的穏やかで、怒ることは少ない。学校では上条や土御門や青髪ピアスに吹寄せや姫神とよく喋る。上条は大親友。上条以外では常時ツツコミ役でたまにしんどいと愚痴をもらす。巻き込まれやすいのは上条の影響だろう。自分の過去については多く語らず、友達はおるか上条にさえ話していない。それに関してはストーリーの中におりませるつもりです。

東雲青葉

身長 162?

体重 49? (女性の平均ということ)

髪の毛は黒色のロングストレート。優しくておっとりな性格。たまに、天然な部分を見せてしまう。実験の後遺症で足があまり動かず、車椅子の生活。完全に動かないと言っわけではなく、部屋では車椅

子と松葉杖でうまく生活をしている。そのせいか手先は器用。文章からわかるように、崩に好意を寄せている。幼少時代の思い出はこれも実験の後遺症で消えていて、それを知っているのは、青葉の父親に唯一会った崩だけである。

エルギオンス兄妹

エルギオンス・エバンス

エルギオンス・カルマ

身長145?

体重(一般の平均体重)

身長118?

体重(一般の平均体重)

崩の住むアパートの住民。兄妹揃っての茶髪。眼は薄い青色で、イギリス出身。『俺は貴族』がエバンスの口癖。性格は、軽い感じに見られるが、カルマに対する接し方から大人じみた雰囲気も感じ取れる。カルマはまだ小学1年生のため、無邪気。エバンスに対しては素直な妹である。エバンスはたまにそれを悪用しようとする。

扇議 あしひらき

崩議

身長175?

体重(一般の女性平均体重)

崩の住むアパートの住民。大家さんのポジション。崩とは昔からの付き合いであり、頼りになる扇さんを崩は信頼している。髪の毛は

茶髪。すらっとしたモデルのような体型が特徴。煙草を吸う。

絵合萩

絵合薙

身長164?

髪の毛は長い藍色。

萩はlevel3の『精神操作』

薙はlevel4の『大気使い』

実験の失敗作とされている。今は初春たちの寮で生活。

萩は天然。

薙はツンデレ。

まさかの字数が足りない事態。

感想待ってます！

台風は目は少しだけ (the eye of typhoon has only

暴走できなかった……！

なんて言い方はおかしいですね。

すいません、遅れました。なんせ期末試験中だったもんで、あまり書けませんでした。今も中休みという状況で、憂さ晴らしに書いてしまった次第です。少し崩れているかもしれませんが、脱線はしていませんので（笑）

では、どうぞ最後まで読んでいただけると幸いです。

「よし、！」

とまあこんな感じに僕は第177支部へと繋がっている階段を意気込んで、だけどゆっくりと踏みしめるように歩いている次第だ。

自分で言うのも何だが、少しは様になってきたのではないだろうか。実際、ゴミ拾いだって上手くなってきたし、大きな荷物を運ぶから力もついてきた。それに加え、知らぬ間になんと、お茶を美味しく入れるコツさえつかんだのだ。

…？、待て待て。

完全にジャツジメントとは違う話になってきてるぞ。

掃除が出来るようになる、

お茶が美味しく淹れるようになるって、

僕は新妻かよ。

そんな語りをしながらも、僕は階段を上りきった。

目の前にある扉の向こうは、第177支部。

「戻ってこれた」

絵合との事件から早二週間。

これからは、ジャツジメント研修生としてまた頑張り始めるわけだ。

僕はそれを、嬉しく思った。



誰かを守れることに憧れていた、

そんな昔の僕が、

今ここで、誰かを守るために動いている。

夢が叶ったような気持ちだ。

「みんな、元気だろうか」

初春や白井や佐天に固法さんのことを思って、僕は扉を開けた。

「お久しぶりです！」

+

「桐原さん！」最初に声を挙げたのは、初春と佐天だった。

「もう平気なんですか!？」

「うん。一昨日退院して、昨日安静にして、ようやく復帰」

「そうなんですか、元気そうで何よりです」

ああー！！

これだよ、これ！

こんな感じにねぎらって欲しかったんだ！！  
あのアパートじゃ、

『二週間労働が滞納している。早急に償え』

と言われてしまう。(扇さんとエバンス)

僕はどこぞの囚人かよ、

って心の中でツッコミをして、逆らえない僕はせつせと雑用に勤  
かない。

あー、それに比べてここは癒やされるな。

「お帰りなさい。もう大丈夫なのね」固法さんもご機嫌だった。

今日は何だか、みんな機嫌良いな。

「あれ、白井はどこなんですか？」僕はいつものメンバーが欠けてい  
るのに気づいた。

「白井さんはまだ来てないんですよ。まあまあ、桐原さん。何はともあれ座ってください！」

「え、あ、ああ」僕は無理矢理に椅子に座らされた。

「さあ、これどうぞ。最近話題の洋菓子なんですよ！」

佐天は僕に、小さな白い箱から洋菓子を出してくれた。

「あ、ありがとう」僕はそんな彼女たちの振る舞いに戸惑いながらも口走る。

何だか、変に機嫌が良い。

「何かおかしいな……」

「ん、どうかしましたか？」

「いや、何でもない」僕は言い切らずに、洋菓子を口に運んだ。

なかなか美味しい。

「…あのー、」

僕は恐る恐る尋ねた。

「何かいいことでもあったんですか？」

固法さんは一瞬ピクリともしなくなった。

しかし、すぐにこっちに向いて答えた。

「いいことなんて、全然ないわよー。一つもね」

固法さんが、

固法さんが、怖え。

笑いながら殺気立っている。

訂正しよう。

何だか、凄く機嫌が悪い。

初春や佐天も何も言わず、ただ僕をじっと見つめていた。

「うっ……」

何なんだ？この雰囲気。

洋菓子を食べる僕の後ろから三人の視線が突き刺さる。

沈黙の拷問だ。

気まずさに刺殺される。

僕何かしたのか！？

「ねえ、桐原君」

「は、はいっ！」固法さんの声にビクつく僕。

「な、何でしょう？って……ええ！？」

いつの間にか、三人がデルタ態勢で僕の周りを囲んでいた。

「私たちに言うことがあるんじゃないかしら？」

「え、あ、僕のいない間ご迷惑をかけました」

「それじゃなくて」

「あ、あのマグカップ、青葉に凄い喜んでもらえましたよ？」

「それも違うわ」

「ええっ……と」頭の中を引っ掻き回して考えるが、思い浮かばない。

「とにかく、すいませんでした！」

最終奥義超徹底的低姿勢。

もうプライドなんて星屑になってどこか彼方に消えてしまった。

「いやいや、私たちはそんな謝罪が欲しいのじゃなくて、真実が知りたいだけなのよ」

「へ？」

突然の言いように、僕は驚いた。

いや、とぼけた。

ここまで来ると、流石に僕も感づく。

「あなた、一体何の能力者なの？」

固法さんの言葉に僕は答えた。

「…いやだなあ、いきなり。言ったはずじゃないですか？ただのしがない精神感知能力ですよ」少し、動揺が入り混じる。

「嘘つかないで」

そんな僕に、固法さんは強く答えた。

「嘘って、ひどいですね」

「じゃあ、あなたが初春たちを助けに行くとき、どうして消えるようにいなくなったのかしら」

「それは……、ちゃんと走って行きましたよ」

「それじゃあ、私たちを助けに来たとき、どうやって窓を割って中に入ってきたんですか」佐天が同じように強い口調で、僕に聞いた。

「それは、…」

「まさか、単に窓を割って入ってきたなんて言いませんよね？ここはあくまで二階にあるんですから」

「それにあの力は決して精神感知能力なんかじゃありません！」初春もたたみかけるような口調で僕に言う。

「えっと……い、いきなり何なんだ！」  
ムツと三人は、その顔を僕に近づけてきた。

「さあ！本当のことを話してください！！」  
三人は、僕に詰め寄った。

「いや、その……あ、僕そろそろ巡回に行かないと！」  
苦し紛れにも、僕は彼女たちの間をすり抜けた。

「あ、こら……」 固法さんの追撃も振り切り、扉の前に立つ。

「な、何の話です！？僕的能力なんて……」

「逃げてても無駄よ！」

「そう、無駄ですの」

僕がドアノブを握った瞬間、そんな声が響く。

目の前に白井がいた。

「し、白井……！」

僕はドアにもたれかかって、白井と向き合う態勢になる。

「やはり、私の目に狂いはありませんの。あなたは精神感知能力なんかではない。何か、隠しておいででしょう」

「白井まで……一体何を……」

「ここまで来て、まだ隠し通すつもりですか？」

「だ、だから……僕は、」

「もう、逃げられませんのよ……」

「いや、……何も……」

ぜ、

絶体絶命。

ドアノブを握る手が汗まみれになりながらも、僕は非常出口を確保した。少しずつ下がりがりながら扉を開けていく。

「そんなことないですよ！ほら、みなさん、あの時気が動転してたんですよ！僕が実は違う能力者だったなんて……」

「へえー、そうなんだ？」

扉を開けた先から声がした。

その声に聞き覚えはある。大いにある。

僕は、ゆっくりとしか回らない頭を振り向かせた。



「おかしいわね？精神感知能力者なら、私がここにいたことぐらいわかってもいい、というよりはわかってしまうはずなんだけどなあ」

「み、御坂……」

考えられる最悪の状況だった。

御坂は仁王立ちをして、僕の逃げ道を断ち切っている。

「それにしても、聞き捨てならないわねーさっきの話。まさか、あんたが能力を隠蔽したなんて。よくも、私を今まで騙し続けてくれたじゃない……」

バチバチつと、青白い光が御坂の額あたりで散る。

「御坂……待て！……これは、誤解だ！僕の話をよく聞いてくれ……はっ！」

気づけば、僕は全方向を5人に囲まれていた。

「わかった、わかったわ。そういうことなら話を聞こうじゃない

みんなでゆっくりとねー」

「嘘だろ、そんな……ちょっと……」

いやあああああああああああああああ！！」

今日、市民の平和を守るジャッジメント第177支部で一つの悲鳴が響いた。

僕の声だった。

+

「さあ、吐いてもらおうじゃない！」そんな刑事ドラマさながらの言い方をしたのは御坂だった。

「ふ、不幸だ…」僕はそう呟いてみるが、もう手遅れで、5人に囲まれて尋問を受けていた。

いつから、僕は上条みたいになっただんだ…

「いつまで黙っているつもり？」固法さんが僕に言う。

「もう、無駄です！白状してください」初春と佐天が詰め寄った。

「その……」

嫌だった。

もし自分の能力を知られてしまうと、

彼女たちにまで被害が及びそうな気がしてならなかった。

自分の事を知られるのが、

たまらなく怖かった。

「もしかして、あなたは勘違いしてるんじゃないかしら？」

固法さんは、明らかに普段と違う僕の表情を察して、言った。

「私たちは嫌がらせとか、そういうのじゃない。仲間として、あなたのことを心配しているの。あなたの隠し事をみんなが、それを隠し通そうとするあなたにみんなが、心配しているの」

「固法さん……」

「あなたは、今回だってそう。私たちには何も教えず、一人で解決しようとして先走ってしまったわ。それが、私たちが傷つかないようにという意図があることくらい、全員わかってる。でもね、桐原君。

あなたが、周りの人が傷つくのを嫌がることと同じ様に、私たちもあなたが傷つくことが嫌なの」

言い返す言葉もなかった。

それは青葉にも言われた言葉。

ジャッジメントのみんなも、僕のことを思ってくれていた。

「だからお願い。ちゃんと私たちに話して。正直に言って」

僕は覚悟を決める。

そつだ、どっちみち能力を隠し通せるとは思ってもいなかった。でも、言おうすれば声が震えた。

「大丈夫ですつて、桐原さん！」

突然そう言ったのは、佐天だった。

「大丈夫ですよ」

その言葉に、五人が笑って、僕を見た。

「さあ、もったいぶらないでいいから、さっさと言っちゃいなさいよ！」御坂は僕にそう告げた。

「はははっ、わかったよ。つていうか、もったいぶってなんかない」

そうして、僕は

重い口を開いた。

†

「音使い？」

「はい、そんな感じですよ」僕は？マークが頭上に浮かぶ五人に、そう言った。

「僕は精神感知能力ではなく、音使い。もともと、そっち方面ではないんです。でも、能力上かぶる部分もありますよ」

「音使いって、そのまま過ぎるけど、そう受け取っていいの？」

「厳密には、少し違いますね」僕は固法さんの質問に答えた。

「音って言っても、沢山ありますからね。小さな音から大きな音まで。一応、僕はどんな音でも使えますが、小さな音になればなるほど威力が弱ってしまうんです」

「だから、あの時、鉄の棒を持っていらしたのね」

「ああ、音の中でも経験上、一番金属音が扱いやすくて音が大きいですよ。でも、もう一つ大きな要素があって、」

僕は説明を続けた。

「反響。金属音が一番反響しやすいから使っているんだ。音の反響は、強弱を決めると言ってもおかしくないぐらい影響するんだよ。だから例えば、」

僕はすっと手を伸ばして、初春と佐天の目の前で止めると、

パン、と

指を鳴らした。

「何です……うわぁ！」

そのとき、僕の指を中心に風が発生した。

佐天の長い髪を大きく揺らして、消えていく。

「空間が限られている所なら、あれくらいの音でも反響して、これくらいの威力にはなるんだよ」

「す、凄いです！」

「凄くないよ」僕は初春に笑って答えた。

「へえー、面白い能力ねえ」関心したように御坂は僕を見る。

「でも、どうしてバンクにはあなたの能力が偽装されているの？」

「そ、それは……」僕は突然の固法さんの質問にうろたえた。

「知り合いに頼んで、データを書き換えてもらっているんです」

「そんなこと、普通ならしなくていいことですよ？」単なる素朴な疑問は、驚くぐらい僕を追い詰めた。

「どうしてそんなことを？」

「……言いたくないんです」

僕は初めて、断った。

雰囲気が変わったことに、五人は押し黙る。

「それだけは言いたくないんです……」

過去が、

巡り巡る。

頭の中がパンクしそうな勢いでフラッシュバックする。

まぎれもない過去を思い出して、

『彼女』を思い出して、

苦しくなった。

「駄目ですか……」

追求を恐れた僕は、そう呟くと、

返答はすこぶる単純なものだった。

「いいわよ」

「へえ？」簡単すぎる答えに僕は変な声を洩らす。

「私たちはあなたを傷つけるためにしてるんじゃないんだから、充分よ。話してくれてありがとう」

「いやいや、そんな。僕のほうこそ黙っててすみません……」僕は慌てて頭を下げる。

「あの、桐原さん！」

初春が佐天と一緒に僕を呼んだ。

「あの時は、助けてもらってありがとうございました……！」

「初春、佐天……」

にっこりと、二人は笑った。

「さあ、ようやく誤解も解けましたわね」ふう、と白井が安堵のため息をついた。

「うん、よかつたわ。ちゃんとわかつたし、すっきりしたものだ！」  
固法さんも、ぐうーと背伸びをする。

「桐原君も、これで心行くまで、私たちの労働力となれるわけだ」

「えっ、なんか文章違いますでしたか？」

「ああ、使い間違えたわ。これで心行くまで、私たちに服従を誓え



るわけだ」

「どうしてマイナスの方向にばかりウエイトが重くなるんだよ！それに使い間違えたって何だ！僕は、少し先の未来では労働源になっているのか！？」

そんな、ツツコミをし終えたところでつい笑ってしまう。

いつも通りに、笑ってしまった。

みんなが、笑って僕に言った。

「お帰りなさい！」

「……ただいまです」

ただ、

本当に単純に、

僕は笑って答えた。

+

「では、お先に失礼します」

また明日などの挨拶を背中に、僕は第177支部を後にしていた。

本当なら、いつも通り最後までいるつもりだったが、今日は青葉を上条の家に預けているから、少し早めに帰らしてもらったのだ。

ひゅーひゅー、とヤジが飛んだのは伏せておく。

「ま、とりあえず急がないとな」僕はゆっくりだが、上条の家をめぐって走り始めた。

足取りは軽かった。

本当に体が軽くなったような気がする。

僕的能力はバレてしまったけれど、その分罪の意識が消えたのだろ  
うか。

そんなことを思って微笑んでみるけど、

やはり上手くは笑えなかった。

まだ隠している、

僕の過去。

誰にも言っていない僕の過去。

これだけは、

誰にも聞いて欲しくなかった。

言わなくていいなら、

そうじゃなくても、

言いたくなかった。

でも、

きつと、

「言わないといけなくなるのかな」

「あ、いたわね」

減速している時に、誰かが僕を呼び止めた。

僕は、振り返るが、

返ってきたのは、

言葉ではなく、

電撃だった。

「うおお！」僕は間一髪の所でそれを避ける。電撃は、僕の後ろにあった信号の柱にあたり、バチバチつと、青白い光が走ると、信号は動かなくなつた。

「いきなり何するんだ、御坂!!」

そう、

電撃を使ってこんなことするのは、

御坂しかいない。

というより、御坂しか知らない。

「流石、避けるのね」

「あのな、言っておくが僕は上条じゃないぞ」

「な、ななな何であいつが出てくるのよっ!!」  
「御坂は顔を真っ赤にした。」

「あれ、先に帰ってたはずでは？」

「あんたを待ってたのよ！」

「浮気か？」

「違つわっ!!」

ダイレクトに拒否されたぜ。

「僕は今急いでいるんだけど、何か用なのかよ？あの場では言えないようなことなのか？」

「そうよ！あの時じゃ言える雰囲気でもなかったし、することまできなかったんだけど、今なら思う存分できるわ!!」

「何だよそれ。どうぞ、言ってみるよ」

「ふふふ、なら言わせてもらつわ!!」

そう言つと、

ぱつと素早く伸ばした右腕に青白い電気を走らせながら、

人差し指で僕を指し示し、

御坂はふつと笑って、

大胆不敵に宣戦布告した。

「私と勝負しなさい!」

台風は目は少しだけ (the eye of typhoon has only

という感じに終わりました、今回の話です。

御坂はやっぱりあんな感じになるんですかね。

次回から戦いみたいな感じですよ。

新章も始めようかと思っっていますので、どうぞよろしくお願いします。

感想待っています。

評価もどうぞしていただかないね。

芽生え (sprouting) (前書き)

更新が遅れました。

なんか不調だったんですよー。

と、作者事情はさておき、<sup>「</sup>愛読の皆さんはお待たせしました。

初めての方は、ぜひこの機会にとある無題の音響をよろしくお願いいします。



芽生え(sprouting)

「だああああー！ー！ー！ー！」

学園都市のとある道、

悲鳴を上げながら、一人の少女に追いかけてまわされる、もとは風紀  
メン  
員で市民の生活を守らないといけないはずの、一人の少年がいた。

僕だった。

「待ちなさい！！」御坂美琴はお構いなしに電撃を好き放題放つ。

「ふざけるな！その台詞は僕のだ！いきなり自分勝手に宣戦布告し  
て、相手の了承も何も取らずに戦い始めるお前の方こそ待ちなさい  
！！」

「何言ってるのよ！つべこべ言わず、勝負しなさい！」

電撃はいつそう強くなるばかり。

「くっ、いつから僕は上条になったんだよ！？」

逃げながら自分の不幸さ加減を呪ってみるが、どうにもならない。

「ああ、もうー!」

僕はすぐ横の小さな道にそれた。

「逃がすものですか!」

相変わらずのスピードで、御坂は僕を追跡してきている。

「どうも最近、僕のキャラが確立してないぞ!」

僕は普通キャラじゃなかったのか!?

そう文句を吐き捨てながら、僕は廃棄処理されたであろう地面に転がる鉄パイプを拾う。

「質悪いけど、……まあ、関係ないか」

路地の出口が見えた。

ぱっと、僕は飛び出すと

停止した。

「やっと、止まったわね!!」僕に続いて御坂も追いつく。

しかし、御坂はこの場所の異変に気付いた。辺りをキョロキョロと見回す。

「どうして誰もいないのかしら？」

「とっくに下校時間だ」

「なるほどね。だけど、人が一人もない道を見つけることなんてよくできたわじゃない」

「僕はジャッジメントだぞ。ここら辺の道はもう覚えてるよ」

「それだけじゃないでしょ？」

「……ああ、僕的能力もだよ」

拾った鉄パイプで反響させて、

跳ね返ってくる音で状況を把握する、ごく単純な方法。

「だいたい、お前がいきなり暴れだすからだろ」

「失礼ね！私はただ勝負を挑んだだけよ！」

「いやいや、そのことを言ってるんだよ」

お前の常識はどこへ行ったんだ。

「でも、どうやらやる気になったようじゃない？」

ふっ、御坂は鉄パイプを持った僕を見て笑う。

「しょうがないだろ？その代わり、制限をつけるよ。あとあまり辺りを壊すな。始末書書くのは僕なんだからな」

「そんなの知ったことじゃないわ」

地獄行きフラグが早くも一つ立ってしまった。

「さあ、本気でかかってきなさい！」

「お前僕の話聞いてるか！？制限つけろって言ったたる！」

「本気じゃなきゃ意味がないの！それとも何、私に負けるのが怖いわけ？」

「別に。相手がレールガンだとしてもしょうがないよ」

「冷めてるわねー、あんた。だから、ペンネームが冷えピタなのよ」

「おい、お前まで作者事情に介入するんじゃない！」

せつかくいい進み具合だったのに…

でも御坂の性格上、なしにすることは出来ないだろう。

ここまでくると仕方がない。

あまり、僕はそういうことには向いていないのだけど。

「僕が心配しているのはそういうことじゃない」

「へえー、それ以外に考えれる余裕があるなんてビックリだわ。何かしら、言ってみなさいよ」

「僕が本気をだしたら、

お前が死ぬかもしれない、と思ってた」

「……」

一気に空気が緊張する。

「へえー、ずいぶんとやる気がでたのね」

「出させたのは誰だよ」

僕はそう言ってみるけど、

御坂は全く怖じ気づくことはない。

うつたえることもない。

動じることさえない。

それこそが、

学園都市第三位

誰もが認めた超能力者

発電能力の最高峰である

超電磁砲

レールガン

御坂美琴。

「そうじゃないと、やっても意味がないんだから！」

バチバチっと、御坂の額に青白い電流が走る。

ニヤリとかつこよく笑うのは、彼女の戦闘態勢の証だった。

勢い良く、御坂の右腕は僕に向かって振り下ろされる。

+

御坂の腕を巻きつくようにしていた電気は、もの凄い速さで僕へと飛んでくる。

僕がそれにできる対策は、

一つの対抗策でもあるのは、

ただ地面を鉄パイプで叩くだけ。

叩いたその音が、

ビル群に反響して、

僕の前に収集されて、

ばん！、と音が鳴って、電撃と相殺された。

「端から見れば、手品もいいところだわ」御坂は僕に対して薄笑いを浮かべる。

「そりゃどうも」

「やりがいがあるじゃない！」

御坂は絶えることなく、電撃を僕に向かって撃ち続ける。

「全く……元氣過ぎだろ！」僕は真っ向勝負で、電撃を全て相殺し

ていく。

「じゃあ、これはどう!？」

御坂の放った電撃は横に列を成して広範囲に及んだ。

「恐ろし…」

そう言いながら、僕はさっきより強く地面を鉄パイプで殴った。

そして、そのまま、

目の前で雑払う。

バン!、と音が鳴って、また電撃は消えた。

「へえー、やるじゃない!」

「褒めて貰えるなんて嬉しいよ」自然と僕は皮肉口調になる。

「だけど、まだまだ!」

「暴れ過ぎだろ!？」

もう、全部相殺するより避けるほうが楽になってきた。

「はっ、あなたの攻撃もわかってしまえば、防ぐことも簡単だわ!」

「最近の中学生ってこんなに元気なのかぁ」

そうやって、おじいさんのように感傷的になりながら電撃に追い回



される、一人の高校生がいた。

またもや僕だった。

「さっきの勢いはどうしたのよ！」

「勢いなんて最初からない」

でも、やるしかないのだろう。

「しかし、お灸なら据えてやるわ」

地面を叩いて、今僕に向かってきていた電撃を撃ち殺す。

その一連の動作で、

僕は、横にあるお店のショーウィンドウに鉄パイプを伸ばした。

良い子は真似しちゃいけませんよ？

先端の荒く切断された部分で、

引っ掻いた。

それは、いつもの音じゃない。

できれば聞きたくない音。

不快の塊。

「不協和音」  
ジグザグ

僕は、鉄パイプを御坂に向けて振りかぶった。

音撃が放たれる。

「だから、おんなじ手は食らわないって、」御坂も電撃を放つモーションに入る。

「言ってるんでしょうがぁ！」

放たれた電撃は、

音撃と相殺される

はずだった。

「甘い」

音撃が突如曲がった。

まるで綺麗な線があとからついてくるように

ジグザグに曲がって、

「なっ！」

御坂へと音を立てて、追突した。

アスファルトを削った反動で土煙が辺りに広がる。

不協和音の

不規則変化。

「音は音でもいろいろあるからね」

しかし、

土煙の中から、電撃が飛び出してきた。

「うおっ」

予期していたように僕は、横へそれて、電撃を避ける。

「どっいつつもりなのかしらね……」そこには、電撃を周囲に飛び散らせ、まるで雷神のような御坂がいた。

「なんのことだよ？」

「何でちゃんと攻撃しなかったの！なめてるわけ！？」

あの音撃は、一回だけでなく、

御坂の目の前でももう一度曲がったのだ。

御坂に音撃が当たったのではなく、

ただアスファルトに当たっただけ。

「僕はジャッジメントだぞ。一般市民を傷つけるわけにはいかないんだよ」

それに、

そんなことのために、

僕はこの能力をもらったんじゃない。

「なるほどね……そういふこと」

「わかってくれて助かるよ」

「要するに、あんたからしたら、《超電磁砲》の私も足蹴の価値しかないってわけね……」

「……おいおい、なんか違いますか？御坂さん、まさか……」

「私をコケにしてくれたわねえー！……」

「逆ギレ……」

つくづく不幸だなあ、僕。

電撃が御坂の前にどんどん集まってくる。

「あれ……なんだよ？」

御坂の目の前に出来たのは、

大きな電気の塊。

「まずはこれくらいかしらね！」

それは放たれた。

「まず、って、これ以上は勘弁してくれよ」

思い切って、鉄パイプで地面を殴る。

「真っ向勝負は無意味だな」

響かせたのは、地中。

地面が僕の前で隆起した。

覆い囲むように出来た人工堤防が電撃をはじく。

「あいつ、……頼むからもちよっとおとなしく……」

ピイン。

音がした。

電撃の音じゃない。

確実に、何かの金属音。

何かを弾いたような音。

「おい、まさか……!!」

僕はすぐ、その場に伏せた。

ドオオオオオオオン!!

轟音を響かせ、僕の上を熱線のように橙色の光線が突き抜いた。

ぼつかりと隆起したアスファルトの地面に穴ができる。

その向こうからは、

ニヤリと笑う御坂を覗けた。

彼女の代名詞

『レールガン  
超電磁砲』

「そうね、これで本気ってやつかしら？」

「全く……」

これは一発しばかないといけない。

アスファルトの穴を抜けて、御坂と向き合う。

「さあ、やる気になった？」

「御坂」

「何よ？」

「もう、レールガンは使うな」

「はあ、何？負けるの怖いわけ」

「それは、僕と相性が悪いんだよ」

「へえー、そう」

御坂はまた、コインを上弾いた。

「なら、自分で確かめるわよ!!!」

しかし、

コインは御坂の指先に落ちたのではなく、

横にいる僕の手に落ちた。

「えっ……」

御坂は驚く。

さっきまで30メートルは離れていた相手が、

隣にいるのだ。

「じじじじじと」



御坂のレールガンが、たとえ音速の三倍の速さでも、

モーションの間は、

僕の音速が勝つ。

「っ！……」御坂は反撃を試みようとするが、

振りかぶった拳は僕に制された。

「おい、御坂……やり過ぎだ」

「あんた何なのよ！私はまだ負けてないわ！！」

「じゃあ、お前はあのままレールガンを撃って、当てて僕を殺したかったのかよ？」

「そ、それは……」

どもってしまふ御坂に僕は言った。

「お前は、能力を制限しないと駄目だ。Level 5は、だからこそ、自分の能力の使い方をしっかりと定めないといけないんだよ」

「うっ……」

とは言ったものの、

目の前でいつもとは正反対に落ち込んだ御坂を見ると、

なんだか自分が罪意識を感じる。

不条理だよな。

「……………」

「あぁー、御坂」

「ふえ、？」少し目が赤くなった御坂の顔がこちらを向く。

「最初は、ゲー！」

「えっ!？」

「じゃんけんポン!!」

僕：チヨキ

御坂：ゲー

「ぐああぁー!負けたあぁー!」僕は少しオーバーリアクション

を取ってみる。

「……………」

「畜生！あともう少しで、もしかしたら、勝てるかもしれない。勝つというのに……！」

「……………」

あれっ、なんだこの空気。

ピクピクと御坂は震えていた。

「あ、あんたは……………」

「み、御坂さん…………ちょっと待って。おかしい、何かおかしい！それは……………」

「馬鹿にしゃがってええ……………！」

「理不尽だあ……………！」

本当、最近の僕は

ついてない。

+

僕は、あの後、何とか事情を説明して帰ることができた。というか、ワゴン車に売ってあったクレープと、それを買うと貰えるゲコ太ストラップが僕の救いの神になってくれたおかげだ。

時刻を5時。御坂との戦いに疲れた僕は、ヘトヘトになりながら、上条の自宅へと続く道を歩いている。

「本当に不幸だ……」

溜め息一つつく度に幸せが一つ逃げていくなら、僕は分単位で莫大な幸せを逃がしているに違いない。

まあ、まずはそれより、

「青葉を迎えに行かなきゃな」

「こんなところで何してんだよ、崩」

そつどこからともなく脈絡なしに、僕へ話しかけてきたのは、

エルギオンス兄妹だった。

「まさか、前にいた中学生を見ながら、あれやこれやと数多の妄想に耽っていたものの、知らぬ間に女の子はどこかに行ってしまった、自分の妄想が中断を余儀なくされたことをその女子中学生のせいにしてしまい『ちよつとないんですけど』と、汗をだらだら流しながら、でもそんなことに一人気持ち悪く笑って嬉しく思っている、世界でまれに見るマゾパワーを発揮している最中なのか？」

「お前は色眼鏡を何重にかけているんだ!？」

もはや訂正するところが多すぎて、訂正しようがなかった。

「ただいま、崩兄!」バツ、とカルマは僕に抱きつく。

「お帰り、カルマ」

「ところで、本当は何してんだよ?」

「青葉を迎えに行くところなんだ。今、上条の家に居てな。留守だったから、少しそつちに居てもらっていたんだ」

「なるほどね〜」

「そついうお前こそ、何してたんだよ?帰るの遅かったじゃねえ

か

「俺はこのシチュエーションに用があつたんだよ」

「えっ、何だよ」

ざっと足を少し広げて踏ん張って、

決め顔で誰彼構わず、

ビシッと決めた。

「次回からは、魔術編《エルギオンス兄妹と僕》が始まるぞ。魔術編に関してはまだ素人な作者だが、何とかして書くようだから、見てください。次は俺たち兄妹がメインになるのでよろしく」

一瞬、呆然の僕。

「……あー大体掴めて来たぞって、お前何やってんだよ!!」

「読者アップのための宣伝だ」

「話の中でこんなにも露骨にフラグを立てられる小説を、僕は一度たりとも見たことがねえよ!!」

「うるせえな、大体お前が全然宣伝しないから駄目なんだろ」

「えっ、やってるじゃん！節目節目にはさ、次章を予告するような、だけど本質はつかないような言葉を並べて、次章が読みたくなるみ

たいな努力してるじゃん!」

「言っとくけどあれ、少しうざいぜ」

「お前にまでそんなこと言われちゃお終いじゃねえか! あれはあれできつと読者受けがいいに決まってるんだよ!」

「ちなみに、巷では僕の言うことが読者の意見をそのまんま反映してるって有名だぜ」

「はっ、そんな冗談に誰が騙されるか……」

「……………」

「えっ、嘘だろ? 何で黙ったままなんだよ? 嘘だ! 頼む、嘘だつて言ってくれエバンス!」

小学生に必死で懇願する一人の高校生がいた。

それに関してはノーコメント。

「ああ、もういい! こうなったら、何があっても僕の語りを最後に入れてやるんだ。まるで今のことがなかったぐらいのテンションで書いてやる。読者を困惑させてやるんだ! ハハハハハハハハ!」

「キャラが壊れちゃってる」

ところで、本題。

「崩、とつとと帰れよ」

「言われなくてもわかってるよ」しびしび、何故か小学生に言われたことに了承する僕。

「腹減つて、たまらないんだからな」

「まだ5時だぞ？早くねえか？」

「育ち盛りなんだよ」エバンスは笑って答えた。

「崩兄！お家で待ってるね！」

「うん、わかった」嬉しそうなカルマに僕は言う。

「そんじゃあ、家にいるわ」

「わかったよ。お前も、家で二人だけになるだろうけどしっかりな」

「言われなくてもわかってるよ。」

俺は貴族なんだぜ」



そう、言っ

まるで当たり前のように思って、

僕は一つ返事で彼らに背を向け、

青葉を迎えに行っていた。

二人と会えるのは、必然。

二人と喋れるのは、当然。

そう僕は思いこんでいた。

家に帰れば、

青葉がいて、

エバンスがいて、

カルマがいて、

扇さんがいる。

そんなことを、いつから当たり前に思うようになったのだろう。  
いつから、

そんな夢を見るようになったのだろう。

僕の大切な夢は壊される。

最後になって、

最悪な形で。

でもそれは、

今から考えても遅くて、

どうにもならなくて、

それならばそれで、

長く続けばいいと思うけれど、

そんなに甘くはなかった。

唐突に、

悪夢は僕に夢を見せた。

芽生え (sprouting) (後書き)

まあ、こんな感じで、

かなり乱暴な次章予告。

『魔術編《エルギオンス兄妹と僕》』

でした。

意外だ！と驚いて貰えると嬉しいですね。

まだ詳細は決まってませんが、

神裂とステイルを出そうと思ってます。

またぜひ読んでください。

感想、指摘待ってます。

評価も、どんどんしていただかないね。

嵐の前の静けさ) The calm before the storm) 前

すいません、今回は短い更新になります。

今、模試中なものであまり書けないんです。

題名通り、今回は嵐の前の静けさ。事が起きる前の話です。

ではでは、短いですが、最後まで読んで頂けると幸いです。

嵐の前の静けさ) The calm before the storm)

古池や 蛙飛び込む 水の音

「あー、聞こえるわー。蛙が池に飛び込む音が。パシャン、パシャ  
ンって」

「あー、暑い」

「あー、聞こえるわー。夜に鳴く蛙の音が。ゲコツ、ゲコツ、って」

「あー、暑い」

「てめえ、人がせっかく古文の宿題を切り上げて、涼しさ対策とし  
て松尾芭蕉の俳句を読んで昔に親しみ、涼しき心へと生まれ変わる  
うとしているのに横で暑い暑いうるさいんだよ」

ちなみに蛙は、季語としては春なのだが。

「それより、クーラーを買いやがれ……」

そんなことを、暑さにだれ、床に仰向けになって倒れた僕とエバン  
スはさつきからかれこれ30分続けていた。

8月2日

無事に終業式を終えた学生は、

うはづはのあはあはでやらやらのえへえへな、

夢一杯胸一杯の夏休みに入る、

のだが、

最悪なことに、上条たちのように整備された寮でなく、僕たちの住  
んでいるのは少しボロボロのアパートのため、エアコンがないとい  
う最大の欠陥が、夏になると手加減なしに僕たちへ滅びのバースト  
ストリームをかましてくるのだ。

「あー、もうこの際、古池でもいいや。飛び込みたい。水と友達に  
なりたい」

「勝手になっとけ」

「うへー、私は煙草になりたい」

さらに僕たちのその横に子供顔負けのだらしなさで寝転がっている扇さんは呟いた。

「吸われてどうするんですか」

「はい、お茶どうぞ」と青葉は僕にお茶を出してくれた。

「あ、ありがとう」

読者の訳がわからないのも当然だろう。まあ理由は簡単で、人間、嫌なものは嫌だから、暑さを逃れようと涼しいところへ向かってしまう。つまり、僕の部屋は湿度、温度、日当たり、風通しのあらゆる面から見た時、このアパートの中で一番のベストコンディションなのだ。例年のごとく、夏の蒸し暑い日になると、住民全員、といっても今年は青葉が増えただけの四人が、一斉に僕の部屋に集まってしまう。ちなみにワースト一位は、全ての点でマイナス成長を記録している扇さんの部屋だ。

そう言えば、エバンスとカルマの部屋は見たことがないな。

「あー、駄目だ崩。我慢できない、煙草吸わせてくれよー！」

「崩ー暑いー！崩ークーラー買えよー！」

「きゃははは！！水、水、お水さんー！！」

「あつ、カルマちゃん！室内で水遊びなんてやっちゃ駄目だよー！」

僕の部屋が音を立てて崩れて行くのがわかった。



「あー、もう無理だ！こうなったら、どうにでもなりやがれー！」

「よっ、それでこそ男だねえー！！」

鉛筆を投げ出した僕に、学生としては何とも決まり悪い台詞を吐くエバンス。

「ねえ、崩」

突然、と言うのはおかしいが、青葉が僕に話しかけてきた。

「ん、どうしたんだ？」

そんなワイワイガヤガヤの部屋の中でも、

いつも通りの日常の中でも、

守ってきた平和な日々でも、

大切に思うこの世界でも、

不吉は、

音も立てずに忍び寄る。

+

「ああ、花火大会ね」固法さんは、暑いのに関わらずいつも通りのムサシノ牛乳を片手に持って、僕の話に頷いた。

牛乳なんてすぐ傷んでしまうのに大丈夫だろうかと最初は心配するものの、この学園都市において、消費期限内の衛生管理に対する不安なんてするだけ無駄というものだ。

だから、僕は話を脱線させないで会話を続ける。

「はい、確か今日ですよね。僕も青葉についさっき誘われて気づいたんですよ」

回想

『今日7時半から花火大会があつてね』

『へえー、そんなのあったんだ』

『うん、それでね……、一緒に行けたらなと思って……でも、崩、ジャッジメントの仕事忙しそうだし、もし無理ならいいんだけど、その、できればみんなで行けたらなあと思って……』

『ああ、いいよ。確か僕、その時間帯はジャッジメントの仕事が入ってないはずだから大丈夫なはずだ』

『ほ、本当！？』

『うん、始まる時間まではジャッジメントの仕事だから、7時ぐらいに花火大会の場所に集合でどうかな？』

『うん！』

というものだった。

「第7学区だけで行われる小規模な花火大会ですからね。花火と言えば、みんな大覇星際のパレードを思い浮かべるはずですか」

「学園都市だけあってやっぱり行事が多いんだなあ、と再確認したよ」

「あれー？ 私には、てつきりその青葉ちゃんのおのろけ話にしか聞こえなかつたけどなあ？」

「なっ!！」

僕はいきなりの固法さんの切り返しに、おもわず過剰に反応してしまっ。

「おのろけなんかじゃありません！ 大体そういう関係でもないですよ!！」

「またまた、ご謙遜しちゃって!?!」

「してません!」

「あら、私は不思議なことは思ってますわよ。桐原さんだって高校一年生なんですから、甘酸っぱい恋の一つや二つ、体験していてもおかしくわないですよ」

「おい、だからそんなんじゃないって」

「それに桐原さんはなかなかの顔立ちですからね」

「いや、だからそういうことじゃ……」

「なかなかですねー。なかなかですねー」

「おい、絶対適当だろ。最初の『〜』が今じゃただの『ー』になってるじゃねえか。しかも、やる気のなさ丸出しで褒めてんじゃねえよ」

善意が感じられねえ。

「ちなみに『なかなかかなり』とは、古文で『中途半端だ・かえって  
しないほうがいい』という意味があるのですわよ」

「知りたくなかったあー!!」

悪意しかこもってなかった。

中学一年生に中途半端と言われた悲しい高校生、桐原崩。

「あ、桐原君。その時間ちょうど仕事が入ってしまったわ」

「嘘つけ、明らかに今入れたらろうが！」

早くも、何かこういうキャラが確立されている。

「僕が言いたいのは、そういうことじゃなくてですな、」

「ん？」

僕は、ジャッジメントの皆にある提案を持ちかけた。

「なるほどねえー、その青葉ちゃんに会ってほしいと」

「はい、そういうことです」

留守番となる初春と白井にはあらかじめ事情を説明し、177支部を出て巡回の途中、固法さんはもう一度僕の提案を復唱して考えるような素振りを見せた。

「どうかしたんですか？何か考えるような声色ですけど」

「いや、それは本当に私たちが行っていいものかなって、ちょっとね」

「えっ、そりゃあ勿論。全然かまわないと思いますが」

「セクハラしてるのがバレるわよ」

「してねえよ」

「セクシャルハラスメントをしているのがバレるわよ」

「丁寧に言い直すな」

「冗談はさておき、それに関してはまだ大切な人の意見を聞いてないからね」

「誰です?」

「その、青葉ちゃんよ」

確かにそうだった。

これは僕がよかれとやっていること。  
青葉には話していない。

「でも、青葉もきつと喜びますよ」

「それって、青葉ちゃんがあなただけに提案したんじゃないの？」

「住民全員にです」

「それでも、きっとあなたへの何かしらの思いがあって持ちかけたに違いないわ」

「どうしてそう思うんです？」

その問いに、固法さんはかっこよく笑って答えた。

「その子を見て、すぐわかった」

「あ、病院で会ったんですね」

「まあね、可愛いかったわね」

「……、あの、固法さん」

「何かしら？」

「花火大会で、僕だけへの思いって何ですかね？」

「……へえ？」

呆れた声。

「まさか……青葉のやつ、エバンスたちよりも屋台でいっぱいお菓子買って欲しいとか思ってるのか？どうしよう、僕の近い未来が、餓死状態にあるかもしれないぞ」

「ど、鈍感……」

「ん、今何か言いました……」

トン、と

街中のため当たり前なのだが、通りすがりの人と肩をぶつけてしまった。

僕も相手の人も、『おっとっと』、という感じになる。

「あ、すみません」

「いやいや、こちらこそ見ていなかったからね」

そうやって僕に紳士的に謝ったのは、男性だった。身長は180センチ弱と言ったところだろうか。頭には、紳士の代名詞でもあるような高級そうな帽子に、これまた高級そうな長いロングコートを身にまとっていた。帽子の隙間から覗かせる銀髪と、僕を見る翡翠色の瞳からは、外国人であることが容易に推測できる。



「あまり人混みはなれていなくてね。もっとも、学園都市は初めてなんだよ」

「そうですか。観光か何かで？」

「そうですねえ……」

いろいろ、あるからね」

ピクリと、何だろうか？

神経が尖る。

嫌疑が芽生える。

男の表情に違和感を覚えた。

「では、失礼するよ」

「あ、え、ええ。それではお気をつけて」

「ありがとう。では、あなたに」

そう言っつて男は、

小さく笑って、

胸で十字を切っつて言った。

「神の御加護がありますように」

そして男は、

人混みに紛れて行っつてしまった。

「桐原君？」

「……………」

「おーい、桐原君？」

「……………」

「サザエさんが打ち切りになるらしいわよ」

「ええ！ あの生誕65周年を迎えた国民的アニメが！？」

「微妙によく知ってるんだね。ちなみに私はちびまる子ちゃん派だ  
けど」

「待ってください。呼び止めてもらってなんですが、だんだん主旨  
から離れていってます」

もう一度、男の方へ振り返ってみるけど、姿はなかった。

「何ぼうつとしてるの?」

「いや、ちょっと……」

違和感を覚えたなんて言えないしな。

「何でもありません。さあ、行きましょう」

たぶん、外国人というレッテルがそう思わせただと思って、

僕は、深く考えなかった。

そう言えば、今日の学園都市は、

驚く程の静けさだ。

嵐の前の静けさ) The calm before the storm) 後

ここまで来たんですが、後が難しいです。難航すると思いますが、  
まだぜひ読んでくださいね。

花火大会後の急襲 ( m a k i n g a s u r p r i s e a t t a c k a f

すいません、また長くなりました。

更新です。

やっとですが、話が新章らしくなります。

それではどうぞ、最後までお付き合いしてもらえると嬉しいです。

『じゃあ、こうしましょう。もともとね、私たちはその時ジャツジメントとして花火大会の風紀管理の仕事が入っているの。だから、一緒に見物や屋台を回ることは無理だけれど、少しでも合間を縫って時間を作るから仕事仲間として紹介させてもらうわ。気を引き締めて頑張りなさいよ。なんたって大勝負かもしれないんだから』

僕は、第7学区のとある河原、もつとも今では着実に花火大会への準備が進んでいて、まるで城本にできる城下町のようにいるんな屋台が花火大会を中心として扇状に所狭しと連ね、夏の風物詩とも言えるこの風景は、やっぱり見ていると胸が弾むいいもののだが、今までの経緯を含め、固法さんの言葉を心の中で復唱し、何か不安が募りながらも青葉達を待っていた。

「大勝負か……」

よくわからないが、きっと重要な意味があるのだろう。

「ふっふっふ……だが固法さん。もう僕は手を打ってあるのだよ」

僕はポケットに入っている財布を握りしめた。

お金は下ろしてある。

「これで、ある程度の範囲はカバーできる！」

たとえ青葉がいくら屋台のあれやこれやを食べたいと言っても、これだけあれば絶対大丈夫だ！！

でも、何故だろう。

未来を見ようとすると先が見えない。

あ、そうか、

涙のせいか。

僕は、そんな一人遊びから抜けると辺りを見渡す。

娯楽から食品まで。

ありとあらゆる屋台が活気に溢れていた。

科学の最先端に行く学園都市にしては、昔の風情漂う出店はとても懐かしく思われる。

「早く行こー！」

「待ってよー！」

そう言い合いながら、小さな女の子と男の子が今日のための浴衣を夜風になびかせ、僕の横を通り過ぎていく。



『ここだよ、崩!』

ふと、そんな『彼女』の言葉を思い出した。

いつも窓からひよこっつと顔を出して、

僕に笑いかけていた『彼女』の顔が、

唐突に思い出される。

言い様もない気持ちで僕を包んだ。

「全く、らしくないな……」

そんなことをつぶやきながら僕は笑った。

その少年と少女が走っていくのをずっと眺める。

「ん?」

僕はその先で目を止めた。

綺麗な着物が目に入る。いや、これは浴衣だろうな。全体的に薄い

青色の浴衣には、すうっと流れるような流紋が入っていて、見ているとちままで涼しくなってしまう。長い髪の毛を首もとで折り返している姿は、凜としていた。

「あー、もうちょっと、ちゃんと見たいな」

あまりに似合っているから、近くで見たいと僕は思った。

それに、彼女は車椅子に乗っているから一貫した全体を見ることができな……。

「ん、車椅子？」

ここで、疑問。

というか、それは僕にだけで、読者にはネタバレらし。

その人の視線が僕と合う。

紛れもなく

青葉だった。

「あ、青葉……」開いた口がふさがらない。  
そんな僕とは対照的に、人混みの中やつと僕を見つけたせいか、青葉は嬉しそうに僕に向かって手を振った。

「崩ー、こっちこっち！」  
そうやって手を上に上げて振るため、浴衣の袖がずれて片元にまで下がり、白くて綺麗な腕があらわになる。

無邪気な笑顔で、僕にずっと手を降り続ける姿。

僕はそんな青葉にただ呆然と見入っていた。

その時、鼻に違和感を覚えた。そっと手で触れてみると、  
鼻血だった。

「げっ！！」慌てて僕は鼻を押さえる。上を向いたり、首を叩いたりして、何とか鼻血を止めようとするが、少しずつ鼻血は垂れてくる。

ああ、もういいや。

この際、変態と思われてもいい。

だが、一言だけ。

着物系統最高！！

「はい、ティッシュ」

「あ、すみません……って、「ティッシュが差し出された方向に向くと、

何故か扇さんがいた。

「な！　なんでいるんですか！？」いきなりで、さらに鼻血の件まで見られてしまった僕は、顔を赤くして扇さんに素っ頓狂な言葉遣いで喋った。

「いや、出店の下見をな。それにしても、」

扇さんは、ふふっと、いつも以上に人をイライラさせるような含み笑いをする。

「まさか、青葉ちゃんのアマリにも普段とは違う浴衣姿の雰囲気と露出具合に鼻血を出しているなんて、青春してるねえ〜。発情期かい？」

「くっ……！！」

僕は言い返すことができなかった。もらったティッシュで詰め物を作って鼻に差し込む。

「すごくかわいいだろ？」

「一体今回はどういつつもりですか！？ いきなり女友達が浴衣になっっていたら誰でもこうなりますよ！」

「じゃあ、お前に芽生えた変な性癖に関しての追求はやめておくことにしよう。いや今回はだな、花火大会というのもあって、青葉に浴衣をプレゼントしたんだよ。初めて着る浴衣に最初は四苦八苦し  
て着ていたけど、着てみるとこれがもの見事に似合っていてな。  
まあ、私の目に狂いはなかったというわけだ」

くっ、不本意ながら言わせてもらおう。

扇さん、グツジョブ。

「あと、カルマにも浴衣を着せてあるから、ロリコンの方でも堪能  
できるぞ」

「しねえよ。ってか、僕はロリコンじゃない」

「あー、ペドね」

「違えよ！ ますますひどくなってるじゃねえか！」

「冗談冗談」そう言って、今まで吸っていた煙草を携帯灰皿に入  
れると扇さんは歩き出す。

「さあ、行こう。みんな待ってる」

『みんな待っている』か、

「はいはい」

僕は少し感傷的になってみるけど、それは表に出さず、扇さんの言う通り、青葉の元へと歩く。人混みで隠れていたカルマも見つけた。

「崩、少し早かったね」

「……ん、ああ、早めに終わってさ」

「そうなんだ。あのさ、扇さんに浴衣をもらって、カルマちゃんと一緒に着せてもらったんだけど、どうかな？」

「どうかなどうかな!？」とカルマも同じ真似をする。

「え、どうかなって……その、」

「うんうん!」

「ま、まあまあだな」

「えー、その言い方はないよ。何かもつとちゃんとした感想が欲しいなあ」

「まあまあだからまあまあなの」

「素直に綺麗だっって言えないんだよ」

「お、扇さん！」

「崩兄、素直じゃないな〜！」

「」「ぶっ、あははははは〜！」

そんなカルマのませた発言に、青葉と扇さんと僕は吹き出してしま  
う。

「さあ、行くぞ。出店回りだ」

「うん、楽しみ〜！」

出店の並ぶ方に向かって歩き始めた。

『帰る場所がある』って言うのは、いついついことかもしれない。

†

「おっちゃん、儲かってる?」

「ぼちぼちなあ。今日は多い方とちゃうか」

「違いよ。本業の方を聞いてるんだよ」

「本業!?!」

「今時、屋台一筋で生きていけるほどやわな世界じゃないぜ」

「……ほう、坊ちゃん、鋭いんやなあ」

「まあな、これでも、苦労して12年生きてきたからよあ」

「実はな、あまり上手く行かないで、最初はそれでも頑固にこだわってきたけど、今じゃ生活まで厳しくなってきたなあ。つい最近、屋台を始めたんやよ」

「へえー、何か奥がありそうだなあ」

「は、何のことや?」

「その裏に何かありそうだって言ってんだよ。おかしいと思っただんだぜ。最近の学園都市は嵐の前の静けさみたいになあ、胸騒ぎは止まらないしよあ」

「あんちゃん……まさか、」

「勘違いすんなよ。俺は不気味な静けさの学園都市は嫌だし、この



胸騒ぎを止めたいから協力するだけだ」

「あ、あんちゃん……」

「さあ、行こうぜ。物語の始まりだ。まあ駄賃と言っちゃなんだが、その綿菓子一個で、」

「……って、くら」

僕はエバンスの頭の上に拳を落とした。

「いてえな、何すんだよ」

「何上手いことまとめて綿菓子貰おうとしてるんだ」

屋台を先に回っていたエバンスは、どうやらかなり姑息なまねをしていらしい。

「お前は邪魔するなよ。俺のストーリーが動きだそうとしているんだぜ？」

「違えよ！誰が読んでくれんだよ、こんな話！」

綿菓子屋とエバンス。

「なら崩、綿菓子買ってくれよ」

「つたく、しょうがねえなあ」

「あ、私もー！」

「カルマもー！」

「わたしもなんだよ！」

「はいは、……ちよい待ち」

何か一人多くないか？

「あー、桐原、俺も頼むわ」

「なんでお前たちがここにいるんだ!？」

上条とインデックスだった。

「いやあー、俺たちも花火見にきててさ」

「そうなのか。久しぶりの感覚だな、上条」

まあ、一週間ぶりなのだが。

「きりはらー、早く買ってほしいんだよ！お腹が減り過ぎてきりはらに嘔みつきそうなんだよ！」

「お前最近あつかましくなっていない!?!……まあいいけどさ。そう



様々な場所から歓声が沸き上がる。

「わああっ……！！」綿飴を片手に持ったまま、口を少し開けて、上空に打ち上げられる花火を食い入るように青葉は見つめていた。

「夜空を飾る、色とりどりの花火。夏の風物詩だ」僕は、青葉の横でいろいろと説明をする。

「綺麗だろ？」

「うん、すっごく……」

まるで小学生のように目を輝かせる青葉。

そう、これからは

そんな笑顔がずっと続けばいいと思った。

「ねえ、崩」

「どうしたんだよ」

満ち溢れた笑顔で、青葉は僕に言った。

「ありがとう」

僕はそれに、紳士のようにお辞儀をする。

「どういたしました」

そして、笑って見せた。

お互いが顔を合わせて笑い合う。

しかし、

ピピピピピと

そんな時に限って、

嫌らしく携帯は鳴り響くのだ。

キ

『頑張ってきてね、崩。私は充分楽しめたからもういいよ。心配しないで、ちゃんとみんなと一緒に帰るから。だから、崩もお仕事ちゃんと頑張りなよ』

そんな青葉の言葉を背に、みんなの場所を離れて、僕は一人、ジャッジメントとして動く。

人影が見えてきた。

もちろん、固法さんと初春だ。

「お待たせしました」

「ごめんね。合流の電話のはずが、まさかあなたを呼び出すことになっちゃうなんて」

「いえ、気になさらず。それより一体何があったんですか？」

「それはまず、こちらに入ってお話するのがいいですよ」

と、白井は近くにある大きな車を指差したのだ。

「あ、桐原さん」車の中で僕を出迎えたのは、10個のモニターに

囲まれた中で、パソコンに向かう初春だった。

「これ、何ですか？」少し驚いた僕は、固法さんに尋ねる。

「監視用カメラよ」との端的な答えに初春が補足説明した。

「この花火大会が行われている辺り全域の監視カメラです。私は、これで状況を把握していたんですが」

「ん、だけど、どうしたんだよ」

「不思議なことが起きるんですの」

その次の瞬間、

4台のカメラが真っ黒になった。

「えっ？」いきなりすることに僕は状況を掴めない。それを見て、白井は説明を続けた。

「こういうことが立て続けに起こっていますの」

「立て続けに？壊れたとかじゃなくてか？」

「ええ、時間が経てば、ほら」

その言葉通り、さっきの4台のカメラは元通りに映されていた。

「私たちもそこに行ってみたんですが、やっぱりおかしいことは何もありませんでしたの」

「なるほど」

確かにおかしい話だ。

「超能力でしょうか？」

「そう考えるのが妥当ね。何にしろ、今はまだ何も起きていないけど、こんなことをするってことはきつと何かを企んでいるってことでしょうから、早く解決すべきだよ」

「そうですね。大体はわかりました。僕も巡回に加わります」

「ごめんなさいね」

「気にしないでくださいって言うてるじゃないですか」

「ありがとうございます。じゃあ、始めましょう。初春はナビゲーション頼んだわよ」

「任せてください！」

「私たちは、ルートと範囲を決めて効率よく動きましょう」

「はい」

「わかりましたですの」

僕たちが本格的に動き出した時には、



花火大会の終わりが近かった。

†

「はぁー！食った食った！うまかったあ！！」

そんな声をあげるのは、もうすっかり暗くなった道を歩くエバンスだった。

「もう、食べ過ぎで、全然花火見てなかったよ、エバンス君」  
車椅子を彼に押ししてもらっている青葉はそう言って笑う。

「カルマちゃんもすっかり寝ちゃったしね」

青葉の膝の上で、カルマがはしゃぎ疲れて、ぐっすり眠っていた。

扇さんは歩き煙草が見つかって、いい歳なのに補導をくらい、この場にはいなかった。

「青姉。俺たちのことは、君やちゃん付けしなくていいんだぜ？もう、家族なんだからさ」

「ええ、そうかな？」

「うん。その方が自然だろ？俺なんか、崩って呼び捨てだからね」

「ははは。うん、ありがと。でも、私はこっちの方が呼びやすいんだ」

「そうか。なら、そっちの方がいいな。青姉が好きな風に呼んでくれよ」

「うん、そうするよ」

そんな、会話の中で、

青葉は気になってしまった。

エバンスたちの、

本当の家族について。

「ねえ、エバンス君のお父さんとお母さんはどこにいるの？」

「えっ……」

エバンスは止まってしまった。

車椅子も動くのを止める。

沈黙。

「あつ、ごめん。その、深い意味はないんだ。ただ少し気になっただけで。崩や扇さんはこのこと知ってるのかなっと思って……」

「あ、ううん、大丈夫」エバンスはそう答えたが、明らかに声が震えていた。

「知らないよ。誰にも言っていないから」

そうやって、無理に笑う。

「俺の家族は……」

「見つけた」

その低い声は、

辺りに漂う暗闇から聞こえた。

†

「くそつ、全然わからねえ」

僕は分けられていたルートに従って辺りを巡回するものの、全くと言っていいほど手掛かりが掴めない。

「根本的に違うのか？」

僕は思考錯誤する。

超能力。

精神系か。

それとも、もっと特殊なのだろうか。

「一体どうやって？」

ああ、わからない。

わからない？

まさか、

「魔術？………そういや、」

ピピピピピピピピ

ここで携帯が鳴った。

「桐原さん！　とうとう見つけました！　監視カメラに不審者発見  
！」

「本当か！？　一体どこだ」

「今いる道の、一本隣の大通りです！」

+

それは、唐突に暗闇から現れた。

いや、暗闇ではなく、もともとはっきりと、そこにいたのだ。

同じ色、暗闇と同じ、黒をしていただけで、気付かなかった。

それは、横から見えない速さでカルマをかつさらっていく。

「カルマちゃん！」

青葉が手を伸ばした所で何も変わることもなく。

青葉は闇に呑まれた。

「カルマー!!」

そして、それは姿を現す。

闇だった。

輪郭も何もない。ただ、闇より黒い2つの目を中心につけて、カルマを捕らえた手だけが宙に浮いている、

暗闇の化け物。

そしてそのそばに、

一人の男が立っていた。

「Hello・(やあ)」

その言葉に、

その声に、

エバンスは言葉を失った。

「なっ……」

「I look forward to seeing you .  
(会つのを心待ちにしていたよ)」

「何で、……」

「How do you do? Mr. Eligionce Evance. (調子はどうだい? エルギオンス・エバンス君)」

「何でお前がここにいるんだよお!?!」

そんな、エバンスの叫び声に動じず、むしろ、

ニタツと笑って

こう言った。

「I went to meet you. (迎えに来たんだ)」

暗闇の化け物の手が伸びた。



†

暗闇の化け物の手は、青葉とエバンスを捕まえることなく、両方の手が勢いよく重なる。

まあ、ここで、

語り部交代ということだ。

僕は、その重なった手の上に立っていた。

「崩……」

「もう大丈夫だ」

「う、うん……」と、何だか抜けたような声で、青葉は僕に頷いた。  
どうしたのだろうか？

まずはそれより、目の前のことに集中しよう。

僕は、男と向き合う。

やっぱり見覚えがある。

身長は180センチ弱と言ったところだろうか。頭には、紳士の代名詞でもあるような高級そうな帽子に、これまた高級そうな長いロングコートを身にまとうていた。帽子の隙間から覗かせる銀髪と、僕を見る翡翠色の瞳からは、外国人であることが容易に推測できる。

ぶつかった、あの男性だった。

僕はここで、白井みたいに腕章を見せつけてかっこよく言い放ちたいんだけど、

右手にエバンスを抱えて、

左手で青葉の肩を抱きかかえているから、

上手くは言えないな。

まあ、ここは英語バージョンと行こうじゃないですか。

というところで僕は、

名乗り出た。

「I - m a “ j u d g e m e n t ” ! ( ジャッジメントだ! ) (

花火大会後の急襲 ( m a k i n g a s u r p r i s e a t t a c k a f

英語は苦手です (泣)

今回はいろいろと書きたいことがたまっておりまして、

でも、話は進めないといけなくて、

結果長くなりました。

感想、指摘、お待ちしてます。

評価も遠慮なくしてってくださいね。

知らない事 (no one knows the truth) (前書き)

今回、早くも次話投稿できました。

待ってました！と言ってくれる人がいてくれると嬉しいですね……  
いるかわからないんですが……………。

すいません、では行きましょう。今回はあまり長くありません。

知らない事 (no one knows the truth)

「案の定、青葉たちだったか……」僕はため息をつく。

やっぱり、トラブルは絶えないな。

「ね、ねえ……崩」横で顔を赤くした青葉が僕に言った。

「ん、どうしたんだ？」

「ジャッジメントを『judgement』で表すのは、どうかかな？間違つて判断力と認識してしまうかもしれないし、ここは直訳になつてしまうかもしれないけれど、『a member of the disciplinary committee』と言つべきじゃないかな？」

「僕はまさか、そんなことをこんな状況で言われるなんて、思いもよらなかつたぞ！？」

「あ……、うん……ごめん……」

「……どうしたんだ？さつきから顔を赤くして、妙にたどたどしいぞ？大丈夫か？」

僕は少し顔を近づけて青葉に尋ねる。

「な！……何でもない！何でもないから！！」青葉はムキになつたように、僕とは反対側に顔を逸らしてしまふ。

「なら、いいんだけど。あ、さっきの返答。別に『judge me nt』でもいいんだよ」

「うん、私もわかったよ。冷えピタさん、前の話書いてるとき、『そうそう、こっからのこっこういうネタもいいかもしれない』と、ウヘへって笑ってたからね。でも、きっと冷えピタさん、ああやって一人で考えて一人で笑って一人で悶えていることではか楽しめないんだよ。それは歪んでいるかもしれないけれど、頑張っているんだよ。ね？何だか、つらいな……」

「何でだろう……その話を聞いて、何より僕がへこむよ……」

語り部としていくらか通ずるからだろうか……。

「頼むから、話を逸らさないでくれよ。定期的に繰り返される中でも重要なシリアス場面なんだから……」

というわけで、

「お知り合いなんだよ」

今までのやりとりを、サッカーで言うゴールからゴールへの奇跡的反則技なスルーパスのように無視させてもらい、本題に戻る。

「おい、お前、日本語喋れるよな。英語を目下勉強中の高校生に対してはお手柔らかに頼むよ。おかげで、僕の失態や、あるうことが作者の変態的一面さえも表立ってしまったじゃねえか」

「それはすまないね」

しかし未だ口調を変えることなく、男は言う。

「どうやら、観光だけじゃなかったんだな」

「言ったはずだよ。いろいろある、って」

「確かにそうか」

「だけど、と僕。」

「一応、ここで風紀委員やっててさ。そっちのやってること、こっちじゃ規律違反なのよ。だから、少し一緒に来て事情聴取させてもらうぞ」

「そうなるのかい……」

「たいそうめんどくさそうに呟く男。」

「嫌なんだがなあ」

「駄目だ」

「予定があるんだが」

「チャラだ」

「そうかい」

「そうだね」

「睨み合う二人。」



「じゃあ、

目先のことだけやるとしよう」

その一瞬で、暗闇の化け物の手からまた違う手が僕たちを襲いにきた。

だが、

スピードでは僕の方が遙かに速い。

見積もって、50メートル後方に下がる。

「崩、カルマちゃんが……！」

「何だと!?!」

「崩……」

その時、低く唸ったのはエバンスだった。

「離しやがれ……」

「……一体、今のお前に何ができたよ」

「うるせえ……俺はな、貴族なんだ……、強い、強い、……貴族なんだよおお!!」

バツ、と僕の手を乱暴に振りほどいて、エバンスは男めがけて突進する。

「馬鹿っ！青葉少しここにいてくれ!!」

僕は青葉を残してエバンスの後を追いかける。

「ヒューリツチイイイ!!」

「ふっ、愚か」男の合図とともに化け物の手は、次々と伸びてくる。

「うおおおお!!」

「危ない!!」

僕はエバンスを抱えて高速移動する。化け物の手がコンクリートを破壊し、街灯を破壊した。

「君に何ができるんだい？」男はそう言うど何やらブツブツと呟き



僕と男の距離は、

二歩。

「カルマを返せえ!!」

「いいのかな?ここにいて」

男が突然呟いた。

「後ろの子ががら空きだよ?」

「っ!!」

僕は急いで振り返る。

化け物の手が、伸びる。

「青葉!!」

「あ……あ……」青葉は足が動かない。

逃げようにも逃げれない。

「間に合わねえ……!!」

「うっ……!!」

しかし、

化け物の手が青葉を襲うことはなかった。

それ以前に、

パン、とはじけるような音がして、

まるで幻想が打ち碎けるような音がして、

暗闇の化け物が弾け飛んだ。

「全く……ジャツジメントって言うのは、そんなにドンパチやるものなのか？桐原」そう言って笑うのは、

上条だった。

「上条！」

「どっちを向いてると聞いている」

「っ!」しまった!

「Ultima!」

「音波!」

反応はしたものの、全てを打ち消すことは出来ず、衝撃で僕は後ろに少し飛ばされることになる。

「くっ!」

「ちっ、せつかく作ったものが一瞬で破壊されたか……」

態勢を立て直し、男を見る。男はたいそうめんどうくさそうに、少し苦い顔をしていた。

「まあ、いい。当初の目的はクリアだ」

「大丈夫か！桐原!？」上条が僕に駆け寄る。

「では、帰ることにするよ」

「ふざけるなあ!」

激情したのは、エバンスだった。

「カルマを、俺の妹を返しやがれええ!!!」エバンスは拳を握って、男に向かって走り込む。

「ふっ、哀れだな」

しかし、エバンスの拳が男に当たることはなかった。

暗闇に溶け込む。

フェイドアウト。

ただ、空を切るだけだった。

エバンスは勢い余って転んでしまう。

どこからともなく声が響いた。

「もう君の役目は、とうの昔に終わっているんだ。ひっそりと学園都市での隠居を楽しむんだな、エバンス君」

そんな、意味深な発言が、この戦いの終わりを告げていた。

+

「一体どうなってんだ!？」

「わからない。どうやら、今回はエバンスらしい」

僕と上条は、前で俯いているエバンスを見る。

僕は、エバンスの傍に行く。

「おい、エバンス」

「……………」

エバンスは黙ったままだった。

「話してくれ」

「……………」

「黙ったままじゃ、何もわからない。カルマを助けることだってできない」

「…………、お前は《科学側》(そっち)だろうが。《魔術側》(こっち)に干渉は出来ねえ」



「何意地張ってんだ。そんな問題じゃないだろ」

「……うるせえ」

「はぁ？」僕は、声色が変わる。

「お前、いつまでそんな調子のいいこと言ってるんだ！しょうもないことで頑固になるんじゃないやねえよ！いつになっても、カルマを助けられないだろうが！」

「うるせえって言うてんだよ！！」

エバンスが怒鳴った。

「素人がうるせえんだよ！何もわかってないくせに入り込むんじゃないやねえ！家族面しやがって、

鬱陶しいんだよ！！」

そう僕に吐き捨てて、

エバンスは走り去っていった。

殴りたかった。

でも、殴れなかった。

何故だか、わからなかった。

「桐原……」心配して尋ねる上条と青葉に、僕は笑って答える。

「迷惑かけてすまないな。気にしないでくれ」

「崩、」僕を呼んだのは、青葉だった。

小さな声で僕に言う。

「エバンス君を、探そ……」

「ああ」

僕はただ頷いて、

胸をえぐられたような感情に耐えていた。

固法さんと白井と初春がアンチスキルと一緒に来たのは、その五分後だった。

全てを解決したのは、扇さんからの電話だった。

僕たちは、と言っても、固法さんと白井と初春はジャッジメントと  
してむこうに残って仕事をしているため、僕と青葉と上条だけなの  
だが。

今、僕の家、アパートにいる。

出迎えてくれたのが、扇さんだった。

「崩、悪かった……」いつもとは違う、申し訳なさそうな顔で僕に  
謝ったのが、第一声。

「まさか、こんなことになるとは思わなかった。私があそこでちゃ  
んとそばにいてやれば……」

「そんなに自分を責めないください。終わった事より、目先の事  
を考えましょう。……まあ、ですが」

ん？となる扇さんに告げてみる。

「当分、煙草は駄目ですね」

「……………」

そこは、首を縦に振らない扇さんだった。

「ところで、本当に部屋にいるんですか？」

僕は話を本題に戻す。

「ああ。私がお前たちを待っている、エバンスが走って帰って来てな。すぐ自分の部屋に駆け込んでいったんだ。腹が痛いんだろっと思っていたんだが……」

まさか、そんなことになっていたなんてな、と扇さんは呟いた。

僕は、エルギオンス兄妹の部屋の前に立つ。

「崩」

「何だよ？」

「怒っちゃ駄目だよ」

「わかってるって」

「桐原、泣くなよ」

「何でそうなるの？」

「一個買い忘れたからもう一度買ってきてって言われたとき、だだこねて大泣きしそっだもんね」

「後の二人、『初めてのおつかい』見過ぎなんだよ！」

改めて、気合を入れ直す。

「エバンス」

僕は扉越しに名前を呼ぶ。

「出て来てくれ」

しかし、返事はない。

「おい、エバンス」

ガチャン。

「えっ……」

扉は、ドアノブを回すだけで開いた。

一同が思わず息を呑む。

僕たちは中に入った。

そこで見たものは、僕たちには理解できなかった。いや、だからこそエバンスは、誰も自分たちの部屋に入れなかったんだろう。

少し散らかった部屋。

しかし中央には、

魔法陣があった。

大きな円の中に何本も線を引いて、よくわからない言語で埋め尽くしてある。

「一体これは……」

三人はただ呆然としていた。

『科学側に、魔術側の何がわかるんだよ』

確かに、何もわからなかった。

エバンスが

魔術側だったことさえも。

「くっそ！」「僕はそう吐き出した。

ここでもう、

お手上げなのか。

そう思った、

その時だった。

「これはこれは、随分とお困りのようぢにゃ？」

聞き慣れた声がした。

入り口の方からだ。

僕は振り返る。

「力を貸してやっても、いいぜ？桐たん」

僕の名前をそうやって呼ばれたのは最近の話で、一人しかいない。

制服を着ていないだけで、

いつものアロハシャツに短パン、ビーサン。

決まりに決めた金髪のツンツン頭に、

高校生には似合わない、サングラス。

首から垂れる装飾品がジャラジャラと音を立てた。

「なあ？」

僕にとっては、まだこの時点までは同級生の友達でしかなかった、



土御門だった。

知らない事) no one knows the truth) (後書き)

言うの忘れていたんですが、

カルマが崩を呼ぶ時の

「崩兄」

これ、ほうにいつて読むんです。

今まで間違えて読んでいた方はすみませんm(\_\_\_\_)m

話がゴタゴタして来ましたが、ちょっとしたネタは忘れず挟みたい  
なと思っています。

529

後、作者はいたって普通なので偏見の目で見ないでください！

確かに友達にはいろいろ言われるんですけどね……

これからのエルギオンス兄妹のシリーズ、『トーンレンジ』が気  
に入った方々、すでにご愛読されている皆様も、楽しんでもらえる  
よう頑張りますのでどうぞ読んでくださいね。

感想、指摘も待ってます。

( t h e r e v e r s e s i d e ) 裏 ( 前書き )

前書きを使わせていただきます。

被災地の皆様

私は、ニュースでしか皆様の情報が得られず、だから、どれだけ辛  
いかを真に全部わかりきることができていないので、もしかしたら  
図々しい物言いになってしまいかもしれませんが、エールを送らせ  
て貰います。

頑張って生きてください。

諦めないでください。僕たちの学校で募金活動が行われているよう  
に、日本の各地、世界からでも、皆様を援助しようとする人々  
がたくさんいます。私たちは、あなたたちのことを思っています。

そして早くに、皆様の普段の日常が戻って来ることを望んでいます。

諦めないで、頑張ってください。

……始めにくいですが、次話です。今回も少し短くなりましたが、

最後まで読んでいただけると幸いです。

(the reverse side)裏

「これ、本当にガキが作った魔法陣かには？精巧に作られすぎだぜ」

土御門はエバンスの部屋の床に描かれた魔法陣をなぞりながら呟いた。

「土御門……その意味がわかるのか？お前は、科学側の人間じゃないのか」

「おっと、そういや桐原は知らなかったんだっけ。上条から聞いてないのか？イギリス清教でもあり、科学sideでもあり、裏では様々な依頼を承る多角スパイ。どうだ、かつこいいだろ？」

「えっ？」僕は驚いて上条の方をむく。

「上条は知ってたのか？」

「ああ、夏休みに入って、つい最近だけだな」

「そう……だったのか」

なんだが、みんなの知らない一面を見たな。

「あの、土御門君……」青葉が心配そうに声をかける。

「大丈夫だよ、東雲ちゃん。俺に任せれば、こんなこと指先一つでちよちよいのちよいだぜ？」と、土御門は学校にいる時と同じ様におどけて見せた。

その様子に安心したのか、青葉は少し微笑んで「うん」と頷いた。

「さて、大体わかってきた……」土御門を包んでいた淡白い光がゆつくりと消えた。

「空間移動式の魔法陣だ。部屋全体を媒介にしている。まあ今じゃ、ぐちゃぐちゃにされて元には戻せないけどな。こいつを使って、レポートしたのさ」

「そこは一体どこかわかるか？」

僕の問いかけに、土御門はいつものように笑って答えた。

「イギリスのようだぜ」

「これぐらいしか手伝えなかったが、悪かったなー、桐たん」

「いや、充分だよ。ありがとう。だが、その呼び方はやめろよ。何  
だか、ゾツとするんだ……」

上条と土御門を見送るために、二人の寮の近くを僕は一緒に歩いて  
いた。

「結構、様になってるぜ？」

「なってない」

「じゃあ、桐箆筥ってのはどうだ？」

「もはや、僕じゃないじゃないか！ただ、共通点があるだけだ！」

しかも『桐』だけ。

「それじゃあ、俺たちはこちら辺でいいにゃー。送ってくれてあり  
がとよ、桐箆筥」

「桐たんと呼んでください、お願いしますー！」

妥協してしまった。

「おい、桐原」

そう僕の名前を真面目に呼んだのは、

黙り続けていた上条だった。

「どうした？」

「俺も、一緒に行くよ」

まあ、予想できた言葉だった。

「いきなりどうしたんだよ」

「今回は、かなりヤバいはずだろ」

「ヤバいだなんて、大袈裟だな。まだ何が起きるかわかってないだろ」

「でも、予測ぐらいならいくらでもつく。絶対、魔術を交えた戦いになるに決まってる」

確かにそうだった。

魔術が出てきて、はいそれだけですさようならなんてことは、あまりに都合良すぎる話だ。

「俺も一緒にいく」

それが上条の思いだった。

「お前の力じゃ、魔術にはあまり効果的とは言えない。だけど、俺



の右手なら、どんな魔術だって打ち消すことができる」

「確かにそうだけど、悪いが今回もちょいとお預けになってもらおうよ」

「だけど！」

「上やん、」上条を止めたのは土御門だった。

「これは、きつと桐原が自分だけで解決したいんだ。それがわからないわけないよな？」

「……………」やるせない気持ちを隠しきれない上条。

彼なりの、右手に対する思いがきつとあるのだろう。それを振り切るのは、友達として、親友として、とても辛いことだった。だけど、僕は笑って答えた。

「大丈夫だ、上条。ただ、思春期で家出したチビっ子二人を連れ帰るだけのことさ。すぐにいつも通りにする。この日常を、壊されてたまるかよ」

「桐原……わかった」

覚悟を決めたように頷いた上条に、僕は強く笑って見せた。

「桐原、これはまあ、俺からの最大の援助だにやー。明日、学園都市専用ジェット機をイギリスに向けて飛ばしてやるぜ」

「え、本当に!?!」

土御門……

「いつも学校じゃ、バカキャラなのに……」

「おい、うつかりさん。心の語りが、間違ってかぎかつこつけたせいでこつちにただ聞こえた」

「すまないすまない……、土御門」

「何だ？」

「帰ってきたらお前に話がある」

「まさか、告白!？」

「鼻をへし折るぞ!……その、一つ、お前に隠していたことがあるんだ」

「ほおーう、いきなりどういった風の吹き回しにや？」

「別に、ただお前に黙っているのが、少し辛く思っただけさ」

「………わかった。楽しみにしてるぜ」

能力のことを自分から話そうとしますなんて、僕はどうにかしてしまっただろうか。いや、そうか……、

友達っていうのは、僕が思っている以上のものなのかもしれないな。

そんな思いで嘆息をついて、

僕は言った。

「じゃあな！また、夏休み中に遊びに行くよ！」

僕たちは別れる。

そして今から僕は、

イギリスへ向かうことにした。

+

この道は、比較的に暗い。そばにある街灯を除いてしまえば、おそらく真っ暗になってしまっただろう。そんな不安定な道を、一人の少年はただ歩く。その少年以外には、通行人も、寮で隣の親友も、今からイギリスへと飛び立つ親友も、誰もいない。

ピピピピピピ、っや、

携帯電話が、

当たり前のように鳴った。

まるで、誰もいない状況を見計らったようにだ。

彼は、いつも通り電話に出る。

『状況は?』

「上手く行った」

『計画は?』

「予定通り」

「よくやった」

それだけで、電話は切れた。

ぐっと、少年は携帯を持つ手の力を強める。

「くそっ！」彼もまた、やるせなさを吐き出した。

友達が、親友が、

誘導されていることを止めることができただけでなく、

自分もまた、その親友を騙しているのだ。

「アレイスター……、一体何を考えてやがる？……」

彼は歯を強く噛み締める。

不安で、もどかしくて、腹立たしかった。

どうしようもないから、余計に苦しかった。

彼には、

ただ無事を祈るしかないのだ。

「桐原……」

彼は、呟いた。

「死ぬなよ」

街灯の灯りが消えた頃には、

もう土御門の姿はなかった。

( t h e r e v e r s e s i d e ) 裏 ( 後書き )

土御門の出番が多くなりました！

方針的には、禁書のキャラクターともしっかり絡んで行こうと思いましたが、まあ上手く行くかはわからないのですが。

感想、指摘も遠慮なくしてくださいね。

旅立ち (the departure) (前書き)

今回は、今から2日間投稿が無理そうなので、無理やり押し込む形になってしまいました。

短い…すいません。

一応区切りにはいい感じになるので、どうかお許しを。

話は変わりますが……

RADWIMPSの「狭心症」

皆さん、お聞きになったでしょうか？

あれ、PV見ると、

衝撃です。

もう、心にぐっと来ます。

泣けます。

歌詞の奥深さとかもう……！

話すと長くなるので、聞いてない方はぜひ一度聞いてみてください。



つまらない話でした。

では、短いですが最後までお読み頂けると幸いです。

旅立ち (the departure)

†

「さあ、ここが君の家さ」綺麗な茶髪を後ろでくくった女性は、左手に握っていた少年の小さな手を優しく引っ張ってそう言った。

「僕の家……」

「そう、君の家。そして、私たちの家」

そう言って、その女性が指差した先にいたのは、手を引っ張ってもらっている少年よりも小さな、だけどこか大人びた眼差しをする男の子と、嬉しそうに横で飛び跳ねるまた一段と小さな女の子だった。

「そして、彼らが家族」

「家族……」

「そう、大切な人」

「無理ですよ……」少年はボソツと呟いた。

「僕に、大切な人を守るわけじゃないか。知ってるだろ……、僕は、僕はもう大切な人なんて……」

「だから何？」

「えっ？」その女性の問いに少年は、うっと詰まってしまう。

「大切な人を失って、だからもう誰もいない方がいいって自分を塞ぎ込んで、一体何が報われるって言うの？それで君は、満足なの？」

「それは……」

「あなたの能力はそれだけなの？」

「……………」

答えが出なくて、

そして一度答えを導いてしまった、

少年は黙る。

その少年に、女性は屈んで視線を合わせ、優しく言った。

「もう一度やり直して見ればいいのさ。次こそは、全てを守り通せばいい。皮肉なことに、でも裏を返せば幸いなことに、君には力があるんだから」

「この力をかよ……」

「そう、その力でさ」

ほらっ、とその女性は、少年を前へと押す。

いつの間にかあの兄妹が少年の前にいた。

「あ……、う……」

しどろもどろする少年。それをじーっと男の子は見つめていた。

「おい、お前……」

「な、何かな？」突然の問いかけにびくつきながらも答える少年。端から見れば、自分より年の低い子供に低姿勢だなんて、おかしい話だ。

「名前は、何て言うんだ？」

「桐原崩」

「……エバンス」

間髪いれずに、女の子が少年の足にガバツと抱きつく。

「カルマ！！カルマ！」

「エバンス、カルマ。その人がお前たちの新しい兄さんだ」その女

性が言った。

「崩……」

「こらこら、あつて早々、しかも兄さんに向かって呼び捨てか」「ふふふ、と横でその女性は笑う。

「よろしく」

その男の子の小さな声が確かに聞こえた。

ふふふ、と女性が笑う。

「さあ、まずは家に入ろう。みんなで仲良くな」

そう言って歩く彼らは、

一直線に繋がっていた。

+

「ぬおっ  
」

と、僕は目覚めた。

危ない危ない。このまま終わってしまえば、今までと比にならない  
くらいのスピード終了じゃねえか。

横の窓から外を見る。

学園都市が小さく見えた。

どうやら、寝ている間に離陸したようだ。

高度が上がると、日の出が雲の間から顔を出して、オレンジ色に僕  
を染める。

夢からの目覚めとしては、最高だった。

けど、状況は最悪だった。

(あいつら……)

ただ、あの兄妹のことを考える。

何もわからないけど、

ただただ、考える。

あの時守りきれなかった、自分が情けなかった。

「くそっ……」

「ねえ、崩。イギリスに行ったら何見たい？」

「そうだなあ。ビッグベンとかかなあ」

「あ！それ雑誌の表紙に載ってた時計台のことでしょ！私も見てみたいんだあ！海外旅行初めてだから、イギリスに行けることと二重の意味でワクワクするなあ！！」

「うん、僕も……えっ？」



「ねえ、それってウエストミンスター宮殿だって知ってた？」

「何でいるんだあああああああああああ！！？？」

青葉搭乗。

「イギリス観光に一人で行くなんてずるいよ！」

「青葉……わかってるだろ。今回は、そんな簡単じゃ……」

「簡単だよ」

青葉はそう言った。

「ただ、家出した兄妹を迎えに行くだけ。ただ、それだけ」

ふふ、と笑う。

「……僕にできるかな」

そんな不安を打ち消すような大きな声で青葉は僕に言った。

「できるっ！！」

はははっ、

本当に笑える。

いつから、

こんなに僕は……

「崩、」

「どうした？」

「あのね、エバンスは本当に思ってあんなことを言ったんじゃないよ。それだけは、わかってあげて」

「もちろん」

僕の答えは、はっきりしていた。

何事よりも、

確信がある。

「家族なんだから」

イギリスへはあと……、

「うまい……こんな酒飲んだことないわあ……！」

あれっ、

なんか締めれない……

「そっぴや、扇さんも乗ってるのか」

「うん、さっきからお酒ばかり飲んでるよ……」

「おい、崩……この酒はうまいぞ……！」

「何やってんですか……」

グroggrogに酔っちゃって、

高級そうなボトル片手に。

なんですか？

ドゥン・ペリニョンって書いてありますよ、それ。

は？



イギリスまで、あと二時間。

旅立ち (the departure) (後書き)

崩の過去も少しずつ見えて来ました…

お楽しみいただけていると嬉しいです。

次からは

イギリス編を!!

今回、ほとんどが戦闘になると思いますので、よろしくお願いします。

禁書のメンバーも出そうと思っています。

ぜひ、今度も読んでくださいね。

感想、指摘、お待ちしてます。

混戦 (the melee) (前書き)

遅れました。

更新です。いや、これが普通なのか……

まあ何はともあれ、

この章、ほとんどが戦闘化する模様。魔術が苦手で下手に書かれています。お許してください。

では、最後まで読んでいただけると幸いです。



混戦 (the melee)

「うー！ー！イギリスかあー！！」

青葉がイギリスの地を踏みしめた。

「ほおーう、やっぱり英国は違うものだなあ」扇さんも後に続いてロンドン空港から出る。

「うん、いいじゃないか！」

「珍しいですね、扇さんがそんなに嬉しそうだなって……って、扇さん凄い輝いてます！！」

バック、照明ピカーン。

「ハッハッハ。何だか元気だわー！！」

そうやって、初の海外に嬉しがっているのは、

三人中二人だった。

「……………」

イギリスってどんな所なんだろう？なんせ、さっきから地面しか見てないからわからない。この地面綺麗だなあ……………そうか、イギリス

は、とても地面が綺麗な国なんだ。凄いなあ、もうなんか頬擦り付けたくなるぐらい綺麗じゃん。ははは、はははははははははははははははははははははは。

「崩、落ち込むふりをして、字数を稼ごうとするんじゃない」

「んなわけねえだろ！！」僕は素早く、扇さんに猛抗議する。その時の顔は、涙でぐちゃぐちゃだったりする。

「あんたのせいで、僕の生活は終わった！せつかくコツコツ貯めてきたお金全部が、あんたのどうでもいい、話の4分の1にも満たないような出来事に、今までの僕の全てが水の泡になったんだ！僕はこれからどうすりゃいいんだよ！？」

その時、落ち込む僕に、優しく扇さんは語りかけた。

「もう一度、やり直してみればいいじゃないか。次こそは、全て守り通せばいいのさ。不幸にも、でも裏をか」

「シリアスシーンのセリフを使い回しするんじゃないぞ！！」

何もかも台無しだった。

まだ始まったばかりだと言っのに。

「さあ、行くぞ」

「……そうですね」

だから、

まだ誰かに見られているような違和感についても、この段階で話すのはやめておくことにしよう。

こんな所で、また、冒頭から早々に始めるものじゃない。まずは青葉と扇さんを安全な場所に移動させるべきだ。

それを優先的に考えながら、ロンドンの街を歩く。

本当、いろいろあつて、これだから、

海外旅行はあまり楽しくない。

†

ガサガサと店内で物音が聞こえた。少し顎に白髭を伸ばした、60代前半のご老人は、息を呑む。

とあるロンドンのしがない店。こんな店を狙って盗難に入るということは目的は一つしかない。実際、周りに張っていた警戒の術式が彼に、このことを教えたのだから。

老人は、小さな店内に明かりをつけた。

「誰だ!？」

そこには、一人の少年がいた。驚く程綺麗な茶髪。背丈に合わせてきつたであろう魔術的価値のあるマントに身をくるみ、そこから出ている腕には様々なルーンが即席で刻まれていた。

しかし、少年は物色するのをやめない。つまり、老人と少年は

知り合い。

「エバンス君!？」

「久しぶりです。おじさん」

驚く老人にさらっと英語で挨拶するエバンス。

「どうして君がここに……学園都市に行ったんじゃ」

「ええ、その通り。僕だって、わざわざこっちに帰ってきたくて来たんじゃありませんよ」

エバンスの顔は笑わない。

「じゃあ、一体どうして？」

「いたらお邪魔です？」

「……………」老人は黙ってしまふ。

「ははは、ただの皮肉じゃありませんか。そんな顔しないでください。僕は、あなたのことを恨んでなんかいませんよ。むしろ感謝してるくらいです。あなたが僕たちを学園都市に送ってくれなければ、今頃どうなっていたか」

老人は黙ったままだった。

「すみませんね、あなたにまでこんなみすばらしい生活をさせてしまつて」

「それはいいんだ。君達さえ無事でいれば。でも、一体どうして君が？」

「決まってるじゃないですか」エバンスは言う。そこにもいつもみる彼の面影はない。

「ヒューリッチを殺す」

「うん、安い割にはいいホテルだな」

少し古風だが、雰囲気の良い室内を見て扇さんはそう言う。

「しょうがない。ここの料金は私が払おう」

「しょうがないじゃない！」

僕はもうこれ以上払えない。

お金がない。

「お願いですから、もう変なことはしないでくださいね！」

「わかったわかった」苦笑いの扇さんだった。

「では、僕は行ってくるんで」

「崩」青葉が僕を呼び止める。理由はもうわかってる。

「大丈夫、ちゃんと戻ってくる。だから心配しないでくれ」

「絶対だよ」

「勿論、夕飯までに帰ってくる」

「この前帰って来なかったよ……」

「う……」

そんなこともありましたね。

「今度は、必ず……」

僕も何だか自信がなくなってきた。

「イギリスでおいしいお店探しておくよ」そう青葉が、優しい声で言う。

「だから、ちゃんと戻って来てね」

「……了解。ちなみにイギリスでおいしい店探すのは難しいかもよ？」

「任せて！」

「それじゃあ、頼んだよ」

仲がよろしくていい事だ、と言う扇さんと、それに顔を赤くしてあーだこーだ言う青葉を見て、

笑って

扉を閉める。

本当なら、ここに

エバンスもカルマもいたんだ。

そう思うと、

それだけで、

ぐっとこみ上げてくるものがある。

僕の手は握り続けたままだった。

「もう出て来いよ」

滞在中のホテルを出て少し歩いた、ロンドン市内のとある大通り。

誰もいないのに、僕は宣言する。

「バレバレだ」

その一言に、小さな脇道からぞろぞろと、それは現れた。イギリスにふさわしい、騎士の鎧を着た兵士。

総勢30人と言ったところだろうか。



「桐原崩だな？」

その中の一人が僕に言った。

「御名答。やっぱり素性は明らかになってるわけね」

「お前をすぐさま拘束する。大人しくしろ」

「そうなるか」

本当に上手いことなってくれるよ。

「ま、今回はそれが好都合ってやつだけど」

「何を言っている？」

「おい、お前らはあっちの女どもを拘束しに行け」

その一言とともに、数人が別れて行動をしようとした。

「おいおい、どこ行くんだよ」

この手の馬鹿は手に負えないわ。

「止まれ」

その言葉と同時に、

その騎士たちが止まった。

他の騎士たちが、怪訝そうに彼らの方へ振り向く。

「右手で兜をとる」

言葉通りに、

その騎士たちが兜を取った。汗が流れて、焦っている顔があらわになる。

「一体……何をした……」

その言葉を聞き、先頭に立つ騎士が僕の方に振り向いて、荒々しく

「貴様!!何をし……」

言おうとしたが、

言えなかった。

体は完全に僕の方へと振り向かない。

動かすことさえできない。

「何をしたって？」

僕は普段通り話す。焦る騎士たちを気にしない。

「お前ら、僕の声を聞いただろうか」

「何？」

「だから僕の声、僕の音を聞いただって言ってるんだよ」

僕は懇切丁寧に説明する。

「何の魔術だ！？」

「魔術じゃねえよ。超能力だ」

音。

聞くだけで、人を魅力する音。

人を操る、

魅惑的な音色。

「用件を言つよ。僕は今お前らに怒り心頭でさ、あまり上手く伝えられなかったら御免よ。でもこれだけは覚えておいてくれ。お前らの命は僕が掌握しているから。それじゃあ、用件を言わせてもらおう」

僕は彼らをじっと、睨む。

「エバンスとカルマを、返してもらおうか」

そう言った矢先、

後ろから、斬撃が僕を捉えた。

+

コッコッコッコッコ

男はとある通りを歩く。一定間隔で並んだ街灯が、男を緩やかに照

らしている。

身長は180センチ弱と言ったところだろうか。頭には、紳士の代名詞でもあるような高級そうな帽子に、これまた高級そうな長いロングコートを身にまといていた。帽子の隙間から覗かせる銀髪は、明かりに照らされると、光ったように見え、

翡翠色の瞳は、

道の先にいる一人の少年を見据えていた。

男は歩みをやめる。

「グレイブ・ヒューリッチ」

「これはこれは、エバンス君じゃないですか」

おどけた口調で、男はそう答える。

「わざわざ会いに来たんですか？」

「カルマを返せ……」

エバンスは、呟いた。

「おやおや、お怒りかな？怖いね。小学生でもお兄さんだからかな？」

「それとも、震えているのかな？どうなんだい？」

《墮ちた魔術師の子供》？」

「カルマを返せって言ってんだろっがぁー!!」

バチバチっつと、

激情したエバンスの周りで電気が散ったと思うと、足元で、円状の術式が紫色に光る。

「ほう」男はニヤリと笑った。

「その年でそこまでか。流石と言ったところか、当然と言ったところか」男はマントから腕を出して、シルクハットを投げ捨てた。

「どうやら、本気を出さないといけないようだな」

「ヒューリッチ！お前をここで殺す!!」

「怖いねえ。じゃあ私もお前を殺すしかないじゃないか！」両肩を抱きかかえるようにして震え上がると、嬉しそうにうっとりとした。ヒューリッチは高らかに宣言する。

「a d d a m 0 0 1 (この身は神の一番近くに)」

「f a i t h 4 4 8 (全ての隣人に信頼を)」エバンスも答えるように、宣言した。

「さあ、私を殺してみろ!!」

その声とともに火蓋は切って落とされた。

混戦 (the melee) (後書き)

次から本格化です。

ご愛読の方は、いつもありがとうございます。

初めての方は、ぜひこれからも読んでくださいね。

感想、指摘、評価待ってます。



それぞれの戦い (each fight) (前書き)

な、なんとか戦いが書けた………やっぱり戦いは苦手です。

今回も長くなりそうなので途中で切っています。

では、最後まで読んでいただくと幸いです。

それぞれの戦い) each fight)

ブワァン、と

紫色に光る円状の術式がエバンスを照らし出す。その光は、今いる  
通りの両側を走る古風な建物の壁にまで映った。

「ajtt1wpgmdjgpp wmdjttgaddPt1jpttja  
q1wmajjm d a d j g p t j a m j t t」

「ほう……流石だ」ヒューリッチはただただそう嬉しそうに頷く。

「その賢明な頭脳と適切で優秀な詠唱は、親譲りかな」

「黙りやがれ」

ギロツとエバンスの眼は、ヒューリッチを捉える。

「vezullia」

その一言で、ぐにゃあ、と地面が曲がる。曲がった部分が棘のよ  
うに変化して一列に並んだ。

「ago」

一斉にヒューリツチへと突き刺さるつとする。

「ふふふ、反抗期の影響かなあ、admjamtjdmwjdm  
tjajntntmjawtamtjadmwtnwtjdmjamo  
t……ultima!」

激しい音を立てて、お互いの技が相殺された。勢い余って発生した風が砂埃を巻き上げる。

「次はどこかな?」

「どっち向いてやがる」

エバンスの声は、ヒューリツチの後ろから聞こえた。

「fighter」

魔法陣から、緑にきらめく炎でできた虎がヒューリツチに向かって突進する。

「ふふふ、そっちか」

「どっち向いてやがる」

その声は、

またヒューリツチの後ろから聞こえた。

砂埃を裂いて、

エバンスは飛び出した。

「！」

「2dragullio」

放たれた青い炎でできた虎と、緑の炎でできた虎がヒューリツチを挟み撃ちにして燃やした、

「全く……」

はずだった。

まるでマツチの炎が風に当たって消えるように、その炎はすぐ消えて、笑うヒューリツチが姿を現し、

「猪口才な」

ニタツと笑う。

「burst」

ボソツと呟いたその一言で、ヒューリツチを中心に悲鳴のような音を立てて爆発が起きた。

エバンスの姿は見られない。

「本当に、つまらないことが好きなんだなあ」

ふっとヒューリツチはそこから消える。

現れたのはこの大通りに並ぶ、ある建物の屋上。そして、

エバンスの真後ろ。

「何してるんだい？」

「!?!」

振り向いたただけでもう遅い。

「ultima」

地面が叩き潰されるように爆発した。

「同じ策はくらわないね」

ヒューリッチは歩みを止めない。

「j t p m w m w m w j g p p j b d d p D k g j e m w g p j  
a j m d j」

砂埃を抜けて、

エバンスと対峙する。

「うっとうしいなあ……うー」

「DDAT」

「!?!?tima!」

しかし、ヒューリッチの攻撃は直前に左へそれで、エバンスを掠めるだけに終わってしまう。

スベルインターセプト  
「強制詠唱……ござかしい真似を」

ヒューリッチはチツと舌打ちをする。

「だが、万策尽きたかな？」

エバンスが背中にしたのは、この通りで一つだけ飛び抜けて建っている、

建物の側面。

「終わりだ、エバンス……ultima!」

その一言で、辺り一帯が激しい爆音とともに破壊された。

砂埃がいくら舞おうとも、もうヒューリッチは何もしない。それは砂埃が晴ればわかることで、そこには、ぐったりと傷だらけで倒れるエバンスがいた。

ゆっくりと歩いて、エバンスの元に立つヒューリッチ。

「君の年でよくやったものだよ。でもここまでだ。最後に言い残すことはないかい？」

「……かはっ、何言ってるんだ……」

しかし、

エバンスはヒューリッチの足を掴んだ。

「お前が終わりだ」

次の瞬間、ゴボツとヒューリッチの足が沈んだ。屋根にじやない。暗闇が足の形にピッタリ吸い取るように、ヒューリッチの足が屋根へと、暗闇へと吸い込まれていくのだ。

「なっ!?!」

ヒューリッチは足を抜こうとするが、抜けることはない。

「ち、こんなもの…！」

しかし、何かをする前に、足元から光の鞭のような縄が、ヒューリッチの自由を奪う。

「一体これは」

そこで、

ヒューリッチは言葉を止めて、

絶句した。

恐ろしい光景。

一般人が見ても恐ろしく感じられるだろうが、

魔術師だからこそわかる恐怖。

「なんだ……」



さっきいた大通りも、

「なんだこれは……」

今いる建物も、

「一体これは……」

目に見える範囲全てが

「何なんだこれはあああああああ……！」

ルーン文字で刻まれていた。

「ははは」

前から声がする。もちろん、

エバンスだ。

「演出ご苦労、木原くんよおお！」

話数も時間軸も全てを無視し、シリアスシーンさえも壊す勢いで出したエバンス会心のボケだった。

「おっと、冗談冗談。ツッコミ役がないからやりにくいな。それじゃあ、演出ご苦労ヒューリッチ君に変えておこつ」

「お前、最初からこのつもりで！」

「作戦上はね。ただ、お前が何ともゆっくり戦ってくれるからさ、暇で暇でしようがないから、ここら一帯は余った時間で描いたんだよ」

「な………！」

あの短時間で、

私に気づかれずに書いたというのか。

「というわけで、一気に形勢逆転ってわけだ。ちなみに俺が用意した術式の組み合わせパターンは、

1542通り。

まあ、あなたの好みによるけど、俺が一番最初の術で死んだ方がいいと思うぜ。何て言っても、一番苦しんで死ねるんだらよあ！」

「お前……！」

バン、とエバンスはルーンの刻まれている地面に手を当てる。

「剣は今その体から抜かれた。血を以て儀式とし、命を食らう者よ。始まりは恐怖。終わりは血肉で。喰い散らかせ。」

ヤマタノオロチ」

その掛け声とともに、地響きが起きる。

現れたのは、

とてつもなく、想像を絶した大蛇だった。

胴の部分で大きく八つに分かれて頭が数だけ生えている。それぞれの眼球は、ギロギロと辺りを見回して、

ヒューリツチを視界に捉えた。

大蛇は聞くだけで恐怖する金切り声を上げた。

獲物を喰らうために大蛇は大きな八つの口を開けて突進する。

「エバンスー！ー！！」

「死ねや」

ドオオオオオオオン！！

ヒューリツチは、爆音と大爆発並みの砂煙に巻き込まれ、大蛇に呑み込まれた。

エバンスはただ立ち尽くす。

その胸中は喜びだった。

やっとだ。やっと……

今まで苦しんでいたことが、

終わったんだ。

「終わった……」

そう言って笑おうとした、

その時だった。

グニョっと、八つの大蛇の胴が奇妙に動いた。噛みついた場所からは動かず、八匹の胴の部分だけがグニョグニョと動く。

「一体何が……」

次の瞬間、

全てが爆発した。

爆音とともに余波の波が、エバンスをふっ飛ばした。

「ぐわぁ……！」地面に叩きつけられながらも、何とか態勢を立て直す。

そしてそこで見たものは、

壮絶だった。

一面の火の海。

周りの建物は全て燃え盛り、その中で八匹の大蛇が、苦痛を訴えるようにうねると、力尽きて倒れて行く。

まるで、地獄絵図。

「ど……どろして……」

コツコツコツコツと、

有り得なく、

脈絡もなく、

因果関係を無視したように、

足音が聞こえた。



「嘘だろ……」エバンスはただそう呟くしかなかった。

「最高だ！何て素晴らしい力なんだろうね、これは！君は、親御さんに聞かなかつたのかい？それは何とも残念だ！この究極の悦楽に共感できないなんて！！」

顔を覆うのをやめて、両手を思う存分開き、笑い転がる勢いで叫んだ。

「聖人の力は、何て素晴らしいんだ！！！」

「てめえ……」

「ああ、そんな昔の戯れ言はよしてくれ。それより、」

ヒューリツチはエバンスの言おうとしていることを遮って話す。

「えーつと、1542通りだったかな？面白い。全部試してみようじゃないか。生憎、今の私には力が満ち溢れているが……そうだなあ、



暇潰しにはなりそうだ」

そう言っつてヒューリッチは、

火の海の真っ赤な中で、

エバンスを捉えて、

ニタツ、と笑うのだ。

✦

「！」

僕は咄嗟に右へとその斬撃をかわす。後ろを振り返ることで騎士たちに向けていた注意が切れて、彼らを操れなくなってしまうがそんなことは気にしない。

優先順位は確実に、今対峙している方が先だからだ。

長い髪の毛を後ろでくくり、Ｔシャツとジーンズといういたって普通の格好の女性。しかしＴシャツの片方の裾は根元まで切られていて、ジーンズも片方が太腿の際どい所まで切られていた。それに加えて、絵合が持っているものの倍はありそうな長身の刀をよこに携える姿はまるでウエスタン風の侍だ。

それに美人だった。

もっと言えば好みだった。

……

ゴクリ、

誤解しないで欲しい。これは緊張を表す表現で、決して邪な思いがあるわけではない。

僕は一応そんなキャラじゃない。

……

一応って、

自分で言っただけで自分で傷ついていた。

「桐原崩、ですね」

本題に戻る。その女性は、僕にそう質問した。

「そうだけど」

明らかに前会った魔術師とは違う。

「私は、イギリス清教の神裂火織と申します」

「うー丁寧にどうも」

まともに話し合える人がやっと出てきたわけだ。

「すいませんが、僕は先を急いでいるのでどいてもらえますか？さつきは、そっちの騎士さんにも襲われそうになったんですけど」

「それはできません」

神裂ははっきりと断言した。

「あなたがこちら側で危険因子として判断されています。即刻に、戦闘態勢を解いて拘束されてください」

「……何だよ、それ」

僕は呟く。

一体どうなっているんだ。

家族を助けるのがそんなに駄目か。

くそが。

「それは、エルギオンス兄妹に関係しているのか？」

「お答えできません」

「……そうかい」

僕は、バンと足を踏み鳴らした。地面に亀裂が入り、横に立っていた街頭を巻き込み、音を立てて崩れる。

「悪いが、断る。僕はただ、家族を迎えにきただけだ。それ以外何もしていない。もし邪魔するなら、こつちも手段を選ばない」

壊れた街頭の幹であつただろう細長い鉄棒を手に取り、僕は言った。

「そうですね。仕方ありません」

そう言って、神裂は刀に手をかけた。

「言っておきますが手加減はしません」

「上等だ。悪いが、僕もゆっくりはしてられなくてね。」

家族が、待っているんだ」

神裂が抜刀すると同時に、僕は地面を叩いた。

それぞれの戦い (each fight) (後書き)

エバンスの意外性や、やっぱりこうなるかみたいなのを楽しんで  
もらえたら幸いですね。

さあ、大体見えてきた今回の戦闘の嵐……楽しんでもらえると幸い  
です。

次話からはこれ以上に進展すると思います。徐々に全体像が見えて  
いく感じだと……いつものことでわかりませんが(笑)

感想、指摘待ってます。

守れない (not defend) (前書き)

更新です。

今回も戦闘……。

でも、やっと一区切りです。

最後までどうぞお付き合いください。

守れない(not defend)

「ふんふふーん、ふふーん ……」

ステンドグラスが反射して照らすだけで、少し儼かな雰囲気は漂うとある教会の中、鼻歌を歌いながらその少女は髪をとく。その髪はおそらくその少女の身長のはある綺麗な金髪で、それをときながら見つめる様子はどこか妖艶で大人びているため、年齢を正確には判断しにくい。

「お呼びですか？<sup>アイクヒンヨッフ</sup>最大主教」

不意に、いや、文脈から予想できるように、この女性に呼ばれたであろう男の声が教会内にこだました。身長は二メートル以上はあるだろうその大きな体に、肩まで伸ばした赤い髪の毛。耳には大量のピアスを施し、右目の下にあるバーコードのような刺青が特徴的な男が、そこには立っていた。

「あら、ステイル。あなたにしては、少し遅い到着たりけるのね」

……。

「いきなり五キロ先の教会まであと二分で来いって言う方がおかしな話だと思えますけどね」

「どうして嫌ない方になりたるのかしら？上司にはそれなりの言葉遣いというものがありけるでしょう？、ステイル」



……、えっと、これは……。

「大丈夫。僕も賛同するよ、作者。彼女の喋り方の表現は、『馬鹿口調』で示していると思うよ」

「な、何を言い出したるのステイル!!」

あー、よかったよかった。こっちもすっかりミスったら大変なことになるからヒヤヒヤしてて。

「って、作者も何勝手に同意を得てホツとしたりけるのかしら!？この喋り方は決してそんな軽々しき表現では説明できかりけることではないのだから!」

彼女は、『馬鹿口調』で話を続ける。

「む、無視されてしまった……」この時だけ、まともな口調だった。

「それで、いったいご用件はなんですか？今、こっちはこっちで忙しいんですから」

ステイルは話を元に戻す。

「あら、その忙しい話についての話たるのだけれど?」

ふふふ、と彼女は笑う。

「今、どのような状況になりけるの?」

「神裂火織が桐原崩を迎撃し、グレイブ・ヒューリッチが許可なく

エバンスという少年を相手に暴れています」

「そう……」

「いったいどうされたのですか？」

「グレイブ・ヒューリッチの抑止を任じたるわ。少年の命を守りなさい」

彼女はそうステイルに命ずる。

「どうしてです？理由がはっきりとせずになんかそんなことをするのは……」

「エルギオンス・エバンス」

「……」

ステイルは眉をひそめた。いぶかしげに彼女を見る。

「こう言えば、わかりけるかしら？」

「まさか…あの子が……」

「時間が無きに尽きるのよ、ステイル。わかったなら、早く行動に移しなさいな。せっかく、大事な家族を迎えに来た感動話が、みすみすただの悲劇になりたりけるのよ」

「……わかりました。では、神裂の方はどうしましょうか？」

「ああ、それはこのままでよくて。放っておいたって致し方ない」とたるから」

「しかし、桐原崩は神裂火織とまともにやり合おうとしています。彼、死にますよ?」

「それぐらいがちょうどいい、らしくてよ?」

「?」

「とにかく、急ぎなさいスタイル。よろしく頼みたるわよ」

「……承知致しました」

スタイルは教会を後にした。

彼女は、髪をまたとき直す。

「ありがとう、ローラ」

彼女の前にあったモニターから音声 flowed。それは、スタイルがいる時からついていて、モニターの映像が変わったことはない。

老若男女誰にでも見えるような人間が緑色の手術衣に身を包み、赤い溶液の入ったカプセルの中に逆さまで浮いている。

「礼を言われるほどのことではなきたるのよ、アレイスター」ローラはただそう呟く。

「しかし、本当にいいのかしら？」

「何がだい？」アレイスターは訪ねた。

「神裂は聖人の中でもトップの部類。あなたを止めるわけではないけど、忠告はしておきたるわ」

「いいんだ。彼には、こういう状況が一番効果的なのさ」

「？」

わからないような顔をするローラ。

しかしアレイスターは、ローラにわからないくらい、

うっすらと、

笑って呟くのだ。

「少し、level upしてもらわないと」

+

神裂は僕の目の前で抜刀する。その長身の刀は目にも止まらぬ速さで僕を切り裂こうとした。

だが、

そこに僕はいない。

「！」

神裂は少し驚くが、僕と対峙するためすぐに頭上を仰ぐ。

僕も神裂を訝しげに見た。

あの攻撃は峰打ち。

どうやら拘束することだけを目的にしているため、手加減はしているみたいだ。なら、

今の内に沈める！

上空に飛び上がる際、横に並ぶ建物を鉄棒で引っかき続けた音が、遅れてくるように僕の鉄棒に巻きつく。両手に鉄棒を持ち替えて右横に大きく振りかぶる。

「音撃、お払い」

神裂に向かって、鉄棒を振り下ろした。

勢いよく放たれた音撃が広範囲に渡った道だけを破壊する。

しかし、僕は攻撃を止めない。

音速で降り立つともう一番地面を叩く。

「音撃」

右足で踏ん張って、遠心力を利用する。後は、

「雑払い」

力任せに奮っただけ。

爆音と砂煙が辺り一帯を包んだ。

「……………へえー、もしかしてももの凄い頑丈だったりするわけ？」

砂煙が晴れた場所には、

僕の音撃で跡形もなくなった場所には、

神裂が刀を構えて立っていた。

「いえ、ただ防いだけです」

「恐ろしいな……」

さっきの、結構本気だったんだけどな。

「では、次はこちらですね」

神裂は呟いた。

「七閃」

キーンと小さな音が響いて、斬撃が空気を切り裂く。

「!」

刹那的に、僕は体を逸らして避ける。

今のは？刀を抜いたのか？

コロン、と地面で音が鳴る。下に目をやると、鉄棒が真っ二つになり、片方が地面に転がっていた。アスファルトでさえ、綺麗な切れ目が入っている。

「拘束される気になりましたか？」

「はっ、……2%だけな！」

落ちていた鉄棒も拾い、二刀流ってほどかっこいいものじゃないが、横を走る建物に擦らせる。

「《ジグザグ》！」

放った音撃は、不規則に変化して神裂に突撃する。

「何ですか、それ」神裂は呆れたように呟いた。

「七閃」

たわいもないようにそれを消し去る。

「見えてしまえば、あなたの攻撃なんてそんなものです」

「くそっ！」

何なんだいったい！？

あんな離れた距離から僕に斬撃を与えるなんて不可能なはず。

「ちっ、」僕は力一杯地面を叩いて、音撃を打つ。

「もう無駄です」七閃、と神裂が呟けば、音撃は相殺され、ただの砂煙がブワアと彼女の周りを通り過ぎる

だけ、だ。

「？」今、おかしくなかったか。彼女の周りを過ぎ行く時、石くずが、妙に変な動きを……

「まさか……」



僕はもう一度、地面を叩いた。

「もうくらわないと言ったはずでは」

「うるせえ」

音撃ではない。音撃を地面に打って発生させる。

砂煙。

「っー！」

神裂は一瞬で視界を奪われる。

その中で、僕が確認することは至って単純だった。

砂煙の中で、きらめく線。

やっぱりだ。

「ごさかしい！」神裂は砂煙を払おうとする。

「七閃ねえ」そんな中、僕の声がこだました。

「本当、騙されたよ。ただのワイヤーを使った技じゃねえか。抜刀するように見せかけて、裏では繋がっているワイヤーを動かして切り裂いてたわけだ」

「……なるほど。この砂煙はそのためでしたか。しかし、あなたに

それがわかったところで一体どうなるっていうんです？」神裂はそう断言する。

「何も変わらない！」神裂は抜刀するように見せて、ワイヤーを動かした。

「七閃！！」

神裂は砂煙の向こうへと放つ。

しかし、

その勢いで砂煙が晴れた向こうには、

誰もいなかった。

「なっ……」

何故？

確かに、

声はこちらからしたのに。

だがそれは、考える前に神裂の頭の中で了解した。

「そっだよなあ。だって僕は、

音使いだぜ？

」

自分の声の反響操作なんて、

簡単にできてしまう。

神裂が後ろを振り向くのはもう遅い。

「終わりだ!!」

僕は音撃を放った。

しかし、

それは音を立てて、途中で何かの衝撃に消された。

「えっ？」

「天草式をご存知ですか？」

神裂はそう問いかける。

「知らなくても結構です。ただ、その私たちは、バレることなく行動するのが得意なのですよ」

「くそっ……」

「七閃！」

キーンと音が鳴って、またワイヤーが襲いかかる。

苦し紛れの音撃は、ただ相手の攻撃を相殺することしか…

「余所見はやめたほうがいい」

神裂が、僕の目を捉えて言った。

「どうして七閃か考えなかったのですか？」

「なっ…!!」

僕は、まだ他にある

六本のワイヤーに気づく。

「遅い」

「ぐわああっ!!」

ワイヤーが僕を切り裂いた。

さっきの今まで手加減（一本）してたのかよ。

痛みに堪えきれず、膝立ちになってしまいが、なんとか自分を保とうとする。

「残念ですが、手加減はもうしません。あなたが終わりです」神裂はそう断言する。

終わりか。

「今、大人しく降参して

《終わりか》

拘束されるといふなら、

《終わりか》

「これ以上は」

「終わりだと？」

「ふざけるな……」

その時だけ、足元がしっかりした気がした。

「こんな所で終わってたまるかよ……、僕にはまだやらなきゃいけないことがあるんだ！」

「……、そうですか。では、  
神裂は構えた。」

僕は、

腕を突き出す。

「七閃！」

キーン、と音が鳴って、

僕は手を握った。

ブチッ、と切れる音がした。

「え？」手の感覚でわかる違和感に、

神裂は止まる。

「ワイヤーが……切れた？」

おかしい。

まだ何も動かしてない。

それに、このワイヤーは特注の鋼糸だといつのに……。

「一体何をした!?!」

「はっ、何って、音を出したのはお前だろっ?」

神裂は驚く。

まさかあの小さな音で、

ワイヤーを切ったというのか。

「うぐっ!?!」

僕はひどい頭痛に襲われた。

絵合の時と同じだった。

一度も自分が閉していない音を増幅したり扱おうとしたとき、ひどい頭痛に襲われる。

演算が莫大過ぎるんだ。

「っ!」頭痛はひどくなるばかり。

でも、ここで倒れてどうするんだ……。

「しづとい……。もう本当に手加減はしないぞ!」

神裂は構えた。

「うるせえなあ……。僕はまだ……。終われねえんだよおお!」

僕は全神経を集中させた。



「七閃!!」

僕はまだ終われない。

まだ、あるんだ。

せっかくやり直して、

最初から始めて、

家族ができて、

友達ができて、

大切な人ができて、

考えられないくらい、

大切な日常ができたんだ。

こんな所で終わってたまるかよ。

あいつらが待ってるんだ。

大切な

この大切な日常を、

「壊されてたまるかよおおお!!」

ブチッ、と音がして、

最後のワイヤーが切れた。

「なっ!!」

「っ!!」

後は、

神裂だけだ。

僕は鉄棒を投げ捨て、拳を握る。

「うおおおっ!!」

ブチッ

っと、何かがちぎれる音がした。

「えっ」

気持ち悪くなった。

突然呼吸が出来なくなっ

て、何かがかみ上げてきた。

「がはっ！」

僕は吐血した。

吸い込まれるように、地面に倒れる。

頭が痛くて、

心臓が痛くて、

手も、

足も、

言うことを聞かなくて、

重くなった。

限界だった。

「何で……」

こんな所で、

死んで……

神裂が僕の目の前に立っていた。

「終わりましたね」

ただそう呟く。

「早く拘束のために、」

バツ、と

僕は去ろうとする神裂の刀を掴んだ。

「あ、あなたは……」

「……返せ……」

最後の力だった。

「……家族を返せ……」

段々、瞼が重くなった。

刀を握む力が抜けてきた。

「……返せ……え……」

「あなたは、……あの少年に似ている」

神裂のそんな言葉を聞き取れず、

僕の意識は朦朧とした。

なさけない

そう思って、

意識が切れた。

守れない (not defend) (後書き)

今回、崩にも進展があり、

エバンス達にも進展がありました。

次からは、話の内容が積み込みのように来ますが……… すいません。

いつもご愛読の方はありがとうございます。

初めての方は、これからも読んでもらえると嬉しいです。

これから、作者の事情で更新が遅れてしまうことになりましたが、すいません。なるべく早く書きますので、よろしく願います!!

感想、指摘もどうぞ気軽にしてくださいね。待っています!

最低 (the meanest of all) (前書き)

お待たせしました……ではないですねwww

とある事情で更新が遅れました、すみませんm( )m

これからは何とか定期的更新に持っていきたいと思います！

もしかしたら、あともう一回更新できるかもしれません……まあい

つものことでわかりませんがwww

それはともかく、少し暗い話になりましたが、どうぞご覧ください  
ね。



最低 (the meanest of all)

うつすらと目に光が差し込んだ。ゆっくりだが、瞼を開いていく。

布団に入った僕がいて、

綺麗な部屋の中だ。

「……あ……」

僕は状況を理解した。ほっとため息をつく。

「夢才チだ」

「んなわけねえだろ」

「ぐええ!!」

間髪入れずに、横から拳が僕を捉えた。

扇さんだった。

「良かったな、死ななくて。まあ一歩間違えれば死ぬぐらいの重傷だったけど」

「そんな重傷患者相手に何で本気で殴ってるんだあんたは!？」

「誰かさんの気持ちの代弁」

「誰かさんって……うっ」

とじじじで、

反対側の横で、青葉がいるのに気づいたのだが……

「あ、青葉……」

「……………」

む、無視……。

「ま、重傷は言い過ぎだけどね」

「だからといっても、殴らないでくださいよ……」

気持ちの代弁とは、そういうことだった。

「怪我は大丈夫ですか」突然そう聞いてきたのは、神裂だった。

「あれ、神裂もいるの?これってどういう状況?」

「いや、その……あなたには謝らなければならない」神裂はいきな

りそう言つと、頭を下げた。

「え、な、何？」

「実は……少し手違いで……あなたを危険因子と勘違いしてしまい、攻撃してしまっていたので……申し訳ございません！」

衝撃告白だった。

ということは僕、勘違いのせいで殺されるところだったのか！？

「生きてるって素晴らしい……」

改めて実感した僕。

「まあ、……気にしてないから。間違いなら仕方ないし、この通り生きていたしね」

「そうですか、それは良かった」

「ははっ、お人好しだぜ」扇さんは笑う。

「でも今回は確かに、そちら側はただ拘束しようとしただけだし、全体的に見たらお前が自爆したってわけだ」

「うっ……痛い所をつきますね」

「ま、こういうのは嫌いだけど、医師としての立場上聞かせて貰うわ。崩君、どういう経緯があったのかな？」

「いや、その……」

まずはあなたの後ろにあるダークなオーラについての安全と保証を頂きたい。

「僕もよく覚えていなくて……無我夢中で……力をフルに使おうとしたら、途中で体が悲鳴をあげたというかなんというか……」

「ふむ、合ってるっちゃ合ってるわね」

「どづいづことです？」

「力の制御の問題だ。今回、お前が最大限に力を出そうとしたが、体が拒否したみたいな感じかな。いや、体が耐えられなかったというべきか……、まだお前が脆弱だってわけだ」

「何でそうなるんですか……」

「守られてばっか、だからだよ」

「？」

「あなたは気を失っていてわからなかったでしょうが、「神裂が僕に耳打ちするように言った。」

「あの後あなたを拘束しようとした時、それを止めたのが青葉さんなのですよ」

「え、「僕は思わずとまってしまっ。」

「前に出て、自分の身さえ犠牲にするようにあなたをかばわれたのですよ。相当の覚悟があったのでしょ。」

僕は黙る。

黙って、青葉を見た。

少し感情の滲んだ顔が僕を見る。

あれだけ守ると誓ってこの有り様じゃ、とてもじゃないけど、言いようがない。

「あ、青葉……。」

「嘘つき」

「うっ……。」

何よりも心に響く。

「また約束を破るなんて、」

「……またまたごめん」

「いいよ」「青葉はそう呟いた。

「生きているならそれでいい」

「……ほんとごめん」

扇さんの言っていることは当たってる。

守ろうとした奴が、逆に守られるなんて、

情けない話だ。

「あらあら、妬けますなあ〜」扇さんは横から茶々を入れる。

「しかし、青葉。いつも崩にそんなデレデレしてたら、あいつダメ男になってしまっぞ?」

「な、何でそうなるんですか扇さん!？」必死になりながら顔を赤くして抵抗する青葉。

「あの……僕、頑張ったのに何でダメ男とか言われてるの……」

何気ない一言がきついです。

「でも、たまには青葉からビシツと罰を与えてやった方がいいと思っぞ?じゃないとこいつは、いつまで経っても万年ロリ変態M男のままだ」

「おい、扇。言葉の暴力って知ってるか?」

「おしいな。私知ってるのは、言葉のナイフだ」

「ほとんど一緒だし、むしろそっちの方が危なく聞こえるだろ!そっついのを言葉の文って言うんだよ確信犯!」

「……でも、それも確かに必要かも」

「え？」僕は驚いて青葉を見る。

「崩がダメ男になるのも嫌だし、私が怒っているっていうのも伝えたいし……」

「あ、青葉……青葉さん？……」

青葉が僕をじっと見つめる。

「インデックスちゃんは怒ったとき、よく上条君に噛みつくんだよね」

「ま、待ってくれ青葉！」

急なベクトル変換についていけない。

「嘘だ……青葉はそんなキャラじゃない！……え、ちょっと待ってほんとにやるの？……」

青葉はグワアっと口を開けた。

「うわぁー！、もう不幸だぁー！！！」

僕は頭を抑えて目をつぶった。

ちよっと待てよ。文が終わらねえ改行がされねえ中略代わりの記号

が来ねえ!! どういうことだ? まさか作者、このまま続けるつもりなのか!? 皆さん、最初に断ってはいるけど、もう一度。この話には残酷な描写があります! ……

かぶっ

「……………」

え、かぶって……全然残酷じゃないじゃんと思っている皆様。

いや、詳しく説明したいけれど、そうするほどのことでもないし、僕にその余裕がない。だから、ここは簡潔に言わせてもらう。

「何でそうなった?」

青葉は僕の鼻に噛みついてた。

「頭抑えられていたから、鼻ぐらいしかなくて……………」

いや、

いやいや、

いやいやいや、

いやいやいやいや、



呼吸困難＋思わぬハプニング＋間近にいる青葉

「いろいろとダメだろおおおおおおおおおっ！……！」

〓 失神

「おいおい、このあとシリアスだぜ？」

そんな事を言った扇さんにツッコむ余裕もなかった。

✦

「……帰ってきたウブな僕」

こんな感じで自虐的にボケてみる自分。

痛々しいこと限りない。

ベッドから起き上がらずとも、人気のなさが感じられた。どうやら、青葉も扇さんもどこかに行ったみたいだ。

「うっ……よっこらせ」僕は体を起こす。まだ少しふらふらした。

さっきの後遺症が………思いだすだけで熱が出そうだ。

「はぁー」

「お目覚めですか？」

僕のため息に答えたのは、意外なことに神裂だった。

「あ、うん。何とか復帰」

僕は頷く。

「あの方たちは、友達か何かで？」神裂は僕にそう質問した。

「あの方たちって、青葉と扇さん？」

「その方たち以外いないような気がします」

「まあ、確かに」

僕は少し考えてから、答えた。

「普通はこっこののを、お隣さんって言うのかな？」

「そうでしたか」

「その様子だと、何か違う物と勘違いしてたようだな」

「いえ、ただ、端から見ていたものとしては、家族のように見えまして……」

僕は、その言葉に呆然とした。

家族。

そうか、そんな風に見えるのか……

ふふっ、と笑って僕は言った。

「合ってるよ」

「はい？」

「僕たちは、それを家族って言っているんだ」

そう、

四年前からずっと。

「そうですか……では、」すると神裂は突然、

モジモジし始めた。

「あなたはその……青葉さんとは、男女交際をしているのでしょうか」

か？……」

「……は？」

生まれて初めて、こんなに変な汗をかきまくっている。

「あの……何を激しい誤解をしてるんですか？」

「いや、だってその……キスマがいな事をしてたじゃないですか！  
……」

神裂が顔を赤らめる。

「いや、あの……されたの僕だよ？何で全く関係のない神裂が恥ずかしがってるんだ？」

「し、しかし、私だってその……ああいうのを目の前で見るのは……」

「あれ、イギリスとかじゃ、普通にキスとかするんじゃないのか？」

「わ、私は生粋の日本人です！」

「まあ、確かに。でも意外だなあ。神裂って何というか、免疫がないんだな」

僕が言えたことじゃないけど。

「あ、当たり前じゃないですか！私だってまだ18歳なんですから……」

「へえ、……へ？」

「いやいや、何かおかしかった。」

「神裂、何かおかしくなかった？」

「な、何がですか？」

「いや、さっきの言葉……もう一度言ってみて」

「私だってまだ18なんですから……」

「……あのな、神裂。僕は、きつと嘘をつくってというのが一番その人の魅力を失わせると思うんだ」

「あの……いや……」

「神裂、何も包み隠すことないじゃないか。大人であることがそんなに悪いことじゃ」

「バゴオン……」

「およそ、僕の顔から三ミリ離れた場所の壁が破壊された。」

「……」

「今が、変な汗をかく真骨頂だ。」

「もう、神裂から発せられるオーラが、オーラが……ゴハア……」。

「も、申し訳ございません」

土下座をして謝った。

神裂は18歳。

それ以上は、

言わぬが花。

知らぬが仏。

触らぬ神に祟りなし。

「おや、話を聞きつけて来てみれば、どうやら体調は優れているようだね」

その時、扉が開いてそんな声が出た。入ってきたのは、60代前半の老人。少し顎髭を蓄えていて、全身を隠すくらいのマントを羽織っている。

「……えっと、失礼ですが、どちら様ですか？」

「おおっと、自己紹介がまだだったね。私はシファー・エンブリュ。ただのしがない老人だ」

「しかし、元イギリス清教所属魔術師」

神裂が横で呟いた。

「お久しぶりです。シファーさん」

「ほほう。神裂、覚えていてくれたか」

「お世話になったあなたを、忘れる訳がない」

「ま、少年。私はそういう者だ」

「はあ………そうですね」

「君に会いに来たのは、まぎれもない。言うことがあってね」

「何ですか？」

その質問に

シファアは笑わなかった。

「君に謝罪をしたかったんだ」

その時、扉が開いた。

今までとは違った重々しい開き方。

そこにいたのは扇さんだった。

「崩、立てるか？」

「はい、大丈夫ですけど」

「ちょうどいい。じゃあ、次はお前の番だ」

「？、何がです」

その質問に、

扇さんも笑わなかった。

「エバンスと面会だ」

†

青葉がぐつとこらえて見つめる先に、

そこには確かにエバンスがいた。

全身を見ることはできない。

顔を見ることさえできない。

ガーゼと包帯がその邪魔をした。



エバンスの肢体は、いくつものガーゼが皮膚にくっついていて、はがれた場所や隙間からは赤くなった皮膚が見え隠れして、

何よりも、エバンスの顔が包帯とガーゼでぐるぐる巻きにされていて、垣間見ることさえできなかつた。口であるう部分に包帯を突き破って管が刺さっている。

彼が生きている証明は、

横で小刻みに揺れる線を映し出した、機械しかなかった。

「え、エバンス……」

意味がわからなかった。

質の悪い冗談だと思った。

これは全部嘘で、

どこからかあいつが悪戯に笑って飛び出してくるに違いない。

そう思った。

そう思ったのに、

エバンスは動かなかった。

「僕が来た時には、もうボロボロだった」

扇さんの横に立つ、黒いマントのような服に身をつつみ、目の下にバーコードをした2メートルを越す男は言った。

「……どういふことだ、説明しろよ」

「ちょっと待て」扇さんは間に割って入る。

「彼は、ステイルさんは、エバンスを助けたんだぞ。早まるな」

「一体誰がこんなことしたんだ」

「君に、それを知る理由はないと思うけどね」

「おい、てめえ殺すぞ」

ステイルに向かって勢いよく伸びた僕の手は、

途中で扇さんに止められた。

「その手を離、」

言い切る前に、扇さんは前の動作から流れるように僕の胸ぐらを掴んだ。

じっと、いつものように僕を見る。

扇さんの、僕の胸ぐらを掴む手は、

今までにない強さだった。

「知る権利なら、あると思うがね」僕を見かねてじゃなく、説明はすべきだと、シファーさんはステイルに尋ねる。

「シフアーさんの頼みだからと言って、よしとするわけにはいきません」

「彼らは、エバンスの家族だ。それなりの事情説明があつていいはず。イギリス清教も随分と心が狭くなつたものだ。では、私が話そうか。不服なら、後で私を何かにつけて罰すればいい」

「……っ、わかりましたよ」ステイルは呆れたような表情を浮かべた。

「グレイブ・ヒューリッチ」

ステイルはそう呟く。

「イギリス清教所属、グレイブ・ヒューリッチ。聖人の一人だ」

僕は足早にその場を立ち去ろうとした。

「どこに行くんだい？」ステイルは僕を呼び止める。

「……お前に関係ないだろ」

「あるね。もしかして、今からそいつを殺しにでもいくのかい？」

「だったら、何だ？」

「やめておいたほうがいいよ。宗教サイドじゃ、聖人つて言うのは科学サイドで言う核並みの力を持った人間だ。君の叶う相手じゃない」

「やってみないとわからないだろうが」

「それじゃあ、いいことを教えてあげるよ」ステイルは神裂を指差す。

「君が戦って負けた相手、神裂火織は聖人だ。今から君が殺しに行こうとする相手は、ついさっき、慈悲をかけてもらい命拾いした、君が殺されかけた相手なんだぞ。どこに勝機があるのさ」

「うるせえ、僕はまだできる。僕はまだ戦える。だからそこを通せ」

「そうはいきません」

ステイルを抜けて、その先。

扉はあと少しだって言うのに、見えなかった。

神裂が前に立っていた。

「そこをどいてくれ、神裂。もう忠告なら聞きあきたんだ」

「忠告なんて、はなからありません」

その言葉に、彼女を仰ぐ。

笑ってなんかいない。

「私たちをお忘れですか」神裂は真剣な面持ちだった。

「私たちはイギリス清教です。あなたは確かに、危険因子ではありませんでしたが、今のあなたが行動すれば、私たちはあなたと敵対することになるんですよ」

グレイブ・ヒューリッチと敵対すれば、

その時点で僕は、

イギリス清教の敵。

「ははっ……なんだよ、それ。この現状見て、まだそんなことほざくのかよ。いったい、どんな神経してんだ……」

僕は近くにあった花瓶を手取る。

「お前ら、そこをどけ。エバンスどころか、カルマさえどうなるかわかってないんだ。今も、あいつが、カルマが泣いてたらどうするんだよ……」

誰も何も言わない。

「わかってんのかよ。聞いてんのかって言ってんだ」

誰も何も言わない。

何で、どうして。

助けないんだ。

「そこをどけて、言ってんだろつがあああっ!!」

「崩!!」

青葉が呼んだ。

聞いたことのある、悲痛な叫びだった。

もう、彼女にそんなことがないようにと誓ったはずなのに、

守ってきたはずなのに、

どうしてそんな声出すんだよ。

僕は花瓶を叩きつけようとしたが、一瞬、そんなことを思う。すい

く、悲しく思う。

その一瞬を、

扇さんは見逃さなかった。

扇さんの拳が僕の頬を突き上げる。

花瓶が手から離れて、

体が不意に浮いて、

音撃にならない、音が割れて、

僕は地面に叩き落とされた。

「……な、何するんですか……」

「気づかないのかよ」

扇さんは呟いた。

「今のお前、本当に最低だぜ」

そう言った扇さんの後ろに、

青葉を見た。

エバンスの前に立ち、涙目で僕を見て首を横にふる、  
青葉を見た。

その時、

僕は最低だと思った。

どつりで、誰も守れないわけだよ。

「何だよ……これ……」

だって僕は、花瓶を割った音で、

青葉も

扇さんも

エバンスも

守ってきた大切なものを全てを

この部屋ごと、吹き飛ばそうとしたのだから。





最低 (the meanest of all) (後書き)

という感じに終わりました。

今気づいたんですが、カルマ忘れてない!?

ちゃんと考えないと……

最後まで読んでくださりありがとうございます。

感想や指摘もしてくださいね。待っています。

創られた希望 (created hope) (前書き)

やっと書けた！みたいな感じで前書きに登場しました、作者です。えーと、あともう一回更新できるかもとか腑抜けた発言に皆様を落胆させてしまい申し訳ありません。いや、結構頑張ったよ？

一週間もかかった理由は、長いからです。新記録を叩き出しました。おかげで、勉強出来てませんがwww

それと、練習としてこの前の話からパソコンで打ったりしてまして余計時間がかかりました。携帯と違い、絵文字や顔文字が打てないしめんどくさいですね。なんとかマスターしようと頑張っている最中です。

では、長々と言いつを喋るのは止めて話に入りますよ。次話です。

最後までお付き合い頂けると幸いです。

## 創られた希望 (created hope)

カツカツ、と足音が響き渡る。僕は部屋を出て歩いていた。部屋だけではわからないが、改めて中全体を見渡して驚く。

ここは単なる家じゃない。

大きな屋敷だった。

テレビやどこぞのファンタジー小説で出てくるような、「屋敷」。でも、あちらこちら埃まみれで、今となっては生活感が全くなく誰かが住んでいるようには見えない。階段の手すりに募った埃を、手ですくい取った。

『ここは、あの子たちの家なんだよ』

失意と自暴自棄の中、シファーさんが語ってくれた話を脳内再生する。

ここは、エルギオンス兄妹の家だったらしい。

過去形だ。

『彼らの両親はね、とても偉大な、イギリス清教を代表する聖人だった。父親の名はエルギオンス・ラッセル。母親の名はティキ・シトラス。まあ、職場恋愛からの結婚だね』

あの兄妹の素性を知らない分、その時少し驚いたのを覚えている。

本当に少し前だ。

彼らには幸せな家庭があった。

一般家庭。

普通の家庭。

血が繋がった家族。

血の繋がっていない家族（僕たち）とは違う。

偽りじゃない。

本物をだ。

『幸せだっただろうな。相思相愛とはこのことに違いない。円満で子供思いな二人は、それはそれはたいそう子供たちをかわいがっていたよ』

嘘のような本当の話、

エバンスは素直で良い子だったそうだ。

『あ、決してエバンスがシスコンとかじゃないから、要らない空想を世界大戦レベルで繰り広げないでくれよ、誇大妄想癖君』

『お前を咎めるのは後にして、どうしてこのシリアスシーンでふざけたの？』

しかも僕への誹謗中傷。

誇大妄想癖君は心に響いたね……。

『でもね、何故だろうか。そんな幸せな生活も続かなかつたんだよ』

逆転。

転覆。

人生のターニングポイント。

子供である彼らにとって、それは唐突だったに違いない。

『両親は、処刑されたんだ』

最初、僕は理解が出来なかった。僕でそうだと言うのに、あの兄妹が理解できたわけがないだろう。

『魔術を使った人体実験』

その言葉は重くのしかかる。

『意味は理解できるよね。そういうことさ。人体実験というのは、それだけでもおぞましいものだけれど、魔術といえは尚更だ』

例外なく、むしろ当然のように、学園都市でもよくあることだった。

能力開発。

『東雲青葉』のように。

はたまた、

『彼女』のように。

ただ、それは自分の身に降りかかってないから、『よくある』と言えるだけで、

経験した者に残るのは、何も無い。

それを僕は知っている。

『最初は誰も理解できなかった。誰もが、嘘だと信じた。これは質の悪い冗談で、きっと笑い話だと思った。でも、嘘じゃなかったんだ。彼らは何も抗議しなかった。ただひたすら黙り抜いて、一番付き合いが長く親しかった私にさえ、何も言わなかったんだ。喋ったのは、処刑される直前。』

《子供たちをよろしくお願いします》

そう言われたんだ。頭を下げてそう言った後、それ以外何も言わず、ただ何度となく頭を下げてお願いした、すぐ後、彼らは処刑されてしまった。』

シファーさんの、何とも言えない顔が脳裏に浮かぶ。

『それからというのも、』

それからというのも、上からの圧力に耐えかねて、誰もこのことに

反抗しなくなったそうさ。

誰も何も言わなくなったそうさ。

誰もが知らないふりをしたそうさ。

という、ただの回想。

その内に、僕はというと屋敷の中をぐるぐると回っていた。

というよりは、みんなに合わせる顔を探していた、何と言って謝ろうかと考えていた、

の方が正解だ。

「会いづらい……」

当然の結果、てやつ。

取り乱した僕を見られたのがとてつもなく恥ずかしくて、何よりも

青葉のあの表情が、僕の胸を締め付ける。

「……何やってるんですかね、本当に」  
今がまさに低迷期だろう。

けれど、そんなことを気にする時間が僕にはない。マイナス成長をする時間。それに比例するのは、カルマの身の危険だった。

「僕は、一体何をしていたんだ……」



こんなところで、ネセザリウス必要悪の教会なんか止められてるわけにはいかないのに、

僕は彼らのお兄さん。

エバンスの兄で、

カルマの兄で、

エルギオンス兄妹のお兄さん。

なのに、

僕は何を守れたって言うんだ。

「くそっ……」

少しでもいいから、

多くなくてもいいから、

汚れていてもいいから、

何でもいいから、

希望が欲しかった。

「ん、」

廊下を歩いていると、ギョっという木材の軋む音がした。僕は廊下の突き当たりを左に曲がって、音のした場所を確かめる。

そこは、右に続く廊下のように何個も扉が壁についている場所ではなく、開け放たれている窓が行き止まりと言わんばかりに大きく仁王立ちしていて、その横の壁には扉が向こう側にある空間へと繋がっているのがわかった。モダンチックな窓が印象的で、中から伺える部屋全体の雰囲気は僕の足はひかれた。

僕は、扉を通れるぐらいに開けて中へ入る。

ずっと横に並んでいる扉のうちここ一つだけが開いていた、

その不自然さに僕は気づかない。

十

そこは書斎のようだった。

奥の壁一面に広がる窓の横には、こじんまりとしたデスクが置かれていて、その後ろ側にはずらりと本を敷き詰めた本棚が並んでいる。今じゃそこから中埃だらけで、機能してないのが丸解りであり、栄枯盛衰意味曰わく栄えたなら衰えると言わんばかりに、部屋の空気は乾燥しきっていた。

本棚に軽く目を通しながら歩く。どれも何もかも勿論英語のはず、だと思っただが、時々、これは英語か？というような、筆記体の背表紙を目にした。感嘆して誇りに思えたのは、我が国日本を代表する文豪夏目漱石の英訳された本が並んでいたことだ。あの二人の両親は文学ならあれこれ問わず、国境を越えて好きだったのだろうか。

デスクに手を置いた。誇りがふわっと浮いたかと思うと、緩やかに僕の手に乗っかる。きつと、こんなところで家族団欒に過ごしているに違いない。

そんなことを考えた後、

埃っぽい匂いが僕を現実に戻す。

彼らの両親はもう、

「家族か……」

そう呟いてみる。

「何なんだろうな」

僕は今まで家族はアパートの住民だと信じていた。

でも、実際どうなんだろう。

家族にはなれないのか？

血が繋がっていないければ、家族になっちゃいけないのか？

「よく、わからないわ」ははは、と自分を苦笑してみた。

わかるわけがないんだ。

「さて、もう行くか」

だって僕は、

「っ!？」

振り向く時、僕は驚いた。

目を奪われた。

本棚と反対側にある壁に、

人がいた。

勿論、本当に人がいたわけじゃない。それに、さすがの僕でも四人もいればどれだけ隠れていても気づいてしまう。

僕は、それまで近づく。

そこまで大きいわけじゃないけど、僕の身長より少し低いくらいはあるのじゃないだろうか。

絵画。

肖像画。

今で言えば家族写真。

四人が、エルギオンス家が描かれた、

絵画だった。

「まさか、この小さい少年がエバンス!?」僕は少し吹き出してしまふ。

その小さな少年、昔のエバンスは緊張した面持ちで、見てると可笑しさが込み上げてくる。ということは横に座っている茶髪の男性はエルギオンス兄妹の父親ってわけか。カルマなんて、今もだけれどまだこんなに小さい。優しく笑う綺麗な女性の膝の上で嬉しそうに顔をしている。彼女が母親なんだ。

そんな感想を述べて見るけれど、

気持ちの暗雲は払いきれなかった。

「へえー、……そうか」

はっきりわかった気がした。

嘘の家族（僕たち）と、

本当の家族（彼ら）には、

絶対的な差があった。

隠しきれない  
拭いきれない  
説明できない

代わりがない

眩しいくらい、素敵だった。

「これが、」

そう。

「家族か」

そう思って、絵画に触れてみた。家族の温もりが少しでもわかるんじゃないか。そう思って絵画に触れてみた。

表面はザラザラして、冷たかった。

「……ははっ、」

僕が、

「笑えねえ」

そう言った時だった。

パン、と何かの合図のような音の後、

世界が180°。姿を変えて、視野に広がった。

「何だこれ!?」最初は事態を呑み込めず啞然としていたが、我に返って辺りを見渡す。古びた本棚も、錆びた壁も、埃だらけだったこの部屋全体が、驚くほど綺麗になっていた。

「一体どうなってるんだ?」絵画を見ると青白く光っている。

これが要因か。

きつと、触れれば発動する仕組みなんだろう。

生憎、魔術に対して何の知識もない僕はこの事態の対処策がわからない。

「何がどうなって、」

その時、バンと勢いよく扉が開いた。僕は思わず身構える。

一人の小さな少年だった。

「あ、」僕の目は絵画とその少年を行き来する。

お前はまさか、

「お父様!?!」

「違うんですけど!?!」

エバンスだった。

ダッシュして僕に突撃しようとする。僕はどうしようかと慌てて考え  
ているうちに、

エバンスは僕の足をすり抜けた。

「えっ?」僕はすぐ後ろを振り返る。

そこには、にこやかに笑う茶髪の男性が立っていた。エバンスはその  
男性へと飛び込んだ。彼らの父親、エルギオンス・ラッセルだっ  
た。

「今日も元気そうだな、エバンス」

「はい、元気様々です!なんたって僕は貴族です!いつだって家族  
を守るよう鍛錬しているんですから!」そう言ってエバンスは笑  
う。

エバンスの貴族説はどうやら昔からの物だったらしい。

続いて入ってきたのは、小さな娘を抱えた女性だった。その子供は  
彼女の長い髪の毛をいじりながら、嬉しそうに笑う。カルマと母親、  
ティキ・シトラスだった。

「あなた、少し緊張してるのでは?」ふふふ、とシトラスは優しく  
笑いかけた。



「汗、汗出てる！」

「本当だ。お父様、すごい汗です！」  
追いつちをかけるようなカルマとエバンスの発言に、ラッセルは頭をかいた。

「こりやまいったな。子供たちの前で大きな恥をかിച്ചったよ」  
そんなシーンが終わったかと思えば、目の前にあつた長椅子に四人は腰を掛けている。何とも楽しそうに話しながら、前を向いて絵画を見ていた。幾度となくシーンは変わって、笑い声がこだまする。

そうか。

この絵はここで作られたんだ。

そして、忘れないように

いつか振り返ることができるように

ここに、思い出を溜め込んだ。

一種の、アルバムだった。

あれもこれもそれもどれも、

見たことない嬉しそうな笑顔で、エバンスとカルマは笑っていた。

「……………」

何だろうな。

やっぱり、

家族（本物）にはかなわないか。

「いつか、」

場面は変わって、夫婦で二人、寄り添うように長椅子の中央に座り込む。分け合うように二人は小さな手帳のようなものを手に持っていた。

「いつかこの思い出を、家族で振り返る時が、来るのだろうか」

「ええ、きっと」

「その時も、あの子たちが幸せであればいいな」

「大丈夫。私たちは見守りましょう。あの子たちは、私たちに似てきっと強いですもの」

二人顔を合わせて幸せそうに笑う。

それを聞いて、僕は辛くなった。

実際それは、

叶わなかったのだから。

「……………」

その時、二人と目があった。見つめあう態勢になる。

「あら、可愛いお兄さんね」

「うん、立派じゃないか」

「へ、僕？」

僕じゃないと、振り返って後ろを確認してみるけれど、誰もいない  
どこれか後ろは壁で……

「子供たちをよろしくお願いします」

向き直ったそこには、

埃だらけの部屋だった。

世界は元に戻ったのだ。

アルバムは終わったんだ。

「……ははは」

してやられたと言うか、  
何と言うか、

「わかっていますよ、」

僕はただ頷いた。

「ですけど、」

状況は何も変わらない。

「一体どうすれば、」

あ、

そうだ。

僕はさっき、二人の持っていた日記を思い出す。

「日記か」僕はデスクに戻ると気が引けるが物色する。

それは簡単に見つかった。

古びた日記。

廃墟となった家敷。だから、誰にも取られなかったわけだ。

ペラペラ、とページをめくる。

「……………」

まずい。

ここまで来て今気付いたけど、日記が日本語で書かれている訳がねえ。やっとストーリーがここまで進んだと思ったら、まさかの障害学かよ。今から任天堂DS買って英語漬けしたところで、日常会話レベル2までが精一杯。どう考えたって日記を読めるまでには1ヶ月以上かかりそうだ。

……………

あー、1ヶ月休載しようかな…。

作者遠い目。

主人公憂鬱。

しかし、僕の指はあるページで止まった。

誰でも、

英語を勉強した者にならわかる、

筆記体のローマ字。

G r a v e   H y i u r i c h

グレイブ・ヒューリッチ

頭の中で繋がった。

「なるほど、」何度も後ろのページに戻って確認する。

読めるかどうかなんて関係ない。

全く皆無だ。

だってそうだろ？

僕は日記を片手に部屋を後にする。

「やってやるうじゃんか」

こういう時、男に必要な物こそ、

度胸とハッターだ。

ま、請け売りだけどね。

†

僕は勢いよく扉を開ける。神裂とステイル、扇さんに青葉にシファア  
ーさんまでもが僕に視線を向ける。

だが、ここで用があるのは神裂とステイル、イギリス清教のネセサ  
リウス、そしてここからは推測だけれど上からの圧力で喋ることを  
禁止された、シファアーさんだ。

「あなたは、」

「どうしたんだい？そんな怖い顔をして」

「お前ら、僕に隠しているだろ」

少し顔つきが変わった。どうやら、確からしい。

「何の事だい？」

「とぼけるな。お前ら、僕を騙していたな」

慎重に言葉を紡ぐ。

「グレイブ・ヒューリッチについて、ちゃんと詳しく話せ」

その言葉にステイルは眉をひそめる。

「何をだよ」

「決まってるだろ」僕は言い付ける。

「グレイブ・ヒューリッチはエルギオンス家と関係がある」

「……妄想かい？」

「そんなわけない。変だと思ったんだ。最低限のことしか言わないし、明らかに深入りするのを拒絶している。僕が割り込むのがそんなに嫌いな」

「ステイル、私は話すよ」シファーさんはそう呟いた。

「し、しかし、」

「この事件はね、聖人が魔術を使った人体実験は、イギリス清教にとって最大の汚点だった。絶対に解決が必要で、早急な処罰が必要だったんだ。浮かび上がった最初の被疑者こそが、グレイブ・ヒューリッチ」

「な」

「しかし、ほどなくして自首してきたのがあの二人だった。何のこともなく、彼らは処刑されたんだよ」

「なんで、どうして誰も疑わなかったんだ？」  
次第に声は強まる。

「言つたろ？彼らは何もしゃべらなかつた」

そつだ。

彼らは黙秘し続けたんだ。

「私たちは、みんな誰もが疑つたさ。これは、グレイブが裏で手を回したに違いない。処刑なんて冗談だ。彼らは無実だ。でも、物的証拠も何も出来なかつた。しびれを切らした上は、処刑を執行したんだよ」

「シフアーさん、あなたどうなつてもしりませんよ」

「もう年だからね」ふふふ、と笑う。



「しかし、どうしてそんなことを？君は知らないはずだろ？」

「ここからだ。」

僕は彼らに話し始めた。

「もし、その物的証拠が見つかったとしたらどうする？」

「なっ！？」三人は動揺した。

僕は間髪入れず、日記を彼らに見せる。

「日記に書いてありました。グレイブ・ヒューリッチについて、ちゃんね」

「……嘘かもしれない」

「じゃあ、どうして僕はヒューリッチがエバンスとカルマの両親に  
関係があるってわかったんだ？」

「っ、吸えないけれど、気を紛らわすためにくわえていたタバコ  
を噛む力が強くなるステイル。」

「ということは、何かしらヒューリッチについては書かれてあるっ  
てことだ」

「わかった。なら、それをこちらに」

「条件がある」

ステイルを遮って僕は条件を言う。

「僕を、ネセサリウスに入れる」

《なっ！？》

驚いたのは、神裂とステイルだけじゃない。二人の横にいたシファ  
ーさんも、エバンスに付き添っていた青葉に扇さんまでもが僕に驚  
愕の目を向けた。

「君は何を言い出すんだ！」我慢の限界か、ステイルの声は強くな  
った。

「ふざけているのか！ いいから、それを早く渡せ！」

「なら、それは出来ない」僕はきっぱり断る。

「なんだと！」

「呑めないなら、イギリス清教以外の宗教団体にも売ることす  
るよ。きつとお金もジャンジャン入ってくるだろうしね。そしてス  
キャンダルされたイギリス清教の弱った瞬間を狙って、僕はカルマ  
を助けることにするよ」

「き、君は…！」

ガツ、と

ステイルは僕の胸ぐらを掴んで食ってかかる。

「自分の言っていることをわかっているのか！」

「僕は本気だ」

ステイルの目をじっと見据えた。

「僕の意思は変わらない。どうする？二択だぜ。条件を呑むか、呑まないか。さあ、とっとと選びやがれ」

イギリス清教は、究極の選択を迫られた。身内の中でこの問題を解決させるか、外へ流出させるか。どっちが賢明なのかは、火を見るより明らかだった。

しかし、自分で言うのもなんだけど、

これぞ危険因子だわ。

「っ！勝手にしろ！」ステイルは舌打ちをして、乱暴に僕を突き放す。

それに僕は、嫌らしく笑った。

「交渉成立だ」

僕はもう一度、書斎を訪れていた。やっぱり埃だらけのまま、あの映像が嘘のようだ。

絵画の前に立つ。触れてみるけれど、当然何も起こらない。

あの言葉は、

僕に向かって送られたのかな。

ふと、そんなことを考える。

だとしたら変な話だ。まるで最後の力を使って僕に託したみたいじゃないか。

まるで、僕があいつらの兄みたいじゃないか。

まるで、家族みたいじゃないか。

「崩」

そう呼ぶ声が聞こえて、扉が開いて誰かが入ってきた。間違えるわけがない、不安の表情を浮かべた青葉だった。

「よう、青葉」

「崩……」

「見てよ、これ。なんかかつこいいだろ」そう言っただけに首にかけてある、神裂からもらったイギリス清教の十字架のペンダントを見せる。

「何かさ。わからないけど、この絵を見てると立ち止まってる場合じゃないと思っただ」青葉と一緒に絵を見つめた。

「子供たちをよろしくお願いします、そう言われた気がしてさ」

十字架を強く握った。

青葉が横で笑ってくれた。

「そんなこと言われちゃ、助けないわけにはいかないだろ？」

「お人好し、って言えばいいのかな」

「うん、それだと助かる」

「へタレ」

「助からなかった！」

そんなツツコミを見て、安心したように青葉は頷いた。

「約束しなされ」

「何を？」

「次こそ必ずや帰ってくるのじゃ」

「姫、三度目の正直でござる。必ずやあなたの元へ笑って帰還いたしやしょう」「ははっ、と頭を下げる僕。

「そして、必ずカルマを助ける」

そう強く誓った。

その時頭を上げようとする、首から垂れる十字架を青葉が引つ張った。ぐっと、さらに頭が下がる。青葉は最大限に車椅子から身を乗り出し、その細い腕を、僕の首の後ろで交差させ、抱きかかえるように僕の頭を包んだ。青葉の頭は僕のすぐ横にあった。

「必ずじゃ」

「……ああ」

ずっと前に誓ったことだ。  
一番最初に誓ったことだ。

何が何でも守り抜いてやる。

すっと青葉の手が離れると、背筋を伸ばす。何もかも見据えて、前を見た。

「じゃあ、いってらっしゃい」

「ああ、いってきます」

青葉に背を向けて僕は部屋を後にした。

「ありゃー、またかつこつけちゃって」

廊下を歩いている時、待ち伏せたであろう不敵に笑う扇さんがいた。

「大丈夫かい、ヘタレ君」

「あなたの耳はどういう構造してんだよ!？」

地獄耳を通り越したな。

「少しはパンチが効いたかな」

「はい、かなり。全て終わってから、二人には謝らせてください」

「うん、待っているよ」

「それより、あの日記にちゃんと書いてあるか、ですよ。まあ、書いてなくても取る行動は同じですけどね。」

「それに関しては、どうやら大丈夫のようだな」

扇さんの指差す方向から、ステイルが走ってきていた。

「桐原崩！」

「うえ！？」二メートルの巨大から伸びた腕が僕の肩をがっちり掴む。

「載っていたぞ！グレイブ・ヒューリッチについての記述が見つかった！」

「あ、ああ……」少し啞然とする僕。

「どうした、何で君は喜ばないんだ？」

「何か、お前がそんなに喜ぶなんて意外だと思ってさ」

「っ！」しまったと言わんばかりの表情を浮かべるステイル。ごまかすのはもう遅い。

「別に、僕は個人的にあいつが嫌いなだけさ」

「そうかい」

それは結構駄目な気がする。

「違う、そんなことじゃなくて、」慌ててさっきの話を払拭するよう、ステイルはまた真剣な面持ちで話し始めた。



「あの日記には、グレイブ・ヒューリッチが行っていた実験の内容が書かれていたんだ。おそらく、彼らも上に報告しようとしていたに違いない」

「やっぱり、実験はあいつがやっていたのか」

「ああ、それもかなり恐ろしいやつだ」ステイルの囁むタバコが歪に曲がる。

「これで全部繋がったよ」

「何がだよ」

「イギリス清教は最初、彼を疑った理由はね、ある日突然、聖人の力を見せたからさ」

「へ？」

「聖人は生まれながらにしてその力を所有する。小さい頃に何かしら具現化が現れるはずなんだ。でも、彼が聖人とわかったのは、イギリス清教を信仰してから十年後、三十歳の時」

「……それって、  
嫌な予感がする。」

そして、それが当たっているのがわかった。

「そう。グレイブ・ヒューリッチは、実験の末他人のマナを吸収して聖人に匹敵する力が目覚める方法を編み出したんだ」

「じゃあ、まさか」

地面が揺れるような錯覚が僕を襲つた。

「グレイブ・ヒューリッチは聖人の子供が何かしらの力を遺伝していると考えた」

マナを補充するために。

マナで聖人を保つために。

「カルマを、殺すつもりか」

「急いで準備しろ！書かれていた術式を見積もったところ、執行日は今日の正午だ！」

タイムリミットまであと八時間。

「崩、これを持って行きなさい」そう言って、崩さんは黒い袋を渡す。

「まさか、あれですか」

「うん、あれだ」

崩さんって本当に用意周到な人だ。

「崩！」部屋から出てきた青葉が僕を心配そうに見ていた。

「ただけれど、いつものように、」

それでも、いつもじゃないように、

僕は力強く笑って答えた。

「任せろ」

ステイルと共に走り出す。

もう、『あの日』以来

バッドエンドなんてこりこりだ。

†

「わかった。楽しみにしておくよ」

カツカツと、三百坪以上はあろう大豪邸の中を、グレイブ・ヒューリッチは大理石でできた床に音を立てながら歩く。

そう。

これは私が作った城だ。

彼は自分を豪語する。

今まで私は、弱者だと罵られてきた。

《魔術師の恥》

ずっと、そう蔑まれてきた。絶対的な身分の差を笑って、どいつもこいつも、私を馬鹿にしてきやがった。

それが、

今ではどうだろう。

私に敵はいるだろうか。

私にかなう相手はいるだろうか。

いるはずがない。

私は聖人。

何よりも一番で最強なのだ。

愉快だった。

今まで馬鹿にしてきたたいそうお偉方が、私に向かって次は頭を下げるのだ。今まで罵倒していた相手に、機嫌を伺って脂汗を流すのだ。

全員、殺してやった。

私を笑った者は全員皆殺しにしてやった。

快樂だ。

全ての頂点に立つ。

何もかもを統べる。

聖人の力は、何て素晴らしいのだろう。

「そう思わないかい？エルギオンス・カルマ」

深い眠りについているカルマを、ヒューリッチは見下ろした。

彼の考えは正しかった。二人の聖人から生まれた子供には有り得ないマナが内蔵されている。おそらくは、普通の七十五倍、聖人の二十五倍。

ヒューリッチが考えたのはその先、そのマナを手に入れた最強の自分だった。

これさえ手に入れば、他の追隨を許さない最強の聖人になれる。

いい。

実にいい。

とうとう私は、神にも匹敵する力を得るのだ。

そして、私はイギリス清教を潰し、ローマ正教の話通り、

神の右席に座ろう。

それからの事は座ってから考えればいい。

時間なら沢山ある。

力なら有り余っている。

私が、

世界を統べるのだ。

ピー、ザツ、ザーザー、あ、あー。

突如、そんな騒音が豪邸内に鳴り響いた。

ヒューリツチは訝しげな顔をする。

「えー、グレイブ・ヒューリツチ君。グレイブ・ヒューリツチ君。

イギリス清教がお呼びです。至急、出てきなさい。あなたの悪事がバレちゃってます」

なんとも間のぬけた声。

しかし、

聞き覚えのある声。

「あなたのだだっ広い家の周りにもう囲まれちゃってます。大人しく出てきなさい。10数える、それまでに出て来ないと強行突破しますよ」

カウントダウンが始まった。

「10、」

慌てることはない。

私は、聖人だ。

何人来ようと、敵では……。

「9、」

次の瞬間。

爆音が鳴り響いた。

もの凄い勢いで建物を削って、  
全てが爆発する。

何もかも吹き飛ばすように強烈な爆風が彼を巻き込み、

ヒューリツチのいる場所は、天井もなくなって、壁さえ消えてしま  
って、瓦礫にまみれた吹きさらしになっていた。

彼に驚く暇は与えられない。いや、実際驚いていたとしても、それ  
さえわからない。

「あ、1〜8忘れてた」

轟々と燃え盛る火炎の前に、一人の少年が立っていた。拡声器を右  
肩に乗せていて、軍服用のミリタリージャケットの下に、何重層も  
薄い赤と黒と白で描かれたチェック模様のシャツ。拡声器を持つ片  
方の腕は肘の辺りまで腕捲りされており、もう一方は袖口も止めず  
にほったらかしにされている。ズボンのジーンズは、ダメージが至  
る所に入っていた。その風貌には天草式が得意とする護身用術式が  
組みまれているように伺える。彼の首から垂れ下がったイギリス清教  
の十字架のペンダントが、全面に広がる炎の色を反射して朱色に煌

めく。

後ろの炎が渦巻いたかと思うと、人の形を作りだし少年の後ろで怒濤の声を上げた。

イノケンティウス  
魔女狩りの王

「こんにちは、ヒューリッチ」

少年はにこやかに笑った。

「ほう、君か」したり顔でヒューリッチは受け答える。

「イギリス清教ネセサリウス必要悪の教会所属の桐原崩です」

二の句を継がせず、不敵に笑う彼の顔には、炎が映る。

「あなたを魔術人体実験の容疑者として拘束しに来ました。……ま、それはイギリス清教側の言い分だけだね。こっちとしてはやっとお前に会えたんだ。言いたいことはわかってるし、何の事かもわかってるよな？」

火炎が燃え盛る中、桐原崩はヒューリッチを強く見据えた。



「カルマを返して貰おうか」

創られた希望 (created hope) (後書き)

拡声器を持って、オシャレに決めて、ニヤリと笑う崩。

かっこいいと思ったのは僕だけでしょうか？

鉄パイプばかりは寂しいですからね……

ここで、お知らせを。

誠に勝手ながら作者の都合により、更新は一週間に一回、悪ければ二週間に一回が限度のようです。ご愛読頂いている皆様には申し訳ありません。それでも引き続き読んで頂けると嬉しい限りです。投稿時間は土曜日の真夜中か日曜日を予定しております。どうかご了承ください。

では長くなりましたが、今回の次話投稿終わりです。

脱字などの指摘、感想等々あったらぜひしてくださいね。待ってます。

笑って欲しい ( I want them to laugh ) (前書き)

やっと書けました!!

更新が安定しなくてごめんなさい . . .

今回最高記録を叩き出しています . . . かなり長いです m ( ( m  
どうぞ、最後までお付き合いいただけると幸いです。

笑って欲しい ( I want them to laugh )

「ふふふ、なるほど」

ヒューリッチは僕を見上げて、くくくと笑う。

「必要悪ネセサリウスの教会に入ったなんて、随分と姑息な手段を使ったようだな」

「まさか。僕の多大な信仰心が認められたのさ」僕は手を大袈裟に広げる。

「どうやら、私に余程会いたかったみたいだ」

「わかってくれます？私の気持ち」

「どうせ死ぬんだから、わかってやってもいい」

「…何だ、随分余裕あるんじゃない」

「どうということだい？」

「そのままだよ。てつきり、もう力がなくなってへニヤへニヤになりながら、他人のマナでも吸ってるのかなと思ってたのになあ」

「……ほう、すでにバレているのか」

ヒューリッチの目つきが一段と鋭くなった。

「言ってるだろ。悪事バレちゃってますって」

エルギオンス兄妹の思いと、

彼らの両親の、

託された最後の希望。

「どうやって明らかになったか知りたくないか？今までひそひそ隠れてたんだからよ」

「ふっ、そんなの結構だ」ヒューリッチは僕の話の話を軽くあしらう。

「もう今となつてはイギリス清教に居る必要さえなくなったんだか

らな」

「はあ？」僕の疑問に、

「ローマ正教に入るのさ」

とヒューリツチは歪に笑って答えた。

「私はとうとう聖人の域を越しつつある。私は神に近づくことができるのだよ。私は全てを掌握するんだ」

……

うーん、何と言うか、

僕は彼の答えを聞き終える。

「しょうもね」

彼に対する僕の答えも、これまたイギリス清教の信仰者としてはいだけないものだったに違いない。だけれど、僕からしてみれば本当にそれだけだった。至極どうでもいい。

「ははは、無知とは恥じるべきものだな」僕の応答に、ヒューリツチは嘲笑った。

「いいか、全てを統べることができるんだ。一番上に立てるんだ！わかるか！？今まで私をコケにして来た奴らが私に頭を垂れるんだよ！《馬鹿で能書きだけの糞野郎共》（あんな奴ら）がいるから誰も幸せになれない！次は私が全ての頂点に立ち、世界を幸せに導くのさ！！」腕を大きく広げ、ヒューリツチはたいそうな公演をしてくれた。

間違いだらけで

どうでもよかった。

「お前に、聖教者として正しい解答を教えてやるよ」

成り立てホヤホヤだけれどね。

無知であるからわかってしまうこと。知識がないからわかってしまうこと。視野が狭いから気づいてしまうこと。何よりも幸せを願うから言えてしまうこと。

「他人の幸せを奪った人間が、みんなの幸せなんてほざくな」

幸せになるために、幸せを奪ってはいけない。

笑うために、泣かせてはいけない。

満足するために、失わせてはいけない。

屁理屈。

綺麗事。

無理難題。

いろいろ言われるかもしれないけれど、それを念頭に置かないで考える奴より、それに悩んで苦しんで葛藤して進む奴の方が、よっぽど綺麗だ。

「何をしようとするの知ったことじゃない。けどな、その前に」

僕は言い放った。

「エルギオンス一家に土下座して、全部清算してからやりやがれ」

「……くくく、お前もつくづく馬鹿だな」一笑すると、僕を指差しヒューリツチは揶揄する。



笑って帰ります。

読者の皆様にはオチを言ってしまうて申し訳ない。

けれどやっぱり、軽い気持ちで見してほしい。

何も心配しなくていい。

不安になることもない。

勝つし、死なない。

お決まりパターンだ。

お約束のパターンだ。

ただ少し違うのは、

死にかけもしないことだ。

ではでは、こちら辺にして

「行きますか」

僕は拡声器を構える。

「予定調和の茶番劇だ」

キ



青葉は車椅子にじつと座りこみ、シファーさんの入れてくれた紅茶を飲んでいた。今の彼女の顔に、不安げな表情は一切ない。彼は、ちゃんと帰ってくるかと誓ったのだから。

「……………」  
「気になるかい？」

後ろから声をかけたのは扇だった。

「扇さん……いえ、全然」

「いや、嘘だな」

「そんなことないですよ」

「だって、それで紅茶四杯目だろ」

「うっ！」的確なツッコミに、青葉は肩を飛び上がらせる。紅茶の入ったカップがガチャガチャと震えた。

あれ、

なんか崩君信頼されてない感じが、

あれだけかつこよく書いたはずなんだけど……

「二度あることは二度あるって言うしな」

扇さんの追い討ちがやってきた。

「でもきつと崩は帰って来ますよ！約束したんですから……………」  
「たぶん」

青葉までだんだん自信をなくしてしまっている。

「もしかしたら、戦いに全力で戦ったが知らないが、相討ちで病院に運ばれて治療を受けて、目が覚めてから青葉に笑って『後日談』なんて言っけきそうだぞ?」

扇さん、何で今考えてたオチ全部言っちゃうんですか。

「面白くないから」

オブラートに包んでください。

作者だって少ない脳みそフル回転して頑張っただけですよ。

「一ヶ月に一回の更新に変更した方がいいんじゃない?」

これ以上、好き勝手作者の状況を報告するんじゃない!!

閑話休題、

「仕方ない、少し迎えに行くとするか」

「え、どういうことですか?」いきなりの扇さんの提案に、首を傾げる青葉。

「崩を迎えに行くんだよ」

「本当ですか!?!」車椅子から身を乗り出して驚く青葉。その表情にはやはり、どこか嬉しいようなほっとしたような安堵感が芽生えていた。

崩が帰ってくると思っても、精神的負担は確実に重い。

信じるという行為は、させる側はもちろんの事だが、させられる側も辛くて不安なのだ。

「でも、迷惑になるんじゃない」

「大丈夫、遠くでいれば問題はないさ。別にあいつを助けに行くんじゃない。ただ、あいつがカルマを連れ戻して帰って来る時に、目の前にいてやるんだよ。その時は、色々複雑な気持ちを抱いているあいつを笑って迎えてやろうじゃないか」

「……はい！」嬉しそうに頷くと、青葉は自ら車椅子を押し進みだす。

「早く行きましょう！扇さん！」

「あ、段差には気をつけなよ」ははは、と笑いながら扇さんは青葉の後ろ姿を見つめる。

「私、好感度が上がったんじゃないのか」

露骨に嬉しそうな笑顔するのはやめてください。

今のその発言で好感度2ぐらい下がったね。

「いいんだよ、2くらい。全体で上がればそれでいい」

「読者の皆様に謝りやがれ！」

思わずかきカッコ使ってしまった。

もうなんかグダグダだよ。

小説じゃねえじゃん。

「それでは、私も行くかな。さあ楽しみにしてるぞ。このオチは一風変わった物にしてくれよ」そう言つと、扇はゆっくりと青葉の後

を追いかけていった。

……さいですか。

んー、まさか、登場人物からこんなこと言われるなんて、

っっていうか、荒らしに荒らしてさっさと逃げやがったな。まあ、計画性が0な作者はいつだってノープラン、ノーアイディア、だけど裏を取れば、修復可能ってわけにもなるんだけど。

………

一言だけ、

全然オチ、面白くないですよ。

†

「んにゃ？」

何だか、ビビっと来たぞ。

最大級のシリアス場面で有り得ないくらいいほのぼの系があった気がする。

っていつか、これから先の展開が議論されてたような。

「あー、何だろうな」

僕の今まで頑張って積み上げた物が跡形もなく一瞬で潰された気がしてならない。

僕だけに崩れた、みたいな。

……笑えねー。

「何考えているんだい？」

その一言の後、コンマ一秒遅れずに地面はひび割れたかと思うと、表面とは違う、一段と固い土壌が針のように突き上げる。

「うおっ」まあ何も抵抗もなく、僕はこれを避けると同時に、少しヒューリツチと距離を取る。

「あのな、こういう時こそああいう話が要るんだよ。混乱と無秩序は避けないといけないだろ」

いや、僕もわからなくなるし。

「君、随分と余裕だねえ。何か秘策でもあるのかい？」

「ああ、余裕綽々、気分爽快、不安は皆無だし、この心は確信に満ち溢れているよ」たいそうな弁舌の限りを尽くして僕は調子に乗る。何だかどんでん返しの負けパターン臭が少し漂ったきた気がしてならない。

「ははは、面白いね。ならそろそろ、それを見せてもらおうか！」ヒューリツチの周りだけが、まるで重力が倍以上になったように空間の歪みが現れる。

「ggoggun!」

弾き出されたような衝撃が、風を纏い、僕に飛んできた。

『消える』

予兆もなく、前触れすらなく、発射された衝撃は最初からなかったように突如消えてしまう。

「!」それを見たヒューリッチは、違和感の感じないわけがない彼は、眉をひそめる。

そしてその後、うつすらと理解したように笑った。

「なるほど、それか」

「そう、これ」

僕は不敵に笑って、口元にある右手に携えた獲物をちらつかせる。

「僕の秘密兵器にして最終奥義、メガホン『拡声器』だ」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………ありゃ？」

何だこの微妙な空気。結構決まったはずなんだけど。

「もしかして、ジョークかい？」

「そうなるんだ！……」

いや、薄々感じていたけどさ。ここまでなるとは思わなかった。

「まさか、それが本当に君の最終手段なのかい？」

「ああ、そうさ」

「ははは、興ざめだ！最終奥義や秘密兵器などと言っておいて、そんなちっぽけな携帯機器ではな！これでは、話にならない！」

「へえー、なら、試してみるか？」

逆撫でするような僕の言葉にヒューリツチは腕を奮った。

「いいだろう！ちよつとした暇潰しだあ！！」

地面に現れた無数のルーン文字が青白く光る。

「ggktpa0pgjtt.ptjatmjajttjtktkmap  
tltmw::zhylyufa!!」ヒューリツチの横から伸びてきた  
長白い大蛇は見境なく猛突進をしてきた。

『散』

その一言で僕は消えた。いや、言い換えてみれば、たったその一言で瞬間移動が容易なんだ。

勿論、ヒューリツチの後ろに現れる。

彼は反対の右手を僕に向けてぶつぶつと何かを唱えた。

「しかし、次はそんなんじゃ効かねえぞ」





「撃!!」

スキを狙い、大声で放った音撃はヒューリツチに向かって飛んでいく。

「調子に乗るなど、言っているだろうがあ!!」頭をかきむしるやいなや、ヒューリツチは叫んだ。

「follodd!!」その一声と同時に空間が歪んだかと思うと、音撃は吸い込まれるように消えてしまう。

「おお、頑張ったな」

「小僧が!! allogrante!!」

ポルターガイストと言わんとばかりに、瓦礫が宙に浮いたかと思うと僕をめぐけて一直線に飛んでくる。

「ぬおっ!!」

驚きつつ、笑いつつ、

さながらおどけるように、

僕は瓦礫をかわす。

その先には、

「へえー」宙に浮いた瓦礫が、集まり集まって、積み積み積もって、ヒューリツチの両隣、

二体の巨大なゴーレムが佇んでいた。

「こりやまた物騒な」

「crush」

その掛け声と同時に、二体のゴーレムは腕を開いて雄叫びを上げる。二体の瓦礫でできたでこぼこな左腕が大きく上げられた。

もちろん、狙いは、獲物はただ一つ。振り下ろされた先にいる、僕。

「怖い怖い」

そう言いながら、二つの腕がぎりぎり交わる頃合いを狙って僕は大きくジャンプした。勢い余って空中で前転をしたような態勢になりつつも、お互いを壊し合って、二体のゴーレムの腕が地面に崩壊音を伴い到達するのを一瞥する。

「いやはや、遅いだけでは駄目ですよ。ヒューリッ」

ギョロツと、突然、

二体のゴーレムの眼が動いた。今までそんな物があつたのかすら、僕は気づけなかった。しかし、その頭部にある、偶然か必然か、赤く塗装された瓦礫がまるで血走った様な眼を作り出すその部分四つが、確実に僕を視界の中心に捉える。そこから右腕でがら空きの僕に反撃しようとするのは、当然の帰結だった。

「嫌だなあ……」

そうやって、呟いてみる。

笑いが止まらない。

何故だろうか。

おそらく昔からに決まってる。

昔が昔で、

居た所が居た所だから、

きっと僕は何か違うんだろうな。

唐突にも、

ある少年を思い出した。

真っ白い髪の毛をした鋭い目つきの少年。

今となつては、学園都市第一位に君臨するあの少年。

居場所が対遇で

待遇が正反対で

正反対だからこそ似てしまった。

あいつはもう、大切な人が出来ただろうか。

僕たち共通の願いは果たしたのだろうか。

……まあ、一位なら当然か。

「こんな一瞬でここまで回想できるだなんて、びっくりだ」

では一言。

NO！と言える日本人になろう。

僕は再び空気を吸い込む。

『触らないで！』

拡声器メガホンから響き渡ったその声は、予兆もなく、前触れもなく、たちが悪いくらい突然に、

二本の右腕を跡形もなく消し飛ばした。

余裕綽々と言わんばかりに着地した先には、ひどく不機嫌で追い詰められたような表情をするヒューリツチ。

「まだ終わりじゃないぞ！」荒れた声で僕に吐き捨てると、空を指さす。

すると、影ができた。

日陰がヒューリツチを段々と覆っていく。

「……これは」

上空を見ればわかったも同然。

巨大な、通常より八割増しのゴーレム。

「融合してるじゃん」

「ふふふ、調子に乗るのもそこまでだ！」ご機嫌を取り戻したのか、後ろにとてつもなく巨大なゴーレムを従えて、ヒューリツチは不敵に笑う。

「立ち直り早っ」

「これで終わりだ！」腕を振り下ろした事を合図に、ゴーレムは体事突っ込んできた。

それはそれは、おぞましい雄叫びが耳をつんざく。

「うるさいなあ……」

たぶん、音使いとしては怠惰の一言に尽きるだろう。いきなり正論になるが、役割分担という言葉を知らないのだろうか、ゴーレムに対して溜め息をつく。

「瓦礫は瓦礫らしく、地面に転がるべきだ」

僕は拡声器を構えた。

喉を最大限に広げる。ここまでは様々な声を出すことに共通することであるが、今回。

顎も少し引いて形から入る。

喉元を這わせるように有声音を発音する。  
それは、何よりも重みがあつて低い、

重低音。

「

アアアアアアアアアア  
アアアアアアアアアア

」

根底を揺るがす低音。

平行感覚を麻痺させる重圧音。

「つつつ!?!」

もちろん、ヒューリツチは止まる。地面に吸い込まれないように必死で耐えていると言うのが正確だ。

「お前……これは一体……」

その時、雪崩のような轟音が響いた。驚いて後ろを向くのはヒューリツチ。

「嘘だろ……」

後ろには、もう巨大なゴーレムはいない。  
そこには、山のように積もった瓦礫があるだけだ。  
瓦礫は瓦礫に戻っただけだ。

「どつちむいてんだよ」

「!?!、しまっ」

重圧が消えていることに気づくのも、  
目の前に僕がいることを知るのも、  
今から防御態勢に入ること、

どれも何もかも遅い。

「速」

僕の通常ではないスピードで繰り出された足蹴がヒューリッチの脇  
腹を抉る。

まるでおもちゃのように、瓦礫の山へと飛ばされた。

大量の砂埃が巻き上がる。  
崩壊音がこだまする。

力の差は、圧倒的だった。

「殺さねえ。お前はまだやらなきゃいけないことがあるからな」

瓦礫の山に向かって僕は呟いてみるけれど、ヒューリッチの返事は  
ない。

……まさか、死んだ？

「訳ないか」

異変は目でわかった。

コトコトと、  
グツグツと、

瓦礫の山はまるで煮られるように震える。

次の瞬間、

「は？」

瓦礫の山が消えた。

普段では決して経験することのないくらいの熱風が僕に吹き付ける。

軽く日焼けはしたような気もしないことはない。

消えたんじゃない。

昇華したんだ。

「ははは、もうお前も終わりだ」

ヒューリッチは前屈みになった状態で僕と対峙した。

赤い赤い、

地面に広がる円形の中心から、僕を睨みつける。

その赤い円は、おそらく瓦礫の山よりもっと広い。マグマを押し込

んだような赤い炎が、あちらこちらへと空中に半円形を描いて移動する。

さながら、太陽のコロナ。

ヒューリッチ曰わく。

「聖人の力」

勝ち誇った笑みで僕へと語った。

「通常の炎なんかと一緒にするなよ。わかっているな、お前が勝てなかった『聖人』の炎だ。これが、私の最強たる由縁だ」

「……さいですか」

広がり続ける紅蓮を見て、僕は溜め息をつく。

「僕って、そんなに説得力ない？」

「……はあ？」

「お前は負ける。決定事項だ。絶対事項だ。この勝負、必ずお前は負ける」

大事なことから二回言ったぞ。

「……よくも……」





竜だ。

火炎でできた火の竜。

紅蓮でできた赤い竜。

「だけど、」

ドロドロとマグマは落ちる。  
ダラダラと崩れ地面に伝う。

「醜いね」

目に毒だ。

体に悪い。

こんなもの、見せるんじゃないよ。

「死ね!!!!!!!!!!」

ヒューリツチの合図から三秒後、

轟音を立てて、赤い竜は僕を呑み込んだ。

「いやはや、別に大丈夫だから付いてこなくていいんだけどな」  
車の運転席から、扇はミラーを通して後ろを確認する。ガタガタと音を立てながらロンドン市内に行くこの車の運転手こそが扇だ。

「いえ、私はあなた達の護衛が任務ですから」

そう答えたのは後ろの席に座る青葉でなく、

その横にいる神裂だった。

「それに、ステイルや、あの少年の事も気になります。じっとして  
いるだなんて、無理があるくらいです」

「ははは、そうかい。でも、その心配ならあつちに回さずこつちに  
全部注いだほうがいいよ」シニカルに笑う扇。それを見て、神裂は  
疑問を感じずにはいられない。

「あの、どうしてそんなに余裕なのでしょう」  
こんなに不安気なのは自分だけだろうか、たまらなくなって尋ね  
る神裂。

「ん、あいつが勝つから」何も考えずにただ答える扇。

「一体何故そこまで断言できるんです？相手は聖人なんですよ」

「確かに、一度負けた相手と同じ強さだな」

桐原崩は、  
神裂火織に負けたのだ。

「だけどさ、変な話」

そう、

本当、変な話。

「本気じゃなかったとしたら、どうする？」

「……はい？」

神裂には疑問も浮かぶし、何よりも少し侮辱された様な感情が芽生える。

もちろん、自分が確かに手加減をしたのは確かだ。

しかし、最後、たとえどれだけ気を抜いていたとしても、

桐原崩にのされそうになったのも確かだ。

「本気じゃない…？」

「いや違うな。その時はきつと、それで本気だったんだろう」あくまでも、扇は神裂を見ない。どこ吹く風のその態度は、神裂の怪訝な表情を強くさせる。

「あいつは、音撃を放つまでにどれだけの手順を踏むかわかるかな？」

「……いえ、全く」

「まず、音を発生させる。それから、音を特定してそれを聞き取る。次に、その聞き取った音を自身の中で増幅させ、ある時は減少させ、音の性質、音質全てを自己決定する。そして出力した音撃をどこからどうやって何をして放つのかを決めて、音撃は放たれるんだ」  
わからないといった顔をする神裂に扇は簡潔に言った。

「つまり、あいつは他の能力と比べて燃費が悪いんだ。普通ならそれが能力だからと言う理由で何事もなく一方通行できる所を、あいつは総計5段階をふんでじゃないと力を発揮できないのさ。そうなれば普通、演算の量はおかしいぐらいに莫大だよな」

神裂もやっとな理解した。というよりは、思い当たる節があった。  
「だから、鉄パイプを利用した…」

音の性質を特定するため、  
音の音質を設定するため、  
音の発生を決定するため、  
音の操作を楽にするため、  
少しでも演算を少なくして、  
音の威力を増幅するため。

しかし、鉄パイプがなくなると、普通の、ありふれる音を使おうとして、

『七閃』で発生するあんな小さな音を使おうとして、

無理強い演算を行って、脳がパンクしたのだ。

「とうとうとは、つまり…」

今回のペースメーカーは、

鉄パイプに代わるペースメーカーが、

「あなたの渡した拡声器<sup>メガホン</sup>、」

「そう、今回のあいつの『即効魔法<sup>チート</sup>』さ」

扇はふふふ、と笑った。

「あいつの音撃を放つ過程と拡声器の機能を考えれば容易にわかるよな。拡声器が引き受ける役割は、音の発生、性質、音質、増幅の決定」

よって簡単な引き算。

「彼のすることは、音の操作だけ……」

意味することは、嫌ほどわかった。

ほとんどの演算が、

音に対して上乗せとなる。

基礎の根幹を拡声器<sup>メガホン</sup>が担い、

彼自身の演算が上乗せとなる。

単純計算、

通常の約5倍以上。

「普通じゃ……」

その時、

爆音が鳴り響いた。

振動が車にも伝わって、大きく縦に揺れる。慌てて神裂と青葉は窓から顔を出して、その方向を確認する。

そこにあっただのは火柱だった。広がる視界の向こうの、およそ半分はそれが占めている。

赤い

朱い

紅い火柱。

神裂の抱いていた少しの安堵感は焼き払われ、現実に戻される。

「それが何だつて言うんですか！ 相手は聖人です。宗教サイドでは核にも等しい力を持った人間なんですよ！ たった5倍ぐらい強くなったところで、何がどうなるって言うんですか！？」

「いや、はなから何も変わらないよ」扇は、当然のように頷く。

「それじゃあ、何故彼を……」

「あいつが勝つ」

へえ？ と柄にも似合わない声を出してしまう神裂。

扇はそれでも、いたって単調だった。

最初から、

始まる前から、

勝つとわかっているのだから、

今さら、何を驚くっていうんだ？

「いくら聖人だからと言って決めつけてはいけない。宗教サイドの見方を、科学サイドに押し付けてはいけない。平均を取ったわけじゃないんだからさ。それに、」

「それに、何ですか？」

「学園都市Level 15の中で唯一の欠番<sup>ゼロ</sup>」

扇は誰よりも的確に、目の前に広がる火柱を嘲笑った。

「<sup>トーンレインジ</sup>音響は、あんなもので沈まない」





体にかかるまるで動かない程の負担を、改めてヒューリツチは感じとる。

聖人の力の副作用。

しかし、笑いは止まらない。

「…ふっ、まあいい。後でまたあの子のマナを吸収すればいいだけだ…これでもう、私の邪魔をする奴はいない……」

ブワツと、風が吹いた。

紅蓮の炎が吹き付けられて揺れる。

「……………」

何かが、見えたような気がした。

おかしい。いや、魔術とかそういうおかしさじゃない。

紅蓮の炎、

太陽のコロナに匹敵する温度の炎に焼かれたのだ。

何かが残るはずがない。

「……………嘘だ」

見覚えがあつた。

たった一瞬、僅かに視界に捉えた、ただそれだけなのに、

「……………有り得ない」

ヒューリツチを恐怖で締め上げる。

風になびく、緑のミリタリージャケット。

「そんな……………バカな……………」

キーン、と音を合わせる調節音。

「あー、マイクテストマイクテスト」

紅蓮の炎は、取り払われる。

「こらこら、勝手に過去形使ってんじゃねえよ。それに言うておくが、語り部は僕だぜ？」

頬に火傷のような擦り傷が一つ、

それ以外、何も傷つけずに、  
まるで何もなかったように、

ただ、僕はそこに存在した。

「……何故だ……聖人の力をくらって……どうして……どうして生きているんだ!!!」

ヒューリツチは絶望に落ちる。

僕はうつとりと笑った。

頬から一筋、血が流れる。

「元気だった？ ヒューリッチ。二分ぶりだな」

「ば、バケモノ……！」

「……」

その名詞で僕を呼ぶんじゃない。

それはもう、昔々の物語。

僕はバケモノなんかじゃない。

『彼女』はバケモノなんかじゃない。

この能力はバケモノなんかじゃない。

あの時から、

僕はもう変わったんだ。

「ブブー」

僕の名前は

「僕の名前は桐原崩だ」

拡声器を構えた。

宣言通り、  
公言通り、

「グレイブ・ヒューリッチ、お前の負けだ」

音撃は、それはもうコンマ001秒も置かずに全てを捉える。

いや、真面目な話。

音のない世界なんて、有り得ないのだから。

+

「はあ、はあ、はあ……」

ヒューリツチは、先を急ぐ。その片腕には、小さな少女のカルマを乱暴に抱きかかえる。もう片方を使わないのは、使い物にならないから。ぶらぶらと垂れた反対側の腕は床に血を垂れ流す。

「は、ははは……」

暗い教会の中、

聖堂の位置に代わりとして置いてあったのは、巨大なカプセル装置だった。

祭壇の上にカルマを寝かせる。

「くくく、まだだ……私はまだ……」

「しつこいな、お前も」

「!!……」

僕は呆れてため息をつく。

しつこいというのは、嫌われる要因ベストスリーには間違いなく入っているだろう。

「何故だ……」

「どうしてって……」

テレポートした先に、音を追って来ちゃ駄目ですか？

「言ってるだろ。カルマを返せ」

「くそがっ！ ultima!!」

その衝撃波も、今となっては役にも立たない。

僕は片手であしらった。残響だけが虚しく響く。



「お前はもう勝てない」

「ふ……、お前もか」

「は？」

「お前も私を馬鹿にするんだな」

ヒューリツチは唸る。

「お前もそうやって、力のない者を笑うのか。一体、何が楽しい！？ 力を持って他人を笑って何が楽しいんだ！？ お前ら力のある奴はいつもそうやって他人を笑って自分を崇める！！ 私たちの努力なんてまるでゴミのように扱いやがって！！ 偉い者気取りがうざったいんだよ！！ あの兄妹の親もそうだった！！」

ヒューリツチは、妬ましそうに吐き散らす。

「あいつらめ、私の実験に気づいてどうしたと思う？ 私に向かってこう言いやがったんだ！ 「こんなバカなことはするな！！」って乱暴にね……バカなこと？……ははは！！ そりやお前たち聖人から見たらこんなこと、蟻が家を運ぼうとするぐらいのバカげたことにしか見えないよな！？ その態度が気に入らないんだよ！！ お前らにだけ力があって、私にだけ力がないなんて、おかしいじゃないか！！ そんなの平等じゃないか！！ 強い者だけ得をして弱い者は得をしない、そんな現実、間違ってるに決まってるだろうがあ！！！！」

「……じゃあや、」

僕は一つだけ尋ねる。

「お前はその力で、誰かを助けたか？」

「……何が言いたい？」

「はっ、別に。ただ、それなら、エルギオンス夫妻の方がもっと立派だったって言いたいただけさ」

「お前も力を有するからそんなこと言えるんだ！ おごるな！！」

「それじゃあ、なんで彼らはお前に忠告したんだよ？なんでお前に黙って密告しなかったんだよ」

間違いない。

決まってる。

「お前を救おうとしたからだ」

「……うるさい！！ そんなありふれた言葉に騙されるわけないだろ！！」

泣くような雄叫びとともに、ヒューリツチの足元が青白く光り、地面に亀裂が入る。

「やれやれ……僕はこういう、熱血的でシリアスな場面は苦手なんだけどな」

ポロツと漏らしてみたり。

「でも一応、僕はイギリス清教徒だし、それにあの二人からのお願いだ」

僕は、拡声器を構えない。

持っつての所にある音量マイクを徐々に上げていく。

「伝言。もう一度頑張つて、幸せにでも何でもなりやがれ」

byエルギオンス夫妻。

「ultimaああああああああああああああああっっ  
」

19、20。

最大音量まであげた拡声器が、体幹を揺らすような音でフィードバック。

生まれる、ハウリング音。

僕はそれを地面に勢いよく叩きつける。

巨大なノイズ。





「ははっ  
」

「何だ、何なんだそれは!？」

まるで鎌鼬の具現化。

「ま、v e r・音だけど  
」

とまあ、かつこつけてみる。

いけないいけない。

本題に戻らないとね。

「グレイブ・ヒューリッチ  
」

そう、

エルギオンス夫妻からの願い二つ目。

助けようとした奴の救済。

「お前をやり直し（スタート）まで送ってやる」

そう宣言して、

モーションなしの高速ダツシュ。

ヒューリツチの目の前で止まると、僕の左拳は勢いよく彼の腹部を殴った。

メシメシと、軋む音がする。

「な、……………」

体が宙に浮いた。

ヒューリツチは何を思ったのだろうか。

吹き飛ばされて僕と対峙した時、

眩いた。

「神よ……我を許したまえ」

はは、

何か良かった、なんて思ってしまっ

最後の最後に謝りやがって。

うん、背教は見逃してやる。

ご都合主義も何もかもだ。

ただな、

「自分の罪ぐらい、自分で償いやがれええ!!」

音を上乗せした右拳が顎を捉えた。

何よりも高くヒューリツチを突き上げた音は、

教会全てを崩壊させ、巻き込んで、

上空へと舞い上がった。



+

「うにゃ…?」

「おいカルマ。いつからお前は、そんな萌え属性たつぷりの声が出るようになったんだ?」

これは『カルマ大好き日記』に記録しないと!

って書いてねえよ。

.....

「にじ、どにじ?」

スルー演技・スルー技術・スルー構成点オール満点。無垢って素晴らしい。めちやくちや救われたよ。

カルマは僕の頭の上、肩車をされている状態で目を覚ました。

「花火大会終わった後、みんなで旅行中」

「そうなんだ！」嬉しそうにカルマは笑う。

「……でもさー、遭難しちゃって大変なんだよねー」

「じゃあ私、崩兄のタケコプターになる！」

「献身的だ!!」

僕の頭上で、全力で腕を回すカルマ。

かわい過ぎるだろ、これ！

「あれ、崩兄。みんなは？」

「今から会いに行こう」笑って、僕は肩を揺らす。

カルマは嬉しそうにはしゃいだ。

「おーい」

向こうから声が聞こえる。

青葉が大きく手を振っていた。その横で、いつものように扇さんは煙草を吹かす。

「さあ、行こうカルマ」

「うん!!」

何だろう。

わからないけど、笑える。

あれは嘘だったのかな。

戦っていたのは幻で、傷ついたのは悪い夢で

目が覚めたらみんなで旅行していた。

待ちに待った日常が帰ってきていた。

でも、もうそれでいいと思う。

それぐらい僕は、

カルマの笑顔に救われている。

笑ってくれてありがとう。

苦しかったのに、笑ってくれてありがとう。

遅くなってごめんなさい。

「崩兄！」

カルマが突然僕を呼ぶ。

「なに、」

ガバッと、僕が言いきる前に、カルマは僕の頭を抱きしめて、嬉しそうにこう言った。

「肩車ありがとー!!」

「……ああ」

僕は、ただ頷く。

守りたいものを、守れた気がした。

†

「いいのですか!?!」  
神裂が僕に強く抗議をする。

「ああ、いいんだ」

僕はそれに頷いた。

「それじゃあ、そういうことでこちらも手続きを済ませておくよ」

「しかし、ステイル！」

「いいんだ」僕は神裂を止める。ステイルだって、決して芳しい顔をしてるわけではなかった。

「後はよろしく頼んだよ」

僕はそう言って、扉を開けた。

小さな部屋の中にベッドが一つ。小さなまどからそよ風が入ってくる。

そんな中、ベッドに寄り添うようにカルマが疲れ果てて寝ていた。

それを後ろから、青葉が頭を撫でて優しく見つめている。

「おっ」

「ども」

扉の横に立っていた扇さんが、僕にいつもの軽い挨拶をする。

「一週間経ってもう大丈夫だよ」

「そうですか」

「本当にいいのか」

「……ええ」

僕はさっきと同じように頷いた。

「何かの代わりなんて、きっとできないんですよ」

「……会ってやれ」

「はい」

僕は歩いて、青葉の隣まで行く。

「あ、崩」

「おっ」

「ナイスタイミング。もうすぐ目を覚ますよ」  
「そうか」

横に椅子を取り出して座った。後ろから、扇さんがベッドを覗き込む。

静かに眠るエバンスがいた。

「全く……」

気持ち良さそうに眠りやがって。

わしゃわしゃと、

エバンスの髪の毛を撫でた。

「んっ……」

瞼が少し痙攣する。エバンスの目がゆっくりと、薄くだが開いた。

「ここは……」

「お前の家だ」

「カルマは……」

「ほら、お前の手を握ってるだろ」

「……そうか……」

「ん、どうしたんだよ」

「終わったんだな」

「ああ」

「まるで、夢みたいだ……」

「そうかよ」

「うん……よくね……」

「……」

「じじやって、撫でてくれたんだよ……」

初めて

エバンスが泣いたのを見た。

「そうかい」

泣いているエバンスの頭をもう一度強く撫でる。

わからないけれど、

これでいいと思う。

「泣きすぎだ、バカ」

僕は笑う。

もう一度だけ、

あと一度だけ、



見納めと言わんばかりに

最後に一度だけ、

エバンスの頭を強く撫でた。

笑って欲しい (I want them to laugh) (後書き)

さあ、ここからどうなってしまふのか...

とは言っても、戦闘は終わったので、次は関係の話なのですが...

エルギオンス兄妹の話は一応次で完全に完結です。

今までご愛読くださっている皆様、今回初めて読んだ皆様、これからも応援よろしくお願いします！

感想、指摘等も気軽にしてくださいね。

待ってます！

後日談 (start) (前書き)

やっとできました!!

もう・・・疲れ果ててます・・・

今回でイギリス編が完結しました!!

それでは、最後までどうぞお付き合いください。

後日談 (start)

「それにしても、今回はえらい地味な病院送りに遭ったんだね。最初は、銃弾を何発もうたれて瀕死状態、この前なんか血だらけになつて運ばれて来たつていうのに、今回は何だい？頭が痛い？はは、そんなのおとなしくしてバファリン飲んで毛布にくるまって天日干しされたら治る話だよ。全く、君は医者を馬鹿にしてるのかね」

「お前は完全に僕を馬鹿にしてるよな!？」

とある病院、というか行きつけの病院。

カエル医師は今までと同じように、僕に対して冷たく当たる。その中でもいつもと違う点を見つけるといふならば、僕がベッドに横たわっているのではなく、座って対面し、診察を受けている事ぐらいだろう。ていうか、僕は精密検査さえなかったらわざわざ怪我もしていないのに病院なんて来るわけがない。脳の損傷がないか検査してもらおうという扇さんの勧めは、そりゃ感謝しきれないものだけにと、やっぱりこういう時は苦痛に感じてしょうがない。

「でも、残念なお知らせがあるよ」カエル医師は脳のレントゲン写真を見ながら呟いた。

あれ、何だろう？ この重々しい空気……

「先生まさか……」

「重大な欠陥が見つかった」

嘘だ…… そんな……

「馬鹿が露見したね」

「てめえぶち殺すぞ」

「おや、酷い仕打ちだなあ。僕は医師として、君の欠陥を指摘した  
だけなのに」

「絶対嘘じゃん！じゃあどうしてそれがわかったか、句読点も含め  
て10文字以内で述べてみる！」

「ここに影があるから。（10文字）」

「それ本物の患部！！」

とまあ、わいわいがやがや、何やかんやで精密検査の結果、僕は異  
常がないという診断が下っていた。

「絶対後になつて症状が現れる気がする」

「じゃあその時に治したらいい話だよ」

「あんたそれでも医者か！？」

早期発見をお願いしますよ！

「はあー、全く」

診察を終えて、僕はカエル医師と対面していた丸椅子から立ち上が  
る。椅子は収納スペースにきっちり直し、彼に背を向けて診察室か  
らでるためにドアノブを握った。

その時だった。

「もう一つ聞きたいんだけどね」

カエル医師は僕を呼び止める。

「何ですか？」

「君、最近のその元気のなさは大丈夫なのかい？」

狙いすましたような質問だった。

「どうしたんです？ いきなり真面目になっちゃって」

「僕は最初からいたって真面目でね。僕は医者だから、誰かが苦しんでいるのを散々見るけれど、それでも治った後に見せる笑った顔が、僕の一番大好きなものなんだよ。そのためなら、僕は何だってする。医者として、患者のためになるものなら何だって揃える」

それを聞いて、僕は一つ息をはく。大丈夫であることを証明するために、笑おうとした。

どんな風に笑ったのか、もちろん僕にはわからない。

「大丈夫ですよ。自分で決めてこうなったわけです。いつも通り元気ですから」

「……そうかい」カエル医師は頷いた。

「それじゃあ診察は終わりだよ。またぜひ来るといい」

「できることならお断りしたいですね」

それでは、と僕は診察室を後にした。

廊下を歩いて待合い室に出た。夏休みとあってなのかどうなのかはわからないが、今日は外来患者は少ない。この大きな待合い室でも座っているのはあちこちにポツポツと数えられるぐらいの人数しかないかった。

「あれ？」

だから、普通ならすぐわかるはずなのに、最初僕は見つけることができなかった。

「青葉？」一緒に来たはずの青葉が、どこにも見当たらない。

「おかしいな……、あ」

病院のテラスに繋がる窓代わりの扉が開いている横に、青葉の車椅子があった。

「何だ、そつちか……、っておいっ！」

僕は、咄嗟に車椅子の所まで走る。

冗談じゃない。

青葉は車椅子なしにどうやって歩いたって言うんだ。

それにここのテラスは、二階だぞ。

「青葉!!」

僕は荒々しく扉を開け放った。太陽の光がまぶしい。一瞬視界がなくなつて、次の瞬間。僕の目の前に荒んだ光景が広がった。

青葉が毛布にくるまって天日干しにされていた。

ほへえーん。

出したことのないような間の抜けた声が僕の口から発せられる。

いや、いやいや。

もうツッコミどころありすぎてわかんねえ。

「あの一、青葉……青葉さん？ 一体何をしておられるのでしょうか」

「ちょっと頭痛くて、おとなしくバファリン飲んで毛布にくるまうて天日干しされてるの」

やってしまった…罪悪感が半端じゃない。

もうちょっと、あの話に触れときゃよかった！！

頼む、やめてくれ！

笑顔で「どう？ どう？」と僕に感想を伺うのはやめてくれえ！



「もう本当にすいませんでした！」  
謝って済んだらいいのにな、なんて思う。

閑話休題、というか、もともと重要な本題なんて無いのだけれども。

「青葉……なんか最近、コメディ色強くなってきたくないか？初期設定が全くもって皆無な状況になりつつある気がするぞ」

「それはなんたる酷い御言葉か。崩は語り部、主人公っていう生涯安泰な立場だから呑気にしてられるけど、私は単なる一ヒロインだからぼうつとしていると出番がなくなったり、忘れられたりするんだよ。今回だって、あらずじ上私は最初と最後にしか出ないから、今のうちに読者の皆さんにはぼうちり私の存在をアピールしておかないとね。そのためなら少しぐらいの無理は厭わないんだよ」

「冷えピタ、青葉に出番上げてえー！！」

健気過ぎる……

「……あ、どうやら近々出演が決定したようだぞ」

「うなー！！」両手でバンザイポーズの青葉。

ていうか、正規ヒロインなんだから大丈夫なはずなのにな……

「ところで、どうやってテラスに出たんだ？車椅子使ってたし」

今はテラスにはいないんだけど、ふと気になって僕は青葉に尋ねる。

「それは、これこれ」青葉が後ろからよろっと長い棒を取り出した。

「あ、松葉杖か」

「その通り」

えへへ、と嬉しそうに、その松葉杖を両脇に挟む青葉。肩が動いた

せいで、綺麗な長い黒髪が揺れて、肩の前後で不均一に量分けされる。前側に残った少しの髪は、青葉の表情を僕から少し見にくくした。

「私も甘えてばかりじゃ、駄目だからね」

「……」

甘えてなんかいないのに。

青葉がいけないんじゃない。

決してあの時、カルマがさらわれた時、自分が守ってあげられなかったことが悪いわけじゃない。

悪いのは、

僕なのに。

「東雲さーん。東雲青葉さーん」  
看護婦が青葉を呼んだ。

「あ、はい」

青葉は車椅子を押して、声のする方向へ行く。

「なあ、青葉……」

「崩は悪くない」

呼びきる前に、青葉は呟いた。

「崩のおかげで、エバンス君もカルマちゃんも助かったんだもん。」

だから、崩は悪くない」

振り向いて、僕に笑う。

「ありがとう」

青葉は角を曲がって見えなくなった。

「――」

肺から空気を追いやる。

やめてくれなんて言えなかった。

笑わないでなんて言えなかった。

酸欠になる前に、口が空気を取り込んだ。

全然足りない。

空気が足りない。

酸素が足りない。

何かが足りない。

それは、

決して補えない。

「傑作だ」

自分をあざ笑って、窓の外に見える、澄みきった空の下で躍動する  
学園都市を眺めた。

今日は8月20日。

エルギオンス兄妹がアパートを去って、

一週間が立つ。

755

†

余談。

うん、これは余談の部類で間違いない。

正直、このような場で話す事じゃないと思う。

喋る僕はもちろん、これを聞く方にだって何かしらの違和感と恥ず

かしさが芽生えるだろうし、まず第一に理論もくそもへったくれもない。あーはいはいそれがどうしたんですかよかったですねすごいね面白いねあら楽し！となってしまっのが、オチとしてはつきりと僕の目の前に置かれている。

いやでもそれでもだけれども、

敢えてここで話してみようと思う。この話を根こそぎ無視してもらってもいい。

これはあくまで、

僕が体験した感覚的なものであり、

エルギオンス兄妹を置いてきた理由だからだ。

……おっと、完全に余談じゃない方向性が高まってきた。いやもちろん、今から話すこと以外にもエルギオンス兄妹をイギリスに置いてきた理由がある。

それは取り引きだ。

僕がイギリス清教に入り、カルマを助ける。

代わりに、

イギリス清教へエルギオンス兄妹を所属させる。

考えてみればわかることだった。あのイギリス清教が、たった僕一人相手に脅されたって何が恐ろしいっていうんだ。

その気になれば、いつだって僕を殺せたって事。

それを語らなかつたことは謝罪する。

いわゆる、後付けってやつ。

いや、本当にすいませんでした。

まあそれが本元。

でも僕にとって、

それは理由のほんの一部でしかない。

2%にも満たないね、いやほんと真面目に考えて。

断言する。

これは、ほとんど全てが僕の決断によって決まったと言っていていいい。

青葉も

扇さんも

スタイルも

神裂も

エルギオンス兄妹自身も全く関係ない。

長い前置きはこれくらいに、

前置きよりも短い無味乾燥とした語り。

家族について話そうと思う。

僕は今まで、家族はアパートの住民だと思っていた。もちろん、サ  
ンタクロースを信じる無垢な子供じゃあるまいし、辞書で調べた家  
族の意味に今更シヨックを感じたり、夢のあることを語ったりする  
のはなかった。端的に言ってしまうえば、僕の場合の家族はみんなと  
違うと割り切っていたと考えていい。

でもだからこそ、

その上それいっそうに、

家族を大切にしてきた。

僕にとってかけがえのないもので、この世でもっとも大切な人たち。  
彼らの周りにいることで僕は何かを満たしていた。

だけれど、

別にそれでおごっていたわけじゃないけど、

知ったような顔をしていたわけじゃないけど、

僕にとっての彼らのように

彼らにとっての僕も、きっと大切なものに成りつつあるんじゃないかって

心のどこかでそう思ってた。

なのに、

それなのに、

イギリスで見たエルギオンス兄妹は違った。

あの絵画に描かれた彼らは違った。

なんだか、衝撃的だった。

こんな笑い方をすることを初めて知った。

はるかに、そっちの方が幸せそうに見えた。



見たことない二人だった。

違いは至極単純、

ホンモノ、ニセモノ  
家族が僕。

どっちがいいかなんて一目瞭然。

ニセモノはホンモノの、

代わりになんてなれない。

そう思ったら、なんだかよくわからなくなって、  
なんだか馬鹿らしくなって、

僕はイギリス清教にエルギオンス兄妹を預けた。

だってそうだろ。

あんな笑顔、見たことないよ。

僕の前で、あんなに楽しそうにしたことないよ。

お願いだから、そういうことなら先に言ってくれ。

まるで、それを嬉しく思っていた僕が、

馬鹿みたいじゃないか。

だから、

僕はエルギオンス兄妹をイギリス清教に預けた。

幻想に囚われた家族ごっこは、

もう終わりなんだ。

御静聴ありがとうございました。

このような余談にお付き合いしてくださった方々には感謝の意とお詫びを申し上げます。

どうぞ気分転換をした後にでも構いませんので、

本編へお進みください。

+

「しらけた顔はやめてくれないか」

不覚にも、今日のような外来患者数の少ない病院だし、声なんてかけられないと思うことさえ怠っていた僕は慌てて振り返ってみる。

しかし振り返ったら振り返ったで、そばにそびえ立つ黒い壁。彼は僕から2人分離れた所に腰をおろす。

「ス、ステイル!？」

僕と同じく必要悪の教会の聖教師、ステイル<sup>ネセサリウス</sup>「マグヌス」。

「どうしてここに!？ イギリスにいたんじゃないのか!？」

「こつちにちよつとした用事があったね」

そう言つて一息つくステイル。どうやら、煙草が中で吸えないから外にいる内にたらふく吸つたんだらう。服にこれでもかと言わんばかりに紫煙が染み付いて、周りには非常に迷惑だった。というか、待合室には二人だけだから、僕になんだろうけれど。もっとも当の本人は早くもニコチンを切らしたらしく、少しイライラしているみたいだ。

一瞬ステイルと目が合った。僕の顔を見たステイルは、考えるような顔つきになつたかと思うと、ふつと小さく笑う。

「大丈夫、君に会いにきたんじゃない。僕は仕事が終わつた後、あてもなく歩いていたらたまたま君を見つけただけの話だ」

「……そうか」

何故だか、少しがっかりする。いや、元に戻るって感じだろうか。僕は慌てて普段通りに装つた。

「今日一日は休みなのか？」

「まさか、今日一日のこの時間だけさ。僕も君みたいに、一日中暇してみたいものだね」

「随分な言い方で」まあ、暇なのは確かだが。僕は少し苦笑する。

「んで、どんな用事で？インデックスに会いにきたのか？」

「冷えピタの出演依頼を受けたのさ」

「そついや、そついうネタもありましたね……」

いや、まさか普通に進むとは思ってなかったけどさ。もうなんか頻繁にこの世界が壊されつつある。というか崩壊してる。

「暇なんて嘘じゃねえか」

「何にも理由は必要だ」ステイルはとうとう煙草を吸いはしないものの、口にくわえてフィルター部分を噛み始めた。

「それに、僕は今非常にイライラしていてね」

「文脈関係なさそうだけど聞いてやる。ってか、単に煙草吸えないからだろ？」

「違う。僕はイギリス編に関して、とてもじゃないけれど苛立ちを抑えきれないんだ」

「？ どうしてだ？」

「これだからイライラするんだよ、ほんと。じゃあ今からイギリス編について座談会でも開こうじゃないか」

「持って行き方が雑過ぎる……」

「僕のせいじゃない。冷えピタのせいだ」

というわけであ、

座談会《イギリス編》始まりまーす。

「『座談会』。えー、『座談会』とは特に意味なし。僕とステイルが待合室の椅子に座ってイギリス編を振り返りながら少し話でもしようかというものです。というよりはステイルの愚痴を聞きます。座って談義するから座談会。今日のゲストはご存知、ステイル・マグヌスさんです」

「元ネタに比べて有り得ないくらいクオリティが低い……」



「い、一体何があつたんだよステイル!?」  
僕の問いかけに、噛んでいた煙草は口から離れて床に吸い込まれる。  
彼の無気力な口は、歪に震えながら形を変えて、残酷な現実を言葉にした。

「僕が出ていないんだ」

あ。

「あの場に、僕は確かにいたんだ。君がヒューリツチに宣戦布告する、『創られた希望』の最後に、ちゃんといたんだ。一緒に戦う、そういう流れだった。なのに……どうして……」

僕は出てないんだ？……

「

「……ステイル……」

「どうしてイノケンティウス魔女狩りの王は出れて、僕は出れないんだ？ 僕は一体……」 虚ろな目のステイルは、ただ病院の非常階段を示唆する電灯を見つめる。

「ステイル……そう追い詰めるなよ！ いや、書かれてなかったかもしれないけどさ、お前の炎……あ、熱かったぜ！？ お前の気持ち<sup>が</sup>伝わってきて凄<sup>い</sup>良かった！！ もうー冷えピタも罪な奴だよほんと！ ステイルめちやくちやくこよかったのにー！！」

「……薄い同情はやめるよ、主役」

うっ、冷たい視線…… 確実にとくぼつがぐつとさがった。

「僕はどうせ、そんなものさ。活躍できない。そういうキャラなんだよ。上条あじつみたい禁書目録（彼女）を守ってあげることさえできなかったんだから」



「話が段々でかくなってる!! それとこれとは別々たる!?!」  
「……もし、これから魔女狩りの王が必要になった時は呼んでくれ。いつでもどこでも駆けつけるから。時給500円だと嬉しいな」  
「金取るんかい! しかしそれにしても安すぎる!」  
「あと、Fortis931(我が名が「最強」である理由をここに証明する)でやらせてもらってます」  
「魔法名乗っちゃた!」

使い方が間違ってる。

とまあ冗談はさておき、

「いややっぱり、何か話があつたんじゃないのか?」  
「そうだな。そろそろ話すでしょう」

あつたのかよ。

「でも大したことじゃない。確認さ。君は、助けるためにしようがなかつたから成り行きでみたいに捉えているかもしれないが、もう僕たちイギリス清教、ネセサリウス必要悪の教会の一員だつてことのね」  
「わかつてるさ、それくらい。ちゃんと頑張ってるぞ。聖書読んでるし」

「ここで馬鹿にしてるのかと言えば、聖書を馬鹿にしてしまつ……」  
「イライラは収まらないスタイルだ。」

「実は、イギリスへ転勤となった」

「ええ!? 嘘だろ!?!」

「幸い』とある無題』だから、魔術に変わっても大丈夫だな」

「いやいや、いろいろ意味あつて無題をつけたんだよ! それにこ

れ、学園都市で奮闘する話だぞ！」

「冷たいんだな、冷えピタは」

「暗に『だから』を強調してまとめるんじゃない！」

「……冗談だ。何だ、てつきり喜ぶかと思っていたんだが」

「何でだよ」

「彼らに会えるからさ」

「……」ステイルの言葉に、僕は黙ってしまふ。

「もう会わないつもりなのかい？」

「……」

「本気で嫌いになったのかい？」

「それは違う」

僕は即座に否定した。そういうことじゃない。

「……あいつらの家で、家族の写真を見たんだよ。……凄く幸せそうな顔しててさ……びっくりした。4年間一緒にいても、あんな笑顔を見るの初めてだったんだ。だから、イギリスに残ったほうが良いんだよ。きっとこれ以上ないくらい幸せに過ごせるはずだ。僕なんて必要ない」

僕は笑ってみせたけれど、ステイルは笑わなかった。

「そろそろ時間切れだ」席を立てて煙草を口にくわえると一直線に外を目指す。時間がないのかニコチンが足りないのか、どっちかはよくわからない。

「なあ、ステイル」

立ち去る彼を、僕は呼び止めた。

何気なくさりげなく、こんなことを聞いてみる。

「合ってたかな？」

「……僕に聞くことじゃなかったね」

再び歩き出したステイルは外に出て見えなくなる。

なるほど、ごもつともだ。

†

「あなたも、この病院が好きなのですか？」ステイルが去った後の待合室、二人が一人になっただけのその場所で、その一人の僕はまさか話しかけられることなんてないだろうとまたまた思い込んで物思いに耽っていると、突然後ろから声をかけられた。

後ろを振り返ってみれば、これまた長身のスラッとした体格で、天草式で使われる術式を密かに表しているらしい日本では少し浮いてしまうような服装の美少女が立っていた。うん、今回はちゃんと美少女にしたぞ。

「神裂か」

「お久しぶりですね」神裂の礼儀正しい所は、古き良き日本が反映されているみたいだ。今の日本はそうでもないだろうけど。

「ステイルを見ませんでしたか？」

「見たも何も、さっきまで喋ってたしな」

「そうですね」うーん、と何やら悩む素振りの神裂。「どうしたんだ？」という僕の疑問に少し苦笑して答えた。

「せっかく仕事の合間を縫って会いに来たというのに、途中で何だか会いづらくなってしまいました」

「ああ、インデックスと上条に会いに来たんだ」  
ステイルの用事とは、そういうことか。

「ええ、恥ずかしながら」横、いいですか、と聞いてきた神裂の言葉にどうぞどうぞと大袈裟な丁寧振りで神裂に勧める。一人分ぐらいの席を開けて腰を下ろした。

「ありや、会いに行かなくていいの？」

「いえ、あなたともその、話をしたくて……」

「……まさか、座談会？」

「座談会……ですか？」

「あ、いや知らなくていい。さっきステイルとやったんだけど……悲しみしか生まなかった。誰も幸せにならなかった」

「何やら、かなり悲惨なものだったのですね」

遠い目な僕に、気を使った神裂だった。

「それで話って何だ？ ネセサリウスの件か？ステイルから少しは聞いたんだけど」

「そうですねですか。ならば大丈夫……あ、いえ……私はただ、世間話の一つや二つでもと……」少し恥ずかしそうにこもったような声で話す。容姿からはあまり考えられない。

「あの、今日は一人ですか？」

「いや、青葉と一緒に健康診断を受けに来てたんだ」

「そうなのですか」意外、みたいな表情の後、またすぐ考えるような素振りを見せる。「えー、あー……」などと苦勞する姿はおそろしく、僕に氣遣つて会話に沈黙を生まないようにしているんだろう。何だか神裂に申し訳ないな。

「神裂、別にそんな無理して会話しなくてもいいんだぞ?」

「あ、いえ……喋る事を考えながら来たのですが……やっぱり、目の前にするとうまくいかないものですね」

……なんだ、この展開。

僕の受け取り方で色々という意味変わってくるぞ。

「あ、思い出しました。これはあなたに聞いておこうと思っていたので、言わせてください」

な、何だ……

「あなたは……」

まさか、これは……

もしかして……

春が………!!

「上条当麻とお知り合いですか?」

かみじょうとつま……………

上条かよー!!

心の中で一度、上条をボコボコにするシミュレーションを行った。

どうやら春は遠い。

「……………うん、知り合い。超知り合い……………何故か知り合い」

「そうですか。やっぱり」

「ん、やっぱりとは？」

「何かそんな感じがしたんですよ。性格がというより、行動パターンや必死なところとか、いろいろ重なるものがあります」

「へー、そうなんだ」

初めて言われたな。何か新鮮だ。

「お気に障りましたか？」

「いや、全然……………ただ、「僕は付け足した。」

「上条と僕を、一緒にしない方がいいよ」

「……………どういう意味です？」

「上条に失礼だったこと」ははは、と笑ってみせる。

「あいつは凄いのよ。幻想殺イマジネブレイカーしもそうだけど、あいつの性格や、もつと言え、心が綺麗だ。自分の能力のせいで不幸になっているかもしれないのに、そんなこと関係なく他人の幸せを優先する。僕はきつとそんなこと……………できないだろうな」

あいつは、やっぱり凄い奴だと思う。だから、僕みたいなかと一緒にしない方がいいよ。

僕の言葉に、神裂は「そんなことない」と反論するけれど、

やっぱり、

「そんなこと、あるよ」

僕はそう言う。

それ以外言えない。

「そう…ですか…」神裂も僕の雰囲気を感じてか、ただそう呟くことしかなかった。

綺麗事を言う資格なんて、僕にはない。

こんな僕には、何も無い。

「では、これからあなたのことはヘタレと呼べばいいのですね」

「今までも思っていたけれど、やっと確信した。お前ら全員極端なんだよ！ 中間はどうした、中間は!？」

普通って二文字をお願いだから覚えてください。

「にゃー、これはこれはこんなところで、二人楽しくお楽しみ会ですかにゃ?」

神裂と僕以外の声がして、スタイルが出て行った出入り口から人影が現れる。まあ、言葉使いからわかっってしまうが、そいつは僕の友人だ。格好はイギリスへ発つ時に会った服装と一緒だった。

「つ、土御門!……」神裂が少し苦手意識をほのめかすような口調で呟く。

当の本人である土御門は、ニヤニヤが止まらない。

「ねーちゃん、あの二人に会いに行くはずなのに、どうしてこんなところで何してるんだにゃー?」

「い、いえ、私は別に……ちょっと彼らに会うのが気恥ずかしく思

「ねーちゃんが脱ぐにゃー!!」

「何でそうなるんですか!! 間を省き過ぎでしょうが!!」

……

何だか、楽しそうだね。

「よっ、桐原」一通りボケて満足したのか、「私は無視ですかー!」と嘆く神裂を置き去りに土御門は僕に軽く挨拶をした。

「おう、土御門」

「無事で良かった」

「ありがとさん」なんてたわいもない、お決まりのやり取り。

土御門はおそらく、今回で僕の能力のことを少なからず知ったはずだ。それでも、それなのに、彼は僕に何の追求もしなかった。でも、それはきつとわかっているのだと思う。



「無事が何より、かな？」

「そうだにゃー。何よりも無事、だ」

「……ははは、そうか」

追求は止めておかないと。それこそ、土御門の計らいに対して無粋  
つてやつだ。

「？、何を話しおられるのですか？」

神裂が不思議そうに尋ねた。僕はそれに笑って答える。

「別に……、戯言たわごと」

しかし、「な？」と同意を求めて振り向いた土御門の顔は、

歪んでいた。

「どうした、土御門？」

「ああ、いや、何でもないとにゃー」すぐに表情を変える土御門。

「そうか」僕は、一切気にせずその顔に呼応して笑った。

その時の僕は、まだ何も知らない。

「それにしても、お前は罪な奴だにゃー。これじゃあ、青葉も怒つ  
て帰っちゃうわけだ」

「……は？」あまりにもさらっと流した土御門の発言に、僕は噛み  
つく。

「待て土御門。青葉が帰った!？」

「そつだにゃー。さつき、怒りながら病院から出て行くのを見かけたぜ。何かと思つて元を辿れば、案の定イチャイチャ話す桐原と神裂に遭遇したつてわけだ」

「なっ、別にイチャイチャなんか!……」

……したっけ?

いや、してないしてない!

願望はあつたかもしれないけれど……もうこの時点で、どう弁解しても僕に負があるか……

「あちゃー…青葉のやつ、声を掛けてくれれば良かったのに」

「……上やんといいい桐原といい、本当に乙女心がわかってないにゃー」

「え? どうしてだよ?」

「それだからだ」土御門の答えに、うんうんと神裂も頷いた。溜め息まで吐かれるのだから、何だか凄い罪悪感が僕を襲つた。

「…それじゃあ、僕も青葉を追つて帰るよ」僕は席を立ち上がつて、最後に挨拶をする。

「これからよろしくな」

「ああ、よろしく」

「あと、それと」これだけはちゃんと言わなきゃいけないと、僕は強く思つた。

「今回は迷惑をかけた。ごめん。だけど、もう大丈夫だから、心配しないでくれ」

「わかつてるにゃー。言われなくても心配しないぜ?」ケラケラと笑う土御門の横で、神裂も優しく微笑んだ。

「では、また」

「ああ」僕は二人を背に歩き始める。

「桐たん」

出口のところ、土御門が、今度は勝手につけた僕のあだ名を呼んだ。

「何だ？」

「今は夏だにやー。日がまだまだ登ってる。ゆっくり帰れよ」

「そうだな」

僕は笑って答える。

たまにはそういうのもいいかもしれない。

そんなことを考えて、

でも、帰ってもエルギオンスあいら兄妹がいないことを思い出して、

途方に暮れて、

僕の足は、まだ夏の日差しが残る夕方の学園都市に重く乗り出した。

「……………」  
「……………」

「土御門、少し質問があるのですが……………」

桐原崩が去った後の、閑散とした待合室の中で、最初に発言したの

は神裂だった。

「ねーちゃん、今俺もそう思ったところだ」

「もしかして…ステイルが言い忘れてるのでは？」

「……確認、怠っちゃったぜ……」

沈黙が挟まった後、しまった、と言わんばかりの表情を浮かべて、神裂は呟いた。

「まさか彼は、あの子たちがいることを知らない？」

†

いつもの通学路が、やけに物淋しく感じるのは何故だろうか。もちろん、答えは知っている。知っているけど知らなくて、よく知らないはずなのにずっと知っていた。禅問答みたいだ。でも、今となってはそれもいいかもしれない。

「なんて、感傷的になる僕は如何なものだろうか」

そう呟いて、僕は学校の帰り道を歩く。

夏休みに入って、初めて学校から帰るんじゃないだろうか。何だか新鮮に、いや、

くすんでいるように感じる。

「……」

わかっているとも。  
今更気づいた。

「…失格…かな？」

エルギオンス兄妹を幸せにできなかった。

何一つ、代わりになつてやれなかった。

家族なんて、無理だった。

アパートのそばにある桜の木が見えてくる。

もう、アパートはすぐそこだ。

エルギオンス兄妹のいない現実は、目の前だ。

「ごめんな」

本当にごめんなさい。

兄らしくなかってごめんなさい。

家族らしくなかってごめんなさい。

でも、きつと向こうでは笑えると思う。

僕よりもきつとた

「崩兄!!」

「っ!?!」

ぱっ、と、横道から突然現れ、小さな少女が僕の足に飛びついた。

「えっ?」

今、何て。

聞き慣れたその声は、

イギリスに置いてきたその少女の声は、

脚元で発せられる。

「崩れろ！！」僕の服に頬を擦り付けて、勢い良く顔を上げる。

「これは……？」

「作戦大成功ですな！」

少女の飛び出してきた道から、青葉が扇さんに車椅子を押されながら現れた。青葉の言葉の後に、扇さんは煙草を吹かして笑う。

「ははは、こりゃ思った以上に大成功だ」

「え……………扇さん、青葉……………これは一体どういつ」

「……………」

後ろで声がした。

これも随分聞き慣れた声だ。

だけどどちらも、

一週間聞かなかった声。



「それは本人に聞いてみな」

ゆっくりと回る頭についている僕の眼は、視界にある少年を捉える。

いつも通りの日常に欠かせない、

一人の少年が視界に入る。

「何だよ、俺のいない間に随分とのろまになったみたいだなあ？  
ツッコミがまだなんですけど？」

「何で……おま」

「遅い!!」

「ぶっ!!」少年から放たれた黒い物体が顔面に直撃し、顔全体に  
広がる。

「マイナス二点でございやす」

「くさっ!! 何だよこれ!!」

「道端で作った泥団子」

「道端で作ったの!? 絶対いけないもの入ってるじゃん!! し  
かも臭いの確実にそれだろ!!」

「水がないから、犬に分けてもらった」

「うおおおおおつ！！」全速力で顔の泥を拭う僕。

それを少年は横で笑っていた。

「挨拶がエキセントリック過ぎるんだよ！」

「外国人だから、日本人よりもファンキーなのさ」

「そういう時だけ外国人使うな！」

僕と少年の間に、少しの沈黙が挟まる。

「退屈だから、戻ってきたんだとさ」扇さんが僕の横まで来てそう呟いた。

「何で……どうして……」僕は、振り絞った声で聞いた。

「僕は、家族じゃないのに」

「……別に、」その少年は僕に表情を隠した。

「……………」

「ほら、日本でいう義務教育だから、まだ学校に行かないといけねーんだよ。それに

ここが僕の家であり、

家族なんで……

「

僕は耳を疑う。

自分で否定した彼らへの言葉が、彼らから肯定で返ってきた。

「そりゃさ、」扇さんが横で笑った。

「家族に代わるものなんてないだろうけれど、私たちに代わるものもないんじゃないのか？」

「そう、そういうこと」「少年は慌てて、扇さんの意見に同意する。

「まあ、出来損ないの兄を面倒みるのはしんどいけどさ。それもそれで足りなくなつて」

「……………何だそれ」

「あらー、もしかして泣いてます？」

「な、泣いてねえ！」「ビシッと直立不動で空を仰ぐ僕。

「ほんとだ。崩、泣いてる！」

「これは泥団子のせいだ。それに青葉だつて泣いたろー！？」

「わ、私は…ちょっとだけだよ…！」

「泣いたのかよ。しかもそれだと意地張れてないし……………ははは」

突拍子もなく、何だか笑えた。

こんな僕も、少なからず兄らしい。

代わりが効かない馬鹿兄で、

アパートの住民の、

大切な家族の一員。

久しく感じる。

嬉しくて、やっと笑えたような気がした。

やっと、満ち足りた。

「さあ、みんなで帰るか」扇さんの誘いに僕たちはいつも通り賛成する。

「あ、ちょい待ち」そう言うと、少年はその右手に小さな少女の左手を握って僕の前に立った。

「お前、言い忘れてることないかなあ?」おどけた少年の口調に、  
「ないかなあ?」とおそらくわけもわからず、その少女は真似して  
後続く。

「……なんだよ?」

「常識はどこに行った? お前の頭は空っぽか?」

「そこまで深刻なの!?!」悩み続ける僕に、少年は呆れ果てて言っ  
た。

「俺たち、帰ってきたんだけどなあ」

「……ああ、なるほど」

答えがわかった僕は、思わず微笑んでしまう。

「お前ら……本当生意気だわ。一体何者なんだよ」

「は、馬鹿言つなよ」少年は、当たり前のように答えた。

「俺たちは、家族なんだぜ?」

その言葉に、はははと笑い返した。

勿論、忘れたわけではないじゃないですか。

覚えてますとも。なんて言っただって、

家族なんですから。

僕は空気を吸い込んで、心から笑って見せた。

「お帰り」

それに反応した笑顔は、今までに見たことがない。絵画の中を探したって、アルバムの映像の中を探したって見つからないような、

初めて見る笑顔で、

エバンスとカルマは

僕に笑いかけてくれるんだ。

「「ただいま!」」

僕たちは、夕日が輝く学園都市の中を歩いて家に帰る。

道にできた影は、

しっかりと、はっきりと、

一直線に繋がっていた。

†

イギリスのとある郊外にひっそりとその墓地はある。よく整備されているせいか、周りの自然は見映えがよく、地面にある大理石の墓石は墓だというのに好印象を与えてしまうぐらいだ。

その中の一つの墓に、その女性は佇んでいた。驚くほど長い髪を一旦折り返して止めて、自分で作ったお気に入りの修道服に身を包み、日傘をさしている。

彼女の目の前の墓には『エルギオンス・ラッセル、ティキ・シトラス、ここに眠る』と英語で掘られていた。その小さな文字の横に小さな花束が二つ、置かれている。

「別に、感傷的になつたわけではなきに尽きるのよ」アークビショップ 最大主教、ローラースチュアートは墓石に話しかける。

「今回の私の目標は達成したりけるわ。エルギオンス兄妹のイギリス清教への服属」

墓石が喋ることはない。

ローラにはそれが、少し憎らしかった。

「ティキ・シトラス、あなたはいつもそうだった。力があるにも関わらず昇進を避け、結婚を選んだ。私にとって、そんなあなたがねたましけるものだったわ」

力のある者を、ローラは越したはずなのに、幸せは何故かいつもシトラスにあった。

「でも憎いことに、あなたのおかげで幸せを知れりけるのだけれど」最後に小さく微笑んだローラは、日傘を翻して墓石に背を向け歩きます。迎えの車が近くにあった。

「安心したりけるのよ、シトラス。あなたの子供はいい家族に恵まれたるのだから」

ローラはその墓地を後にした。

エルギオンス夫妻のその墓石には



ひまわりをあしらった小さな花束が二つ、

風に揺られて、墓石を飾っていた。

後日談 (start) (後書き)

土御門の件は次に持ち越しです。これが、次章の火種になります。・

いつもと違うエルギオンス兄妹はどうだったでしょうか？稚拙な文ですが、楽しんでもらえたら嬉しいです。

今回でイギリス編（エルギオンス兄妹と僕）が完結しました。ご愛読してくださる皆様がいるおかげでここまで続けることができました！本当にありがとうございます！！これからも少しずつ頑張っていきますので応援よろしくお願いします！

感想、指摘などはどうぞ気軽にしてくださいね。  
待っています。

## 後日談波紋（前書き）

遅れましたm（――）m

すいません。長い間投稿ができませんでした。

少しスランプ状態でした、そしてまた今回も

長いです。

そして、新キャラが登場するのですが、  
何だか、結構ヤバい奴です。

はい、かなり。

もしよければ、批判の声もあがってくるかもしれないのでその時は  
聞かせてくださいね……。

では、つまらなくなってもぜひ最後まで読んでくださいね。

後日談波紋です。



いや、もう本当に。その一言に尽きる。

というか、このまま続けるとどうでもいいことが規則性を帯びてどこまでも続きそうだ。

「夏って……暑いよね」ジャージの下にTシャツといった、いかにも高校一年生としては何を基準にしたのかはわからないが模範的なけれどしっかり者からしたら少しだらしのないそんな服装で、僕は布団の敷かれた簡易式ベッドの上に寝転がっている。

暑くて寝れないとはお気楽この上ないですな、なんて舐めてかかったのが間違いだったのか……、

「いや、違う」

絶対違うね。これは間違いなく、

住民あじびのせいだ。

「今までの経緯を説明しよう」もうここからはカギカッコつけない、めんどくさいから。

昨日、我が家であるアパートにとある贈り物が来た。それは、全員が待ち望んでいた物、

空調機だ。

どうやら明細書を見る限り、イギリス清教の最大主教ローラースチアイクヒショッフユアートが、何の理由もなく寛容的な太っ腹精神で僕たちに贈った

らしい。

おかげで昨日はその後の二時間、エルギオンス兄妹は「流石は我らの最大主教様アイクビシヨツプ！だ」と体を無闇やたらに最大限に酷使して暴れ喜んで拳げ句の果てに熱中症で意識を失い、青葉は青葉で「ご飯にとつて最大の調味料は空腹、の原理だよ、崩！」と脈絡が全くない意味不明な言葉通り、最高気温31度のこの炎天下の中、空調機の涼しさの実感を倍にしようとして冬に着るようなダウンジャケットを重ね着し、暑さ我慢大会を一人で開催した末路には、大会新記録3分2秒を叩き出して熱中症で意識を失い、扇さんは何を思ったのだろうか、「何故終日は禁煙…？」と意味深長な発言を残して、日陰に座り込んだまま動かなくなった。

以上より、まだクーラーの恩恵を享受する前に、クーラーの存在だけで死者3名（扇を除く）を出した「0822事件」の後である今日やっと、僕たちはクーラー本体にたどり着けたわけだ。

いや、しかし、ここで

単純明快で絶対的な欠点を、知ることになった。

クーラーが、3つしかない。

………

青葉（1）

エルギオンス兄妹（2）

扇さん（3）

僕（４）

.....

もう、後は喋りたくないんで、ご想像にお任せする。

ついつきシリアスな戦闘を書き終えたというのに、もう一度書く気にはなれない。

悲惨だった。

まあ、今までの説明＋読者の皆様の想像の結果、クーラー争奪戦で敗走した僕は一人寂しく自分の部屋で暑さに苛々しているわけだ。実際、涼しいはずの僕の部屋なんだが、負けた悔しさが腹立たしくて、もしかしたらこれ以上の涼しさがあると考えてしまつて、体感温度は現在進行形で加速し続けている。

「くっ、ひどい仕打ちだ……」

プルルル、

僕の携帯が初期設定の単調な着信音を奏でた。

「ん？」

携帯を開いて、画面を確認する。

「非通知？」 通話ボタンを押して、耳元に近付ける。

「はい、もしも」

「涼しいいいいい!!」

ブツッ。

エバンスとの通話時間1秒。

「ははは、これはもうあれだ。絶対イギリス編がなくなってる。僕の威厳は？あの家族的団欒は？Please tell me the truth!!」

もうこうなれば、ひきこもりしかない。そうだ、ひきこもれば、全て上手くいくじゃないか。もう誰も傷つかないじゃないか。

プルルル、とまた電話がコーリング。

……。

僕は携帯を手にとる。

「はい、もしもし」

「何故、終日は禁煙……?」

「あんたは一体何なんだ!？」

僕は携帯を投げ飛ばす。



「いや、そこはエバンスが『涼しいいいいい！』で来たんだから、扇さんも『涼しいいいいい！』でしょうが！ こういうのはテナポが重要なんだよテナポが！！ こんであなたはどれだけ終日嫌いなんだよ！？ もうわかったから、ていうか今日火曜日だろうがぁ！！」

はっ！？

とあるアパートの一室、クーラー争奪戦に敗北したせいで躍起になっているにも関わらず、何故かヤジというボケに対して熱く語ってツッコミをしている自分に気づいた。

……………。

「……………暑い」

ピンポーン。

「……………ふふふ、いいねえ……………いいねえいいねえ、実にいい！」「マッドサイエンティストを気取って、僕は狂う。

次は青葉か。

ドンドンと、勇み足で僕は小さな僕の部屋を横切って玄関へ向かう。ドアノブを回した。

世界が開かれる。

「さあ、青葉！！ 思う存分ボケるがいい！！ 今日僕は冴えてるぜ！！」

「…………えーっ、と」

両手を広げ空へと飛び出しそんな僕を見て、目が点になる青葉。あはは、と小さく苦笑する。

「そうじゃなくて…………今日は大事なお客様が」

「お客様？」

「そうなのですよ！先生は崩ちゃんを連れて行くために来たのです！」

「…………あ、」

僕は扉を閉めた。

「え、崩！何で扉閉めちゃったの！？」

「天からお召しの声が聞こえた」

「そ、そんなことないよ！ 結構近くから聞こえてたでしょ！？」

「いや、あれは恐ろしい宣告だった」

「一体どんな風に聞こえたの！？」

「先生は崩玉を手に入れることできたのだよ、黒崎一護」

「ブリーチ見過ぎだよ！これインデックスの二次創作なのに！後の方完全に脳内イメージじゃん！」

「も、もう！ 崩ちゃん！」

あ、聞いたことがあるな、と思われるような声が扉の向こうから発

せられる。

って、冗談冗談。

「そんなバカなバナバナナー!!」

と、扉を開けて最高の笑顔でボケてみた僕。

しかし、青葉の膝の上に丁寧に靴を脱いで僕と高さを合わせようとした見た目が小学生にしか見えない、一応大人であるその女性は小さな肩をふるふると震わせて今にも泣くスタンバイができています。

「えっ、いや、ほら、あの、ジョーク。ジョーク、ですよ……………  
ね？」

「崩ちゃん……………」

僕の弁解も時すでに遅く、涙がたまって目を赤くしたまま、ビシッと僕に人差し指を指し示し、

小萌先生は叫ぶのだ。

「ちゃんと補習授業を受けるのですよ!!」

「あ、今出てきました。パーカーで顔を隠されていますが間違いないでしょう。幼女誘拐と監禁の容疑で連行される、桐原崩被疑者で」

「ずうえべし」

「くへっ」

とまあ、いつも通りの僕とエバンスのくだらない一コマだった。

「お、崩。シヨックから立ち直れないと思いきや、もう出かけるのかよ」

「そんなわけないだろ。シヨックからまだ抜け出せもしてないけれど補習受けないと駄目なんだよ」

「青春してるねえ」

「してねえよ」

「崩ー、早く行くよー」と小萌先生の車から聞こえる青葉の声に、「今行く」と答えて僕は歩きだす。

「おい、崩」

「何だ？」

「いつてらっしやい」エバンスの言葉に続けて、カルマも真似をした。

いや、僕が驚くのは当然だろう。

「……どうしたんだ？ いきなり」

「そこは聞かずに素直に流せよ!！」

わかった。少し恥ずかしそうにしていることは伏せておこう。

「ほんじゃまあ、…いつてきます」

「おう。青葉姉もいつてらっしゃーい」

「うん! いつてきまーす」車の窓から顔を出して、青葉も挨拶を返す。

…て、小萌先生、車運転できたんだ。

「留守番、気をつけろよ」

そう言い残して、僕は車に乗る。

「あれ、崩ーなんかにやにやしてるよ?」

「崩ちゃん、にやにやしてますねー?」

「し、してません!」

二人は、実に嫌らしい質問を僕にふっかける。

車は学校へと走りだした。

「それにしても、今回もまた変に大騒ぎしたんですねー?」

「変には余計ですけど、まあいろいろありました」

「そうですか。いろいろですか」

小萌先生の言葉に僕と青葉は顔を見合わせ、小さく笑って答えた。

「「はい、いろいろありました」」

「でも、何はともあれ、普段通りで良かったです」

本当に小萌先生の言う通りだ。

欲張らないから、せめてこの日常だけは、

いつまでも続いて欲しい。

「あれ、この車って補習行きですよね？」

「そうですよ」

小萌先生の回答に、ますます僕の疑問は深まる。

「もしかして、青葉も？」

「そんなわけないじゃないですか」当たり前のように、小萌先生に否定された。

「私は病院に行くから、小萌先生のお言葉に甘えて送ってもらってるの」

「なんだ、なんかがっかりだな」

「残念賞」と言つて、横で青葉が笑った。

「東雲ちゃんは、優秀なのですよ」。崩ちゃんとは、天と地の差があります」

「えっ、そこまで!？」

「この前の数学のテストなんて、満点でしたからねー」

「青葉、本当かよ!？」

「へへーん、なーに、これを使えばちょちょいのちょいだよ」と人差し指で頭を指し示す青葉。

「無敵じゃん!」

彼女の演算回路フィンベルにかかれば、高一レベルの問題は朝飯前だった。

「はい、東雲ちゃん着きましたよ」

車は、いつもの病院の前で止まる。

「あ、小萌先生ありがとうございます」

「これくらいお安い御用ですよ」

「じゃあ僕、車椅子を下ろしてくるわ」

そう言つて先に降りると、後ろから二つ折りにされた車椅子を取り出して広げ直し、青葉の手を取つて器用に座らせる。

「ありがとう、崩」  
「これくらい気にするなよ。送っていいこうか？」  
「大丈夫だよ、大袈裟だなあ。後は私一人でも大丈夫だから」  
「そ、そうか」それでも心配そうな僕に、青葉はやれやれといった  
感じに笑った。

「うん、だから崩はちゃんと補習頑張りなよ」  
「……わかった」僕も微笑んで青葉に答える。  
「ではでは、挨拶を」  
「？ 挨拶？」  
すると青葉は、嬉しそうに笑って言った。

「いってきます！」

「……ああ、いつてらっしやい」

青葉が病院に入っていくのを見送ると僕は小萌先生の車に乗り込んだ。  
だ。

「やっぱり崩ちゃん、にやにやしてますね」運転しながら、普通より何倍も下にあるミラーを使って小萌先生は僕を見る。

「いや、全然にやついてません」  
「幸せそうですー」  
「そうですかー？」  
「このこのー」  
「いやいやー」

不毛なやりとりが、かれこれ10分は続いた。

「ところで、桐原ちゃん。今回は、何があつたんですか？」

「そうですね……恥ずかしい話、少し家族旅行に行ってまして」  
「へえー、そうなんですか。補習をサボって行くとはいい度胸です」  
「すみません……しかも手土産もなしで」  
「いいですよ。教師のやる気は生徒の笑顔です。それを見ただけで十分なのです」

「もう、感謝の限りです」

「いえいえ、でもそれは早く、みんなに見せなきゃ行けないですよ」  
車が止まった。

どうやら学校に着いたようだ。

「ではでは、早くその笑顔を大事な友達に見せてくるのですよ」  
小萌先生の笑顔がミラー越しに僕に見えた。

さすが尊敬できる教師だな、なんて思ってみたりする。

「そうですね」僕は頷いて車を出た。

「先生は少し授業の用意をするので、先に行ってくださいです」  
「わかりました」

僕は教室を目指して学校に入る。

小萌先生の言う通り、この笑顔は友達にちゃんと見せておかないとな。だって、あいつの日常と僕の日常は、もう繋がっているんだし。

目当ての教室を見つけると、僕は扉を開けた。

いつも通りに机が並んでいる。ここから見える景色も、そのどれも全てが全く変わっていない。

僕の机も、



前に座る友人も、だ。

僕はいつも通りに着席する。もちろん、上条は多くを語らない。

ただ一言だけ、彼は僕に尋ねた。

「元気か？」

そんな素朴な疑問に、決まって僕は答える。

「いつも通り」

「……そりゃ幸せな話だ」

「だろ」

お互い、顔を合わせて笑った。

「さあー皆さん、補習を始めるのですよー」

小萌先生がやってきて、いつも通りに授業を始める。

何もかもが普段通りだ。

「うん、頑張りますか」

一息ついて、実感した。

日常はちゃんと戻って、

その中に、僕はちゃんという。

+

「おや、また会うなんて奇遇だね」カエル医師は少し目を丸くする。だけれど、彼は今までに何人も急患をくぐり抜けてきたベテランの医者だ。驚いたのも少しだけで、すぐいつも通りの顔つきが彼には戻る。

「健康診断では異常もなかったし、笑顔も戻ったっていうのに、何かあるのかな？　もしかして、サボリってやつかい？」  
「違います！」

抗議した青葉は、もう、といった表情を浮かべた。

「夏休みですよ？　休み中なのに、学校へ行く人なんて……あ」  
考えると、ものすごい身近に一人いた。

「どうしたんだい？」

「あ、いや。学校に行くのも悪くないですね……」  
悟った青葉は、空気を読む。

「それで、一体今回は何なのかな？　僕には全く見当がつかないのだけれど」

「えっと、今日は先生に相談がありました、」

「ほう、何かな？」

「足のリハビリを、しようと思ってるんです」

「…………ふむ、」

カエル医師は神妙に一息、間を入れた。

「足のリハビリか…………確か君のそれは…ちょっと待っててくれ」そう言つと席を立ち、数分後、片手にカルテを携え席に戻る。

「君の足は脳の損傷によるものだよ。簡単に治るものじゃないだろう」

「それでも…………治る確率はありますか？」

震えた声で尋ねた青葉を、カエル医師はいつになく真剣に見つめる。青葉の目にも自身の断固たる決意が映っていた。

「ない、わけではない」

「本当ですか!？」

「ただし、少しきついものになると思うよ。覚悟はできているのかい?」

「…………はい!」

「…………わかった」溜め息のようなその肯定は、今から続く苦悩に呆れた風に聞こえるけれど、それでありながら最後の希望を決して絶やしていない、力強い響きだった。医者としての心構えが目に映える。

「君がもう一度歩けるように、リハビリを始めよう」

「あ、ありがとうございます、先生！」

「それは、歩けるようになってから聞こうかな」ははは、と笑って椅子を回転させると、青葉と対面している状態から一転、机に向かって何やら詳細をカルテに書き留めるカエル医師、

「あ、でも」しかし、何か思いたしたように呟くと顔だけを青葉に向ける。

「どついう風の吹き回し、ってほどでもないけれど、一体どうしていきなり思い立ったんだい？」

「あ、それは……」カエル医師の不意な質問に青葉は言葉を詰まらせる。

「それは、えーっと、……」徐々に耳が赤くなっていく青葉。「あのー、そのー、えー」とエンドレスかと思われるほど言い続けると、少しずつわかり始めたカエル医師にニヤニヤと微笑まれながら、最終的には顔を真っ赤にして、

「か、かくかく、しかじかです……」

に落ち着いた。

「ははは」とカエル医師はその言葉を聞いて声を出して笑う。青葉から机へと視線の方向を変えると、右手に持っていた愛着のあるボールペンでペン回しを華麗に決めて、ペン立てに収納した。

「幸せそうで何よりだね」

「せ、先生！ ちゃかさないてください！」

東雲青葉にも変化があった。

†

「うーっ！」僕は自分の席に座ったまま、上半身を大きく後ろに反らして背伸びをした。一番後ろの席だから、誰に気兼ねすることもないし、まあ利点と言っちゃ利点だ。その他にも内職にはうってつけだし、窓の外からの景色はよく見えるしと、配置的にはなかなか価値が高い。

「はい、お疲れ様でした。上条ちゃん、桐原ちゃん」と小萌先生はいつも通り、笑顔で僕たちに労いの言葉をかけると、「気をつけて帰るのですよー」と挨拶をして教室を立ち去った。

……まあわかっていただけのように、補習が僕と上条だけだったらこの席が有効に働く要素は皆無に等しい。っていうか、あったら教えてほしい。全身全霊で実践しよう。たとえば、『スケスケミルミル』がエンドレスになろうとも。

「なあ、桐原」

上条は後ろの僕に振り返る。

「何だ？」

「これからどこか昼飯食べに行かないか？」

「お、いいね。賛成だ」

じゃあ食いに行くか、と上条の声を合図に僕らは席を立つ。

「何食べる？」

「カツ丼とかはどうだ？」

「そうだな。一番無難だし」

なんてかわいい話ができたのは、

教室の中だけだった。

扉が開く。

「あ、でも僕は」

足が一步、廊下に出る。

方向は、右に見える階段。

談笑しながら、

「パスタが食べたいな…」

二歩目を踏み出した、

次の瞬間だった。

「崩君」

「え？」

鼓膜が振動して、その声を伝える。  
川を流れるようなその綺麗な声は、

何よりも強く僕の心臓を掴んだ。

「う……」

何とも言えない威圧感が突如、僕を襲い、体中の皮膚の小さな穴から汗が流れ、

額から一筋、玉の汗が落ちる。

上条は何事もないように、僕を呼んだ方向へと視線を向けるが、僕はゆっくりと振り返ることしかできなかった。

そこにいたのは、もちろん女性だ。僕たちと同じ、この学校の生徒であることも確信を持って言える。しかし、初めての人にとってはそれを見分けることは少し難しいものなのかもしれない。

何故なら、その女性が修道服を着ているからだ。

もちろん、この学園都市の中で目につくような、そんなお堅い修道服ではない。一応、学校の制服と同じ藍色のような上下繋がった修道服。折り目一つもなく足元へ届くそれは、右足の横辺りで膝まで裂けているため、動きにくいことは何一つないだろう。胸元には、藍色の生地我真っ白な十字架が描かれている。

その女性は、ふふふと微笑んだ。その微笑を、『初めて』、『何も知らずに』、見たというなら、間違いなく心を奪われているだろう。整った美人の顔立ちで『優しそうな』雰囲気は、異性としては魅力的に見えることこの上ないはずだ。

あ、『』については言及しないでほしい。僕は『』をつけなかったら、とてもじゃないけれど話す気にはなれないから。

首を横に傾げると、その女性の両耳についている二つセットでアシメトリーの、銀縁でかたどった中に赤い宝石を敷き詰めた十字架



のピアスが、太陽の光を反射して赤くきらめき、揺れる。

「き、紀夜井坂先輩……」

僕は、ゆっくりとだが深々と頭を下げていくと90°になった時点できつちり止まる。

「こ、こんにちは」

「はい、こんにちは」紀夜井坂先輩はまるで、うん及第点、みたいな笑顔をする。

「でも、言いましたよね？ 私の事は、水簾先輩と呼んでくださいね、って」

ゾクツと悪寒が走った。

「はい！ 申し訳ございませんでした！！ 以後気をつけさせてもらいます！！ どうか、哀れな僕を許してください！！」

現在角度60°。

僕も随分柔らかくなったものだ。

「はい、よかったですね。寛容な神は、あなたの重罪を許してくれるそうです」

ありがとう水簾様！

いや神様じゃなくて水簾様！！

「あー」

今の僕からしたら、何て腑抜けた声なんだと思うような、そんな声が発せられた。

上条だ。

「どうしたんですか？ 上条さん」

「えーっと、」なんて悩んだ次に出てきた言葉は、

僕を絶望させた。

「よくわからないんですが、俺と知り合いですか？」

真っ白。

そついやガラスの割れる音が聞こえたっけ。いや、何かもつと凄い音のような…そつだそつだ間違いない。

世界の崩壊音だ。

「あの一、知り合いなら俺と会ったときの事をお」

「上条さああああああああああああああん!!」

全速力で上条を呼び止め、肩を揺らしまくる。

もう汗が尋常じゃない。端から見れば狂ってる奴だ。

「何言ってるの？ 何言ってるんだよ？ 何言っちゃってるんですか！？」

「き、桐原…：…なんか今のお前もの凄く怖いぞ」

「それはこつちのセリフだ!! なんてことしてんだお前は!! 紀夜井坂先輩だぞ、あつ違う水簾先輩だぞ!! 態度をわきまえろよ!! っっていうか知らないわけにはずだろ!! だって先輩は、」

「崩君」

ビクツと、水簾先輩の呼びかけに、肩を大きく縦に揺らした僕。

「もついいのですよ」

え、どつちが？

上条が？

僕が？

それとも世界が？

「あのー、上条さん？ すいませんが、崩君をお借りしてもよろしいでしょうか？ 少し昼食も兼ねてお話がしたいんです」

僕だった。

「お昼食べる予定だったんですか！？」「こんな時だというのに、上条は間の抜けた声で喋る。

「なら、一緒にお昼食べましょうよ」

「崩君をお借りしてもよろしいでしょうか？」

「え、いや、一緒にお昼」

「崩君をお借りしてもよろしいでしょうか？」

非常にまずい。

れ、霊圧が……確実に藍然隊長並みにある。

周りが削られていく……

「すみませんどうぞお貸しします」

売られたー！！

「じゃあ、桐原。俺先帰るわじゃあなバイバイグッドラック！！」

「お、おい……」

僕が止めるのももう遅く、上条は廊下を曲がって階段をダッシュで駆け下りていった。

あー、もうだめだ。

世界で一人の気分。

「そんなことないですよ、崩君」

その声は、廊下にひんやりと響き渡る。

ゆっくりとしか回らない僕の頭は、機会仕掛け並みに角張った動きで、現実を捉えた。

笑う彼女を、捉えた。

「崩君、落ち込むことはないわ。こうなることは、最初から予言されていたことなんですから」

そう言って彼女は、

何も知らない男たちにとっては今世紀最大の笑顔で、

全てを知る僕にとっては今世紀終焉の笑顔で、

美しく微笑むのだ。

「って、いとこのイエスが言っていたわ」

よくよく考えれば、

すんげー家系図。

「……出ない」

人は居るが病院であるが故に静かなその食堂内に、その声は力無く響き渡る。

ムスツとした表情で、青葉は机に顎を置き、携帯電話の画面と対峙する。

「むむむー。崩、補講はお昼までで終わりって言ったのに……三回かけても出ないし、」そう言いつつ、青葉は近くに備え付けられている時計を横目でみる。

時刻は、12時45分を示す。

「お昼ももう終わっちゃうし……」

はあ、とため息を吐き出し、一人の寂しさを顔に滲ませて、携帯電話の画面に映る『崩』の文字と数字を見つめる。もちろん、こんなことしても崩が来てくれるわけじゃないことは本人も自明の理であるだろう。悔やんでしまうのは、あの時変に気張って、崩にお昼を一緒に食べようと誘わなかったことである。

「帰りも一人かな……」悲しくなっただけか、机には顎ではなく、頬をぺちつとくつつけて、周りの世界を横に見ていた。

「おい、青葉」

そんな青葉の寂しいブルーな世界に、白衣だけが映った。「えっ？」と突然の呼びかけに驚いて、横に寝ていた世界を慌てて戻す。

「お、扇さん！」

白衣を着て、勤務中の扇さんだった。

「ん、どうしたんだ？ そんなところでマロニーのように落ち込んで」

「ま、マロニーって、お湯に揺れる前は思いっきりカチカチじゃないですか！…ここは変にひねらないで、こんにゃくとかにしてくださいよ！」

「んー、青葉は真面目だな」遠い目で呟く、扇だった。

「それより、扇さんはどうしたんですか？」

「それより、はこっちのセリフかな」ははは、と扇は綺麗に笑ったかと思うと

そこからはにやけ顔だった。

「それより、青葉はリハビリがあるというのに、携帯電話に映る崩



の文字を愛おしそうに見つめて何してるんだい？」

「なっ!!!!???.....」青葉はガチツと固まったかと思うと、秒速並みの速さで顔を真っ赤にする。

「な、なななな.....へ、は、ははは、な.....な!.....ななななな、何を!」

どうやら、後はあまりにも動機が激しいらしく何も言えないようだ。

「少しの揺さぶりでもここまでとは、かわいいねー」

「扇さん!! やめてください!!」

「おっと怖い怖い。それじゃあ青葉、行くぞ」扇はそう言って、青葉の車椅子を押して病院内を移動し始めた。もちろん、どこに行くのかは青葉自身も知っている。

程なくして着いたのは、リハビリステーションだった。

「私はここまでだ。青葉、頑張れよ。大事なのは気持ちだぞ。目標に向かってひたむきに努力しなさい」

「はい。ありがとうございます、扇さん」

「二人の恋路の為となれば.....」

「も、もう! やめてください」

ははは、といつも通り笑うと、手を振って扇は廊下を歩いていった。

「うー」赤くなって疲れたような顔で、青葉は扇を見つめていた。

「でも、憎めないんだよなあ」なんて、最終的には呟いてしまうの

だけれど。

「大事なのは気持ち、か」

目標に向けて努力する。それが何よりも力になる。

青葉は、すうーと息を吸い込んだ。

そう、これは私の挑戦だ。

みんなに甘えてばかりいるから、なんて理由には頼らない、私の願望だ。

ただ、

みんなと一緒に歩きたい。

手を繋いで歩きたい。

彼らと繋がっていたい。

彼と繋がっていたい。

ただそれだけの、

ほんと、それだけの

私の小さな、夢だ。

「よし、頑張ろう！」

青葉は車椅子を進める。

歩けるようになったら、崩にどこへ連れて行ってもらおうか、なんて考えながら。

+

テン、テレレン、テンテテテン、……

聞いたこともないクラシック。しかし、抑揚があつたりと聞いていてとても楽しく、今日のお昼はこのレストランで、食事も雰囲気もおいしく楽しく過ごしてくださいなんて思いが込められてるようにも思える。

なんてのは嘘だ。

いや、僕に限つての話なんだけれど。

「……………」

学園都市のとあるカフェテラス。銀色にアレンジされたいかにも心惹かれるようなテーブルを挟んで、僕は紀夜井坂水簾先輩と昼食の時間を……楽しんでいた、わけではない。

「いいテラスですね」

「…そ、うですね」

僕は、水簾先輩から溢れ出る威圧感に必死で耐えている。何も知らずに周りで楽しんでいる人々が羨ましくしてしまうのがない。

「お待たせしました」綺麗な服を着たウェイトレスが、料理を持っ

てきて、水簾先輩と僕の前に並べた。

「わぁ、おいしそうですね」

いかにも高級そうな、

パスタだ。

……横に置かれた伝票をチラッと確認する。

「なっ!!」

明らかに高校生の昼食としては相応しくなかった。

「どうしたのですか？ 崩君。美味しい料理が目の前に並んでいる  
と言うのに、そんな顔をしていては損ですよ？」

「できれば、僕も笑いたいです……」

力無くだが、僕は水簾先輩に笑って見せた。

水簾先輩は上品に、フォークとスプーンでパスタを食べ進める。

「それにしても、今日はどうしたんですか？ 夏休みは、忙しいん  
じゃ？」

「ええ、そうなのだけれど、何だか美味しい物が食べたくなって」  
「……………」

これって、カツアゲと一緒にすよね？

「あ、孤児院の子供たちに持って行ってあげましょう。みんな喜ぶ

わ！」

「お願いです。まず目の前の哀れな仔羊も救ってください！」

高校生にとって、お昼で五千円の出費はきついです。

「孤児院の方は大丈夫なんですか？」

「ええ、まずまずです。元々、そういうものですからね」僕の質問に、手を止めながら水簾先輩は話した。

水簾先輩は、聖徳者として孤児院のシスターも学生と兼ねて続けている。それだけは、彼女としても唯一の生きがいであり、熱心さは勉強よりも遥かに高い。あそこの院長は凄く優しいのに、水簾先輩ももっと優しくして

ビュオン！、と勢いよく音を立てて、バスケットに入っていたナイフが僕の眼に突きつけられた。

残り3ミリ。

「気をつけなさい。地の文だからと言って、見逃しはしません」

CG使ってるようなオーラが、水簾先輩の後ろで渦巻いていた。やっぱり、あなたも介入してくる……何でもないです。

「は、はい……以後気をつけます……」

再び調子を戻して席につくと、さっきと同じように上品に食べ進める水簾先輩。見た目にはさっきのような凄惨な雰囲気も感じられないのが不思議でしょうがない。

「そう言えば、変な話ですけど」「あっ、と小さく思い出したよう

に、僕はパスタを巻き取ろうとするフォークを止めた。

「上条は、どうして水簾先輩のことを忘れていたような態度をしたんでしょうか？」

「あら、知らないの？」動揺せず、流暢にパスタを食べる水簾先輩の姿は当然知っているような印象を僕に与える。

「遅れていますね」

「え、知ってるんですか？」

「当然です」

「つてか、何故知ってるんですか？」

「神様の使いだからですよ」

「夢のある話ですね」

「実際は、予習をしてきたんですけれど」

「予習？」

「はい。『どうやら』とある魔術の禁書目録Ⅰ』で記憶喪失になったみたいですよ？」

はい設定ドーン。

「何で……」

僕も我慢の限界だった。

「何で毎回こう上手く絡んでこれないんですかね！？ 僕語り部

！！ これ二次小説！！ そういつの言っちゃ駄目でしょうが！！」

「あら、時間軸なんてどうでもいいように書いてた奴がよく言うわね」

「突いてきた！！ それとこれとは別だ！ ああいつのはたまにならいんだよ！！」

とある無題の音響、『種』の方を参照ください。

「周期的にはいい感じですよ」

「ごもっとも!」

最終的には賛成してしまった。

「では、崩君。面白くするために必殺ギャグを一つ、お願いします」「いきなり!? ってか、必殺って何ですか!?!」

「上条さんの話のカミングアウトをもみ消すのです」

「ほら、言っちゃ駄目なやつだったじゃん!」

「もう、男ならつべこべ言わずにはつきりと言いなさい。『青葉と付き合いたい!』って」

「もはや、ギャグでもなく僕のカミングアウト! って、そんなことなぜ知って……いやいや、思ってないよ! 全然思ってないからな!」

「顔、赤くなってますよ。どうしたんですか?」

「赤くなってるねえよ! しかも確実に、先輩のせいでしょうが…」

ブスッ。

鈍い音に吹き出る血、ですかね。

「いつてええええっ!! 何で僕の手をいきなりフォークで刺すんですか!?!」

「指を指すからよ」

「いやいや、語調合わせて等価交換みたいにするな!」

「礼儀知らずは命取りなのです」

「いきなりフォークで手を刺してきたやつがよく言うよ!」

一部始終僕のツッコミが終わると、ふふふ、と口に手を押さえて、



水簾先輩は小さく笑う。

「からかいがあつて楽しいわ」

「今、その言葉に何よりもへこみました……」

僕は、ふうと一息つく。

水簾先輩は、また休めていたフォークを動かし始めた。ふふふ、と思いついたように笑う姿は、見ているとこつちまで小さな幸せを分け与えてもらっているような気持ちにしてくれる。

もう一つ、やれやれといった感じに笑って溜め息をつく。

先輩も、そうやって……

ダン!!

僕は回想しようとするけれど、

それは、僕たちのテーブルを力強く足で蹴り上げた効果音が遮った。

「うわっ!?!」

「……」

「よおう」へへへ、といかにも悪そうに笑ったのは、僕たちのテールを蹴った風貌があまり好ましくない男だった。

いわゆる不良ってやつ。

どうやら、今日は今からハイキングでも行くのだろうか、後ろに5、6人程今一番仲の良い似たような友達を連れてくるようだ。

いわゆる不良グループってやつ。

「いちやいちゃ楽しそうじゃんか〜お兄さんに、お姉さん方〜」

へへへへへ、とお友達の方々も風紀の悪い笑い方をする。

このやり取りをいちやいちゃしているように見えたお前の眼は節穴か、と普通ならツツコミをかましてやる所なのだが、

今それどころじゃない。

そんな余裕はどこにもない。

「はっ！！！？？」

僕は慌てて、水簾先輩の方を見る。

そして、

水簾先輩を見て、

僕の恐怖は確信的なものとなった。

「おい!!」

僕は突然目の前の男に向かって叫ぶ。もの凄い僕の剣幕のせいか、男は小さくうろたえるが、すぐ今までのようないかにも強そうな態度を繕う。

「何だよ!!」

「今すぐ逃げろ!!」

いきなりの僕の勧告に、男たちは一瞬目を点にした後、「ははははは!」と盛大に吹き出した。

「ははははは!!、馬鹿じゃねえのか!! 今ピンチなのはお前の方なんだぜ!? 逃げ出すのは俺たちじゃなくてお前だろ!?!」

「お前ら、死にたいのか！！ 死にたくないならいいから黙って走って逃げる！！」

「ああ？、ふざけるな！！」

どうやら僕の話が伝わらなかつたらしく、逆に怒った男は、僕を強い力で突き飛ばす。勢いよく押された僕は、後ろにある誰も座っていないテーブルに突っ込んで騒がしい音を立てた。

「俺は、level3の発火能力だぞ！？ お前みたいなのるまの無能力者とは違うんだよ！！」

「いや、そんなのは関係ないんだ！！」

「何が関係ないんだ！？ ザコは引っ込んでろよ！！」そう僕に言い放つと、男は僕の座っていた椅子を蹴り飛ばす。それに満足したのか、グループ全員気持ち悪い一体感のもと高笑いをした。

「なあ、お姉さん？？」ひっひっひ、といかれた悪代官は

水簾先輩に矛先を向けた。

「！！」僕はそれを見て、絶望した。

とうとう、笑い事じゃなくなった。

男は、水簾先輩の肩に、腕を回そうとする。

「綺麗なお姉さん、俺らと一緒に遊ぼうぜ？……」

しかし、それはできない。

腕は、水簾先輩の肩に回せなかった。

水簾先輩の手が、男の中指を握った。

「あ？ 何だ？ まさか俺のことが！？」

ポキッ。

「あ、」

「あ、」

「「「あ、」」」

周りの観客、もちろん僕も男も含めた全員がそんな声を出した。

「……………あ？、ああああいああああ！！？？」

男は、突然の痛みを叫ぶ。

だけれど、当の本人。

水簾先輩は笑っていた。

「てめえ、何しやがるんだ！？」悲痛と怒号の入り混じった声で、男は水簾先輩を脅す。

「え、どうしてって……」

あなたの手、汚いんですもの」

「」

場内が騒然とした。

「何だとコラア！！てめえナメてんのか！！」

「ああ、唾を飛ばさないでください。汚れます。あなたのせいで聖

霊たちが逃げていくでしょう?」

しかし、依然としてその微笑は変わることがない。

「だいたい、あなたの指がもともと変な方向に曲がっていたから直してあげたのですよ」

ほう、どうやら彼女の中では手の甲に対して60°の角をなす指が正常らしい。

「ふざけやがって!!無能力ごときがよお!!」

男は、水簾先輩に掴みかかろうとした。

「はあ、やれやれ」

そんな溜め息が少し聞こえる。けれど、その声が男の耳に入った時にはもう遅い。

男は水簾先輩を掴みかかろうとした腕を軸に、空中で一回転している。視界は何を捉えているかわからない。重力と作用した力で男は地面に叩きつけられた。

「!...かはあ...!!」肺から酸素が抜けた男は、地面で悶え苦しむ。

「いいですね。ザコはそうやって悶え苦しむのが一番です。苦しいのなら、50バタバタで1ヨダレを垂らしてあげましょう」

美しく暴言を吐くのは、もう先輩が聞く耳を持たない証拠だ。

「なめんじゃ……ねえぞ!!」

男は空いている手を、炎を出すために仰ぐように挙げようとするが、それを許す程、水簾先輩は優しくない。

彼女の履いている、ハイヒールの靴が、炎の中心をヒールでねじり潰し、彼の手を踏み潰す。

「ぐわああああ!!」余りの痛さに叫ぶ彼の顔面には、

もう、ハイヒールが目の前に構えていた。

水簾先輩の足が、彼の顔面を蹴り飛ばすと、男は動かなくなった。

「あーあ、」

退屈な声を出すのは、蹴り飛ばした本人だ。

「口の割には、なんて弱いのでしょうか。ザコはザコなんです。ふふふ、死ねばいいのに。生きていって言うなら、地球に迷惑のかわらないように生きなさいな」



握っている男の手を使って、体を足で蹴り上げると、浮いた拍子に力を加えて、軽々と横に放り投げる。

倒れるテーブルやイスと共に、男はガラクタになった。

「それにしても、悲しいことですね」

残った不良グループは、ガタガタと震える頭を、悲惨な仲間の最後から水簾先輩の方へと向ける。

「ついこの前までは、こんなことあるわけがなかったというのに。あれから、随分と経ったのですね。何だか、もの凄い実感しました。駒場君や浜面君と、やんちゃしていた頃が懐かしいです」

「な……あ……あ……」恐怖で声がかれた不良たちは、震える足を一歩ずつ後ろへと動かす。

それを見た水簾先輩は、至極面倒くさいような声を出した。

「あのー、あなたたちザコが突っ込んで来ないと、私はあなたたちザコを殺せないじゃないですか。ザコが時間を取らせないでください。ザコはザコらしくザコ並みにザコぶっていればいいのです。後は、私が処理するんですから」

「あ……あああ……」水簾先輩が一歩ずつ近づいてくるのを見て、不良たちは顔を青ざめる。わなわたと震える。恐怖して、絶望して、

彼女に救いを求める。

「1」めんなさい。許してください……」

「……ふふふ、」すると彼女は、美しく笑ってこう答えるのだ。

「駄目です」

その微笑は、全員を凍らせる。

「あなたたちに神のご加護はありません。マリア様のお赦しも聖霊たちの祝福さえも与えられていないのですよ。そんな戯言を吐くのは、よしてくださいな。気持ち悪くしょうがないです。」

そして彼女は、最後に笑いかけた。

「そうやって、うちの向かいの佐竹さん家の息子の友達のイエス君が、言っていました」

不良たちの悲鳴と共に、水簾先輩は暴虐の限りを尽くす。

こんな噂を聞いたことはないだろうか。

第六位が現れない理由。

実は、誰かに負けたりしい。力に奢ってあれこれ構わず馬鹿してたら、勝負に負けたんだってさ。

でも、なぜそれ以来、第六位が現れないかっていうのは別の話だろ？ みんなが不思議がるのも無理はないって話だ。

ここだけの話。

そうしてほしいのだけれど、問題はその勝った相手だそうさ。

その勝った相手は何でも、

無能力者の女性らしい。

はい、それではお待たせしました。

今の噂が関係あるかは皆様にお任せしよう。

人の噂も七十五日。

所詮、噂は噂だ。

では、さっきの話は置いといて、

不吉な話は言うまいで、

彼女についてご説明しよう。

もちろん、わざと言わなかったわけじゃない。

話す気になれなかったただけだ。

でも、こんなことされちゃ話さないではいられないだろ。

彼女の名前は、紀夜井坂水簾きよいどかすいれん

『笑わない天使』

『微笑みの悪魔』

『暴虐の使徒』

『神様の終焉』 などなど、

数々の素晴らしい称号を持ち、

『学園都市の魔女』と称された、

僕たちの学校に通う、一つ上の先輩であり、

元スキルアウトリーダー。

僕が知る、

学園都市唯一の聖徳者で、

学園都市唯一の冒読者だ。

「ははは、」

僕は、死体のように動かなくなった不良たちがごろごろところがっている、その凄惨な光景を見て、力なく笑う。

それに呼応したように、

手を組んで神へと祈り、

彼女は、

紀夜井坂水簾は、

美しく微笑むのだ。

「アーメン」

+

「うっ……」青葉はゆっくりと、左右両脇にある手すりを使って、少しずつ前に進もうとする。

「うっ、だぁー！」疲れては、手すりから手を離して地面に座り込んでしまう。

さつきからずっとその繰り返しだった。

何回も何回も挑戦しては、最初の段階で躓いてしまう。もともと、まだ爪先にしか力が入らないのだから、今の状態では少し難しいのだ。

「ま、まだ頑張れる！」垂れてきた汗を拭いて近くにある椅子に腰を下ろすと、椅子の高さを調節して高くし、もう一度手すりを持ち

自力で立ち上がるうとした。

「もう、一回……あ！」手すりを持っていた左手が汗で滑り態勢を崩した。

一気に床へ吸い込まれる、

「うっ!!」

と思われたのだが、

そうはならなかった。

青葉の右手を握って、肩を支えてくれたからだ。

「へっ？」青葉は驚いて前を見上げる。

そこには、彼がいた。

「お力を貸しに参りました」ははー、とお辞儀すると、顔を上げて桐原崩は笑って見せた。

「く、崩!？」青葉の顔は急に赤くなる。

それに気づかず、崩はいつも通り青葉に接していた。

「僕に言ってくれば、少しでも力になれるんだから、相談してくれよ。みずくさいじゃないか」

「うん……うん、うー」顔を赤くしてくらくらする青葉を見て、崩は少し心配する。

もちろん、心配の理由と赤くなっている理由は一致していない。

「頑張り過ぎるのも、気をつけるよ」

「うん……」

「よし、これだけ、最後頑張りな」

「そう……だね」

青葉は崩に手を引かれながら、ゆっくりと歩き出す。体重は崩に預けているから、前よりは少し歩きやすい。

「……お昼」

「え？」

青葉は小さく、前を向くと崩の顔がすぐ近くにあるので、俯いて咳いた。

「電話でなかった」

「あ……その……ごめん」

「私、寂しかったな」

「ご、ごめん」

「一人で昼食食べたんだよ」

「ご、ごめんなさい」

低姿勢な崩だった。

「何かあったの？」

「うん……もの凄いいことがあったけれど、……もう思い出したくないな、とほほ」

「だ、大丈夫？」心配そうに、青葉は崩を覗き込んだ。



いきなり前に現れた青葉の顔に、崩は驚いて目線をそらした。

「え、あ、うん。……大丈夫」

「そうなんだ。なら、良かった」

「？」

「何にもなくてよかった。安心したよ」

「……うん、ありがとう」

「えへへ、どういたしまして」

青葉は、初めて一周をなんとか歩ききった。

「やった！ なんとかいけたよ、崩！」

「ああ、おめでとう！ これからはコツコツと、この調子で頑張ろうな」

「うん！」

「無理はするなよ」

「わかってるよー」談笑しながら、青葉を車椅子に下ろすと、崩は後ろに回って車椅子を押す。

「それじゃあ、先生に挨拶して帰ろうか」

「そうだね。あ、帰りに飲み物買って行くつよ」

「そうするか」

そんなたわいもない話をしながら、病院を出てコンビニに寄ると、ジュースを買う。

もちろん、5本だ。

「あ、崩。押さなくていいよ。自分で押すから」

そう初めて青葉が言ったのは、コンビニの帰りだった。

「え、でも」

「いいから。ほら、行こう」

そう言っつて、青葉の車椅子は進み出す。  
崩も歩き始めた。

「ふふふ、何だか新鮮だね」

「そっぴいやそっぴいな」

笑いあつて、二人は歩く。

青葉は、崩の横を歩く。

「最初は、こんな感じかな」

「ん？ どうした？」

「うっん、何でもない！」

青葉は嬉しそつに首を振つた。

いつまでも続くと思われたこの平和な世界で、いつか崩と手を繋いで歩こうと思つて。

しかし、その平和がかりそめであることは、

このとき、誰も知る余地はなかった。

+

学園都市には、窓のないビルがある。その中のある一室、溶液の入った大きなカプセルには、一人の人間が浮かぶ。

「ふふふ、どうやらうまく進んでいるみたいだ」

彼は、どこを見るとなくうつろな目でつぶやくと、

「そろそろかな」

薄く小さく、唇を歪ませた。

「桐原崩、もっと深くに潜らせてやるっ」

## 後日談波紋（後書き）

どうでしたでしょうか？

もの凄い奴も出てきて、

崩も何だか大変な予感が……

これでイギリス編終了です！！

楽しんで頂ければ、それだけで嬉しい限りです！！

次章も頑張りますので、更新した際は読んでやってください！

感想、指摘等々ぜひとも聞かせてくださいね。  
待ってます。

冷えピタでしたm（　　）m

暗雲（前書き）

本当に申し訳ございませんm（　　）m

謝ってばかりですね……

次話投稿が遅れました。

新たな『節』に入りました。

皆様が読んでくれるおかげで僕も続けられます。

では、伏線を楽しんで、アパートの住民たちで笑っていただけると嬉しいです！

……かなりふざけたものになってますが、どうぞ最後までお付き合い合  
いくださいm（　　）m



「暑い」

いや、もう本当に。その一言に尽きる。

というか、このまま続けるとどうでもいいことが規則性を帯びてどこまでも続きそうだ。

「ってあれ？」

何かこれ、この前あったような……。

ミーン、ミーン、ミーン。

……………。

「ま、いいか」僕はシャープペンシルを、小さな机に広がる宿題の上に放置して後ろへと仰向けに倒れ込んだ。

扇風機の作り出す風が、静かに僕の髪を揺らす。

今日の僕はというと、特に何かをするわけでもなく、イギリスに行っていたため途中で止まっていた宿題をコツコツと進めていたわけ

だ。中学生の頃の『夏休みの宿題は夏休み終了直前に慌ててするの  
が醍醐味だ』なんていう、何の根拠もないのに、むしろどうみても  
間違えているが、何故か僕みたいな一部の階層には急激に浸透して  
しまう偏見に満ち溢れたこの考えは、高校生になったのだからそこ  
の所はきちんと改めるべきであり、今こそその実践の時なのだが、  
やはり目の前にするとやる気があまり起きないし、その時になつて  
現れる障害に体力を削がれ、何やかんやで失敗してしまうのは、も  
はやお決まりというか、それを見ている方は『微笑ましいね』とか  
『青春してるね』などなど言いたい放題好き勝手だけれど、その窮  
地に立たされて見ればすぐわかるが、とてもそのようなお気楽なも  
のじゃない。

「はあ……」

やっぱり宿題があると気分が萎えるな、なんて思っていた、  
その時だった。

「そんな調子では、ここでやっていけないぞ！」

「……はあ？」

そんな声が聞こえた。

玄関の向こうからだ。

「ドーは、ドイツつてビールがとても有名だけれど、日本人みたい  
にキンキンに冷やして飲んだりすることはあまりないらしく、ぬる  
いビールを普通に飲むことが多いから、もしかすると日本人はあま  
り好まないかもな、でもソーセージ最高。」



の、ドー!!」

バァン!!ともの凄い音とともに、歪に曲がった僕の玄関の扉が部屋へと飛んできた。

「とう!!」

そんな少し昔の戦隊物さながらに、エバンスは僕の部屋に滑り込んでくると、報復前進のポーズを取っている。

「レーは、レンコンって意外に沼みたいな所で栽培されるんだよな。だからレンコン抜きに沼に入ったけれど、レンコン抜けても、俺が沼から抜けられねえ、みたいなの。ちょ、おま、レンコン抜けて俺抜けねーで、本末転倒、みたいなの。レンコン抜けて俺抜けねーで、本末転倒みたいなの！」

のレー!!」

エバンスはどうしてテンションが上がったのかは知らないが、ポケットにある、今年の夏で飲みまくったラムネについているビー玉を手当たり次第に投げた。

パリーンパリーンバラバラバラ。

できればあまり説明したくない音が色々と鳴り響く。

僕の虚ろで生気のない眼は、エバンスを捉える。

「さあ、崩!!」

あろうことか、エバンスはそんなの知ったこつちありませんと顔に書かれたとてつもなく素晴らしい笑顔で僕の方を振り向いた。

「ミは!？」

「……………」

「ミは!？」

「はぁー」何故か溜め息をつくほど余裕があるように見える僕は、重い口を開いた。

「ミーは、ミンチカツとメンチカツの違いっていまいわからねえ。知りたいけど、今から Wikipedia で調べるとしたら、注文を受けようとしてくれている店員さんに失礼だし、何と言ってもそんな違いすら知らないのかよって馬鹿にされそうだしなあ……………」

よし、  
トンカツにするか

の「ミー」

自分で言いながら思ったけれど、明らかに『ミ』『じゃなくて』『ト』の気がしないこともない。まあドレミの音階にはないけれど。

「流石だな。入隊してまだ間もないと言うのに、もうそこまで能面貫いて言えるようになったか」

「一時間おきに言われればそりゃ覚えるわ。それに温度差考えろ。今なら僕の心はなんと氷点下レベルだ」

「ふっ、いいだろう。戦場では冷徹な心が必要だ」

何だこの世界観。

お前どういうキャラなんだよ。

「ではお前に、戦場で役立つドレミの歌の最後を教えてやるっ」

「ドレミの歌が戦場で役立つと思ってるのかバカ。どんな戦争だよ、合唱コンクールでも予選敗退だわ」

「これを卒業訓練とする」

「僕入隊したのさっきだろ」

「最後の音階はファだ」

「後の大事な4つはどこに行った？」

「一度しか言わないから覚悟して聞きやがれ。いくぞ」

僕の話を見殺し続けたエバンスは、大きく息を吸って構える。

「ファは……」

「……は……？」何だかこちらまで緊張してくる。

そして、

エバンスは言い放った。

「FAXのファ」

「短かつ！！あんだだけ長いやつだったのに最後はFAXで、とんだ期待外れだよ！！」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

あれ、クーラーないのに涼しいー

キ

「ほんとやっちゃったぜ」頭の上に大きなたんこぶを乗せたエバンスは、掃除機を使って床に散らばる窓ガラスを取り除いていた。

「勢いで書くとろくなことがねえよ」

「ほんとだわ」

「はい、謝罪謝罪。私と読者の皆様はそんなしょうもない領きを必要としてないんですよ。謝罪しろ！謝罪！」

「どうもすいませんでした」

この間にエバンスのたんこぶは謝罪の数だけ増やしておいたので、

皆様どうぞお許してください。

「ちっ、何で俺が殴られなきゃいけないんだ。冷えピタの野郎、責任転嫁もいいところだぜ」

「いや、確実にお前が駄目だろ。たとえば台本通りであったとしても、良心があれば人の部屋の扉壊したりビー玉投げて窓ガラス割ったりしねえよ。エバンス、そっちの端持ってくれ。新しいガラスはめるぞ」

「しょうがねえだろ。俺の案が却下されてむしゃくしゃしてたんだ。おっしや、持ったつぞ」

「台本に書いてないことが発覚した!!!」

現代っ子が犯罪を犯した時の言い訳だな、恐ろしい。

せーっの、で呼吸を合わせ、ガラスを持ち上げると、割れたせいで縁しか残らない窓へとはめ込んだ。

「ってか、踏みとどまれよ。どれだけイライラしてたんだ、案が通らなかつただけだろ?」

「崩、どうみてもこのくだりはウケない事が丸解りだろ? 僕なら絶対違う案を出して、この中途半端に終わってしまえば極寒のツンドラ地帯になることを避けていたね」

「ほう、随分と自信があるんだな」

「もちろん」

「言ってみ」

「『森のくまさん』だ」

「お前はアホなのか!?!」

僕にはいまいち違いがわからない。

「お前、『森のくまさん』舐めてんじゃねえぞ。『スタコラサツサツサーのサー』だぞ。凄すぎじゃねえか」

「これ読んでる人終始イライラしてるわ！もう何が凄いのか訳分からん！よくそんな並々ならぬ自信が湧いてくるな！」

「森の泉から、な」

「徹底的『森のくまさん』姿勢！！」

あと、上手くないから嬉しそうに笑うな！

「おっと、そうじゃない。俺はだな、崩に助言をしようと思ってきたわけだ」

「何だよ、助言って」

「ストーリーを進めるためのヒントだ」

「誰が文中での意味を答えろって言ったんだよ！？」

「いやさ、真面目な話」わからないかなー、と言わんばかりにエバンスは僕の顔を見た。

「夏休み遊んでねえ」

「……は？」

遊べないのしょうがなくなね？

「いや第一、夏休みにシリアス編の Spanien をあんなに取るかね。イギリスなんて日帰りで帰ってこいバカヤロー」

なんと、イギリス編の主人公格だった奴がよく言うぜ。

「しょうがないだろ。色々大変だったんだから。それに終わった時

間をあれこれ言っても戻ってこないぞ」

「だから今この瞬間を、いざfly」

「そのまま帰ってくるな、forever」

なんやかんやで、楽しそうな僕とエバンスコンビです。

「えー、けちな奴め」

「そんなこと言われると、余計連れて行きたくないな」

「ロリコンな奴め」

「てめえ、どうして俺にはロリコンが誉め言葉なんだよー！」

「青姉と遊んでもらうからもついいよ。じゃあなおさらば、ペド野郎！」とエバンスは僕に暴言を吐いて僕の部屋からそそくさと逃げ帰ってしまった。

「やれやれ、」台風が過ぎ去って、とりあえず溜め息をつく僕。

でも確かに、

「遊んでないな」

なんて思ってみたり。

「だが、すまないなエバンス。今年の夏休みはレッツ質素だ」

色々ね、次章のストーリーとかあるの。

じゃあ、早くそれしろよ、とか言わないの。

……ああ、そうですよ。暇ですよ。遊べますよ。でもね、僕はそれ

より宿題がしたいんですよ！追い込まれてるんです！

「……ジュースでも買いに行くか」

僕はそう思いついて、席を立つ。

綺麗ではないが、ちゃんと付き直った扉を開けて僕は外に出た。

「うへえ、暑いな」

蒸し暑い空気が、待ってましたと言わんばかりに僕へと襲いかかる。

「そっぴや、青葉もジュースいるかな？」

そう思って、隣の青葉の部屋をノックしてみたが、想定外な事に、返事がなかった。

「あれ？ 病院に行ったのかな」

まさか、部屋の中で倒れていたり……するわけないか。クーラーがあるんだし。じゃあ、どこへ行ったんだろう。

なんて、一人ぶつぶつと呟きながら階段を降りる。

最近の青葉は、随分と積極的に物事に取り組み始めている。「これもりハビリ！」と本人は意気込んでいるのだが、何と云うか、変な話、あまりいい傾向じゃないと時々思ってしまうことがある。

いや、その姿勢はとても評価すべきものなんだけれども、今まで以



上に僕へ頼らなくなったし……えーと、だからそのー

「……あ、暑いー!!」

体温が上がった理由は、ここではあえてふせておきたい。

「あ、青姉！　あまり無理しないで！」

「う、うん！　大丈夫、少し運動するだけだから」

お、噂をすれば……

そう思つて、僕はこのアパートの、桜の木が植えてある庭から聞こえる青葉とカルマの声のする方向へと足を運んだ。

「しょうがない、ジュースぐらいならあいつらにも買ってやるか」

そんな軽い気持ちで、庭の方に「おい、ジュース買いに行くから何が欲しいー？」と尋ねるために声を出そうとした時、

僕は一旦それをやめた。

なんだか、止めないほうがいいと思つたからだ。

青葉が松葉杖を使って、歩こうとしていた。

もちろん、まだ少ししかリハビリをしていないのだから、はいもう歩けるようになりました、なんて事ではない。少しずつ、松葉杖を

自分の位置から前へとずらしていき、地面にちよんとサンダルを履いた足を地面につけると、徐々に体重を足にかけていく。力がほとんど入らないのだから、片足が全体重を支えきれなくなる、腰がくだけ、地面に吸い込まれそうになるが、するとすぐにもう片方の松葉杖をぐつと前に出して、両脇に力を入れ、態勢を立て直す。

その度に、青葉の両サイドに散らばっているエルギオンス兄妹が、心配そうに声をかけるのだ。

「……………」

心温まると言えば間違いなくそうであるだろうけれど、やはり心のどこかに寂しい気持ちがないとは言い切れなかった。

「到着！！」

いつも食卓として使っている一階の中央の部屋がおそらくスタートだろう。そして目指していたゴールは、十メートルほど離れた庭の中央にある桜の木の根元だった。

「はぁー！！」

トスン、と両脇から松葉杖を外して、重力にのっとり地面へと腰を下ろし、大きめの溜め息をつく青葉。周りでエルギオンス兄妹がピーチクパーチクとさええずる小鳥のように青葉へと話しかけていた。

「青姉、大丈夫！？」

「無理しすぎだよ！！」

「だ、大丈夫だよ。リハビリも兼ねて運動もしないとね」紺色の布地の腕と脚の側面部分に赤いラインが入ったジャージの上下一式を、余ったヘアピンで脚と腕の長さを好みに揃えて着る青葉は、暑そうに手を顔の前でパタパタとさせた。

「カルマもここで遊ぶか！」エバンスの一言にカルマは嬉しくなったのか、急にはしゃぎだすとそこら中を走り回り始める。エバンスもお兄さんとして、でもいつの間にか夢中になって、カルマを追いかけ回していた。

それを、ふふふ、と嬉しそうに、青葉はを木にもたれて眺めていた。

「青葉」

「あ、崩」

前から近づいてくる僕に声をかけられて、青葉は僕へと視線を移した。

「あれ、宿題はもういいの？」

「ちょっと休憩がてら、コンビ二へね。それにしても、えらく無愛想じゃないか。これぐらい僕が手伝えたのに」

「え、あ、ううん。これぐらい平気だよ。崩の邪魔するものなんだか気が退けたし……」

「そうか、なんか気を使わして悪かったな」

「い、いやいや！ そんなことないよ」あはは、と青葉は笑ってみせた。

「んで、ここで何やってるんだよ」

「へへん。noteインテリな崩君に御説明しようではないか」

「わざわざnoteまでつけてくれてサンキュー」

本当、心に響かせてくれるよね。

「まあ、大したことじゃないんだけど」そう言って胸元でそっと包

み持っていた本を嬉しそうに突き出した。

「かつこよく、読書でもしようと思って」

「お、いいじゃん。確かにここは……」

『おい、早く早く!!』

僕の声を遮るように、元気な声が聞こえた。

庭、と言い続けているが大した庭でもない今僕たちのいる所は、左右を小さな塀が囲み、後ろには僕たちのアパートが構えているのだが、前方は開けっぴろげで、小さくはあるが、よくエバンスたちと野球をする空き地が広がり、視界が開けている。

その声は、その視界の隅の道路から聞こえてきた。小さな少女二人が楽しそうに笑っていたのだ。

「楽しみだね! プール!」

「ねっ!! 冷たくて気持ちいいよ!!」

「うん!!」

なんとも、微笑ましい光景だ。

「なんだか、こっちまで微笑ましくなるな、青葉……」

同意を求めて振り返った青葉の顔は、

「あっ」

僕の考えていた青葉とは違った。

羨望の強い眼差しが、少女たちを捉える。でも、それが八つ当たり

で、自分勝手に、でもそうなってしまったことは自分のせいじゃなくて、努力しても歩けるようにならないかもしれない可能性を考えて、

青葉は、不安をつらくこらえて、

笑う。

「そうだね」

「う、……うん」

頷くしか、できないのだろうか。

「やっぱり、外で本を読むのは間違いだったかな？」

「ん？」

「……暑い」パタパタと手を団扇代わりにして仰ぎながら、青葉はもう一度笑った。

「だな」僕も呼応する。

「それじゃあ、僕はジュース買いに行ってくる。青葉は何がいい？」

「私、紅茶でお願いできるかな」

「オッケー。おい、お前らは何がいい？」

「精霊の泉の水！」

「竜の涙！」

「はい、カルピスとサイダーね」

お前ら、一体どこの世界まで飛んだんだよ。

「んじゃ、行ってくる」

「いつてらっしやい」

アパートを抜けて、ゆっくりと近所にできたコンビニへと足を運ぶ。

「……………」

いや、まあ……………そういえば、エバンスが遊びに行きたいと行って  
たし、今年の夏休みは遊びに行けてないのも事実だからだ。

今からする行動の理由は前文。

コンビニに入ると、ジュースの売っているコーナーにはわき目も  
ふらず、雑誌コーナーへと直進した。

もちろん、そこにあるのは『夏休みと言え！』なんてハイテンシ  
ヨンで書かれた題名の雑誌が山ほど置いてある。

僕はそれを目の前にして立つと、一つずつ雑誌を手に取り確認して  
いく。

「……………なかなか見つからないな」

少し溜め息をつきながらも、手当たり次第に雑誌に目を通す。どれ  
も海ばかりだ。

「プールとか、そういうのなのかな？」

「それはこれだ」

「あ、本当ですか！？ ありがとうございます！」

おおっ、本当だ。いろんなプールが乗ってるな。これならいい所があるかもしれない。

「……………ん？」

今若干おかしかった。

「いいの見つかるといいな」

「……………って、」

僕は横の人の顔を見る。

見慣れた景色だ。

「何で扇さんいるんですか！？」

僕の小説進行ポイントの下降要因、と最近巷で有名な扇さんがファッション雑誌を読みふけていた。

「それはもうあれだ。私だって出番が欲しい」

「いやあるから！ よりによって何でこのタイミングですか！？」

「そりゃもう、面白そうだから」

「傍迷惑！…！」

そういうので出てきたら、矛盾が生まれます。

「ほんと、崩は優しいね」

「やめてください」

「青葉ちゃんのためなら、何でもするってか？」

「そういうのじゃないです。……ただ」

うん、ただこれだけだ。

「こづいう悲しみ方は、できるだけ消せるなら消したほうがいいと  
思ってる。笑っているのが一番ですからね」

「へえ……いかすねえ」

「違います。でも扇さん、ありがとうございます。これで、」

「23ページ」扇さんは僕がお礼を言い切る前に言った。

「へ？」

「23ページ開いてみ」

扇さんに言われた通り、僕は雑誌をペラペラとめくってそこへたどり着く。

最近オープンした、第23学区の大型アミューズメントプールの記事だ。

「そこなら、いいんじゃないのか？」

「……扇さん」

「何だ」

「扇さんも、いかすじゃないですか」

「いやあ、まあね」

肯定してしまうのはいつもの事で僕はそれを見て笑ってしまつ。



「よし、交渉してみますか」

僕は携帯を取り出して、そのページに書いてある電話番号を打ち込む。

20分の交渉の結果、車椅子の使用者でも入場を許可されたのは、言うまでもない。

+

カルピスと紅茶とサイダーを携えて、暗に自分の飲み物を買い忘れてしまったことをほのめかしながら、僕はアパートへと戻ってきた。扇さんはそのまま部屋へと戻って、気づかれないよう準備を始める。

僕は裏庭の、桜の木の下で本を読む青葉の元へと向かった。

意外にも青葉は熱心に本を読んでいた。よほどハマったのかな。

「青葉ー、ほいジュース」

「あ、崩」近くに来てようやく気づいたのだろう、青葉は文面から目を離すと僕へと目を向けた。

「ごめんね、ついでに」

「い、いやいや」これで自分の買い忘れたなんて言えなくなった。

「ところで、えらく真剣に読んでるけど、何の本読んでるんだ？」

「あれ、言わなかった？」

「うん」

「『とある魔術の禁書目録16』なのだ！」

「ぐえええええー!!」

聞かなきゃよかった！

でも、面白いですよね！

あの話大好きです！

「あわわわ！ 上条君の周りには本当に女の子ばかりだよー!!」

「誰だ青葉に要らんボケばかり与えてる奴はー!？」

この二次小説には混乱と無秩序が多数含まれております。

閑話休題、

「なあ、青葉」

「何かな？」紅茶を飲みながら、僕に答える。

「どこか遊びに行かないか？」

「!？」

唐突な質問だったせいか、紅茶を飲む青葉はむせかえってしまった。

「だ、大丈夫か!？」

「い、いきなりどうしたの!？」何故か顔を真っ赤にして僕に尋ねる青葉。

「い、いや…夏休み、そんなに遊んでなかったろ？」

「た…確かにそうだけど…」

「ちようどいいじゃないか。後残り少ない夏休みを楽しもうぜ」

「でも、」

僕の提案に、青葉は難色を示した。

「私、こんなだし……」

そして、あはは、と申し訳なさそうに笑った。

「私がいたら、みんなに迷惑だし、遊ぶ範囲が凄く限られちゃうし。お荷物だよ……」苦しそうな表情から一転、青葉は無理矢理明るい声を出した。

「だから、私抜きで楽しんできて！でも、お土産ぐらいは買ってきてよ！留守番は任せなさい！」

僕の見たい青葉は、そんな顔はしてない。

「駄目です」

僕の突如な言葉に、青葉は「えっ」という風に戸惑った。

そんな青葉に僕はわざと得意気に笑ってみせる。

「もう、決まってるんだよ」

「青姉！」「バツ、と飛び出してきたカルマが、勢い良く青葉に抱きついた。

「カルマちゃん！？」

「プール！！」カルマは嬉しそうに喋る。

「プールに行けるんだよ！！」

「え、」で、でも、とどもってしまふ青葉。

「私、車椅子だし……」

「それが大丈夫なんだよ！」遅れてきたエバンスが、カルマほどではないがやはり少し興奮気味に青葉に向かって言った。

「扇姉と崩が、交渉したんだってさ。移動範囲に制限が少しついやうけれど、入場できることになったんだよ」

「こら、お前ら要らんことを言うな。とつとと身支度してこい」

「よっしゃー！」とエルギオン兄妹はとても楽しそうにアパートへと戻っていった。

「……………崩」突然のことにポカーンとしている青葉は口を開いた。

「どうした？」

「私、……………プールに行けるの？ 車椅子だけど大丈夫なの？」

「もちろん」

「私、プールで遊べるの！？」青葉の表情が輝いた。

そうそう、これを見たかったわけ。

「そうだよ。嫌だったか？」

「そんなわけないよ！！ 凄い嬉しい！！」満面の笑顔の青葉は、僕に向かって言った。

それを見ると、僕まで嬉しくなる。

「崩、ありがとう！」

「家族は、楽しいことはみんなに平等だ。ありがとうなんてレベルじゃないよ」

「でも、言いたくしょうがないの！」  
青葉は、横にあった松葉杖を取り出して脇に挟み起き上がろうとした、

けれど、

先に僕の手が、青葉の腕を持って支えた。

「え？」

「こういうことも、みんなで分担だ」

それだけ言うと、僕と青葉は立ち上がり、車椅子へと青葉を座らせた。

「……………そうだね」

言いたかったこともこれだけだ。

わざわざこんなに長くして読者の皆様には申し訳ない。しょうがないの日本人だから。結論には遠回りしちゃうんだよ。恥ずかしいの。

「うん、みんなで行こう！ プールに行こう！」

「待ってました！」僕は、ニヤツと笑って、わざと駆け足で車椅子を押し進める。

「わわっ！崩ゆっくり、安全運転！」

「そんなんじゃ、プールに逃げられるぞ！」

「プールは逃げないよ!？」

はははっ、と悪戯に笑って、僕は確信する。

プールが先。

勉強なんか二の次だ。

「勉強よりも大切なものがある！」

「あれ、崩まだ宿題終わってないの？」

いい区切りかと思いきや、

どんでん返し。

「え？」

「私、もう7月中に終わったよ？」

あ————、

何この寂寥感。

†

第二十三学区は、地下に展開している。

「うわぁ……………これはすごいな……………」

と言っても、僕も今初めて知ったのだが。

地下街とも言えるそこは、もはや地上に広がるものと同じだった。風景に、外と目立って変わるものはないし、なんと言っても天蓋が

上空に空を形作っていたことが一番の驚きだった。

「す、凄いね……」

青葉が目を点にして、僕の横で呟いた。

「ま、こういうのが第一階層第二階層と続いているんだよ」扇さんは軽く第二十三学区の説明をし終わると、すぐに煙草へと手を伸ばす。

扇さん、本物知りだな。

「あ、譲さん。ここ禁煙みたいですよ」

「え、マジ？」

……あながち、そうでもないようだ。

「しかし、何だか近未来的だなあ」

「ははっ、学園都市なんだから当たり前だろ」

「でも、ほんと凄いです。それに店揃いもなかなかで、地上より良さそうですし」

「ね、ねえ崩」

さっきまで一緒に共感していた青葉が、ツンツン、と僕の肘をついていた。

「ん、どうした？」

「あ、あれ」

青葉の指差す方向へと、僕は視線をやる。

最近流行りのコーヒーチェーン店のテラス。



白髪の髪を立たせた白衣を着た奇天烈な男性。

細長い口をつけた獣型ロボット。

「……何だか、凄いシユールだな」

「うん、……そうだね」

「青姉、崩兄！ 早く早く！！」カルマの僕たちを急かす声に視線を移し、はははと笑うと追いつくために駆け足になる。

「さあ、遊ぶぞー！！」

「程々にしろよ！」

プールはもう目の前だ。

+

地下に広がる第二十三学区第三階層のとあるコーヒーチェーン店。

白髪を立たせて白衣を着た男性は、コーヒーを頼むでもなく、テラスの一角に腰を下ろし、机に書類を並べて何かを考えていた。おおよそ風貌からして、研究職だろうと周りの人は判断する。

「……………ふむ」

男は深く一息つくくと、薄く笑った。

「さっぱりわからん」

わかんねえのかよ！、とツッコミたい所を我慢している奴は、おそらくテラスに山ほどいるのではないだろうか。

「ふつ、いいアイデアが思いつくかと思って少し遠出を試みたが、生憎収穫はないようだ。歴史に名を刻まれた偉人達はよくこうやってアイデアを湧かせたと言うが、ふむ、私は今少し、その違いにちよっとした絶望を感じている」

「博士」

横に規律正しく座る、細長い口を持った獣型ロボットが突如、若い少年のような声で喋った。

「何だ？」男は博士と呼ばれ、それを対して気にもせず、獣型ロボットに応答する。

「行き詰まっているところを申し訳ないのですが、」

「いやいい。気にするな。別にそうたいしたことじゃない。それより、何かあったのか？」

「はい、速報です」しかし抑揚のない声で、獣型ロボットは言った。

「暗部組織『フィールド』が動き始めました」

「……ほう」初めて、ロボットの方に博士は視線を落とした。

「確か、『フィールド』は解散したのではなかったか？」

「はい、確かに既存であった『フィールド』は七月二十日を持って消滅しましたが、どうやらまた新たに『フィールド』が組み直されるようです」

「ふむ……実に興味深いな。そんな情報をよく手に入れたものだ」

「いえ、博士、机に置かれている資料の内、一番左の物をお取りください」

博士は言われた通り、机に置かれた資料の中から指定された資料を取る。それはいたってシンプルな物で、表紙である白紙の紙を含めて計二枚。

残りの一枚には、印刷された少しのメモ書きが、四枚の顔写真を囲んでいた。

新たな『フィールド』の構成員。

「この情報源は？」博士の質問に、またしても獣型ロボットは単調に答える。

「統括理事会です」

「……どうしてか。こういう時だけ頭が回る」

「では、今回の内容を発表させてもらってもよろしいでしょうか？」

「ああ」

「博士には今回、『フィールド』の構成員、四人の内一人への襲撃を行ってもらいます」

「そうかい」

博士は改めて、四枚の顔写真に視線を移す。

そして、不気味に、

一般人には恐怖さえ与えるような、

暗い裏の顔で、薄く微笑んだ。

「どいつにしようか」

「さあ、遊ぶぞー！！」

そんな少女の元気な声を、耳の隅で捉えた。

ふと顔を上げると、車椅子に乗った少女が、少年に後ろから押してもらって嬉しそうにはしゃいでいたのだ。

「……ほう」目を丸くしたと思うと、すぐに博士は不敵に笑う。

爆走車椅子少女か。

「それは思いつかなかった」

「博士、変な発想はやめてください」

+

「でかつー!!」

「おお、本当に広いな」

エバンスと僕は、水着に着替えてプールの入り口に立っていた。

想像してたものよりずっと広く、目の前には大きなウォータースライダーがどんと構えてあり、地面には蛇のようにグネグネと、水路状のプールが這っていた。

「うおー!!」

「落ち着け。まだ青葉たちが来てないだろ」僕は走り出しそんなエバンスを止める。

「止めるな！僕は水になるんだ！」

「なって嬉しいって思う奴を初めて見たわ」

「あまり塩素を入れないで！」

「おお、それぞ水の気持ち!!」

バカな二人です。意外に僕たちは僕たちで楽しんでるんです。

「お、お待たせ!!」

後ろからそんな声が聞こえて、それが青葉の声であることなんてわかっていたから、ゆっくりと振り返る。

「……………」

息を呑む。青葉の水着姿に釘付けになった。意識していないと、顔がにやけてしまいそうだ。

風になびいてツイストしたような緩い布地でデザインされたビキニ。下は少し長いスカートのように、太ももの半分辺りまでを隠していた……

あ、まずい。

「はい、ティッシュ」

「本当ありがとうございます、扇さん」

またあなたかよ！

「鼻血出し過ぎて死ぬなよ」

「そんな愉快に死にたくありません」

でも、実際は天国だったりして。

ということ、後の水着描写は割愛。作者の変態ぶりを止めるためにも一役買おうではないか。

「う、うわあ！！ 凄く広い！！」青葉はプール全体を見渡して感嘆の声を上げる。

「これなら、行動範囲が制限されてもだいぶ遊べると思うよ」

「さあさあ、行くぞ！！」エバンスはカルマの手を握ると一目散に走り出した。

「こちら、あんまりはしゃぎすぎるなよ！！」

「ほら崩！ そんなこと言わずに私たちも行くこう！！」

「はいはい、そうだな。扇さんは？」

「私が見ての通り、保護者役だ。ここで待っているから、楽しんできなさい」

「わかりました」

「扇さん、楽しんできます！！」

「ああ、行っておいで」





「えええええって、もしかして、青葉は車椅子のままプールに飛び込んで悲惨な運命を辿るうとしてたのか？」

「い、いや、違うよ……！」

「じゃあ、他に方法があるのか？」

「え、えええええ、えつと、た、確かにないけど、その、私もまだ、その、あの、えええええつと」

「ぶくつ、くくくく、青葉いいじゃないか。夢に近づきそうだぞ？」

「ああ！、扇さん!？」

「へ、夢？」

「あああああああああ！！ 何でもない何でもない！！ 何でもないから！！」真つ赤な青葉は、顔の前で両手をブンブンと左右に振る。

「そ、そうだよ、車椅子がなくなったただだよ。いつも階段の時は車椅子と一緒にかかえてもらってるじゃんか……ううううう、わ、わかった!!」ボソボソと呟いたかと思うと、何やら一大決心をしたように頷き、キリツと前を向く。ちなみに顔は赤くなったままだ。

「よし、それじゃあどっこいしょ！」

「ひゃあつ!？」

僕は、青葉を抱きかかえた。

ぺちつと音を立てて、青葉の肩が僕に当たる。早鐘のような心臓の鼓動が、間接的に僕に伝わってきた。

……まずい。

意識しないでいたはずなのに、何故だか僕まで緊張してきてしまった。

「じ、じゃあ、よろしくお願いします」

「お、おう！」

ガチガチになりながら青葉をかかえて歩く僕は、周りの人から好奇心な目で見られていた。

「ぷふふ、」ガチガチになっている僕を見て突然、青葉が小さく吹き出したように笑った。

「な、何だよ？」

「だって、あれだけかつこよく言ってたのに、凄い緊張してるから…ぷふふ」

「しょうがないだろ！ 考えてたのとギャップがあっただよ！」

「ギャップ？」

「あ、いや、何でもない！」

む、胸が当たってるなんて死んでも言えない……。

「崩、」

「な、何？」

「ありがとう」

「え、どうしたんだ？ いきなり」

「崩がいなかったら、私は今こんなに幸せじゃなかったと思うから」  
「……大袈裟だな」

「そんなことないよ。本を辿れば全部崩のおかげ。どれを見ても、完全に崩がいる」

「……僕も、」

「ん？」

言われてばかりは、なんだかむず痒い。

「いつも心配させたりして、本当にごめん。それに、お弁当まで作ってもらって、その………」

言うのも、結構むず痒かった。

「ありがとう」

「……ぷふふっー！！」青葉がとつとつ吹き出した。

「えっ!?!」

「崩……の、照れた顔ってかわいいんだね」

「なっ!?!」急激に暑くなるのを感じた。

「いきなり何だよ!」

「ははは、ごめんごめん」そう言って青葉は、抱きかかえられた状態のまま出来る限りの範囲内で、小さくお辞儀をする。

「これからもよろしくお願いします」

なんだか、僕は安心したような気持ちになった。

「「ちら」ぞ、よろしくお願いします」

お互いに顔を合わせて、微笑んだ。

「さあ、プールだプール！」

「よし、そうだね！ いっぱい楽しむぞ……」

「崩——！！」

どんと、

後ろから強い衝撃が僕を押した。

「あ、」

「え、」

態勢を崩して、プールに向かって前のめりになる。

咄嗟に青葉を水面側からそらし、後ろへと方向転換した、

その先に見たのは、

空中落下してくるエルギオンス兄妹だった。

「崩——！！！」

「崩兄——！！！」

「く、崩え——！！！」

「ぎ、ぎいやああああああああああああああ！！！」

大きな水しぶきが、流れるプールに逆らうように音を立ててできた。

微笑ましい？

めちゃくちゃ痛いんだぞ、コノヤロー！！！！

「お、お疲れ」

ふらふらになりながら、青葉をかかえて帰ってきた僕と横ではしゃぎ回るエルギオンス兄妹を見て、扇さんは笑って言った。

「楽しかったか？」

「おう！」

「うん！」

「はい！」

「……………」

「みんな楽しそうでよかった」

数に入れられなかった。

「よし、青葉姉、次は向こうでバレーしよう！！」

「うん！！」

青葉は車椅子に座ると、エバンスが後ろに回って押し始めた。

「崩、行くよ！？」

「僕は……少し休憩」

「しょうがないなあ、私たちは先に言ってるね！！」

「お、おう。気をつけてな」青葉を見送ると、僕は休憩スペースに

腰を下ろした。

「…………崩」

横に座っている扇さんが僕を呼んだ。

「な、何です……………か？」

扇さんから、ただならぬシリアスムードを感じ取った。

「ど、どうしたんですか、扇さん……………」

「崩……………一つだけ聞かせてくれ」

「は、はい？」

「青葉の胸、どれくらいだった？」

「ん〜、こですわね、ってコルア」

全然シリアスじゃなかった。最近、感覚がおかしくなってるな。

「発展途上だな」

「ちよお前黙れ!!」

意味がわからなくなってきた!!

困ったときの閑話休題、

「青葉も見違えるほど元気になったな。」

「本当です。あれ、そういう扇さんは泳がないんですか？」

「ああ、私はいいよ。お前たちを見ているだけで充分だ」

「そうですか」

「……ああ、何だかお前たちを見ているとさ……」扇さんは柄にも似合わず、シニカルに笑った。

「昔もこんなだったなって、思い出すんだよ」

その深みがかった扇さんの表情に、僕は目を伏せる。

「覚えてるか。昔のこと。プールで遊んだことあるだろ」

「もちろん」

刻々と、記憶は蘇ってくる。その記憶は、まるでついこの前のように鮮烈だ。

「確か、まだ『彼女』が僕のことを少年って呼んでた時ですね」

「そつだな」

鮮やかに

『彼女』の思い出が蘇る。



『少年!』』

嬉しそうに、小さな簡易式プールに足をつけて、水しぶきを飛ばして遊ぶ。

『早く、少年!! 水がなくなるぞ!!』』

『だーめ! 今の水が一番冷たいんだよ!!』』

『なんじゃそりゃ』』

『ほら、意地張ってないで、早く遊ば!!』』

少年と遊びたいの!!』』

「忘れるわけじゃないじゃないですか」僕は呟いた。

扇さんが僕を見る。

「あいつがいなかったら、今の僕はいません」

記憶の中の『彼女』を僕は見つめる。

「あいつのおかげで、僕は今生きているんですから」

「……そうか」

「崩、扇さん！！ 遅いですよ」

呼ばれた僕たちは、声の方向へ振り向く。

向こうの広場のスペースから、青葉がバレーボールを掲げて僕らを呼んでいた。

「扇さんも呼ばれてますよ。行きましょう」

「やれやれ」溜め息をつくが、扇さんはクールに笑うと、

「崩」

僕を呼び止めた。

「何です」

「青葉ちゃんを、守ってやれよ」

「……はい、当たり前です」

「崩、扇さん、早くー！ー！ー」

「わかった！ 今行くよ！」

この時僕は、まだ何が起きるか知らない。

平和な日常が徐々に崩れ始めていることも、

『僕の存在の意味』さえも、

全く知らない。

†

この後は、四人で思う存分プールを満喫した。

三対一ではめられた。

扇さんからスパイクの集中放火をくらった。

エバンスにプールへ突き落とされた。

ボールを一度もさわれなかった。

顔がやけに腫れた。

プールを出た後、みんなでファミレスで夕食を食べた。

何故か僕だけライスしか食べれなかった。

全部僕の支払いだった。

お金がなくなった。

これだけを除けば読者の皆様に語るだけの価値はないので、**割愛。**

暗雲（後書き）

はい！

伏線大事ですよ！！

伏線が一番ですからWWW

次回は原作に介入&伏線です。  
まじめになります。

感想、評価、指摘、よろしく願います。

あと、ご覧になった皆様、『とある無題の音響』をこれからまどろ  
そよろしく願いますm( )m

## 背影（前書き）

お、お久しぶりです・・・

冷えピタです。

いろいろと忙しく、一ヶ月ほど更新が出来ませんでした。

いつも読んでもらっている方々はどうもすみませんでした・・・

それともう一つ

長いっ・・・・・・・・

ですが、どうぞ最後までお付き合いくださいm（ ）（ ）m

それでは。



いや、もう本当に。その一言に尽きる。

というか、このまま続けるとどこでもいいことが規則性を帯びてどこまでも続きそうだ。

「ってあれ？」

何かこれ、この前あったような……。

……いや、確実にあったな。しかも二回目だよ、これ。

「あ、桐原さん少し右です！」

「そこからまた少し上です！」

「はいはい……」

そんな回想はさておき、僕はというと木に登っていた。

ジャツジメントとして、ね。

その理由はもうすぐ、街路樹のてっぺんに行けばわかるだろう。登りきった僕は、ひょこつと枝の隙間から顔を覗かせる。



ふるふると震える、一匹の猫がいた。

（見覚えのある猫だな……）と思いつつ、僕は「ほら、おいで」と手を伸ばしてみるが、いつこうにこちらの手に近づいてこようとなない。

「どわっ!？」幹にかけていた足が滑り、慌てて両手で、猫のいた横へと伸びる太い枝へと手を伸ばす。最悪なことに僕のせいで木に揺れが生じ、『何だ何だ!？』と猫は飛び上がると、ビュンと電光石火で、今いる場所から枝の先の方へ移動してしまった。

「あちゃー、どうするかな……」

「き、桐原さん！ 大丈夫ですか!？」

「あ、うん。一回降りる」登ってきた幹を丁寧に、枝に手をかけて降りていき、ゆっくりと地上に足をつける。

「うわあ、あれじゃどうしようもないですね」佐天が、街路樹の幹からグンと横に長く伸びた枝の先にいる猫を見て、呟いた。

「うーん、何かいい方法があればな……」初春も横で頭を抱える。

この状況を説明するには少し時間を戻らないといけない。今日はとすると、この夏休みは色々とあったせいでジャッジメントとしての活動をおろそかにしてしまった、というのもまだ研修生段階のため夏休みに仕事をするのはあらかじめ予定されてはいなかったのだが、何だかそれも気がひけたし、ちょうどいいことに固法先輩から『人手不足で手伝ってほしい』という電話を受けたので、第177支部で仕事をした後、初春と一緒に帰っていると街路樹を見上げて立ち尽くす佐天を発見したわけだ。どうやら猫が木から降りれなくなっただけらしい。

そして、僕が木に登って助けるといふ案が出て、それが失敗して今に至るわけだ。

「まいったなー、どうするべきか」

「ここは、あれしかないですよ！ 桐原さん！！」 初春が興奮気味に僕へと提案した。

「何？」

「飛んでください！！」

「初春、お前の頭が飛んでるぞ」

「いや、いい案じゃないですか！ 初春の言う通り、飛んでください！！」 佐天さえも何故か同意する。

「何言ってるんだよ」

「飛べないのはチキンですよ！！」

「じゃあお前らもチキンな。はい終了ー」

「わわ！ 待ってください！！ごめんなさい！！」

と、お約束。

「嘘嘘。確かに飛ぶのが良さそうだな」

「え、桐原さん本気ですか？」

「その前に少し準備をとちよつと待っていてくれ」そう言い残すと、僕は目の前にあったコンビニに入った。

数分後、

コンビニから出てきた僕を見る初春と佐天の顔は、何をしているのかわからないといったようなきよとんとした表情を浮かべていた。

「き、桐原さん……何してるんです？」

「まあまあ、はいこれジュース。暑いだろ？」

「あ、ありがとうございます……って、だから桐原さん、一体全体何を考えているんですか？」

「さっきお前たちも言ってただろ？」僕はニヤリと含み笑いをすると、静かに言い放った。

「飛ぶんだよ」

「……桐原さんの頭飛んでますよ」

「ぐわあ！言い返された！」

僕が馬鹿みたいじゃないか……。

「って、飛ぶってどういうことですか！？」佐天はぐいっと顔を近づけて僕に聞く。

「飛ぶって言うっても、僕の場合は『跳ぶ』に近いかな」

そう言うって僕は、ピンと親指でコインを一枚、さながら御坂みたいに、空中へとはじいて見せる。そして戻って来たコインをはじいた手で握り取り、広げて、二枚になったコインを初春と佐天に見せた。もちろん、一枚は最初から握っていたただけだから手品でも何でもなし、ここで大事なのはそれではなく、この硬貨だ。

「五百円玉？」佐天は首を傾げる。

「うん」僕は頷いて、およそ7メートルはあろう街路樹を見上げた。「この高さだと百円玉ではどうも無理そうだし、手持ちがお札だったから五百円玉を出すために少し崩したんだよ。ジュースはそれの副産物」

「そうだったんですか、それならそうと言ってくださいよ……ってあれ…桐原さん、五百円玉二枚ありますよね？」初春の疑問は正し

い。

「もしかして、一万円をくずしたんですか？」

「うっ……」痛い所をつかれた僕だった。

「あっ、そうですね。学生ですから五千円で……」

「……二千円」

「えっ、……」

「初春、その……二千円札をくずしたんだよ……」

「まさか……あ、そうですね……」

「ぷぷっ！ まだあつたんですね、二千円札なんて」

「こら佐天笑うな！ 店員さんと同じような目で僕を見るなー！」

初春もこらえているようだった。

本当、上条並みの不幸が身につきつつあるよ……。

とりあえず、話を戻す。

「でも、桐原さん。本当にそれで飛べるんですか？」

「うん、おそらくね」不安そうにする初春に僕は頷いた。

「えっと、確か一度風船を取ったときがあつたら？ その時は木がまだ低かったけど、今回はかなり高いから、この五百円玉を間に挟むってわけ」

僕は助走距離を測る。手には二枚の内一枚の五百円玉を握っていた。

ゆっくりと加速して走り出す。

「本当に飛べるんです……」

「五秒」

「へ？」

初春と佐天の前を通過するとき、僕はボソツと呟いた。不吉な言葉を聞いたのか、二人は一時停止の後、素早く僕を目で追う。

「音の都合上、空中停止の限界は五秒！」

「ここ重要。」

「えええええ!!??」

二人の驚きを置き去りに、左足で踏み切りジャンプする。

そして近くにあった金属製の手すりに右足が着地する瞬間、そつと五百円玉を靴の下に敷く。  
右足が着地して、

音を吸って、

次の一步で、

空中へ勢い良く飛び上がった。

「うおっ!?!」

予想以上に飛んだため、少し体勢を崩しかけるが、なんとか踏ん張って空中で落ち着く。

一秒もせずに、猫のいる木の枝まで到達した。

『にゃにゃ!?!お前さんはさっきの!?!』と驚いたように、枝の奥へと後ずさりしてしまう猫。

しかし、僕もノープランなわけがない。

「ふふふ、猫よ!?!」

僕は秘密兵器をポケットから取り出してつきつけた。

猫の大好きな、

「かつおぶしでございませす!?!」

ピクッと、猫は反応するやいなや『よくやったー!?!』と言わんばかりに、僕の手へ飛びついてきた。

「よっし！」捕まえた猫を抱きかかえると一安心する。

これで五秒経過、だ。

僕の体が重力に従い始める。

それと同時に、五百円玉を地面へ落として地面から跳ね返ってきたその上に左足で着地した。

いわゆる、衝撃吸収剤だ。

「ふう、無事成功して良かったよ」

「にゃー」

と頷くように、猫が落ち着いた鳴き声を発する。

「あのなー、もとはといえばお前が…あっ！！」近くで見て、ようやくこの猫を思い出した。

「スフィンクスじゃないか！！」

『ふむふむ、この匂いは確か……桐原殿ではないか！』と言っていたら嬉しいが、とにかくスフィンクスの方も元気な鳴き声を返してくれた。

「スフィンクス、インデックスはどこなんだ」

「にゃー」単調に鳴いて答える。

「じゃあ、上条は？」

「にゃー」「これもまた、単調だった。

「……………」

「……………」

「お前も大変だな……………」

「にゃー……………」

僕には、それがため息に聞こえた。

類は友を呼ぶとやらなんとやら。

†



「スフィンクス、僕の頭の上は定位置なのか？」

『にゃおー』と鳴いたかと思うと、御満悦のようにスフィンクスは顎を下ろす。

その後というのも、僕とスフィンクスは初春と佐天とは別れて、インデックスの家へと向かっているところだった。いかにも幸せそうなこいつの顔の理由はきつと、初春と佐天にたっぷり撫でてもらったからだろう。幸せ者めコンチクショー、と微塵も思わないわけではない、横目でそれを見ている僕だった。

「ま、たまにはそういうのもいいのかもな」

『その通り。一時の癒しなのだ』ムフー、と今にも鼻息が聞こえてきそうな幸せオーラの溢れ出る顔のスフィンクス。

「でも、そろそろ降りてくれよ」

「にゃおー」

「周りの視線が痛い」

「にゃおー」

「おい聞いているのか？」

「ムフッ」

「さっさと降りやがれ！」不敵な笑みに怒り狂った僕は、スフィン

クスをガシツと掴み離そうとするが、スフィンクスも『なにくそ！』と意地になって僕の頭にしがみつく。

「ぐわあ！！ 爪、爪！！爪がくい込んで……！！！」

暴れていて周りに注意が払えなかったため、人混みで誰かにぶつかった。「きゃっ！」と小さく相手が声を洩らす。

「す、すみません……」

「いえ、こちらこそ……」

顔を見合わせた瞬間、

「あ」

「あ」

と二人揃って呟いた。

上下の繋がった、淡い緑色に流れるような青色が織り交ぜてある服。ヒールのあまりないサンダルを履いて、トートバッグを肩にかけるその姿は、夏休みはもうすぐ終わってしまっが、まさに夏って感じだ。ちなみにその服は僕と一緒に買ったものである。ポニーテールにされている長い藍色の髪の毛が、振り向きざまに左右に小さく揺れた。

「桐原さんじゃないですか！」

「萩か！ おう。久しぶりだな」

絵合萩だった。

「本当にそうですねー、『後日談余韻』以来です。やっと出れて、何だかホッとしました」

「萩さん、露骨にそういうこと言つのやめて」

「ふふふ、もう某なんていう第一人称キャラを捨てた私に、怖いものなんて何も無い！ さあ桐原さん、ボケまくりましょーぞー！！」

「は、萩が狂ってる！？」

とまあ、挨拶です。

「桐原さんは今日は何を……うわぁー！！」質問の途中で萩は目を輝かせ、僕の頭上へと視線をやる。

「その猫、どうしたんですか！？」

「ああ、友人の猫。木に登って降りれなくなっていた所を助けたついでに、家へと送ってる途中だ」

「そっなんですか……」

「……なんなら、さわってみるか？」

「いいんですか！？」

「僕が言うのも変だけど、どうぞどうぞ」といっつか、そんなに輝いた目で凝視されると、さわらせない方がよっぽど酷だ。

この時だけスフィックスが僕の頭から素直に離れたことは、あまりいただけない。

「うーー！！ サラサラしてます！！ やっぱり猫ってかわいいで

すよね」

萩は夢中になって猫を撫でていた。随分と御満悦のように、目を細めて、顎をうりうりと可愛がってもらっているスフィックス。

嬉しそうに萩も猫とじゃれあっていた。あの時から、随分と表情が豊かになったと思う。学校にも慣れて、生活にも余裕が出て来たのか、とてもかわいらしく、見ているこっちまでも微笑んでしまいうだ。

く……しかし、何だこの敗北感は。

「そっぴゃ、萩は何しに行くんだよ？」

「あ、私は大したことじゃないですよ」そう言って、照れ隠しをするように手を顔の前で降り、笑った。

「少し学校の宿題でわからないところがあって、それを図書館に行つて調べようと思つてたんです」

トートバッグの中身は、それってわけだ。

「へえー、どんな問題？」

「数学なんですけれど」

手渡して受け取った僕は、それに目を通す。

よかったー、簡単な方だ。

と、中学一年生の宿題を見て、安堵と優越感を覚えてしまう大人げない高校一年生の僕だった。

「なんなら僕が教えようか？」

「え、えええ!？」突然の誘いに、萩はびつくりして答えた。

「この脳みそがわかる範囲なら教えて差し上げましょうぞ」

「でも、時間は?」

「余裕だよ。スフィックスもそこまでなついていると、なかなかすぐには離しにくいしね」

「そうですか……それじゃあお願いします」ではではと萩は頷いた。

「それじゃあそういうことで。後は場所だけねど、近くのアミレスでいいか?」

「はい!」

僕たちは、アミレスに向かって歩き始めた。

平和に、ただ平凡に、時は流れる。

忍び寄る暗闇が足を掬おうとしていることにすら、

気がつかないまま。

「あの、これがわからないんです」

「……………」

まあ、僕たちは近くにあったファミレスに入ったわけであり、無事スフィンクスも隠して連れていけ、飲み物などを頼み、今、テーブルに広がる萩の宿題へと取りかかっているところだ。

しかし、それが問題だった。

「えーとな、萩さん」

「な、何ですか!？」

「何で全部  $x = 2$  なんだ？」

夏の計算ドリルと書かれた宿題には一次式の簡単な計算式が並んでいるが、そのどれも  $x$  が  $2$  と答えられていた。

「いやだって桐原さん、どう考えてもそうじゃないですか」

「何だよ!! いやまあ、最後の方にある複雑な問題は見逃すとしても、最初のこの問題、『 $x - 3 = 1$ 』がどうして『 $x = 2$ 』なるんだ!？」

「じゃあ桐原さん!」勢い良く、姿勢良く、ビシッと手を挙げる萩。

「Xが2以外に、Xに対応する答えがあると言っんですか!」

「いやあるよ!」だからお前の計算ドリルには正解がないんだよ  
!」

「なら!」……」萩がバン!と音を立てて机を叩くと、顔を俯けて唇を噛んだ。

「じゃあ、……」一体……、「涙をこらえているのか、眼は赤くなり、震えるその声で、彼女は呟いた。

「Xって何なんですか……」

「文字だよ!」……!」

おふざけはここにいらで。

とは言ってもさっきからこの調子で10分は経つ。

「それにしても、結構間違えてるじゃんか……」

次々にページをめくっていくけれど、現れるのは赤い線のバツ印がほとんどだ。

「おいおい、萩……」

3ページ目からは何とも言えないくらい悲惨だった。x=2で通し続けるし、一応学んだのか、yは=1または2で交互に使っているけれど、zは全て=1で答えている。

「お前、どういう計算したらこうなるんだよ？ いいか、だからこのxはだな……」

はっ！と、僕は突如我に返った。

というか、何かひらめいた。

「は、萩……」寒気を何とか抑えて、計算用紙として使っている紙に僕はxを丁寧に書く。

サツ、サツ。

「xは？」

「2」

「じゃ、じゃあ……」次にyを書いた。

サツ、サツ。

「yは？」

「2」



「……………なら」締めになだ。

「Zは？」

「1」

間違いない。

こいつ、数字と画数を一緒にしてやがる。

「……………なんてこった……………」

予想以上の難物だ。

「あの……………」

ワシヤワシヤと頭を掻き乱す僕を見て、萩は何だか心配な面持ちで僕を伺った。

「あ、いや大丈夫。今わかりやすい解説をしてやるからな」

そうは言ったものの、どうしたものかとやはり僕は悩んでしまっただが、

「いえ、もういいです」

「え？」

それを止めたのは、

まぎれもなく、萩だった。

「いや、でも」

「いいんです」萩はそう一言呟くと、僕の手元にあった計算ドリルを自分の元に手繰り寄せて鉛筆を握ると、赤いインクで間違いを指摘された問題の傍に、弱々しい数字を綴った。

「……………」

もちろん、『 $x - 3 \parallel 4$ 』が『 $x \parallel 7$ 』であることなんて式を見るだけで考えなくてもわかることだし、あたりまえ、普通の範疇も何も、一般教養であるのは確かであろう。けれど、彼女、

絵合萩・絵合薙を知る僕にとっては、

少し、驚く結果だった。

「……………わかるのか？」

「……………はい」

それがわからないから僕に聞いたのに、萩はそれを知っていた。

「な、何だ…知ってるなら答えることだってできただろ？」

「いえ、『私』は知りません」

「え？」

わからないといった顔をする僕に、萩は自分の頭を人差し指で指し示した。

「『ここ』が答えを出すんです」

ただ、萩は苦笑する。

「だけど、」

「そうです。普通はあたりまえですよね」

頭に命令して考えて答えを出すのだから、間違ったことはない。

そう言おうとした僕はおそらくその面に関しては普通であり、そして、

それを止めた萩は異常だった。

「覚えがないんですよ……」

例えば、ある所に一人の中学生の女の子がいたとする。その女の子はある日、何気なく高校生の教科書を、中学生の教科書を、数字のはびこった列を、文字の入り混じった列を、カッコに囲われた数字を、数字に数字のついた数字を、或いは変哲な記号がついた数字の羅列を、初めて、見たとしよう。

そして、それが全部わかったとしたら？

もちろん、一億人に一人というような天才であれば話は別だ。のっぴきならない、奇天烈な解答で、大人たちをあっと言わせでもするのだろう。

しかし、こんなときに限って、それは紙一重の差で違う。

「私……こんな知らない……」

異例。

特例。

外れた存在。

普通じゃない。

あたりまえじゃない。

『僕』のような

『青葉』のような

『彼女』のような

学園都市に忍ぶ、

闇の排出物。

「私は、物心ついたときには……ずっと薬詰めだった。何も出来なくて、ただ薬を大量に飲んで、よくわからない液体の入ったカプセルに入れられて……」そっと自分の肩に、腕を胸元で交差させて、それぞれの手をそっと置く。

「もちろん、勉強なんてしてないのに、それに言葉だってままならなかったのに……私、この前初めて勉強をしました。そのとき、びっくりしましたよ。見たこともない順番で数字が並んで、それを解いてみてと言われて、黒板の前に立ったんです。わかるわけがないのに、わかるはずがないの……って思っていたら、その式を見るだけで答えがわかったんです。頭の中に答えが浮かんで、そこまでの道筋が、全く自分の知らない記号で意味付けされているんです。ゾッとしました。何よりも、チョークを握ってその答えを書こうとしている私自身に、」

萩は、震える肩を自分でぐっと抑えた。

「時々私、わからなくなるんです。普段生活している自分は誰なのか。数式を解く私は、言葉を喋る私は、一体誰なのか。もしかしたら、私の中に、薙も知らない誰かがいて、だとしたら私は、……私  
は」

かすれた声で萩は口にした。

「一体……誰なんでしょうか……?」

実験によって、演算能力の向上により生まれた副作用。

脳の一人歩き。

知らないものを知っている。

見たことのないものを見たことがある。

聞いてないのに聞いた。

触れたことがないのに感触がある。

わからないことがわかってしまう。

それこそ、

本当の一人ぼっち。

「……なるほど、そういうことか」

でも、

「なんだ、そういうことかよ」「僕は安心した声を出した。

「な、そういうことかっ！」「声を荒げ、萩は強く口走る。

「桐原さんにはわからないでしょ！ 世界に一人の気持ちなんて！  
自分が誰だかわからないなんて！！」

「…わかるよ」

「えっ……」  
静かに放たれた僕の答えに、萩は止まってしまふ。そのときの僕の、優しく笑った僕の顔に、萩は戸惑った。

「わかるよ」

「嘘ですよ……」

「ううん、嘘なんてつかない。僕にはちゃんとその記憶がある。この身で直に、その寂しさを感じた」

もう昔の、  
でも消えることのない、

四年前の話だ。

「じゃあ、私はどう……」

「萩」小さく呟いた萩に、僕は手を突き出した。

「えっ」困惑する萩に、僕は笑って答える。

「小指貸してみ」

恐る恐る萩は、右手の小指をそつと出すと、

僕はそれを、自分の小指でギュッと握った。

「ふえっ!?!」驚いた声を挙げる萩。

ここで僕は、決めゼリフ。

「1 + 1 = 2だ!」

「!.....、何も言わずに、萩は顔面からテーブルにめり込んだ。」

じゃなくてじゃなくて、照れ隠しはこれまで。

「今から、始めてみたらどうだ?」

「え?」顔を上げて、萩は僕を見る。

「どういことですか?」

「そのままだよ」

僕は、『四年前』のように笑った。

「何もないなら、今から始めたらいいじゃないか。自分がわからないなら、これから創ればいいじゃないか。過去がなんであろうと、お前がなんであつても、そんなの関係ない。心配しなくても、僕がいる。友達がいる。僕たちがお前を証明してやる。僕たちから始めればいい」

それでいい。

そうやって僕も、『彼女』に救われたんだ。



「本当……ですか……」

「任せろ。僕たちはずっと、お前の味方だ。約束する」

笑いかけた僕を見て、萩は急に顔を赤らめると、僕から視線を外し頷いた。

「あ、あの……桐原さん……その……」

「そしてだな、萩」僕は萩がモゴモゴと呟いた言葉が聞こえず、話し始めた。

「見る！ ここから『引き算』モードへ移行するぞ！」

「はうう！？」何だか物凄い期待外れな悲鳴でリアクションする萩だった。

「今から、このシロップが二個のところを……」

「も、もう！！ ふざけないでください！！」

「え、ふざけるも何も、計算教えて欲しいんだよな。これが本題だろ」

「雰囲気察してください！！」

「ん、雰囲気？」

「なっ！！??」萩は急に顔を赤らめると、「あ、いやそのー、こここれは、別に……何でもないです……」と一人で自己完結すると、自分を落ち着かせて、乗り出していた状態に戻した。

「ど……鈍感」

「えっ、何だ？」

「何でもないです！！」「いーだ！ と言って、萩は席を立とうとする。

「あれ、どこ行くんだ？」

「ちよつと飲み物をおかわりしてきます」

「何だ、それなら僕が行くよ」

「いや、大丈夫ですよ。私先ですから、桐原さんのも入れてきます」

「そうか、何かわるいな」

「いえ、かまいません」

「それじゃ頼むよ。足元気をつけてな、こけるなよ」

「わかってます！ もう、私中学生で」

ガツッ。

「すっ？」

萩が目の前で傾いた。

いや、フラグのつもりじゃなかったけれど、だとしても、

「これは早すぎー！」

慌てて僕は、地面に吸い込まれていく萩の手を掴もうとする。

「うっ！？」

急に腕を引っ張ってしまったため、萩は態勢の収集がつかなくなっ

てしまう。

「おいっ！！」

「きゃっ！！」

思いきって伸ばした腕が、萩の頭の後ろに回る。

幸いなことに、萩の後頭部が僕の腕で支えられる状態で勢いは止まった。変な言い方をすればお姫様抱っこの地に足付きバージョンともいう。

そして最後にお墨付き。

「ふおっ！！」萩を通り越して素早く伸ばした左手の先にある、2つのコップの口の部分を掴んでキャッチした。

我ながら見事な動きだった。

「ふふふ、僕も少しはできる男になったな」

「……たたた、」

萩は、閉じていた瞼を開ける。

僕は、至近距離で萩の顔と対面した。

あ、いや、

絵合の顔と対面した。

「あ、え……えええ……」

「おい、萩。注意が足りな」

「おい、お前……」

「へ、お前？」

あれ、僕の知っている萩はお前なんつ言わないはず……

「ま、まさか……」

「ななななな、何だ、この態勢は？」

「ち、違う！ お前もわかるだろ！！」

僕は慌てて、彼女に素っ頓狂な声で説明し出す。

「これはお前が床に倒れそうになったのを、必死に止めてだなあ！？」

今となつては、それがまるで抱き寄せるような態勢に見えなかったわけではないこともない。

「んで、この腕はな、ほら見てみる！！　グラスだ！　グラスを取ろうとしてたんだよ！？」

まあそれも、二の腕近くに当たっているふっくらとした感触を無視するわけにはいかないかもしれない。

証拠無し。言い訳無用。

まさに裏目的状態。

「お、お、お前は……は、はー」

「待ってくれ！！　違うんだ！　話せばわかるんだよな」

「この変態があああああああつつつつ！！！！」

「薙iiiiiiやあああああ！！！！」

真っ赤な顔をした薙の拳は、

僕の顎を打ち砕いた。

「うおっ！ 見事なアツパー。超惚れますね」

たしか、そんな客の聲が、空中で聞こえたと思う。

+

「い、ごめんなさい。薙様」深々と頭を垂れて謝る僕。

「……………」ずっと顔を赤らめる薙、の構図だ。

何が起きたかを整理すると、倒れかけている萩の手を引つ張った衝撃というひよんなことから、萩と薙の意識が入れ替わってしまい、いきなりのことで状況を飲み込めない薙は、怒り狂った殺人アツパーで僕の顎を打ち砕く鉄拳制裁を行った、僕からすれば理不尽に行われたわけである。

「……………別にもう怒ってねえよ……………」

ムスツと赤くなっている表情は変えないまま、薙はパクツと目の前に置かれたフルーツパフェをスプーンですくって食べていた。

うーん。「俺を食べ物でつるとはなめてんのか…？」と凄んでいた割には、お詫びのフルーツパフェで手をうったところからしても、やっぱりそこらへんは女子中学生なのだろうか。まあ何にせよ、僕としてはそれが唯一の救いだ。

一口食べる度に、ムスツとした薙の顔が綻ぶ。

「お、おいしい…！」

「良かったな。幸せそうで何よりだよ」

「なっ……！？」急に薙は赤くなると、バン！とテーブルを両手で叩いて猛抗議をしてきた。

「へ、変なこと言うな……！俺は別に幸せそうな顔なんてしてねえ……！」

「よく言うよ、『お、おいしい……！』ってめちゃくちゃ嬉しそうだったぞ」

「な、う、うるさい変態……！」

「変態は誤解だ……！」

「あれはどう考えても……！！」それを聞いて思い出したのか、うつ！と言葉に詰まってしまった薙は、「あ、あわあわあわわわ」と一人慌て始めた。

「うつ……うつうつうつうつ……！」限界を突破するくらい、簡単に言えば、確実に40 を超える発熱をしているであろうと思われるくらい、薙の顔はのぼせ上がる。

「お、落ち着け薙！ほら、何かお前、非常にまずい！何一人で自爆しようとしてんだよ……！」

「じじじじじ自爆なんて、ばばばばばバカヤロー………あ、TSUT Y A ええええ延滞してる………」

「それ今気付くのかよ……！何でもいいから冷たい物食って落ち着け……！」

薙は勢い良くフルーツパフェを食べ終わると、「ふ、ふう……」と一息ついた。

本当、今日の薙はよくわからない。

とまあ、一区切り。

「そ、その……わかるかったな。いきなり殴って……」

「もういいよ。気にしてない。まあ、元気そうで何よりだよ」

それでも考えないと、報われない。

「え、あ、おう。もしかして……俺のこと……その……気にしてくれてたのか？」

「ん？んー、まあちよつとだけぶはあっ……！」

勢い良く顔面にファミレスのメニューがクリーンヒットした。

「僕……何か悪いことしたかな？」

「……鈍感野郎」薙はそう言うと、ぷいとふてくされて、窓の外に視線をそらしていた。

「えーっと、……そうだ」話題を変えようと僕は、テーブルに目を移す。

「数学の続き……教えようか？」

「……」一瞬視線を僕に向けると、薙はペンを握った。

「次はこれなんだけど、」

「俺のせいなんだよね」



薙が突然、呟いた。

僕はふっと、視線を彼女に向ける。

今までとは全く違う、暗い、もどかしい表情だった。

「……………何がだよ？」

「薙の悩み。全部俺のせいなんだよね」

薄く、小さく、

薙は笑う。

「もともとは、萩が本体だったわけ。俺は、その、能力の副産物さ。能力の肥大した一部なんだよ」

「どっという意味だよ？」

「そのまんまだよ」

薙は僕の顔を見ずにペン回しを始めた。

意味を直接受けるのが嫌で問い詰めたのに。

『そのまんま』、理解しなくなかったから深く掘り下げたのに。

「もともと、俺はいなかった。いや、いたけど、『俺』としてはいなかった」

僕を見る薙の目には、

生気がなかった。

「俺は『能力』だ」

その発言に、僕は言葉を失う。うろたえる僕を見て、薙はシニカルに笑って見せた。

「萩の改造実験段階で埋め込まれた『能力』さ。いや、発現したと言うべきかな。もともとは俺の意識はなかった。とんでもない突然変異のおかげさ。そのせいで、萩は被検体として優先的に選ばれた。皮肉な話、発現していなかったら失敗作として捨てられていただろうな」

薙は僕を見ないまま、話を続けた。

「萩は『精神操作』として、俺は『大気使い』として成立してしまつたから、もう難しいことはわからない。数ある実験体の中でも、特異な変化を遂げた萩が失敗作となつてしまつて理由も、今じゃ永遠に闇の中だ。でも、わかることは、ただ俺の存在が、萩に多大な影響を与えてしまったことだけだ」

薙はペン回しを失敗した。シャープペンは小さな音を立てて、テーブルに落ちた。

「萩には内緒にしてくれよ。じゃないと、聞こえないように話した意味が……なくなるからさ」

ぎゅっと力強く、薙は手を握り締める。

その手を見るだけで、僕は胸を締め付けられた。

「お前は知っておいてくれ。俺の存在意義は、ほとんどな」

「知らない」

僕は彼女の言葉を遮る。

「はあ？」

「そんなこと、知らなくていい」

「お前、なめてんのか……人の話をちゃんと聞けよ！」彼女は激情する。

「しょうがないだろ！！これは事実なんだよ！！」

「そんな事実、ぶち壊してやる」

僕は低く唸った。

「僕の知る雑は、そんなんじゃない！」

「ははは、めでたい野郎だな、お前は。俺は……変わらねえよ」

何も変わらない。

過去は変わらない。

雑は変わらない。

僕は変わらない。

そんなこと、僕が一番知っている。

僕は『彼女』の記憶を、抱いて生きている。

そうだ。

だから、だからこそ、

僕は今を変えてきた。

「じゃあさ、どうする?」まるで、薙は僕を試すように問いを投げかけた。

その唇は、震えていた。

「もし、萩と俺、どちらかが消えなきゃいけないとしたら……お前は どうする?」

「……バカか」

「……え?」

過去の過ちを繰り返さない。

僕のやることはただ一つ。

「僕が、守ってやる」

「……」 薙はただ、僕を見つめた。

「僕がそうなる前に何とかする」

四年前アノトキから、僕の誓いは変わらない。

「……はは、何だそりゃ」 薙は僕から視線をそらして俯く。

「なあ……」

薙は震える声で、

自分の存在意義を確かめた。

「俺は、……生きていてもいいかな？」

僕が答えようとした時、テーブルに置かれたメモ用紙が少し動いたのに気づき、それを見て、

思わず、僕は小さく笑ってしまった。

トントン、とテーブルを人差し指でつつき、薙の視線を呼ぶ。

「もちろん、」

それだけ答える僕を見て、次にメモ用紙へと視線を移した薙は、はつと目をみはった。

計算用のメモ用紙には、

薙のシャープペンを握る左手の横には、

小さい字で『いいよ』と書かれていた。

「萩が言うんだから、絶対だな」

僕は、笑って言う。

『もちろん、だって薙は、私の大切な家族だもの』

そうやって萩は言ったのだろう。聴こえないけれど、そう僕には聴こえた気がした。

「はつ、とんだバカばっかだよ……ほんと……」

残酷な境遇。

絶望的境地。

変な話、不謹慎な話、

そんな環境だからこそ、彼女達は出会い、絆をより深めたんだ。悲しい時も辛い時も共に過ごしたっていうのに、

今更、そんなこと言っちゃいけない。

腐れ縁だ。

「ははは、そりゃどうも。どうだ、バカしかない所の居心地は？」  
そう聞いた僕に、薙は、

いや、

萩と薙は

目尻の涙を拭いながら、

確かに笑っていた。

「うん……最高だよ」

†

「うーん、何かあれだな」ファミレスを出た僕は、ぐっと背伸びをする。

「今日はぐええ!!」喋ろうとしたその時、後ろから薙の蹴りが華麗に決まった。

「それ以上言うな!」

「くっ、何だつて僕はこんな役回りなんだよ」

割に合っていない。

「大体、忘れられがちだけど、僕ものすごい勢いのパンチ顎に食らってるんだからな」

「だ、だから! それは誤解で! その、悪かったって言ってるだろ!？」

「いであ!! じゃあ、何で謝りながら蹴ってくるんだ!? 矛盾してるだろ!!」

「なっ!？」痛い所をつかれたと、身じろぎしてしまう薙。

「いや、だから、それは……」えー、あの一、その一、を積み重ねるに比例して、顔がどんどん紅潮して行く。

「て、てめえ……」

「ちょっと、ちょっと待て薙……何で握られた拳が徐々に振り上げられてるんだ!? ってよくわからないけど、僕が悪かった!!!ごめんなさい!!!」

ピピピピピ、と、そのとき。

僕の携帯がまさに助け舟と言わんばかりに、初期設定の着信音を奏でた。



「た、助かった！」一旦中止になったことに僕は心の中で歓喜の声を上げる。「ぬっ……！」と勢いを止められてしまった薙は、顔を赤くしたまま、ぷいっつと僕から顔を逸らしていた。

通話ボタンを押して、携帯を耳へと押し当てる。

「も、もしもし？」

相手は、意外な人物だった。

「桐原崩だな？」

「その声は……ステイル!?」

僕は驚嘆の声を上げたのだが、ステイルはいたって冷静に、それどころか、溜め息すらついて僕に答え返した。

「いちいち反応が大袈裟だ、君は」

「どうして僕の電話番号を？」

「それはあの子から聞いたのさ」

「あの子……って、インデックスの事だな」

インデックスって普通に呼べばいいのに。素直じゃないと思わないことはないが、彼らの、インデックスとステイル、神裂たちにもお互いの距離感というものがあるのだろう。そこは、もう解決したにせよ、難しい所でもあった。

「それにしても、一緒にいるんだ。それならちようどいい」スフィックスをそこまで送れば、今日の僕の、一応使命という使命は終わらせてわけだ。

しかし、二人の居場所を聞くために次に発しようとした言葉は、僕

より少し早く、ステイルが先制される。

「端的に、電話するに至った経緯を言わせてもらおうよ」ステイルの  
声は、一拍置かれた。

「君に、来てもらいたい。ネセサリウスの一員としての頼みだ」

「……………なるほど、了解」僕はステイルと同じくらい単調に、当  
たり前のように答えた。

簡潔が何よりと言わんばかりに、後は行き先だけを聞くと、短い挨拶  
すらなしに電話を切る。どうせ向こうでまた会うのだから、どっ  
ちみち今、挨拶から始まり事細かな状態説明云々をしようがしまい  
が変わらない。

耳から電話を離れた僕は、薙が僕の顔を覗き込んでいることに気づ  
いた。

「何だか、取り込み事か？」心配そうに聞いてくる薙に、僕は笑っ  
て答える。

「んー、少しね。大丈夫だよ、大したことじゃない。少しこいつを  
返すのが長引いただけだ」そう言っつて、ぐいっとスフィックスを持  
ち上げ、胸のあたりで止めた。『にゃおー』とかわいく、スフィン  
クスは薙に向かって猫なで声を出す。

「悪いな、送れそうにないや」

「な！？ い、いいよ別に！！ なんだ、送ってくれなくても一人  
で帰れるわ！！」顔を真っ赤に、慌てて両手を大きく左右に振る薙。

「そ、それじゃあな！！」

「あ、ああ、またな」

ファミレスの前で、お互いが反対方向に歩きだそうとした。

「な、なあ!!」

その一歩目で、薙は振り返る。

「ん、どうした？」

僕の言葉に、彼女は照れくさそうに笑った。

「今日は、ありがとう」

「……おう」

薙は頷いて、「じゃあ」と帰り道に振り返ると、ゆっくり歩き出す。

僕もそれに答えて、彼女に背を向け歩き出す。

本当、未来の僕から見たら、今の僕はとてもじゃないけど苛立ってしょうがなかっただろう。

簡単に、思い込み過ぎている。

妄動で、軽拳過ぎている。

僕は、どうして、

約束を守れなかったらと、緊張感を持たなかったのか。

僕は、どうして、

絵合の、笑っている顔しか考えなかったのか。

僕が自分の軽拳さを呪う時は、

絵合の、泣いた顔を見るのは、

そう遠くない、未来の話だ。

†

「いや、あのパンチは反則並みでしたね。超最強です。そして、殴られた方もピンピンしているなんて超不思議です」

とあるファミレスの、一角。

見た目12歳ほどの少女が、ソファ型の座席にちよこんと膝を抱えて座り、あらゆる映画のチラシを見ながら呟く。その映画はどれも、テレビでは取り上げられない、知名度の低い物ばかりだ。

「もしかして、あの女性は格闘家でしょうか。何はともあれ、あのパンチには超惚れました」

「お前はさっきから何言ってるの？」

その少女の向かいには、一人の女性が座っていた。といっても、その少女と比べればずっと大人びているため、年齢は高校生以上だろうか。夏仕様の半袖コートを着ていて、『お嬢様』という雰囲気を感じさせるが、手には何故か、ファミレスであるのに、外で買ってきたであろうシャケ弁当を持っているという、『お嬢様』からはほど遠い型破りなことをしている。

「うん。今日のシャケ弁当は、昨日のシャケ弁当と一緒にだ」何だかご満悦、といった表情を浮かべる彼女。そしてすぐに箸を取り、食べ始めようとするが、さっきの話題を掘り返した。

「そっぴや、パンチが何とかって？それ何、絹旗？」  
絹旗と呼ばれた少女は、視線を彼女に移す。

「まさに超最高のアッパーでした。女性の方がとある男性にアッパ

ーを喰らわしたんですよ。男性の方、超浮いてました。麦野さんの座っている方向とは反対で起きたので見えなかったんですね。まあ私も、結構離れていたのでよくわからなかったんですけど。超残念です」

「ふうーん」そうなんだ、と一応聞いて頷き返すと、麦野は箸を持ち直し、シャケ弁当に取りかかるうとしたが、

ブーブーブーブー、と

携帯の振動がそれを邪魔した。

至極決まり悪そうな顔を見ると、仕方なしに電話に出る。

「遅い。というか、タイミングが悪い」

いきなり、不躰に、麦野は電話に向かって呟いた。電話の向こう側で、活発的な女性の声が麦野に喋りかける。

「しょうがないでしょ！ 私にだって仕事があんのよ」

「これがその仕事だろ。早く話せい」

「あー、もうお前たちめー！！」

頭をかき乱しているに違いないぐらいの勢いだ。

「それで、結局は何だよ？ 二人しか呼び出さないで」

「それは今回の仕事が二人で足りるから。『アイテム』総員で行くほどの規模じゃないのよ」

『アイテム』

学園都市の暗部組織。

4人で一つの小さな組織。

だが、その4人で、いやもっと言えば、その中の一人、

麦野沈利だけで、軍隊を崩壊させるほどの力を持つ。

三人寄れば文殊の知恵と言うが、確かにこの場合、四人よれば怖い物はないのかもしれない。

「今回の資料を携帯に送るわ」

それを合図に数秒後、麦野の携帯にメールが届く。回線を繋いで聞いていた絹旗も、自身に届いていたメールを確かめた。

メールの内容はいたってシンプル。

顔写真が4枚だ。

「……これ何？」 麦野が訝しげに携帯へと質問する。

「まあ、話せば長くなるんだけど」一息ついて、電話の向こうで女は話し始めた。

「『フィールド』が、動き始めたの」

ピクリと一瞬、ほんの少し、

麦野の眉が動いた。

「……確か、『フィールド』は分解されたはずじゃ」

「ええ、確かに。既存していた『フィールド』は、七月二十日を持って完全消滅したわ。でも、新たに再構築されるのよ」

「ふうーん、あの『フィールド』がね」

特に思い入れがあるわけではないが、麦野は『フィールド』にひっかかる。

「それ、よくわかったな」

「あなたも大体予測がついているでしょ」

「……統括理事会」

「イエス。今回のインフォーマーであり、クライアント」女は、含み笑いをした。

「では、今回の任務を話していいかしら？」

「どうぞ」

「あなたたち二人には、その写真の『フィールド』の構成員4人のうち一人の襲撃を行ってもらいたい」

「……わかったわ」やれやれ、と溜め息をつく麦野。しかし、それならそれで生じる問題が、彼女にあった。

「どうして、一人の襲撃に二人も呼んだんだ？ 『アイテム』で言うなら、私か絹旗、どちらか一人で充分なはずだ」

「保険よ保険」

「保険なんて必要ない。私たちをナメてるの？」

凄んだ麦野の言葉に、しかしながら女は、声色を変えることはない。

「……どういふことなのよ」



「え？」

「.....」

女の発言に、

麦野は歪に笑った。

絹旗は、表情には出さないが、彼女に恐怖を覚える。

逆撫でされた彼女に歯止めは利かない。

それがlevel5第四位、『原子崩し（メルトダウン）』麦野  
沈利。

「ははは、それじゃあ後は私たちが勝手にやらせてもらうわ」  
「あ、こら！ もうあなたたちたらー！..」

麦野はそれを無視して、電話を切った。

「へえー、面白いじゃん」

彼女の声はもうさっきまでとは違つ。

低い低い、唸り声。

「殺しても、責任はとらないからな」

そう言つて彼女は、ニタツと笑うのだ。

4人のうちの一人、

とある少年の、顔写真を見て。

+

「思いの他、早くついたんだね」

僕が来た時、それがステイルの第一声だった。

「携帯のナビ機能使えば、ちよちよいのちよいだよ。それにしても、何故こんな所に？」

ステイルの指示してきた場所は学園都市外部にある教会、『オルソラ教会』だった。建設途中であるため、鉄筋などで組み上げられた足場が、教会全体の至る所に設置されてそのままだ。

「ちよつとね、もめ事さ」

「何だか、宗教界も大変なんだな」

「君が言うかい？ あくまでも君は、ネセサリウス所属のイギリス清教徒なんだぞ」

「そりゃ失礼」

あまりそういった実感わかないのだが。

「つてあれ、インデックスは？ ここにいたんじゃなかったのか」

「あの子ならもう動いたよ。表から突入する」

「そう。んで、」

僕は、尋ねた。

「上条は？」

「、よくわかつたね。彼がいるって」ステイルが意外そうな顔をすると、少しいじけたように呟く。

「インデックスがいて、上条がいないわけないからな。もしかして、インデックスが今から突入するってことは、上条は先走ってもう突

入しちゃってたりする?」

「御名答」

「まっただな、上条は」

「ま、君が言えることじゃないかもね」

「あ、あははは」僕は少し苦笑いをする。

「でも、それなら話は早いよ。僕は何の躊躇もなく助けに行く」

「言わせてもらうが、イギリス清教はそんな躊躇させる事を君にはやらせない」

「お、さすがイギリス清教！ ありがたやー！ あのー、できればもう一台クーラーが欲しいんですけど」

「君は、イギリス清教を何だと思っているんだ!？」

うーん、いろいろくれる人?

とまあそれはさておき、

閑話休題。

「んで、どういう戦略で行くつもりなんだ? ステイル」

「ふふふ、それはとても簡単な話だよ」

ステイルはここぞという時にかっこよく笑うと、ビシッと人差し指で僕を指し示す。

「君は、脇役さ!...!」

「.....はい?」

ポカーンとする僕を、ステイルはさらに置いてけぼりにする。

「いいかい？ 今回の君は脇役なのさ！！ はははは！！ 『エルギオンス兄妹編』はイノケンティウスしか出さなかったからな、ツケが回ってきたのさ！！ ふふふ、あはははははははははははははははははははははは、」

「いいからとつと行つてこい」

「ぬわあ！！！」

ドンつと、僕が後ろからステイルを蹴り出すと態勢を崩したまま、教会の壁へと倒れていく。

「うおおっ！！！！」

慌てて使った火の魔法が、教会の壁を突き破つて、ステイルは教会内部へと吸い込まれた。

「まさか、こんな風になっているとはな」

何だか舞台裏見れて得した気分。

つてちよいちよいこれ二次小説じゃん。

……自分で言つて悲しくなつたことは黙っておこう。

「さて、僕も動きますか」

当然、

後ろには、騒ぎを聞きつけたローマ正教の修道女たちがわんさかと武器を構えてやってくるわけで、

僕はそれに対し身構える。

「言つとくけど、手加減はあまりしないから」

その時、スフィンクスが僕の襟元から顔を出し、『にゃお!』と端的に短く、猫らしからぬ声で、彼女たちに吠えた。

「おおつ、やる気だなスフィンクス」

僕は、はははと笑うと、足場の一部である鉄筋から鉄パイプを抜き取る。

一通り、手の準備運動として鉄パイプをもてあそぶと、彼女たちに向かって構えた。

「さあ、行くぞ。脇役は脇役として、見えないところで目一杯輝いてやるっじゃん」

+

「くっ!!」

オルソラ教会内部、ローマ正教修道女たちがはびこる最中、

ある少女が、槍を振り回す。

ラフな格好は恐らくより戦闘向けにするためだろう。

「数が多すぎるっ!!」

息が荒くなりながらも、数の減らない相手に向かって槍の切っ先は絶対下げない少女。

けれど、多勢に無勢は自明の理だ。

「五和！ 大丈夫か!?」 仲間の一人である誰かが、彼女を気にかける。

しかし、そんなことをしている暇はない。この戦局では自分のことで手一杯なのだ。

「こ、これじゃらちが……」

「五和後ろ!!」

「っ!?!」

仲間の叫び声に、五和はすぐ後ろを向く。

一人の修道女が彼女に武器を振りかぶる。

「うっ!?!」

防御態勢も虚しく、両腕を前に突き上げた状態の五和に、大きな刃は、

しかし、刺さることはなかった。

相手の刃は、横から突如入ってきた鉄パイプで軌道を乱され、勢いよく地面に刺さった。

「な、なに!?!くはあ!!」

修道女に、驚く暇は与えられない。その鉄パイプは流れるような動作にそって、相手の鳩尾へと叩き込まれる。彼女は意識を失い、床へと吸い込まれた。

「おい、大丈夫か!?!」鉄パイプを操る少年は、五和に向かって心配そうに言う。



「……あ、はい！ 大丈夫です！！」

慌てて、頷く五和だが、彼女の中の疑問は拭いきれない。

この人は、どこから現れたのか。

敵に囲まれそうになるほどの大人数だ。

気づかないわけがないのに、この人の存在に気づかなかった。

「くそつ、多すぎだろこれ！！」少年は、持っている鉄パイプで応戦する。

それを見た五和も、今はそれどころじゃないと少年と一緒に協力した。

「なあ、これってさあ！！」突然、少年は五和に叫ぶ。

「一体、どういう戦況なの！？」

「あ、はい！！ ローマ正教と天草式で二極化している状態です！！」

「なるほど……じゃあ向こうには味方はいないと」

「そ、それがどうしたんですか！？」

「簡単な話だよ。頼みがある！」

少年は五和に向かって言う。

「建設用のあの足場を崩してくれ！」

「えっ！？ そんなことをして何の意味が！？」

「僕を信じる！！」

五和は、自分に向かって叫んだ少年の声に、心動かされる。

「は、はい!!」

五和と天草式の面々が、それぞれ近くにある建設用足場の根元を断ち切った。

鉄筋の足場は、波のようにうねり、倒れ始めようとする。

「けれど、これでも駄目です!! 確かに相手全体にダメージを与えることが出来たとしても、それでは微弱な程度しか!!」

しかし、そのとき五和は違和感に気づいた。

それは、あまりにも唐突なことで、彼女を震え上がらせる。

「音が……してない」

五和の視覚と聴覚が一致しなかった。

崩れる足場。

分解される鉄筋。

落ちていく鉄の棒は、

敵の武器と弾きあう。

床に当たって踊り狂う。

それなのに、どうして、

こんなにも無音の世界なの？

「ありがとう」

思考が収束する前に、五和は少年の声を耳にする。  
この無音の世界で唯一、

聞こえる彼の声を耳にする。

「う、嘘……」

五和の目の前で信じられないことが起きていた。



少年は、持っていた鉄パイプで地面を叩く。その音に反応した彼の後ろの音塊が姿を変えて、その長い鉄パイプに巻きついていく。

出来上がったのは、

巨大な鎌。

「たまには、宗教的名前で行きますか」

彼は両手で鎌を構えた。

「魔女狩り」

そして、鎌は振り下ろされ、

教会は、破壊される。

爆発したような音響と、

一瞬の閃光を伴って。

†

「うっ！！」もの凄い勢いで砂嵐が巻き上がる。

五和は態勢を保ちながら、砂嵐から視覚を守ろうとするが、

「あっ！！」態勢を崩して、後ろに吹き飛ばされそうになる。

しかし、そんな五和の手を咄嗟に握る人がいた。

砂嵐は、突然響いた金属音にかき消される。

五和の手を握っていたのは、さっきの少年だった。

「あっ……」

「いや、わるい。手加減したつもりなんだけどさ」

あははは、と

崩壊した教会内部から見える月を背に、

当人は苦笑いする。

「えっと、名前は？」

「い、五和です！」

少年はそのまま手を引っ張って、五和を立たせた。

「一応人は狙わず、建物だけ壊した感じだからさ。五和、あとで、  
救護手伝ってくれないか？」

「あ、はい！！！」

「うん、ありがとう」彼はそう言うと、五和に背を向け、事態の収  
集へと歩き出す。

「さあ、主役は行った行った。後で、集合写真とらないといけない  
だろ？ 僕はここにいるから」

「あ、あの！！！」

五和は、少年を呼び止める。

握られた手を胸元に、

ただ、その少年を見つめていた。

「あなたは？……」

「うおっつ」

忘れてた、と表情を緩ませ

「僕は桐原崩。よろしくな」

桐原は笑った。

†

てんやわんやだったが無事に全てが収まった。

オルソラが救出された。



天草式の容疑も晴れた。

インデックスにスフィックスを返した。

上条は病院送り。

午後11時以降にアパートへと帰還。

青葉に帰りが遅いと怒られた。

僕の夕食が、扇さんとエルギオンス兄妹によって食い尽くされていた。

失意と空腹のどん底のなか、部屋で一人虚しく寒天を咀嚼。

見かねた青葉が夜食を作ってくれた。

すごくおいしかった。

以上のことを除けば、後は語るに値しない事ばかりなので、割愛。

## 背影（後書き）

いろいろと原作関与でした。

しかし、あくまでも大事なのは伏線です！

後は一つとなりますので、どうぞ楽しみにしててください！・・・

・更新スピードに自信はありませんが・・・

それでは、読んでくださった皆様、どうもありがとうございました。  
これからも更新した際はぜひひみてくださいね！  
感想、指摘など待っています！

冷えピタでした。



## 胎動

「うつつ!!??」

僕は、突如として感じた、今までに比類のないぐらいの悪寒に身を震え上がらせる。

「崩、どうしたの？」異変を察知した青葉は、僕が押す車椅子から後ろを振り返った。

「……どうも嫌な予感がする。何だが、頼みの綱であった前書きすら崩壊してしまったような気がする、いや絶対そうじゃない！ なんか高笑い聞こえたぞ高笑い!?!」

これは、ストーリーを進める上で解決すべき問題……

「大丈夫だよ崩、見てない振り見てない振り」

「この確信犯つつ!!」

どうも今回は世界の終焉を見ることができるようだ。っていうかね、何というかね、大体うちの登場人物みんなふざけてるの。ははは、あははははは、はははーはーはーあーあ。

んじゃ、今回の本題に戻りますか……。

「ふふふ、楽しみだね」

「それは何よりだ」

青葉がこれほど嬉しそうにしている理由はというと、今から僕たちの向かう学校にある。今日は全生徒登校日だ。登校日、夏休みという名残惜しいスーパードグレートな期間が終了したという宣告であり、これから二学期が始まるぜーの、学校側から生徒に対する宣戦布告。およそほとんどの高校生の頭脳にある、便利なトンデモ広辞苑にそう記されているだろう。でも、青葉や、もとい僕もその他の学生たちもそうなのだが、夏休みの期間がとても長く、登校日という初日だけは友人との久しぶりの再会として、よくプラスな思いが付随するものであり、ま、そのメカニズムを簡単に言ってしまうえば、夏休みを有意義に過ごした分だけ報われるということなのだ。

さて、僕はこの夏休みを有意義に過ごせたのか、という疑問は置き去りにしよう。

「みんな元気かな？」

「んー、たぶん？」いろいろ含まれてるのはご想像にお任せします。振り向いて尋ねる青葉に僕が苦笑いで答えると、いつそう楽しそうな表情をする。

それを見て、僕は青葉の見てない所でもう一度、今度は小さく笑った。

「さあ、もうすぐだぞ」

「うん、うん！」

僕たちは、

いや、

僕は何も知らずに学校へ向かう。

皆さん、シートベルトは締めましたか。  
頭の中は、空っぽにしましたか。

ではここでタグ引用。

『混乱無秩序を含みます』

†

『日常のー』

まあ言ってしまうと、僕だって『学校になんか来たくねえよ』と、  
不良を気取ってぶんぶんいわしてやるぜーみたいな一世代前のモラ  
トリアム高校生を演じたいわけではない。

つまるるところ、僕も学校には来たくなかったわけじゃないのだ。

「な、何だか緊張するな……………」

廊下を歩きながら一人モジモジして、はにかみそうな表情を無理矢理抑えた顔をしている高校一年生を想像してもらおう。

「うわえ……何か胃液上がってきた」

自分の語りで自分が傷つくなんて、自滅もいいところだよ。

とは、言ってもだ。

僕は初々しい高校生らしく、教室へと繋がる扉の前に立つ。

胸が高鳴らないと言えば嘘になる。  
目を輝かせるなっつてのは酷である。

息を吸ってみれば、学校独特の、みんなの混ざった匂いがした。アドレナリンが分泌というか、静かな闘志ならぬ、徐々に気分が上昇する。いつも通りクールに行きたいところを、突然友達とバカやりたくなるような突発的な興奮状態が僕の平常心と入れ替わり立ち替わり支配しようとする。大股になりそうな足は必死で押さえた。上づる声は喉元で抑止。手の力は、程々に。楽しさはまさに絶頂期。

「おは……」

ガラツと、変哲も何もない音を立てる扉。  
踏み込む足は、教室の床を踏む。

風邪の吹き込む窓。なびくカーテン。不恰好に並ぶ机。各々が作る小さな群れ。高校生の『青春』。  
その中で僕が見たものは、

自分の机に置いてある、花の飾られた花瓶だった。

「.....」

『青春』を訂正しよう。

何だこの新手のイジメは？いやいや、死んでねえよ。

あれ、ちよつと待てよ……僕何か悪いことしたっけ？ だって夏休み始まる前だから一学期。一学期は特に目立ったこともしないし、迷惑かけたりもしてないし、というか僕、いつも教室でゴミ落ちてたりしたらすぐ拾うし、掃除当番を交代してほしいという頼みを断ったことないし、よく黒板消し忘れてる時は率先して僕が代わりに消してるし、体育とかの移動の時は鍵閉めすることも多いし、って何だこのけなげさも僕って千石撫子だよ！！ いや大和撫子の間違いだよ！！ っていうか何だ何だこの状況！？ あーもう意味わかんなくなってきた！！ 世界線間違えたのか？ 分岐点なんてあったのか？ あー紙にメモるときや良かったよでもこの世界ギャルゲーじゃねえよ！ ってお、落ち着け、自分落ち着け！ ふ、ふふ、面白いじゃないですか……どうする、何をどうすれば？ 方法は？ タイミングは？ 武器は？ な、何をどう選べば？

って、



「アニーゼになっちゃってるよ！…！」

おいおいおい、まずいよ何か最悪の終わりが見えちゃったよ！！  
ま、まさかこの状況……と、とにかく何とかしないと、ふ。ふふふ、  
面白いじゃないですか。どうする、何をどうすれば？ 方法は？ 夕  
イミングは？ 武器は？ な、何をどう選べば？

だから、

「アニーゼになっちゃってるよ！…！！…！」

「終わりだ。アニーゼ」

クラス全員がキリッとした目で僕を見つめる中、

上条は先頭に立つ。

「てめえはもう自分でわかってんだろ」

「いや、上条、僕アニエーゼじゃな」

「てめえの幻想は、とっくの昔に殺されてんだよ」

「だ、だから」

聞き覚えのあるセリフ。  
脳内再生される映像。

「ただど相手は、僕じゃねえ!!」

「うおー……っ……!!」

「これアニエーゼ編になっちゃってるげぼろじゃあぁあっっ……!!」

熱血の鉄拳をくらった僕は、床に潜む冷たさを知った。

『日常の二』

「じゃんけんするか」

「いや、頼むからさっきまでのくだりを無視しないでくれ」

授業終わりの休憩中、土御門が突如口走る。

「桐原の生き様は胸に刻んでおいたにゃー。かさぶたができて完治するまでの二日間は忘れないぜ」

「誰が怪我しろって言ったよ！？心に刻んでくれないかな！！？？」

報われないよ、全く。

「でも、ただのじゃんけんじゃないんだにゃー、これが」

「そっやねん！」

横からよきつと生えてきたのは、エセ関西弁の青髪ピアスだった。

二人して声を揃える。

「罰ゲームは恐ろしいぜえ〜!!」

「な、何だよ…罰ゲームって?」

「ういっよいっよ……」

土御門、耳打ち。

「なっ……」

僕仰天。椅子転倒。

「何でそんなことやらなきゃいけないんだよ!!」

「あほう。これには男のロマンがかかってるんや」

「お前らのトラブルに僕を巻き込むな!

「あら、やらないっていうのかにゃー?」

「もちろんだ!! んなじゃんけん誰がやるか!!」

「えー、じゃあいいのかにゃ?」

土御門は、またもや僕に耳打ちした。

「桐たんの能力、バラしちやおうかな」

「さ、最悪だ!! このコメディ的展開でシリアス条件を人質に  
やがった!!」

「さあさあ、やるのか? やらないのかにゃ?」

「ぐっ……だあー!! わかったよ、やればいいんだろ!？」

「それでこそ、桐原だにゃー。さすが似非男」

「手厳しいな、おい……さ、上条もやるぞ」

「……………」  
返事はない。ただの屍のようだ。

「……………」  
「どうしたんだ、桐たん？」

「あー何でもない。よし、三人でやるか」

三人が一つの机に集った。

「よっしゃー！　じゃあ始めるでえ！！??？」

僕たち三人とも、妙な緊張感に包まれる。僕たちの顎からは、教室の暑さには関係ない変な汗が滴り落ちていた。

掛け声は土御門。

「最初はグー。じゃんけんぽん！！」

結果。

青髪ピアス：パー

土御門：グー

僕：チヨキ

「「「おおおおおおおおおおおおお  
「「「

引きつった笑い方で、それぞれを見合って一步後退。

「負ける訳には、」

「行かないにや……」

「ほな行くで……」

避けるべきは一人負け。

願うのは一人勝ち抜け。

掛け声は青髪ピアス。

「最初はグー。じゃんけんぽん!!」

結果。

青髪ピアス：パー

土御門：グー

僕：グー

「だらしゃあああああああああ!!!!」

「ぐわあああああああああああ!!!!」

天国と地獄がそこにはあった。

「さあさあ、残るは桐原と土御門や!! どちらが罰ゲームなんか

な〜」ひひひひ、と重圧から解放された青髪ピアスは狂ったように笑い出している。

「だが、」

僕たちはまだ、戦場の中だ。

「勝つのは僕だよ、土御門？」

「はっはっはー、それは悪い冗談だぜえ？ 桐原」

一瞬、窓から入ってきた風が二人の間を抜ける。西部劇でよく見かける、草の塊みたいなあれが床を転がっていた気もしないことはない。

じゃんけんでここまでかつこよくなれる奴は僕たちを差し置いてほかにいないハズだ。

そして僕たちはしょうもない人間に違いない。

「じゃあ、行くにゃ」

「おっしゅっ」

最後の聖戦。

掛け声は土御門。

「最初はグー。じゃんけんぽん！……！」

結果。

土御門：チヨキ

僕：ゲー

「やつ、やったー！ー！ー！ー」

「ウィーーン」

結果。

土御門：パー

僕：ゲー

「何でだよっつー！！」

伸びのあるストレート不条理。

「なに平然と卑怯な真似をしやがるんだ！！」

「世の中には、正解が不正確である時が必ずある」

「誰が社会にでる前の教訓を与えて欲しいなんて言ったよ！？っ

てか、これ教訓じゃないよ！！ 規模が小さいよ！！ イソップ寓

話もビツクリだよ！！」

「つべこべうるさいにゃ、桐原は。んじゃ、『今から負けたらウイ

ーンじゃんけんチャンスじゃんけん』にします」

「お前の矮小な頭はあーだこーだ意味不明なんだよ！！ ていうか



なんだそのネーミングセンスのかけらもない」

「うだうだうるさい、始めるぜ」

「強制終了!!」

まるで僕がめんどくさい奴扱い。

うん、不条理だ……

「くっ、ここまで来ればしかたない……」

「おっ、さすが桐たん。男だにゃー」

だけれど、似非男から男へとレベルアップしたことを素直に喜んでいる暇はない。

「そんじゃ行くぜ」

掛け声は土御門。

「最初はグー。じゃんけんぽん!!」

結果

土御門：パー

僕：チヨキ

（き、来た!!!!土御門の『負けたらウィーンじゃんけんチャンス』!!!!）

「ウィーン」

結果

土御門：チヨキ

僕：チヨキ

「何でだよっっ！！！」

もはやツツコまざるをえねえ。

「バカなのかバカなんだな！？ 何であいこにしたんだよ！！ そこはお前が勝って僕が負けたから『負けたらウィーンじゃんけんチャンス』に入って、それで……ちよつと待て、……」

今更気づいたけど、

「これ、終わらないよ！！！！」

「桐たん…もう言葉はいらないにや」

「何いってんだつちみ」

「じゃんけん！、」

「っっっ！！」不意打ち過ぎる土御門の掛け声に慌てて僕は手を挙げてじゃんけんの態勢に入る。

しかし、脳の演算が追いつかない。次はグーか、パーか、チヨキか何だ、何が、一体何を……。

「ぼおおおおおおおんつつつ！！！！」

「ぐわあああああああああああつつつ！！！！」

.....

「……なあ上条。世界って、どうしてこんな不条理になっちゃったんだろうな」

「.....」

返事はない。ただの屍のようだ。

「僕はこんな世界……嫌だよ、上条」

「.....」

返事はない。ただの屍のようだ。

「なあ……返事をしてくれよ、上条……幻想をぶち壊してくれよ！  
！上条つつつ！！！！」

「.....」



「つつー！」

崩は慌てて廊下ルートから一步下がって階段の踊場領域に身を潜め、こそこそと頭だけを壁から出して廊下の近況を確かめる。

「吹寄じゃない……か……」

ほっと一息ついたのも束の間、崩の頭に漂う暗雲は払いきれない。

(くっ、確かにじゃんけんで負けたのは僕だけど、冷静に考えてみれば、これは割にあつてない………。つてあれ？これに似たような下り………あいつらやる予定じゃん)

「はめやがったな……」

崩は予定上僕が入れないことを知って企んだんだな、と勘がいいことにそれに気づく。

「うっ、不幸過ぎる……」

しかし、もう後にはひけなくなっていた。

(後方に待機する土御門と青髪ピアスからは『早くしろ』って信号がバンバン飛んできてるし、青葉には訳もなく謝っておいたし、イギリス清教の十字架に向けて予め罪の懺悔もしちゃったし………あー！！少しでも胸を揉むことに正当な理由をつけられほっとして、もしかしたらなんて考えた自分をやり直したい！！時を戻せたらな………。理科準備室に行けば何とかなるだろうか……。ま、僕は真じやないから無理か。)

「袋小路……」

「ちょっと桐原、何してんの？」

「うええっ?!」

後ろからの呼びかけに、崩は慌てて振り向く。

聞き覚えのある声。

彼の友人であり、そして今回のキーマン、吹寄制理が立っていた。

「吹寄……」

「何よ、まるで幽霊を見たような顔をして……失礼ね」

ぐいっと、いつものように崩へと詰め寄ってくる吹寄。教材を抱えているところからして、大方職員室にでも用事があるのだろう。普段なら何か話題を見つけて、あーだこーだと話し合うが、今回は崩の変な緊張のせいで二人の間に会話が続かない。

「……? 何よ、黙っちゃって」

「え、あ、いやその……あ、あははは」

「まあいいわ。私、ちょっと職員室に用事あるから。また教室で。」

あ、そうだ。あんたと青葉も今日は食堂で食べるんでしょ? 昼休

みは一緒に食べましょ」

「あ……」

崩の元をすり抜けて、吹寄は職員室を目指す。

(やっぱり無理だ……こんなの……)

しかし、諦めかけていた崩の脳内で再生されるのは、土御門の呟き。







(言ったら、吹寄に殺される前に青葉に殺される……)

「そうよね……」

(青葉……私が桐原と付き合ったら、悲しんじゃうのかな……でも、それで断ったら桐原の気持ちに答え切れてないし、私自身にだって正直になれてないかもしれないし……)

「そ、その……桐原は、……どうして私なの?……」

「え、ど、どうして?」

「だって、あんたのいつもそばには……その、青葉がいてくれるじゃない。なのに、どうして私を……?」

「そ、それは……お前が一番だからだ」

(胸が)

「え……」

(な、何よこいつ……いつもへらへら笑ってるだけなのに……じ、こういうときだけストレートに言いやがって……)

「そ、そう……ありがとう」

「え、あ、うん」

(何でお礼? 待て待て今どういう状況なわけだ?)

「……」

(も、問題は私よ!! 素直になれって自分に言い聞かせてみても……桐原とは確かによく喋るわ。何だかんだ言っただって、ちゃんと私の話を聞いてくれるし、話していて楽しいもの。書物整理の時なんかも手伝ってくれるし。優しいし、頼りがいがあるって、変に意





「胸揉ませてください」

あれ？今思ったけど、

吹寄ってテレパス使え

ピ――――。

†

「崩、心臓止まってるよ」

「ぬおおっ！！」「慌てて目が覚める、じゃなくて、なかったことに

する。

おっ、やっと戻って来た感じが……というか、何だか今まで絶対おかしかった。なんか違うアニメ入ってなかったか？

「って青葉、冗談は止めてくれ……僕、あれから放課後までずっと気絶してたんだぞ」

吹寄の『怒』ストレートグーパンチを食らってからというもの、僕にはそれ以降の記憶はない。というか、目覚めたら保健室でアットPM4時というミステリアスなシチュエーション。先生から詳細を聞いて、せめて終礼には間に合わせようと学校内を移動の最中、校舎の壁に礫にされた土御門と青髪ピアスを発見した時は、自分を陥れた張本人とは言えども、流石に同情せずにはいられず、滂沱の涙を流したのを覚えているのだが、

「僕はこれからどうすりゃいいんだ……」

それ以上に、教室に戻って見つけた吹寄から発せられる黒いオーラが脳裏に浮かんで離れない。

これからのスクールライフは暗雲低迷だ。

「さあね」

そして、目下進行中の悩みがこれだった。

「あ、青葉……」

珍しく、青葉が結構怒っている。

あ、いや、こんな冷静沈着みたいな感じにいるが、僕の心中はまるで台風襲来のごとく、ひどく弱っているので混乱中だ。

「えつとな、青葉……だからこれはだな」

「わかってるよ。やらされたんでしょ」

明らかにふくれっ面で僕の方を見ようとしない青葉。

「はい、今日は崩が荷物持ってね」

「う、うん」

言われた通り、僕はついさっきまで青葉が持っていたスーパーの袋を、いつものように押し手にかけることも出来ず、自分の手へと負荷をかけた。

状況を説明すると、あまり大したことではないが、いつも通り学校の帰りに、近所のスーパーに寄って夕飯の買い物をしているという風景だ。最初はどうかやら僕にお礼のつもりで始めた料理作りも、今じゃ青葉の料理がこのアパートの生命線に成りつつあった。扇さんと僕に青葉自身のお弁当を3つ、毎日作るといのは流石に酷であるため週に二回だけれど、夕食はいつも青葉中心に料理が進んでいる。「たまには休んだらどうか？」と勧めたりするが、青葉はただ笑いながら「みんなが手伝ってくれから全然しんどくないよ」と決まって答える。確かに僕たちはアパートの四人総出で夕食に取りかかっているため、どこの家庭よりもどんちゃん騒ぎで飽きることは悪い意味でも良い意味でもないだろう。それが僕たち家族の在り方であり、僕たちはそうやって大袈裟に、そして強く家族を感じているのかもしれない。

つと、真剣に語ってみたけれど青葉の怒りには何ら効果なし。

「えーつと、あ、青葉」

「……何かな？」

「その、悪かったよ……ごめん」

「……別に怒ってないよ。今日は何を作ろうか考えてただけ」

ぶいっと、僕から視線を逸らす仕草にはおそらくキログラム単位で怒りが込められている違いなかった。

「崩は今日何が食べたい？」

「あれ、もう食材買ったつちやっただろ。何か予定があつたんでは？」

「ううん。今日は上条君が見ていたチラシで、安売りしてたのを見てつい……」  
「気まずそうに、少し赤くなつて笑う青葉だった。」

「今日は崩の食べたいものを作つてあげよう」

そして吹寄の件に続き、今日はイレギュラーな日でもあつた。

今日は、アパートに僕と青葉の二人だけだ。エルギオンス兄妹は小学校の研修旅行。扇さんは徹夜で働くため病院に泊まると、予め学校終わりに電話がかかってきていた。

ということは、いつもアパートの住民ピラミッドでは権利が全く皆無な僕に、なんと1日の内最大である夕食のおかず決定権が今日は僕にあるってことか……

あれ……なんか前が霞んで見えないや。

「さあ、崩は何を食べたいの？」

「うーん、そうだな」

「はい、あと十秒」

「ええっ、何でそんな早いんだよ!？」

「何でも! 料理は準備がかかるんですっ!」

「ま、まあそうだけど……はははっ」

「ん? どうしたの崩? いきなり笑っちゃって」

「いや、なんか、青葉が主婦みたいに見えてさ」

「しゅ、しゅ、主婦!？」

「うわあ!？」

青葉は飛び跳ねるように驚く。それにつられて僕まで驚いてしまった。

「しゅ、主婦って!？」顔を紅潮させ、どぎまぎした様子で青葉はこっちを見ようとしない。

「いやその、何だか料理が板についてきたなあと思って……」

「これは別に! その、楽しくて!! 崩のためだけじゃ……」

「そりゃそうだろ。みんなのためだし……ん? 青葉?」

「わわわわわわわ!! そういやこんなのがあったー!!」青葉はどこかの猫型ロボットばりに手を振りかざす。

手には、一枚の紙切れ。

それに書いていた文字に、僕は首を傾げた。



「ふ、福引き券？」

「そ、そう！ さっきもらったの忘れてた！！ 崩が今から行ってくるといいよ！ うん、それがいい！」

「え、あ、ああ」

「ちよつと私は！！ お、お豆腐買ってこるから！！」そう言い残すと、青葉はものすごいスピードを出して車椅子でスーパーへと走り込んでいった。

一人残された僕は、先ほど買った食材の入っている袋を見返す。

「……豆腐、買ったじゃん……」

ははは、と突拍子もなない青葉の行動を理解することもできず、ただ苦笑いするしかなかった。

「えつと、福引きは……あ、あそこか」

スーパーの入り口を離れた場所に安っぽいセットが組まれていた。何人が先に先客がいて、普通なら、失礼な話になるけれど、中年女性が並んでいるというのが一般的であると定着しているのだろうか、差し詰めここは学園都市、公園で群がるのも、コンビニにたまるのも、タイムセールで躍起になるのも、そして福引きに並んでいるのも、学生なのだ。

「はい、残念賞です」福引き担当の店員さんは陽気な声で、僕の二つ前の学生にティッシュを渡す。そんな店員の天真爛漫な感じとは裏腹に、学生は「ちえっ」と悪態をつき去って行った。

「はい、次も残念賞。また挑戦してねー」

前の人も残念賞に屈し、ティッシュを握って帰っていく。

とうとう僕の番。とは言っても、そこまで気合は入れていないのだが。福引きなんてそんな簡単に当たるもんじゃない。

僕は店員に福引き券を渡す。

「あの、福引き一回」

「はい、わかりました。ティツシユです」

「ちよつと待て。何がわかったか知らないが僕を見た瞬間にティツシユを渡すな。福引きをやらせる。僕にもジャラジャラ回すやつやらせる!!」

どこに行ってもこの扱い。

不幸だ……。

何故か店員に納得がいかないような顔をされたまま福引きの権利を与えられた僕だった。

あの名前のわからない、ジャラジャラ回すやつを取っ手を持つ。まあ、結局はティツシユだけれどいいか……

ジャラジャラ。

音が鳴って小さな玉がテーブルの受け皿に転がった。

「お」

店員の期待が含まれた声に、僕は視線を移す。

キラキラ光る、銀色だ。





ドンッ、

道のど真ん中、騒いでいた僕は一人の通行人とぶつかった。

もちろん非があるのは、こんなところで騒ぎ立てている僕の方だ。

「あ、すみません」

当たってしまった人に、頭を下げ謝る。

身長は僕より少し高い。長身でスーツじみた服に茶髪の髪の毛が、なんだかスタイリッシュな不良を演出している。

「……ああ、気にするな」

僕の方を向いてそれだけを言うと、何事もなかったように歩いて行った。

一瞬、彼が沈黙したのでドキッとしたが、もめ事にならなかったことに、ほっと胸を撫で下ろす。

「あれ？ みんな集まってどうしたの？」

そして、彼と入れ違いで青葉が戻ってきた。

「ってうわ！ 崩どうしたのそのお肉！？」

僕の両手で持っているブロックの牛肉に圧巻の声を上げる。

「福引きで二等です。まあでも、こいつらに捕まったから嬉しさプラスマイナス0」

「ひどい言いようだなー」

「そうそう、おいしいもんはみんなでわかる」

「そんな幻想、ぶち壊してやる！」

「最後の一人、おかしいぞ」

「ぷふふ」青葉はいつものように、嬉しそうに笑った。

「じゃあみんなで、お肉パーティーだね」

「「よっしやーっ!」」

青髪と土御門は飛び跳ねて喜ぶ。

「桐原」そんな中を声をかけてきたのは上条だった。

「どうしたんだ？」

「悪いな、なんだか便乗しちゃって」

「なんだよ、お前らしくないな。みんなで食べたほうが楽しいに決まってるだろ？ 気にするな」

「そっか、ありがと。いやなんかさ、まともな所見せとかなないとキヤラ崩壊しちゃったから心配で」

「そういうこと露骨に言うのやめない？」

おーい、早くいくぜー、と先を行く土御門と青髪に催促されて、僕たちも歩き出す。

「そつだ、制理も呼んであげよっ」

「ええっ!？」突拍子もなく現れるダークホースに生命の危機を感じた僕。

「そ、それは」

「今のうちに、仲直りしておいたほうがいいよ」

「……そつだな……何だか悪い。気使わせて」

「別にいいよ。でもその……これからは」

「ん？ 何だ？」

「これからは……あっちこっち手出さないこと……！ わかった!？」

「お、おう!？」

何がなんだかさっぱりだけど……

「じ、じゃあ許す。ほらほら崩！ 車椅子押して押して!」

「はいはい」

僕たちも歩き始めた。

和気藹々と

そこには大切な日常が生きていた。

壊れるはずのないと思いつけた、

大切なものがあつた。

優しい風が水面を揺らすように、平和な日々が続いていく。

でも、それは、それこそがもう幻想だったんだ。

水面下で、闇はもう蠢いていた。

「あー、だるい」道中、やってられないように悪態をつく、一人の少年がいた。

しかし、彼を見て少年と呼ぶのは些か無理に思われることがある。まずはその長身。おそらくは180センチに届いているくらいのも長だ。初見で少年はまずない。次に風貌であった。スーツにも似た、しかしそれよりはまだラフである、まるでホストが着るような服装に身を包み、決定打の茶髪。それと身長がナイスなほど組み合わせられて、スタイリッシュな不良を演出していた。

「……暑いじゃねえかよ」そんな普通とは一線を画した新星スタイリッシュ不良でも暑さには弱かった。

「さっきのやつが持ってた肉、うまそうだったな」

彼は、ついさっき肩がぶつかった、とは言っても相手の肩が少し低かったが、それを思い出す。

「今日は肉料理にすっか」

ジュジュジュジュジュと

彼のポケットの中で携帯が鳴り響いた。何事もないように自然な動作で、彼は携帯を耳へと押し当てる。



「あら元気？」

携帯の向こうで若い少女の声がした。

「ああ、ホステスか」

「ホステスじゃないって何度も言ってるでしょ」

「それまがいだろ」

「触ってもこないし、お酒もつがない。ただ喋るだけよ」

「よくわからん世界だ」

やれやれ、と彼はため息をついた。

「んで、何の用だよ？」

「仕事よ、仕事」

「お前がやれ」

「私には仕事があるのよ」少女もそこは譲らない。根気負けしたのは、意外にも彼の方だった。

「んで、何だよいったい？」

「腕試し」

ピロピロ。

さっきとは違う着信音が鳴る。

携帯に届いたのはメールだった。

メールの内容は至って簡単。

顔写真が4枚だ。

「メールは届いた？」

携帯画面を視界から外して、「ああ」と彼は答える。

「それね、新たな『フィールド』のメンバー」

少女のあっけらかんとした言葉。

しかし、彼の表情は変わらなかった。

「ふーん」

「だから、あんたはその4人のうち1人の襲撃をしてほしいわけ」

「それが腕試し……ね。かはは、」

「どうしたのかしら？」

「ムカついた」

どつと、流れでるように、

威圧感が声から漏れた。

彼は不敵に笑うと、携帯を握る力が強くなる。

「腕試しね……いいいいいぜ、やってやるよ。その糞みたいな仕事。言っとくけど、」

「ええ、もちろん」彼女は快く、その先を答えた。

「殺したって構わないわ」

ブツツ、と携帯が切れる。

切ったのは彼だった。

携帯を強く、ポケットに押し込む。

両手はポケットに入れてそのまま。

歩く速さは段々と速くなる。

何よりも、

彼は楽しそうだった。

歪に、彼の口は笑みを作る。

目は何よりも強く、睨むように、先を見る。

「俺に腕試しなんかいるかよ」

そう、彼には腕試しなんて似合わない。

いや、腕試しなんて次元ではないのだ。

学園都市level5第二位

「俺は『ダークマター未元物質』、垣根帝督」

垣根帝督に、常識は通用しない。

+

その後の僕はというと、どんちゃん騒ぎで大変だった。

松坂牛を使ったフルコース料理が食卓を飾った。

最高においしかった。

しかし土御門は義妹の料理最強説。

青髪はバニー最強説。

上条はとにかく平和論。

僕は密かに、青葉の料理最強説。

よくわからない混乱の中、吹寄によって鎮圧。

僕たち三人は吹寄の『怒』ストレートパンチを往復で三タイムに渡りボコられた。

姫神が遅れて登場、影の薄さに痛感し、トイレに三十分引きこもる。

なんやかんやで楽しい一日だった。

以上のことを除けば、後は語るに値しないので割愛。

## 胎動（後書き）

えーと、お見苦しいボケをお見せしてすみませんでした。

冷えピタです。

最後まで読んでくださりありがとうございますm（ ）（ ）m

垣根の話し方が少し不安ですがこれで全ての伏線が張られました。

新たな章に入ります。

暗部編です！！

一番楽しみにしていた話なので頑張りたいと思います。

更新は毎度ながら遅いですが、また更新した際はぜひご覧くださいね。

冷えピタでした。

開巻劈頭（前書き）

お久しぶりです。冷えピタです。

もう、壊れませんでしたwww

シリアスが、舞い戻ってきました！！

なんか久々な感じですね。

では最後までどうぞお付き合いくださいm（（m

暗部編開幕です。



## 開巻劈頭

「ぐわぁ……………」

何とも言えないうなり声で起き上がった僕。

「あつ……………」時計を見て、啞然とする。

9時半。

ちなみに僕たちアパートの住人が日曜日に揃って朝食を用意し始めるのは8時。

そしてわいわいがやがやと食べ終わるのはおよそ8時半を越えたところ。

「か……………確実に朝食食べ損ねた!!」

ガバツと、勢い良く布団を放り出して、ジャージ姿のまま玄関へと走る。

「朝食!!」

「うわぁっ!?!」

僕は朝食会場である一階へ飛んでいくために、張り倒すぐらいに扉を開け飛ばした。

「ありゃ?」

「くうつおつ……」

その前にいたのは、両手を前に突き出し防御態勢に入って、なにやら可愛らしくも奇妙な呻き声を出している青葉だった。

「青葉、どうしたんだ？」

「び、……びつくりしたんだよ!!」

もの凄い見幕で僕に訴えかける青葉に気圧されそうになるが、「ごめん、ごめん」と何とか怒りを静めさせる。

「あれ、まさか……」

時刻は9時半過ぎ。

青葉がここにいる。

嫌な方程式への条件が勢揃いだ。

「もう朝食終わった!？」

「ううん、今から。だから崩を起こしに来たんだよ」

「え、今から？ だってもう9時半だろ？」

「エバンス君とカルマちゃん、昨日の大覇星祭の練習よっぽどきつかったみたいで、今起きたの。扇さんもずっと残業徹夜漬けだったけれど、日曜日だから帰ってこれて、揃ったの今さっきなんだよ。みんなお腹減ってるみたいだから、少し遅いけど今から朝ご飯」

「あ、そうなんだ」

青葉をよそ目に、ラッキーと一安心する。

僕もここ一週間、大覇星祭の練習や吹寄に手伝いで駆り出されたりしてたから、大変だったのだ。

「ということとは青葉も今起きたのか？」

「お、お恥ずかしながら」照れ笑いする青葉だった。

「んじゃ、二人揃って行きますか」

「そうだね、みんな待ってるし」

「青葉、寝間着は着替えなくていいのか？」

「ジャージは便利な部屋着だよ、崩」

「お、それには賛同だ」

たわいもない話が繋ぎあつて、僕たちは笑つ。

平和な日々を嬉しく思つて、僕たちは笑う。

全員で朝食の支度を終えるまで、あと7分。

みんなで朝食を食べるまで、後10分。

僕のバターロールをエバンスに全部食べられるまで、あと12分。

カルマが間違つて僕のヨーグルトを食べるまで、あと15分。

どんちゃん騒ぎの、いつも通りの朝食が終わるまで、あと20分。

携帯が鳴るまで、あと30分。

9時45分。

彼の携帯画面の右端に、日付と一緒にあってそう表されている。

「くそっ」アロハシャツに短パン、ビーチサンダル。金髪の髪の毛に、サングラスをかけた彼の姿は、普段の本職である学生の面影をほとんどかき消してしまっている。

そして、今回の事件が、彼の顔をよりいっそう険しいものにした。た。

土御門は、ビル街の日陰に腰掛け、喧騒を眺める。

何事もないように普段を生活する人々。土御門は彼らを見て、なんて羨ましいんだらうと思う反面、今現在そうやって生きようとする自分が憎かった。

友達の危機を、見て見ぬ振りしかできない自分に憤慨していた。

エルギオンス・エバンスを追いかけてイギリスへと行かせるために、ジェット機を用意したことも親切心なんかではない。

命令。

ただそれだけ。

今の土御門にあるのは、友に嘘を突き続けた、そして今もそうやって知らない振りを続けていることへの罪悪感だった。

「どうかされたんですか？」

土御門の横には、一人の少年が立っている。

黒髪に褐色の肌。服装からも一段と爽やかさが増している、印象の好ましい少年だ。土御門はあえて何も答えない。誰であるかも知っているし、いつ自分の近くに忍び寄ったかさえも把握している。それでも、土御門は今、何も言いたくなかった。

「落ち込んでいるなんて、珍しいですね」物腰柔らかな口調。彼の爽やかな顔は変わらない。

「落ち込んでなんか、いないぜ？」腰掛けていたベンチから上空を見上げる。

ビル群が空を制限していた。

飛ぶ鳥は、まるで路地に迷い込んだように、迂回しては出口を探す。

でも、地上にはその出口がない。

「そういえば、聞きましたか？ フィールドの件」

「聞いてない、わけがない」

「そうでした。でも、相当酷い話ですよ。何でも『テスト』があるそうで」

「……………なあ、海原」

土御門は、呟いた。

「もし、大切な友達に危険が忍び寄ってるって知ってて。お前はそのまま知らない振りをするのか？」

「……………どうでしょうね。他人事なのでさっぱりです」

爽やかな顔をしたわりに、海原は冷酷なことを言う。

しかし、土御門もわかっていることで、これが普通なのだ。闇に身を預ける身なら。

大切な物を守りたいなら。

「それでは、お仕事ですよ」

海原は突然話を切り出した。

「はあ？」

土御門は、海原の言葉に首を傾げた。普通なら大方、リーダーである土御門に仕事の依頼が伝えられるものであるのに、今回は何故か海原がその依頼を聞いたらしかったからだ。

海原は、土御門の返答を待たない。即決即断のように、矢継ぎ早に答えた。

「『フィールド』の監視、及び『フィールド』への最終決断です」

「……なんだと？」

「簡単な話ですよ。私たちは、『フィールド』の有効性を第三者的観点から観測すればいいのです」

「おい、そんな話聞いてな……お前まさか!!」

状況を悟った土御門は、海原の考えを見抜いた彼は、さっきとは違い、血相を変えた。

「馬鹿言ってるじゃねえ！ そんなことを理由に俺たちが勝手に動いて、あいつらを助けてみる!! 確実に今度は俺たちが」

「助ける？ 何を取り間違えてるんですか？ 私たちは彼らの有効性を確認するだけ。もし私たちの方で役に立たないと思われれば、」

「話は簡単。殺してしまえばいいのよ」

海原が土御門に動じず、ただただ話を続けている最中に、結論は海原ではなく一人の少女によって淡々と導かれてしまった。

胸が隠れるくらいのブレザーにミニスカートの、比較的露出度の高い服装。二つに分けている長い赤髪を後ろで小刻みに揺らしながら、彼女は土御門の元へと歩いてきていた。

「だってそうでしょ？」

「結漂、」

「要らない敵も排除できるし、上手く行けば手間を省いたということとで優遇されるかもしれないわ。『いろいろ』と、メリットが出てくるじゃない。それに、向こうは私たちに『動くな』と命令しているわけでもないわ。つまり私たちは、居ても居なくてもいい存在。もしくは、」

「彼のプランの、想定範囲内」

結漂が変わって、海原が締める。海原は土御門に、強く笑いかけた。

「動かない、わけがないですよね」

「……ははは」

ボソツと、土御門から笑い声がこぼれた。

それを見た二人にも、口の端に小さく、『やってやるっ』とした意識が表れた。

「そうだったぜえ。ま、わかってはいただけだな。召集するのを忘れてただけだ」



土御門は立ち上がる。

三人が、ビル群の影に、暗い暗いこの学園都市の闇の中に、確かに立っていた。

その姿は誰にも見えない。

「行くぞ」

通行人が、彼らのシルエットを掠めとった。  
もう、どこを見渡しても彼らはいない。

静かに

確実に

大胆不敵に

暗部組織『グループ』は暗闇の中で躍動する。

反旗を翻す、野望を携えて。

+

学園都市には、窓のないビルがある。入り口もなければ出口もない。しかし、確実にそこには人間がいる。

遠く遠くへと、焦点を合わせたその目は、ガラス越しに覗いている。その人間は、その階の空間を縦に突き抜いて設置された、液体に満たされる大きなカプセルの中で、視界を逆さにして浮いていた。

『ご報告です。9時55分、『グループ』が動き出しました』

彼の液体カプセルを取り巻く無数のビジョンの中の内の一つ、『information』と書かれた電子板から電子音似の音声がこだまする。

「予想通りだ。そのまま放っておいて構わない」

『了解いたしました』

それだけ言うと、プツンと切れるように、画面は消えてしまった。

「計画は順調だ」

『どつだろつな』

中央に、電話の受話器をかたどって『calling』とあしらわれた画面が突如表れる。電子音も混ぜられて、誰かが特定できないようにされたその音声はそこから聞こえていた。

『アレイスター。お前の計画は、粗すぎる』

「ほう、まさか心配になって電話してきたのか」

『まさか』

電話の声は悪態をつく。

『定時報告だ。準備は整っている』

「流石だな。手が早い」

『うるさい。やることを早くやれ』

「心の準備はいいのかい？」

『黙れよ被験者』

ブツッと、乱暴に、一方的に電話は切れる。画面がどこかに吸い込まれるように消えてしまった。電話の終わった後、アレイスターが操作して次に表れたのは、大きな大きなリスト表。その膨大なデータ量の中を、検索検索と続けていき、アレイスターは一人の少年を見つめる。

その少年の全ての個人情報、画面にリストアップされた。

「さあ、準備は整った」

アレイスターはその無表情の顔に、歪な笑みを浮かべて言い放つ。

「闇の中へと、招待しよう」

画面に表れる、受話器のアイコン。

携帯が鳴るまで、あと

+

「食った食った」食事部屋から最初に出てきたのは、エバンスだった。

「食べたね！食べたね！」キャハハハと笑いながら、カルマも部屋

を飛び出し外を走り回る。

「……食べてないよね」

食事部屋から負のオーラを体に纏い、のそのそと引きずるように出てくる高校生が、って

まあ言ってしまうえば十中八九というより百発百中で僕だよなこれは。

「おい崩、せつかく青葉姉ちゃんの朝飯を食べて気分爽快の朝まで出迎えてくれているというのに何だその不快感丸出しは」

「僕朝飯食べれてねえよ。正確かつ綿密に言えば、瓶の底にあったマーマレードに入ってるミカンの皮しか食べてない」

「ナイス少食」

「カプトシムもビックリだよ！」

あー、お腹が……早くもピンチだ。

僕の朝食を9割9分9厘食らいつくした挙げ句、笑顔で走り回っているエルギオンス兄妹をよそ目に、溜め息をつきながら階段を上って自分の部屋に行き着く。

「あー」

しゃべりたくない。

動きたくない。

とにかく何もしたくない。

んー、語り部失格であるが今回はかりは許してほしい。はい、更新  
はここま

ジュジュジュと

携帯が電子音を奏でた。

「ん？」置きっぱなしにしていた携帯を手取る。

通話ボタンを押した。

「もしもし？」

「ちよつ、カブトムシで…クオリティの低さ」

即決即断。

「よっしゃ戦争だ」

こうなったら容赦しないぞ。

「いや、僕もギャグには容赦ないぜ。音響一のお調子者の目はごまかせねえ」

「もう黙ってる！ これ以上物語を荒らすな！！」

自分で言うのもなんだけど、僕は苦勞人だ。

#### 閑話休題

「なんやかんや言ったら……」

僕の言葉に続くように、腹が可哀想な悲鳴をあげた。

「余計お腹減ってきた……」

青葉にもう一度ご飯を作ってもらうの申し訳ないし、

「しょうがないか」

むくつと、僕は重たい上半身を起こす。

コンビニへと買い出しに行くことを決意した。

「何だか最近、こういつ役回りばかりで」

~~~~~

携帯が、また鳴った。

「おいおい……」僕は溜め息をついて、玄関に行く足を引き返し窓から下を覗く。構造上僕の下部屋がエバンスの部屋だからだ。

「おい、エバンス!! お前同じツッコミ何回するつもりだよ!!」

「はぁ!?! 何の話だよ、カブトムシ野郎!!」

窓からツツカケを履いて出てくるエバンスは、

「あれ?」

携帯を持っていなかった。



「お前、今僕に電話かけてる？」

「もう切つただろ？ 何言ってるんだ？」

ということとは、電話はエバンスじゃない。

「間違えて、危うく出ないところだった」

窓から離れて、部屋の中を視界対象にする。

小さな机の上で、携帯が鳴り続けていた。

僕は玄関へと足を進め、そこを通過するついでに携帯を取る。財布も一緒にだ。

通話ボタンを押す。

携帯を左手で、耳に近づける。

財布はズボンの後ろポケット。

そこから普段の動作で、右手はドアノブを握る。

「はい、もしもし」

「……………」

「もしもし？」

「桐原君だね」

ドアノブを回す右手が止まった。

もちろん、自分の電話番号であるのだから、僕以外有り得ない。相手の名前を確認するのは、一種の礼儀でもあるわけだからおかしいも何も、当たり前前のはずだ。

だけど、僕は相手の声に違和感を覚えた。

艶めかしい、現かもわからない幻想的な声。  
綺麗すぎる、現実味のない気味悪い声。

携帯画面を確認する。

電話番号が表示されていない。

「あの、どちら様です？ 失礼ですが、お知り合いだったり？」

「違う、これが初めてだよ。桐原君。初めまして。」

桐原、崩君

背筋が、ゾツとした。

まるで、この携帯から僕を見ているように、その抑揚のない声は僕を正確に捉えている。

「命令は手短にするよ」

「あの、ふざけてるんですか。迷惑電話はやめてほしいのですが」  
相手のぶしつけな会話に、僕の怪訝な気持ちは強まる。

「迷惑電話だなんて、失礼だね。そうだ、君の大切な人は元気にしているかい？」

「は？」相手の言葉に、思わず僕は止まってしまふ。しかし、電話の向こうの声は止まらない。

「誰って、君の住んでいるアパートの、住人のことに決まってるじゃないか」

飲み込もうとした唾が、喉に引っかかった。

「何言ってるんだ……」

「わからないのかい。煙草が大好きな病院勤務の大家さん。家出をきっかけに絆を深めた、イギリス出身の小生意気なかわいい兄妹。そして、研究所から逃れてきた『原石』の、隣に住む、車椅子に乗った同級生」

ぐらつと地面が揺れた気がした。僕の足を吸い付けたまま、地面が曲がっていく。歪んでいく。よくわからなくなる。

思考が、切れた。

「おい、お前……どうしてみんなのことを知ってる……」

「これでわかったかな？では、命令の、概ねの内容を伝えるよ」

「聞いてんのか！」「僕の声が、僕の知らない内に激情していた。

「何でお前がみんなや僕のことをそこまで知ってる……！ お前は一体誰なんだ……！」

僕の怒鳴り声に、

「じゃあ、君に私の正体を教えるかわりに」

彼は淡々と、その流暢な声で言い放った。

「東雲青葉が、どうなってもいいのかい？」

「な……………」

僕の口から言葉は出ない。  
出るわけがなかった。

「わかってくれたかな。では、時間がないから手短かに、命令の内容を話させてもらう」

彼の言葉は確実に僕の心臓を掴む。冷え切ったその冷たい言葉が僕の体に事の重大さを染み込ませて冷却し、体外との温度差に、まるで自分の体が捻られていくような感覚に陥った。

「幕は上がったのだよ」

そして彼は、舞台にあがっていることさえ知らない僕を、きつと笑

ったに違いない。見えていないけれど、それがわかってしまう。

抑揚のない声に初めて、滲ませた微笑。

何もかもを知っているから、思い通りだからこそ湧き出る、優越感にも似た絶対的な嘲笑で、

全てを狂わせるその一言は、

ただ当然のように、僕に投げかけられたのだ。

「君は今から、『フィールド』の一員だ」

†

第七学区のとある場所に、そのネットカフェはある。大型チェーン店であるそのネットカフェは、意外にもあまり一目のつかない、ビルの横に小さく設置された縦型看板を注意深く見ていけばやっと見つかるような、そんな場所で営業をしているため、また内装が他のチェーン店よりも微妙にシックであるがゆえに、一部の常連客の中には『インレジナルレストタイム時空間の狭間』と呼ばれている。

「ふっ、危ないところだった」

店内の半分を占めている個室スペース。その中でも、一際キーを叩く音が目立つ部屋の中で少年は呟いた。

少年はあらかじめ備えられているデスクトップを使っているのではなく、持参した銀白色仕様のノートパソコンを、机にあったキーボードを奥にしまい込んで開けたスペースにて利用している。ブラインドタッチでキーを打ち続け、真つ暗な画面にももの凄く速さで緑黄色の英文字の羅列が打ち込まれていく。

比較的暗めの服装。この夏だというのに、長袖にカーゴパンツという組み合わせは、おそらく義務と身だしなみ、社会的立場のためという目的を除いたスーツ姿よりも酷な物かもしれない。まるで卵の殻を真ん中で割ってそれを頭にすっぽり被せたようで、前髪がギザギザと彼の眉毛よりも少し先、目に入る瀬戸際で視界を中途半端に邪魔している。それでも彼は、その目をパソコンから微動だに動かさない。

「これで全ての任務が遂行された」

少しの間、そのまま集中すること一分半。彼は「ふっ」と息を吐き出し、手を止めた。前髪はいじらない。

「しかし、危ないところだったな。あと少しでも『プロ・ライティングオブコネクト導かれる光の線』が遅れていたら、『ロケイン時空間の狭間』に『エントレスエン介入』できず、『ド・クライシスリメインド終わり無き混沌と破滅』に取り残されてしまつところだった」

訳)あと少しでも予約が遅れていたら、ネットカフェが満席で入れず行き場をなくすところだった。

彼はそう大胆に語る。

「ふっ、今回はこの僕の愚劣さが引き起こしかけたことだ。これからは気をつけなければ……おっと」

彼が手を伸ばした先には、空になったガラスコップ。それを見た彼はまた、「ふっ」と笑った。

「どうやら、思った以上に『ミストフォース精霊の力』を使ってしまったようだ。空になったグラスにまで、僕の『ゴットオブザライトハンド神に奉られし右腕』が食らいつことしてゐるだなんて」

訳)どうやら思った以上に体力を使ってしまったようだ。空になったグラスにまで右手が掴もうとするなんて。

部屋に備えつけられた電話を勢いよく外す。プルル、と二回呼び出し音が鳴ったあと、店員が電話に出た。



「はい、ご注文は何でしょうか？」

「『ティアイオブフェニックス不死鳥の涙』を頼む」

訳）オレンジジュースを一つ。

「……はい？」

「どうして一回で理解しない。この回線はもう奴らにバレているかもしれないのだぞ。お前は『トリアルオブザゴテス女神による試練』で何を学んだというんだー！」

訳）どうして一回で聞き取れない。この回線は奴らにバレているかもしれないのだぞ。お前はバイトの面接で何を学んだというのだ！

「いや、あの………すみません、ご注文は？」

「お前はその澄んだ瞳の先に何を求めている？ わかっているとも、三年間、お前は『エターナルワールド終末の世界』の壮絶さと絶望感をその身で実感したんだろ。僕も『せつぼうのさんぶつ第八世代』だからわかる。でもさ、だからだろ？ だから僕たちは諦めちゃいけないんだろ！！ お前のその手にはまだ『モニングムーン名残の月』の力が残ってる！！ お前が諦めてどう、」

訳）厨二病指数値測定不可能により翻訳不可。

ブツツと、しゃべっている途中に電話が切れる。

少年はただ察して、口の端に笑みを作った。

「昔から変わらないな……、お前が世界を救ってくれ」

真実）嫌がられて、電話を切られた。

ブルル、と次は彼の電話が鳴った。パソコンに繋いでいたイヤホンを、スマートフォンに接続し換える。

「未冬おぼっちゃま、今日の帰りはいつぐらいになるでしょうか」  
執事丸出しの老いた男性の声が、彼をそう呼んだ。

「わからん。帰るときには電話をしよう」

「かしこまりました。では無事帰還することを祈っています」  
「ありがとうセバスチャン」

注) 執事の名前は権造である。

そう言い終え、電話を切りイヤホンを外すと、腕時計に目をやる。

「まだ時間があるな」と頷くと、未冬はパソコンに向かった。

彼のパソコンに映し出されたのは、インターネットを介して表示されたツイートシステムである。慣れた手つきでログインすると早速、未冬は呟く文章を書き始めた。

友達三人という表記には、申し訳ないが目をつぶってやってほしい。  
未冬が呟いた文章はこうだ。

ID) 152868541

sub) 今日

トゥール・オブザクロック

( 『 真実の時計』 が僕を呼んだ。今から僕は時空間を旅する。 『 学  
園都市の魔女』 を、追いかけて。

「ふっ、全世界が殺気立つであろう」

何百回呟いてやっとコメントを一つもらっただけの人間がよく言えたものである。

「さあー、後は優雅に画像鑑賞を待とうではないか！！僕のデーターフォルダーが火を吹くぜ！！……って待ち！これは一体どういうことだ！！」

そう言つて未冬が持ち上げたのは空になったグラスだった。

「あのアルバイト店員は何をもたっている！？ 店長に言いつけてやるぞ！！ お客様第一だ……」

苛立つて立ち上がった未冬は、

有り得ない光景を目にした。

人が誰もいなかったのだ。

確かにこの店は、隠れ家的存在が売りであるためにいつも人数は決して多いというわけではない。しかし矛盾しているのだ。未冬の予約を最後に、個室は満員のはずであった。だが、隣を見てもその隣を見ても、誰もいない。周りに誰もいない。

彼の『目』が左右百八十度、上下、全てを、見た。

そして、彼だからこそ理解した。

周りに誰もいないんじゃない。

「このビルには誰もいない…」

ブオン、と突如、

設備されていたデスクトップのパソコンが起動した。

もちろん、未冬が起動ボタンを押したわけでもない。独りでに立ち上がったパソコン。キーボードは奥にしまい込んで使っているはずがないのに、

真っ暗なその画面に、白い文字が並んだ。

『Dear Mr. Mifuyu Shidan』

ローマ字の文面。

趣味の悪い悪戯。

何よりもこの状況が、

そして相手が、自分の名前を知っているということが、

未冬をその気にさせた。

「さしづめ、『質マッドジョークの悪い冗談』と言ったところか」

『I block your mission. (君の任務は私が阻止する)』

未冬はその文章を見て、

「ふっ」

彼お得意の、キザで不恰好に、笑う。

「全く、何てナンセンスな奴だ」

最後に映された、気味悪い文字を呟いた。

「『The Doctor (博士)』、君に教えてあげよう。あま  
りナメてると痛い目にあうぜ」

そう、

彼を

思しだんみふゆ談未冬をナメてはいけない。

彼は正真正銘、本物の

「この『フィールド』の右腕、そして学園都市の『カオスエンペラー狂い咲く皇帝』、  
思談未冬をな！」

末期厨二病患者である。

+

「あっ  
」

第七学区、交差点。

彼はふと呟く。その手には、煙草が一本よろつと飛び出ている、  
くしゃくしゃに潰れた煙草のパックを持っていた。

「タバコ、きらしちやったよ……」

長身であるが故に、道中で、それも人通りがある中で立ち止まってしまうと、目立つ。少し天然パーマのかかった黒髪。だが短いために、全体的にはなく、髪の毛の先部分に集中してパーマがかかっているのだ、だらしないように見えてしまうのは弱り目に祟り目という言葉だ。学園都市のこの暑さもあって、整った顔立ちも今じゃ、だらしなさを助長してしまつて逆効果になっている。

「あー、くっそー、……………」

彼はズボンのポケットを探るが、お目当ての物は見つからず、ひっきりなしに、気だるい声で唸った。

「タスポ忘れたー……………」

当たり前のようにそう呟いているが、実際のところかなりいけないことであることは承知していてもraithたい。

そもそも、制服を着ているやつが言うことではないからだ。

「ちくしょー、どう考えても今から時間まで煙草一本で保つのはきつい……………。誰か…俺にニコチンを……………」

「おい」

そのとき、彼は、不意にも声をかけられた。いや、不意なのかどう

かは、語り部からわかることではないだろう。

顔の表情一つ変えず、彼は振り向く。

同じく、長身である茶髪の男性が、顔色一つ変えずに立っていた。

「裏ノ裏表うらのうらおもてだな」

「あら、俺を知ってるっていうことは一緒の学校かな……ってダメだ。君、タバコ持ってる？俺、今ニコチンがなくて、」

「『フィールド』のリーダー」

ぴくりと、誰も知らないはずのことを口にされたのに対して、彼は眉毛をひそめた。

もう一度改めて、相手を見る。

「ああ、そういうこと。何か見たことあるような顔だと思った。確か君は、垣根」

「俺の名前なんて知ってても、お前には何の意味もねえよ」

大胆不敵に、垣根は宣告した。

「わるいが、お前はここで殺す」



「……喧嘩っ早いよね、全くさ」

やれやれ、と彼は溜め息をつく。左手に握っていたタバコのケースから、最後の一本を右手に持った。

「少し待ってくれよ。俺、最後の一本吸ったときたいから」

右手に持つタバコが、口元へと近づいていく。

「あ、そういえばね」

彼が、ふと、

そう、まるで気まぐれのよつに

呟いたのだ。

「このタバコの銘柄、」

そのとき垣根は、

まばたきをする。

特別なまばたきなんかではない。

生理現象。

自然の摂理。

何もおかしいことはない。

しかし、たったその、1秒にも満たない時間、

0.0001秒。

垣根は目をつぶってしまったのだ。

そして、垣根が目を開いてみた世界は、

もう、全てが違う。

「知ってる？」

彼の口元にあったのは、

「っ!？」

火のついたダイナマイトだった。

「ほら、気を抜いたら駄目だろ」

垣根の一瞬の隙に、ダイナマイトは投げられる。

「くそっ!!」 垣根の背中から一瞬の内に出てきた白い翼が、ダイナマイトとの壁になる。しかし、垣根のその翼には、何か軽い物が当たったかと思うとそれだけで、爆発はしなかった。

慌てて翼を開き、前を確認する。

そこは、今までの人通りが消えた、交差点の街路。

くしゃくしゃにされたタバコのケースが捨てられていた。

「なんだと……」



った右手で、こめかみを器用にかく。

「だろ？、垣根帝督」

「そうだなあ！！その通りだ！！」

垣根は、高らかに宣告した。

目の前にいる相手に、狂ったような目で、嬉しそうに。

誰も、その次元に立てなかった場所に向かって。

そして今、目の前で、自分と同じ次元に立っている相手に向かって。

「俺は、第二位垣根帝督だ！！！！」

まるで、全ての支配者として垣根を祭り上げるように、後ろの翼が勢い良く広がる。

それなのに、

それだというのに、

絶対的強者を象徴されたこの状況下で、

彼は

裏ノ裏表は笑っていた。

「俺は、『フィールド』のリーダー、裏ノ裏表」

タバコの煙が、現実を歪める。

「少しの間、よろしく」

暗部組織『フィールド』が、その姿を現した。

## 開巻劈頭（後書き）

どうでしたでしょうか？ 楽しんでいただけたら嬉しいです！

『フィールド』の構成員。これがまた、みんな個性派でして……崩が消えそう。

ラスト一人も、すごい個性派ですよ。

それはまた、次の話で。

ここからの話は、戦闘がたくさん入ってきます。伏線が全て出てきます！

m では、最後まで読んでいただきありがとうございますm（――）

更新はいつも遅くなりがちですが、ぜひ、またご覧になってくださいね。

不得要領（前書き）

遅くなりました。

どうも冷えピタです m ( ( m

さあ、暗部編も本格的になってきました。

ぜひ、最後までお付き合いください。



## 不得要領

太陽の光が、今日に限ってやけに眩しい。脳天を沸騰させるような暑さで、汗の玉が額に滲んでくる。

それとも、今の僕がおかしいだけなのか。

回転しない脳みそを抱える頭は今、予想以上に重たかった。

思わず足元がふらつき、慌てて両手が階段の欄干を掴んだ。空気がやけに薄い。地球の酸素はこんなに少ないのか。それとも、ただ僕の動悸が激しいだけなのか。

「なんだよ……」

ぼそつと、喉から絞り出したかすれ声が空気を乾燥させた。

階段を降りて、まるで怪我人のような千鳥足でゆっくりと声のする方向へと向かう。

いつもと何も変わらない。

青葉はエルギオンス兄妹と一緒に、庭で遊んでいる。

その光景が何より、余計に僕をわからなくさせた。

僕と周りの極度な温度差が浮き出て、まるで青葉たちのいる場所が陽炎のような錯覚を起こす。

頭の中で、脅迫されるように再生される音声。

《東雲青葉がどうなってもいいのかい？》

アンドロイドのような、恐ろしい程綺麗過ぎる薄笑い。

《幕は上がったのだよ》

「なんだよ……」

アパートの外壁に、踏ん張れない体を預けた。

「『フィールド』って一体……何がどうなってんだよ……！」

アパートの影が、ひっそりと僕を覆う。土がぬかるんだようで、僕の足を離そうとしなかった。暗い影は、よりいっそう僕の体を外壁に貼りつける。

知らないうちに、もう全てが

平和な日々だったのに、いつの間にか全てが

「あ、崩兄!!」

はっ、と我に返って、僕は前に焦点を合わせた。

カルマが手を振っている。

青葉が同じように僕に気づいて笑顔を咲かせた。

「ねえ、崩」

青葉が、僕を呼ぶ。

僕は日陰から動けなかった。

《君の大切な人は元気になっているかい?》

奥歯をぐっと噛み締める。

苦虫を噛み潰したように、僕の表情は歪んだ。

《煙草が大好きな病院勤務の大家さん》

それに青葉は、すぐ気付いたのだろう。

《家出をきっかけに絆を深めた、イギリス出身の小生意気なかわいい兄妹》

こっちへと、自分で車椅子を押し僕の方へとやって来る。

《そして研究所から逃れてきた『原石』の、隣に住む、車椅子に乗った同級生》

僕の方へと。

僕の方へ？

影の中へと。

暗い場所へと。

《東雲青葉がどうなってもいいのかい？》

来てはいけない。

「青葉！！」

気づけば、僕は叫んでいた。

「えっ？」近寄ろうとした青葉はびっくりして、車椅子を止める。

影の中へ入って来なかったことが、僕にとって最低限度の安心だった。

「ねえ……崩？」

「な、なんだ？ どうしたんだよ？」

慌てて笑顔を取り繕う。

「大丈夫？ 顔色、よくないよ。それにすごい汗だし」

「え、お、おう。心配するな。大丈夫だよ。それより、何楽しそうに喋ってたんだ？」

「あ、うん。崩知ってた？ エバンス君に聞いたんだけど、なんとラジオ体操は31まであるんだって！」

「んなわけあるか。ラジオ体操を31アイスクリームみたいにするな。一ヶ月間一日一日違う体操が楽しめても嬉しいどころか覚えれ

なくて苦労するわ」

「ちつつち。崩、甘いね。31アイスクリームには、実は32種類のアイスクリームがあるんだよ！」

「え、まじか!? 何だこの微妙に裏切られた切ない気持ち。青葉こそ、そんなのどこで知ったんだよ？」

「トリーバーアー」

「この作品はフィクションです。実在する団体、番組等とは一切関係ありません!!」

## 閑話休題

「……なあ青葉」自然と俯き加減が増してしまう。

「ん、どうしたの?」

青葉のいつも通りの笑顔を、僕は見る。それが何より胸を締め付けた。

「元気? 変わったことないよな?」

「どうしたのいきなり」クスツと、突然の問い詰めにおかしくなったのか、青葉は小さく笑う。その後、笑顔のまま「大丈夫だよ」と付け加えた。

「そうか」青葉にわからないよう僕は安堵する。

「うん、だってね、私はここの生活が大好きだからふと、そんなことを言う青葉に視線を向けた。」

真っ直ぐな瞳に、目が合った。

「普通の人生は送ってきてないかもしれない。だけれど、今の生活は世界で一番楽しいよ。周りにいる全ての人が、私を支えてる全ての人、かけがえのない大切な人だから」

「……そうか」

僕は頷いた。

「うん、ならいいんだ。変わりがなけりや大丈夫。なんか照れくさくなってしまうこと言わせちゃったな」

「そ、それ言うとな計恥ずかしくなるでしょ！」キー、と横で可愛いらしくジタバタする青葉を面白半分になだめて、僕は言った。

「んじゃ、ちょっと出かけてくるよ」

「あれ、どこ行くの」

「ああ、……いやその、コンビニコンビニー！」暗くなった表情を慌てて明るく塗り替え、足早に踵を返して僕は歩きだす。

「何か欲しいものとかある？」後ろ伝いに青葉に尋ねる。それでしか、聞くことができなかったからだ。

「しょうがないから、五百円までなら……」

「崩……！」

突然、青葉は僕の名前を叫んで、

気づけば、僕は足を止め、振り返っていた。

優しくて、誰かの痛みまでわかってしまうから、まるで自分のことのような、悲痛にも似たその表情。

「私は、大丈夫！　びっくりするぐらい幸せだから。だから、」

青葉は言った。

「崩は、大丈夫？」

「もちろん！」



僕の大きな声が、響く。

ぱちくりと、青葉は目を丸くした。

「いきなり、何言ってるんだか。僕は変な話、扇さんに雑務押し付けられたりエルギオンス兄妹の世話してるおかげで、体力には自信があるんだよ！ だから、大丈夫」

笑顔で、

とにかく笑顔で、

上辺だけでもいいから、

今だけは嘘をつかせてくださいと、

どうか気づかないでくださいと、

懇願するように僕は祈って、

青葉に笑いかけた。

「僕は、大丈夫」

「そっか！」安心したように笑うと、青葉は「いつてらっしやい」と手を振った。

僕も振り返すと、青葉に背を向け歩きだす。

太陽の光が、今日に限ってやけに眩しい。脳天を沸騰させるような暑さで、汗の玉が額に滲んでくる。

重い重い僕の足は、学園都市に鈍い音を立てる。

行かなければならない場所は決まっていた。

携帯を開く。待ち受け画面には、『第7学区ネットカフェで謎の爆発事件』や、『第19学区、スキルアウト暴動事件』などと不穏な題名のニュースがテロップとして流れているその上の右端に、小さく時刻が表情されていた。

10時20分。

僕は苦い顔のまま携帯を閉める。

反芻された言葉が、僕の頭に不快音を鳴らした。

『午後12時、第七学区の廃ビルに集合だ。幸運を祈るよ、桐原崩君』

†

「逃げてるだけかよ！」垣根は広げた翼で宙を舞いながら吐き捨てた。

彼がその翼を奮う度に、鋼鉄にも似た固い羽が地面を豪雨のように音を立てて降る。

「ひゃー」

そうやって、まるで地面を滑るように裏ノ裏表は逃げ回っていた。

「ちょこまかと、お前には興ざめだな」

垣根は深く溜め息をつく。彼にとって、もう翼を奮うことさえ面倒

なものになっているのだ。

「死ねよ、オラ」

両方の翼が勢い良く完全に広げられる。太陽の光が羽を照らして、

「っ!?!?」

一瞬の静寂の後、金切り声のような高音とともに6つの光線が放たれた。たった数秒、次にみる景色は、辺り一帯が焦土と化した地面だった。

「……………」

垣根は静かに地上へ降り立つ。

心にあるのは、快楽か、悦楽か、虚無感か、優劣感か、

否。

怪訝という、しこりだった。

「どうしてだ? みたいな顔してるな」

その原因は目の前にいる。

絶対的な自分の領域の中で、地面にひれ伏すことなく、へらへらと笑って立っている、

裏ノ裏表だ。

「ああ、太陽光線じゃ足りなかったわけか。欲しがりだな、てめえ」  
「おいおい、太陽光線の上があるのかよ。それはさすがに勘弁してほしいね」

(……おかしい)

垣根は思考する。

(太陽光線の範囲は、確実にあの短時間で逃げ出せるデッドラインを大幅に超えていたはずだ)

なのに、裏ノ裏表は垣根の前に立っている。

それも堂々と、攻撃範囲の中心だ。

(肉体強化系の能力か？ でもそれではスペックが間に合っていない)

そのとき、垣根の中に最初の映像が再生された。

タバコが突然ダイナマイトに。

ダイナマイトが一瞬で、タバコのケースに。

そして今、死んだはずが目の前に。

(テレポーター空間移転者か。そう仮定すれば、最初の現象も難なく証明できる。タバコもダイナマイトも最初から用意できるものだ。物体に触れることなくテレポートをさせられるとなると、恐らくlevel...) )

「4」

「!?!」

垣根は驚いて目を見開く。

しかし、変わらず前にいるのは、裏ノ裏表だ。

ニヤリと笑う彼だけだ。

「勘違い、かな？」

「てめえ……」

「読心術じゃないよ」裏ノ裏は至って冷静だった。しかし、どこかぬけた滑稽さを滲ませる。

「俺もお前も同じさ、垣根帝督」

「どういう意味」

言い切る前に、変化があった。

裏ノ裏は、最後のギリギリまでタバコを吸って、口に溜まった紫煙をゆっくり吐き出した。

煙は宙を舞う。

空気に吸い付いて消えない。

消えないから

消えないから

消えないから

消えずに残って、

黒煙に変色した。

「、」垣根はただそれを訝しげに見つめる。

吐ききった全ての紫煙が黒へと変わった。横に流れることもなく、

上昇して消えていくこともない。

黒煙は、裏ノ裏の周りを浮浪している。

まるで靄のように。

「ははは、タバコの煙って普通でも周りに言われもない甚大な被害を及ぼすって言うのに、黒い煙になると、ますます印象悪くなってしまうな」冗談混じりの裏ノ裏の言い草。余裕のような、のりしろのある声。

「かつ、そうだな。それじゃあ今回を機に、」

垣根が、笑った。

ドツと、威圧感が辺りに充満する。

「禁煙させてやるよ」

重力を加速させるような、垣根の圧力。

それでも

それなのに

さっきからずっと



裏ノ裏は、変わらない。

「それは困るな。何とかしないと」

裏ノ裏の右手がすつと動いた。細長いその腕の延長線上に垣根を捉えて、手は銃の真似をする。

その手を、黒い煙が包み込んだ。

裏ノ裏は相変わらずの表情。

しかし、垣根もその歪な笑いを止めなかった。

垣根にとって、その全てが予想通りだったからだ。

（あいつの能力は、レポートなんかじゃねえ。精神操作系だ。おそらくきっかけは、最初のダイナマイト。あのときにひっかかったとすれば示しがつく。今俺が見ているあいつも、ただの幻影ってわけだ）

裏ノ裏は喋り出す。

「さあ、この拳銃でどこを狙おうか」

（俺を急かして、先に攻撃をさせる。そうすることで、俺に幻影であること気付かせないよう・・・）

「バァン!!!!」

そう。それは、ただの銃声を口真似した物に過ぎなかった、

はずだった。

「なっ……」

垣根の右腕が、振り子のようにならへと大きく揺れる。

どうして？

強く押されたから。

何に？

威力に。

何の？

垣根はゆっくりと視線を向ける。

二の腕。

貫通した穴を塞ぐように溢れる鮮血。

銃痕。

突如、強い痛みが体を走り巡った。

「つつ!?!」

しかし、傷口をかばって垣根は悲鳴を抑えた。

銃で撃たれたのだ。誰であつても激痛を伴う。しかしそれより、痛みより何より、声をあげるより何より、反撃をするより何より、

「どうしてだ!?!」真っ先に垣根の頭を支配したのは、疑問だった。

裏ノ裏を睨みつける。しかし、すこし前屈みになつて傷口を押さえていたため、同じくらいの身長であっても、そこには差が生まれていた。

垣根は裏ノ裏を見上げて、

裏ノ裏は垣根を見下ろしていたのだ。

「どうしてって……」

最初から最後まで、裏ノ裏の表情は変わらない。

「決まってるんだろ。俺は空間移動能力ではなく、念動能力テレキネシスでもなく、サイコメトリー読心能力でもないってだけだろ？」つらつらと箇条書きをするように、裏ノ裏は不正解を上げていき正解を絞る。

だけれど、

それでも垣根は、答えがわからなかった。

「それに言っただろう？」

裏ノ裏は笑った。

「お前と同じなんだよ、垣根帝督」

裏ノ裏は、そつと自分の胸に手を当て止まる。胸ポケットに入っていたのは、タバコのケースだ。

「おつと、そうだそうだ。ここに閉まってあつたんだよ。ひゃー、助かった」

いつもの癖で、タバコを一本取り出すと、口にくわえて火を付ける。

「不得要領」

呟いた言葉が妙に響いた。

「それが売りでやらせてもらってます」

口から吐かれる紫煙。空中を汚染して、何もかもを有耶無耶にする。

「改めてよろしく、垣根帝督。常識が通用しない同士、な」

吹き出されたタバコの煙は、消えない。

+

「ぶ、ぶはあっ！…！」

第七学区のとあるビルの狭間に位置する細い路地。

ビルからそこへと繋がる扉をダイナミックに開けて飛び出てきたのは、思談未冬である。

「おいおい、まじかよ……！」

服装はやけに汚れていた。両手の中には、パソコンの入った大事なリュックが抱えられている。

「フロアまるまる爆破させるとは、ありえんティ―」

寒いギャグはそのまま放置し、パソコンを起動させる。

「良かったー、無事だった。壊れたら大泣きしてたわ」

とんでもない弱虫発言である。

「ゴホン、さて、あの『ホマーアタッキング血塗られし爆撃』から生還したことをまずは喜ぼうではないか。今から祝杯を挙げるのも悪くないな！」思談はハハハハと笑い声を突き上げた。

「しかしまあ、やることはまだ山積みだ。少しも休む暇はない」

ポケットから取り出したスマートフォンで電話をかける。

「はい、どうしましたか、おぼっちゃま」

三回のコール音で出たのは、執事の権造だ。

「ビッソフイテール権造、ここらへんで一番高いビルはどこになる？」

「そうですね、恐らく『エンパイアビルディング』でございます。セブンスミストから少し離れてはいますが」

「そうか、では」

思談は、何てこともないように、

「そのビルの最高階を買収してくれ」

そう、言い放った。

「ああ、後服も着替えたい。そこに届けておいてくれ」

「かしこまりました」執事の権造も、当然のように了解する。

「機材はプランAのものを。そして『フィジット賢才頭脳』の起動を頼む」

「お迎えに上がりましょうか？」

「いや、いい。『エラエクタパリア不可侵領域』を張ってあるから問題ない。僕は、『カオスエンペラー狂い咲く皇帝』だぞ。これを機に少し世界を歩いて見ようじゃないか」

「かしこまりました。それではお気をつけて」

注）権造はよくできた執事である。

思談は電話を切ると、銀色仕様のノートパソコンを起動させる。

「さて、僕を怒らせた罪は重たいぜ？」

浮き出るように画面下に表示されるアイコンを、カーソルがクリッ



クした。

途端に、現れる数々の画面。重なり合い、かぶさり合い、ノートパソコンの液晶画面を覆う。

それに追隨するように、思談の指がキーボードの上を踊り狂った。

「気づかれないとでも思っていたのか？ 博士」

行き着いた画面は、7つ。中央にあるのは、何かの全体図を二次元で表した模式図だ。その周りを覆うように6つの映像が囲んでいる。

その画面を眺めて、

ニヤリと、思談は笑ってみせた。

「くくく、逃げられないよ」

カタカタと短く、キーを鳴らして、最後にエンターキーを叩いた。

「hello, machinery」

訳）出番だよ、機械仕掛け

画面右上のある映像。

群れて移動していたお掃除ロボットの中から、一機だけが逆走を始めた。

†

「ふっ、実にしょうもないものだった」

白い白衣に手を突っ込み、周りとは浮いた雰囲気醸し出す。博士は、第7学区のある街路を歩いていた。

「何も殺すことはなかったか？」

『別に構わないでしょう。所詮、それだけだったということですよ』

横を歩く獣型ロボットが、少年のような声色で答えた。異風を漂わせる一つの原因でもある。

「ならいい。面倒事はさっさと済ませたかったからな。私にはやる  
ことがまだ……」

その時、ちょうど向こうからお掃除ロボットが姿を現した。

学園都市に常備されている機械仕掛けだ。何もおかしいことはない。

しかし、それが段々と近づいてくることに、

自分以外この道に誰もいないことより先に、異変に気づいた。

『ドクター！ ドクター！ ドクター！ ドクター！』

音声化された電子音が、狂ったように言い続ける。

博士は足を止めた。

「まさか……！」

気づくのはもう遅い。

近づいてきたお掃除ロボットは最後に、背筋をゾツとさせた。

『ゲームオーバー』

次の瞬間。

一瞬の閃光と共に、爆発が起きた。

## 不得要領（後書き）

みんなキャラが濃いWWW

崩し頑張って消えないでくれよ。

それでは、今回もあとがきまで読んでくださりありがとうございました。  
しました。

初めての方も、今まで読んでくださっている方々も、これからもど  
うぞ』とある無題の音響』をよろしくお願いします。

感想も、よかったら書いてください。

誤字、指摘などありましたら遠慮なくお願いします。

晴天霹靂（前書き）

お久しぶりです、冷えピタです。

日曜日によつてと思つてましたが、学園祭の都合で今日になりました。

今回は裏ノ裏対垣根帝督集結です。もしよければ、見直してもらつて見てください。結構込み入っていましたので……

ではどうぞ最後までお付き合いくださいm（　）（　）m

## 晴天霹靂

「くそがつー！」

垣根帝督は即座に、両翼を勢いよく前に押し出し、風圧で地面を叩き割った。バリバリバリバリ！と、自分の足元付近から目標へ地面が裂けていき、ばらまいた残骸とともに、敵を打撃する。

しかし、それは垣根にとってもはや優越感を行動に移したものではないのだ。

危機感。

本能的行動だ。

(このままじゃ、まずいー！)

垣根は一つの行動で手を止めなかった。

右方向奥。

裏ノ裏が笑っていた。

黒い煙が、もといた場所から高速で飛んできたように糸を引いている。

「なめてんじゃねえぞ!!」

垣根の怒号とともに、翼から数千もの羽が、裏ノ裏を八つ裂きにしたように飛び立った。

視界がなくなるぐらいの砂煙を辺り一帯に撒き散らす。まるで、地上が空から分離されたように、砂煙が境界線を張っていた。

ブォン!と、砂煙を突き抜けて、垣根は上空に現れる。自身を覆うようにしていた翼を広げ、纏いつく砂煙を一瞬で払いのけた。

見下ろした先には砂煙。しかし、それだけではない。

うつすらと、途切れ途切れに見える黒煙。

今では、垣根に一抹の気味悪ささえ覚えさせた。

(タバコを吸う度に増えている? 一体あの黒煙は何なんだ?)

「……………くっ。まあ、どうでもいい」

垣根のその一言で、終焉はやってくる、

はずだった。



「好い加減、」

翼が広げられる。

「死にやがれ」

奮われたその六枚の翼によって生みだされた風圧が、たたみかけるように地面を粉碎した。

砂煙が地面に押し付けられて二つに裂け、垣根の横を勢いよく上昇していく。

「っ、そうかよ」

垣根は酷く悪態をついた。

周りに漂う、

消えない

消えない

消えない

黒煙。

そして、地面が抉られ砂煙が何度も発生しては風圧で消えていく、

垣根の攻撃によって被られた被害の中でも一番の中心位置。

精神が研ぎ澄まされている今だからこそ聞こえる、

コツコツと、不気味な足音。

終焉は来ないで、

「おいおい、のっけからなんだこの仕打ち」

砂煙の中から現れたのは、

「酷くないか？」

裏ノ裏だった。

「言わせてもらつが、そういうお前も酷いもんだぜ。騙し討ちの悪徳者が」

「おいおい、お前も似たり寄ったりだろ？悪党」

笑いながら、裏ノ裏は紫煙を吐く。風圧で散り散りになってしまったため、空白となっていた彼の周りにまた黒煙が浮き出た。

「うるせえぞ、コラッ!」

バツと、翼が広げられる。その翼に当たる太陽光線が、徐々に集まり、膨れ上がっていた。

「今度こそ、終わりだぜ」

さっきまで二枚で打っていた光線が、次は総勢六枚で発射される。それはもはや、威力の問題だけではなかった。ランダムな発射角度。攻撃範囲。その全てを考慮して考えれば、単純計算で三倍という値は全くもって意味を持たない。

「おっつ、それはまずい」

だけれど裏ノ裏は至って単調だった。

煙草を持つ反対の手、その手が握っていたものが、隠していたものが、姿を現した。

小さな、手榴弾。

「ふっ、はははははは!」 垣根はそれを見て、高笑いをした。

「たった一発の、そんなしょうもない手榴弾で、俺を殺せるとでも思ってたのかよ!」

垣根はまるで天使のように見下ろす。

今度こそ、目の前で不気味に笑う男を殺すために。  
学園都市第二位をあざ笑う、不愉快なこの男を殺すために。

「俺は第二位、垣根帝督だぞ!!」

「いやいや、手榴弾のせいにするなよ」

その時、ボソツと裏ノ裏は呟いた。

「原因は、お前の風圧で俺の煙草の煙を撒き散らしたことなんだか  
らな」

抜かれたピンが投げ捨てられる。

うつすらと笑った裏ノ裏。

ゆっくりと力を弱めた右手。

滑り落ちた手榴弾の軌道。

行く先にある、黒煙。

ゴポツ、と音がして、

黒煙が手榴弾を飲み込んだ。

「なっ!？」

垣根の目が見開かれる。タバコの煙に当たっただけの手榴弾は、地面に落ちるはずなのに。周りに漂うあの煙は、ただの紫煙で、

「気をつけるよ」

パンクしそうな垣根の脳内に、囁きかけるような裏ノ裏の声がよぎった。

「後ろ」

一拍も置かず、コン、と何かがぶつかる軽い効果音。

垣根は後ろを振り向いた。

まるで、時間が遅くなったような錯覚が襲う。

「?!、」

そこにあっただのは、ピンの抜かれた手榴弾。

さっきまで、裏ノ裏の手元にあっただ手榴弾。

学園都市第二位にとって、何の脅威にもならないはずの手榴弾。

だけれど、当たり所によれば確実に、一人一人を殺せる殺傷能力を持った手榴弾。

そして、その無防備な人一人の首もとにそつと現れた手榴弾。

その後ろで、黒い煙が浮遊していた。

(な、なんで……)

「大丈夫だ」

絶句する垣根の代わりに、

裏ノ裏は笑った。

「首吹つ飛ばせば、考えなくてよくなるぜ？」

次の瞬間、上空で小規模の爆発が起きた。

決して少なくはない爆風が、余波になって裏ノ裏の周りを通り抜ける。

カチカチ、と、裏ノ裏は爆風からライターの火を守って次の煙草に火をつけた。

煙草の先端から上る紫煙が、爆風の後を追うように後ろへと流れていく。

「、」

突如、爆発の煙の中から、丸い大きな物質が落下してきた。受け身を取るわけでもなく、その物質は重力に従順し、地面に激突する。

それを見た裏ノ裏は、意外そうに、けれどそれは上っ面だけで、本

当はこうなることがわかっていたような口振りで言った。

「お、まさか生きてたのかよ」

「……………くそ……………やるうが……………」

その物質の一部が、ゆっくりと開かれる。それは物質なんかではなく、翼が、六枚の翼が、球状に包み込んでいたのだ。

垣根は、その中から姿を現した。

俯いて表情は見えないけれども、確実に息が上がっている。服装には爆発の影響が残っていて、こめかみから頬を伝って致死量まではいかないが少なくはない量の血が流れていた。

「くそが……………くそが……………くそが……………」

忌々しいようにその一言を、垣根は何度も繰り返し呟く。

「俺が誰だか……………分かってんのかよ……………」

「なんだよ、」

その言葉に、裏ノ裏は答える。

「どうしたんだ？垣根帝督」



「違えんだよおおおおおつ！！！！！」

その時、垣根は爆ぜた。

「俺は学園都市第二位、垣根帝督！！こんなところでお前みたいなザコにやられちまうような、くそみたいなやつじゃねえんだよ！！！！」

まるで雄叫びのように、天に向かって吠える。

一気に広げられた翼から、衝撃と風圧が一緒になって裏ノ裏を吹き飛ばそうとした。

「っ！？」 何とかそれには耐えきったが、

裏ノ裏は、目の前に広がる光景に初めて言葉を失う。

翼を広げた垣根帝督の頭上で、何かがあった。

ゴポゴポゴポゴポツ！と、まるで沸騰するお湯のように、急速に形を変えて完成へと近づいていく。

その垣根の姿はまるで、神だった。

そこで新たに世界を創り出そうとしている、

迷信だと思われていた、神のようだったのだ。

「確かに、深く考えなくて良かったんだよなあ……」

垣根はボソツと呟く。裏ノ裏はそれに気づいて、彼と視線を合わせた。

理不尽なほど世界と外れた、完全無欠な嘲笑。

この世界を不味いと言わんばかりに、吐き出すような凶悪的口振り  
で、

ゆっくりと時間をかけて丁寧に、

垣根はその言葉を紡いだ。

「第7学区ごと、吹き飛ばしてやるよ」

「つつ!?!」

次の瞬間、

閃光が辺り一帯を呑み込んだ。

+

「か、かははははは………」

それはたった三秒間の出来事だった。閃光は、ただ光景を一時的に掠め取るだけではすまなかつたのだ。光の中で、拡散された『未元物質』。まるでシャボン玉が次々と割れていくような、呆気ないほど恐ろしい爆発の連鎖。その全てが折り重なるようにして、莫大な大規模爆発が地面をえぐり取ったのだ。周りにはどれも残骸のように残る建物とアスファルトを削り取られ荒れた地面。

その中心、発生源。

垣根はそこに君臨していた。

少なくとも、彼にまで爆発の衝撃は影響したのだろうか。先程よりも多少服の傷が目立つようになっていた。もう荒い息を隠す必要も

ない。垣根の両目が、ある者を捉えたからだ。

少し先にある、人間の死体。

煙草が大好きな学生の死体。

不敵に笑う、『フィールド』のリーダーの死体。

第二位にたてついた、なれの果て。

「きひいっ…ひひ…そうだよ、これがそうなんだよ」

垣根は満足して、その口を歪に歪めて笑う。

これこそが、彼の求めていた光景だった。思い描いた、今までに何度もみてきた視界だった。垣根の前では、全てが平等にひれ伏す。絶対的な力が、『未元物質』が、規範の知識を塗りつぶし、既存の定理を覆し、何もかもが絶望して地を這いつくばる中、垣根だけがその場所で立っている。



しかしその腕が、振り下ろされることはなかった。

「っ!？」

目の前に少女が立っていたのだ。

垣根の、銃で撃たれた方の右手をぐつと彼女の両手で握りしめている。それが、彼女の能力故の行為であることに気づくのは、流石の垣根であっても数秒の時間を要した。

金髪の綺麗な髪の毛。その容姿は15歳くらいであるというのに、まるでホステスが着るような赤いドレス衣装。カールされて前に垣根の方へと揺れる髪の毛のリズムは、彼女の荒い息に連動している。そしてその、冷や汗をかいているような顔が、垣根の方へと上目づかいで向けられた。

「お、お前は……!」

垣根には、その少女に見覚えがあったのだ。何ととっても彼女は、

『スクール』の一員だった。

「何で……」

少女のいる理由が不明である垣根は思わず呟く。しかし彼女は至って普通に、いつもの言動を崩すことはなかった。

「何でって……あんたが勝手に暴走してるからでしょ。やり過ぎよ、こんなところで暴れて、あんたでもただじゃ済まないことは分かっているでしょ。」

彼女は、一旦垣根から目を逸らす。彼らの耳が捉えたのは学園都市特有のサイレン音。

「アンチスキルが来るわ。いいから早く逃げ……っ!!」

突然、彼女が小さな悲鳴を上げた。垣根が、握っていた彼女の手を乱暴に振り切ったからだ。

「うるせえ!!どけっ!!」垣根は彼女を視界から払いどける。

けれど、

「なっ!?!……」

そこに、さっきまであった死体はなかった。

「まだ……生きてやがったのか……くそがっ!!」

「よくわからないけれど、今はそれどころじゃないわ。後の処理は



任せて」

「うるせえんだよ!!」垣根は彼女の言い切る前に激怒した。もはや、彼女の能力が意味を持たなくなる。

「お前何で止めやがった!?!お前さえ止めなければ殺せてたんだぞ  
!?!」

「っ!?!?.....あ.....」

垣根はぐつと彼女の襟元を持ち上げる。

「要らねえことしやがって!?!」

「な.....何言ってるのよ.....殺すって.....何をよ.....」

「んだと?.....」

「あんだ...ただ暴走してた.....だけじゃない」

「ふざけんじゃねえ!?!」

垣根は彼女を突き放す。解放された彼女は、荒い息のまま垣根を睨みつけた。

「.....か、はっあ.....」

「まだまだ! あいつはここからそう遠くに逃げられねえ!?!今から

なら探して間に合う」

「……だめよ」

それを小さく、だけれど真剣な低い声で止める声があった。

彼女だ。

「お前、わかってんのか？」

「あんたこそわかってんの？これは上からの命令よ。こんなところで暴れて、それもスキルアウトに対して暴走してしまうなんて、これ以上は庇いきれないわ」

「……は？……」

垣根は初めて、いやようやく、

違和感を正確に捉えた。

「何…言ってるやがる？ スキルアウトだと？……」

「そうよ。私たちが到着した時点では、あんたはもうスキルアウト全員の反乱を鎮圧していたようなものかもしれないけれど、だからと言ってどうして暴れていい理由に？まさか、スキルアウト側の差し金があったのかし…」

「ちょっと待て!!……何言つてやがる!?!」

慌てて彼女を止めた垣根。額がうつすらと汗ばんでくる。

「俺が戦っていたやつは裏ノ裏表だ! 『フィールド』のリーダーだぞ!!」

「そう、ならスキルアウトの中にいたのかもしれないわね。あんなにいたもの、紛れ込んでいてもおかしくないわ」

「な…何言つてやがる! 俺が戦っていたのは…あいつだけだっただろうが!!」

そう、そしてまただ。

少女の顔が、怪訝なものになる。

糸と糸とのもつれ合い。

垣根と少女のくい違い。

「な……何だよ……、お前おかしいんじゃないのか?……」

玉のような汗が、垣根の頬を伝う。

（有り得ない! 有り得ない! 有り得ない! 有り得ない! 有り得ない! 有り得ない!）

心の中で反芻される言葉。おまじない。しかし、そんな可愛いものではなかった。

「そんなわけ……あるはずねえだろうがっ!!」

たまらなくなつて、垣根は乱暴な声で叫んだ。まるで少女に訴えかけるように。

「とにかく、まだあいつはこの辺りからそう遠くは逃げられねえ！  
！いいから、第7学区を隈無く探して、あいつを殺すんだよ！！！」  
けれど、

「……何言ってるの？」

その訴えは空を切る。

少女の怪訝な顔が、もはや垣根にとって恐ろしいものになっていた。  
今のどこが間違つたのか垣根には予想がつかない。  
今までのどこに誤りがあつたのか見当もつかない。

地面が歪んでいく幻覚。  
自分も歪んでいく感覚。  
そして、心のご真ん中を支配したあの黒煙。

《不得要領》

頭の中に、鈍器で殴られたような鈍い衝撃。

全てを打ち明けるその種明かしは、何の変哲もなく

彼女の口から発せられたのだった。

「ここは、第19学区よ……」

+

「おいおい、さすがにありや危ないわ」

コツコツコツと、先ほどと比べてはあまり覇気というものが感じられなくなった足音が、通りに響く。といっても、辺り一帯には先ほど起きた爆発の余波で飛んできた瓦礫が散布しているため、そう足音が響かないのだ。だから気づかないかもしれないが、彼の歩幅も足音もリズムも、最初から何一つ変わってはいない。

ブー、ブー、ブー、と

その時、マナーモードの携帯が彼のポケットの中で震えた。携帯を取り出して、普段通りに電話に出た。

最初の一声は向こうからだった。

『時間ピッタリ。お疲れ様です、先輩』

その一言に、

「ありがとう、思談君」

裏ノ裏は笑った。

「いやー、でもね、なかなかどうして、完全勝利とまではいかなかったんだな。ま、最初からそんな予想は考えてなかったけれど」

裏ノ裏は、視線を自分の右手にやる。爆発の余波をくらった右腕は、擦り傷に切り傷、火傷が目立ち、肩口から血が流れていた。

「でも、死ななかつただけマシってやつかな。それにこの怪我のおかげで、大覇星祭も休めそうだ」

『何言ってるんですか。そんなの話数が一つ二つ進めば、どんな怪我でも自動的に治るようになってますよ』

「毒舌だ」

くくく、と裏ノ裏の含み笑い。やりたい放題は、どうやらこいつらも同じらしい。

『それにしても、残念でしたね』

思談は抑揚のない声で言うが、そこにはその凄さに驚き呆れたニコアンスが、嫌でも末尾に付いていた。

『垣根帝督に第19学区を第7学区と勘違いさせて、暴走させた後に、自爆させようとする計画。最後になって邪魔が入りましたし』

「まあね。でもそんなものさ。何でもそう上手いこと行かないよ。端的に感想を述べた裏ノ裏が口を開いた。

答え合わせの時間だ。

「相手は学園都市第二位。真つ正面から戦って勝てる相手じゃないし、民間人を庇いながら戦えば尚更だ。でもちようどいい時に、違う場所の一つ、暴動が起きただろ？ほら、携帯のニュース速報に出るくらいの大事件」

『第19学区、スキルアウト暴動事件。よく言いますよ。起きるのとさえ知ってたくせに』

「何のことやら。ただそれを利用しただけさ。これが下拵え」

『本当に、先輩の能力ってたちが悪いですよね』

思談が、一拍溜めてその言葉を放った。

『《相手の五感のうち一つを誤認させる》能力って』

「そんなことないさ。誤認させることができるのは一つだけだ。視覚を誤認させることができても、聴覚に触覚、嗅覚、味覚は正常に働いているんだから、バレないようにするなんて暗闇のなかで針に糸を通すみたいなものさ。だからlevel2の偽装現実トリックアート止まりなんだよ」

『では訂正を。本当に、先輩ってたちが悪いですね』

「嫌な言い方だなあ、全く」

『んで、早く教えてくださいよ。今回のオチ』

思談の言葉に、ため息を吐くような裏ノ裏の笑みが答える。裏ノ裏は順々にストーリーを紐解いた。

「結局、垣根帝督は《初めて第7学区で俺を見かけた時から幻想にかかっていた》ってだけの話だ」

裏ノ裏は至って単調に続ける。

「あいつは俺を見つけた時点で、視覚における偽装現実トリックアートにハマっていただけのことだ。タバコをダイナマイトに変えたことで能力にハマったんじゃない。能力を解いたから、タバコは嘘で、ダイナマイトが本当だとわかったんだ。最初から俺がくわえていたのはダイナマイトだったと。そしてまた能力に引っかけた。《バアン！》ってね」

「本当にlevel2なんですか？視覚全てを騙すだなんて」



「いや、視覚全てを騙したわけじゃない」

『え？』

「君を呼んだ理由だよ。全てを騙せるわけじゃない。だから今回、《なるべく似た景色が続く第7学区から第19学区までの道のり》を君にオペレーションしてもらったんだ。足りない部分は自分で補えるしね。それに、」

『まだあるんですか』

「エキストラの皆様にも協力してもらってね」

『……エキストラ？』

「まるで第19学区を第7学区のように見せかけた彼ら。まるで俺が銃を撃ったように見せかけた彼ら。まるで手榴弾がテレポートしたように見せかけた彼ら」

裏ノ裏はニヤリと笑った。

「スキルアウトさ」

『……なるほど』考え深いような顔きで、電話の向こうの思談は頷いた。

「第19学区スキルアウト暴動事件の中に、コネがあってね。それで数人のスキルアウトに協力を頼んだのさ。俺の能力じゃ、十人も人間を視覚誤認として作るのは重たくてね。垣根帝督は、向こう

からこつちを見つけたと思っっているようだけど、最初に見つけたのはこつちだ。彼の周りにいた通行人は、最初からスキルアウトだったんだよ。気づかないに決まってる。だってここは学生の街、学園都市。ほとんどが学生で普通なんだから」

それで後のスキルアウトの暴動は彼女が鎮圧したんだけどねと、胸ポケットから取り出した本当に最後の煙草に火をつける。仕事終わりの煙草は格別であるのを、裏ノ裏は知っていた。

『つまり、銃や手榴弾も全て……』

「そう、俺が銃で撃つたんじゃない。俺が銃を構えるフリをした背後から、スキルアウトが狙撃した。手榴弾は、空間移動テレポートしたんじゃない。偽物の手榴弾をまるで消えたように見せかけて、垣根の背後からスキルアウトが投げつけたただけだ」

ふう、と煙草の煙を吐く。うっすらと靄のようなそれは、空気に馴染むように消えていった。

「黒煙は、ただの飾りさ」

つまり、

そう言って、思談は締めくくる。

「結局、垣根帝督を視覚誤認の状態の中、十一人でランチしたってわけですね」

「手っ取り早く言えば、そうかな」

あっけらかんとした裏ノ裏の言葉に、思談は言葉を失った。

簡単に話す裏ノ裏表。

しかし、相手はあの垣根帝督なのだ。

学園都市第二位。

それは他の追隨を受けない、もはや確立された二つの席の一つ。

それを一瞬にして、掠めとろうとしたのだから。

いや、それよりも何より……

「最後の邪魔は痛かったなあ。あのまま行けば、周りにあつた発電所や大量の燃料タンクと一緒に心中してもらうつもりだったんだけど。まああれだけ被害を被らせたんだ。善戦した方だね。上が黙っちゃいないし、垣根帝督ももう行動できない……」

『全く、』

思談の突然呟いた言葉に、裏ノ裏は止まった。

『善戦ねえ』

余裕綽々のニヤニヤ声。

その声を聞いた裏ノ裏も、大体のことが把握できていた。

一応、一応だ。

しめないといけないから聞いておこう。

「おかしかったかい？」

『おかしいも何も、最初の一発で、垣根帝督を殺せたくせに』

「何のことやら」

裏ノ裏はただ、そうしか答えない。

『では先輩の作戦通りに。プランAで』

通話は、ただそう言い残して切れてしまった。

†

「と、いうわけなんだよ。海原光貴君」

ボソツと呟いた一言に、一瞬の静寂が辺りを包み込む。動いたのは、裏ノ裏から30メートル程離れたビルの路地の影だ。

「バレてたんですか？」

そう呟いて海原光貴は道に姿を現した。

「わざわざ君のために、思談君も口裏を合わせて解説まで行ったんだ。出てきてくれないと困るね。でも、君もあの爆発に巻き込まれて死ぬ予定だったんだけれど」

裏ノ裏表は後ろを振り返ることもなく、歩みを止めない。海原光貴も、ただ一定の距離を持って歩みを進めた。これが唯一、海原の緊張を保つ方法だったからだ。

「君も刺客なのかい？」

「残念ながら、違います。私たちは今回、一切関与しませんので」

「何だ、そうなんだ」

「本当に残念そうにしないでください」

「まさか、『グループ』には頭が上がらないよ。先輩なんだしね。それにこっちも、できるだけ穏便に済ませたい。戦うのは最終手段

た」

「最終手段ですか……」丁寧な解説をしまして、最終手段と言えるのですかね」

「……………くくっ、」

「？」海原には確かに、裏ノ裏のせせら笑いが聞こえた。聞き取りづらい、そう、20メートルの距離ではほとんど聞こえないような、小さな声だ。なのに、

「もちろん」

「っ?!」

次の一声は、海原の真後ろから聞こえたのだ。

（前の彼は視覚誤認か!?!）

後ろから肩を叩いて声をかけてくるような気安さ。慌てて海原は振り向くが、

「なっ!?!」

そこには誰もいなかった。

(くそっ!!)

そして、遅れて気づいた海原が振り返った先には、

もう裏ノ裏表はいなかった。

「聴覚誤認……!!？」

気づいた時にはもう遅い。

いいや、違う。

《結局最後までわからない》

不穩をもたらす決まり文句。

不得要領、意味不明。

高らかな裏ノ裏の声が辺り一帯にこだました。

《手札くらい、いつでも見せてやるよ。でも、イメージ写真は中身と異なる場合があるのでご注意を。能力には何かしらの人為的介入があります。あしからず。卑怯だズルいだ皆結構。種と仕掛けしか、御座いません》

「っ……」

海原は最後に、小さく悪態をついた。

彼のすぐ側の路地に入った所にある、

裏ノ裏の音がする、スピーカーを見つけて。

+



「……だあー」

どこかの人混み。

溢れかえる雑踏。

裏ノ裏は、その中で気だるい声を垂らす。

「さあて、後が上手く行くといいけれど」

最後の残り少ない一本の煙草を吸い尽くし、紫煙を吐く。ケホツ、と通り過ぎる通行人にアピールされて、少し申し訳なさそうな照れ笑いを浮かべて、ポケットから取り出した携帯灰皿に捨てた。

ブーブーと、二回だけ携帯が震える。

ニュース速報の合図だ。

「さあ、青天霹靂だ」

携帯の待ち受け画面に、流れるテロップ。

後半戦開始の合図だった。

『11時、第7学区セブンスミストで大爆発。第7学区混乱状態！』



晴天霹靂（後書き）

崩「僕、主人公なんだけど……」

ちよつと影が薄くなっている崩です。皆さん忘れてあげないでくださいね……

さあ、次は後半戦！

第7学区で『フィールド』が大暴れです！

これからもとある無題の音響をよろしくお願いします！

感想や指摘などもぜひください！

それでは、冷えピタでした。

**雲蒸竜変（前書き）**

どうも冷えピタです。

お久しぶりです。更新が遅れましたm（）（）m

そして、また長い。

今回は、思談末冬の紹介と後半戦への招待です。

どうぞ最後までお付き合いくださいm（）（）m

## 雲蒸竜変

十

携帯の時刻表示が10時50分を表した。味気のない待受画面に数秒視線を落とした後、携帯をポケットにしまい込む。

第7学区、『セブンスミス』。休みの日とあって、第7学区のデパートやショッピングモールは、沢山の学生で大盛況だった。要所要所で、ごった返しの人混みができている。楽しい休日が、平和な日常が、至る所に広がっていた。

「、「浮いているというより、まるで自分だけ隔離されたような感覚が、人混みの中であつても強く頭に響いてくる。」

耐えられなくなった僕は、アパートから静かに抜け出していた。青葉に買い物を頼まれなかったのが唯一の救いでもある。少し、焦点を定める、状況を把握する時間を確保できたからだ。

しかし、それは『無意味』で、また逆効果でもあった。

街行く人々の、溢れんばかりの表情。浮き足立った小学生が走り回る。心地良い空気。芳しい匂い。日常は何も変わらない。

頭が、狂ってしまいそうだ。

街路樹の木陰へと、人混みをかき分けてたどり着く。  
手に力が入らない。それでも、僕はその手で乱暴に、街路樹の幹を叩きつけた。

「くそっ!!」

小さな悲鳴は、人混みにかき消される。誰もが、ここにいる僕の不幸を知らない。いや、知ることができないのだ。

不条理なターニングポイントだった。

「いったい……何がどうなって……」

「ちよつとあんた!!」

その時突然、後ろから大きな声が届いて、それと同時に僕は肩を掴まれた。我に帰って、慌てて振り向いてみる。僕の肩を掴んでいたのは、女性の、それも中学二年生の、華奢で綺麗な手だった。休日であっても外出時は必ず着なければならぬ常盤台の制服が、学生達の中でも一際目立っている。

「み……御坂……」

僕の後ろにいたのは、御坂美琴だった。

「やっと気づいた。あんた何回呼んだと思ってんのよ。華麗にスルーしちゃって」いつも通りの調子で、当たり前障りのないフレンドリーな御坂の喋り方。まだ上条じゃないだけ、本来のツンデレパワーは発揮されていないようだ。

「誰がツンデレだ!!」

「うおっ、待て待て!! 放電はまずい! 放電はまずいから!!」

「何地文でボケてんのよ! シリアスシーンでしょうが!!」  
肩を上下させ、赤い顔で猛反発する御坂。だからもつといじりがいがあるのだけれど。

「悪いな。今日は上条と一緒にじゃないぞ」

「なっ!? べ、別にそんなつもりできたんじゃないわよ!! 私だって、たまたまあんたを見つけて声をかけただけだからね!!」

「わかったわかった。落ち着けよ」

街路樹のそばに埋め込まれた手すりに腰をかける。納得いかん表情の御坂も、渋々ではあるが同意の表れとして隣に僕と同じように腰かけた。

「初春さんや佐天さんと一緒に遊んで。あ、もちろん黒子もね。今向こうのゲームセンターでクレーンゲームに夢中になっちゃって、少し息抜きに、外に出てきたばっかりなのよ」

「そうなんだ」

「あ、ほらほら」その声の誘導で向いた、人混みの濁流を一つ挟んだその先に、少し遅れてゲームセンターから出てきた初春と佐天と

白井を見ることができた。御坂を見つけ、クレーンゲームの景品であるうぬいぐるみを各々が抱えながら手を振る。そして横にいる僕も見つけ、笑顔えがおにはいまして二倍増になった彼女たちは、続けて僕にも手を振った。

「あ、そうだ。お前さ、絵合えあわせって知ってる？」

「ん。そういえば、初春さんと佐天さんがよく話してたわね。確かに二人の友達でしょ？また今度紹介するって言ってたわ」

「そうか。じゃあその時は、仲良くしてやってくれよ」

「……あんたの言い方気に入らないわね。別に私は、偏見の目で見たりしない。きっと、仲良くなれるわよ」

「そうか……ありがとう」

「別にお礼はいらない」そう言っ、御坂ははにかむ。通り魔事件のことを、御坂はおそらく知っているだろう。それでも、事情をわかって、原因を知った彼女は、深く追求したり根に持ったりすることはないはずだ。だから、絵合の言葉にその話を付け加えなかった。御坂なりの気遣いと、絵合に対する友好さが手にとるように、その笑顔から伺えた。

「だな」小さく笑って、僕はただそれに答える。御坂の人柄を考えれば、いらぬ心配だった。

二人して、目の前に広がる雑踏を眺める。どうやら、かなり人混みが増しているせい、向こう側の三人はこちらに来るのに苦戦しているようだ。彼女たちの人混みに掠められたりする姿が、海で遭難したように見えた。

「……あんたは、大丈夫なわけ？」

突然、御坂が口を開く。



「何がだよ？」

その一言に、心がずっと重くなった。

「他人の事を思いやってあげるのはいい事よ。でも、自分も、あんたも、大丈夫なの？」御坂の目には、さっきまでと違って心配そうな色が映える。

「さっきのあんた、すごくつらそうだった……」

末尾に滲む気持ち。それに僕は慌てて、笑顔で否定した。

「何言ってるんだよ。超元気だ」

「あんたって……嘘つくのヘタよね」溜め息のように吐き出すその言葉。僕はただごまかすために苦笑いをする。

そんな顔を見て、御坂は呆れたんだろう。もう、というような横顔がこちらを見る。それでも、これ以上追求しようとはしなかった。

《話せる時になったら、話さない》。《いつでも力になるから》。口に出さなくても、御坂の思いが僕に伝わっていた。

だからこそ、苦しかった。

「黒子ー、初春さんに佐天さん、大丈夫？」

御坂は前方を見つめて、心配そうにしながら、人混みの中へと足を投じていく。三人はどうやら迷子の子供を見つけて右往左往していたようだった。御坂は助け舟として三人の元へと駆け寄っていったのだ。

♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪

体が一瞬、痙攣を起こす。まるで背骨を抜かれたように、フラフラとした感覚が、また僕の中に芽生えた。玉のような汗が、こめかみから頬を伝う。

狙ったようなタイミングも、

着信音の微妙な緊張も、

携帯の真っ暗な待受画面も、

何もかもが、あの時と同じだった。

『驚いたね』

アンドロイドのような美しい、現実味のない気味悪い声。  
僕に電話をかけてきた正体不明の人間のものだ。

「お前………」

『おや、それはてっきり、こちらのセリフだと思っていたがな』

「何だと……？」

『君は今の自分の立ち位置を理解していないようだね』失望すら思わせる声色。「教えてくれ、お前は誰なんだ！」という僕の訴えにさえ、呆れたよと小さく呟く。

『君をね、親しい人たちだけで開催するホームパーティーに呼んだんじゃないんだ。君の仲良しの友達までなら呼んでいいよなんてルールもないし、ましてや中断なんて有り得ないんだよ』

「……………！」

電話から聞こえる声と裏腹に、御坂たちの泣き叫ぶ小さな少年をあやす姿が、すり潰した苦い薬のようにもどかしい心を強くする。

「わかってる……………。今のは、あいつらに偶々合っただけだ。すぐ離れる。集合場所にはちゃんと行く。まだ時間じゃないだけだろ……………」

『だから、わかってないと言っているんだ』

その時、電話の声が突如重みを増した。

「……………どうしようもない……………」

『最近の科学は進歩したと思わないかい？』

打って変わって、世間話のような口調。

『ほら、見てごらん。あの拳銃』

「！」キーワードに反応して辺りを見渡す。しかし、こんな人混みの中、拳銃と言われたってどこで何を意味するのかなんて……  
わからないはずだった。

ゆつくりと僕の頭が、御坂たちのいる四人の方へ向いた。

面白い顔を作ったりして、気さくに笑わせようとする佐天。一緒にあって、心配ないよと少年の涙を拭いてあげる初春。前線から離脱して、電話で迷子相談所に解決を試みる白井。ポンポンと頭を撫でて、大丈夫だからねと語りかける御坂。

泣いている少年の手には、

黒く光る、プラモデルの小さな『拳銃』。

「……………待て、どこのことを言ってる」

泣き止んだ少年が、無邪気に両手を御坂へと……。

嫌な汗が滲む。

『凄いだろ？あの拳銃』そして僕の言葉を無視し、

電話の向こうで間違いなく、小さく笑う調子で、彼は呟いたのだ。

『あんなに小さくても、至近距離からなら、頭ぐらい貫通するんだ』  
『や』

「っ!?!?」

気づけば僕は電話を耳から離し、即座にその場へと移動して、

「やめろっ!?!」

小さな少年の手をおもいきり叩いていた。

パチンツ!?!と、小さく鋭い音が鳴る。

誰もが、その行動を理解できない状態だったのはほんの一瞬の話で、少年の泣き声とともに、四人の思考は慌てて再スタートした。

「ち、ちよつと桐原さん!?!」驚いた初春が、咄嗟に少年と僕の間  
に壁となって割り込む。

「そ、そうですね！ 遊びなんですから、そんなことしなくてもいいじゃないですか……！」 佐天は、また泣き出してしまった少年の手をさすって、僕を諫めた。

「はあ……はあ……いや、これは……」

口に出そうとした言葉を、無理やり引っ込めた。

言えるわけがない。

言えば、次こそ被害が出でしまう。

何よりも、相手はこっちの行動をすべて見ているのだ。

「違うんだ……一体これは……どこに……」

胃液が上がりそうになる。

激しい動悸。人混みの残像が目眩を引き起こして、火に油を注ぐ。

「……桐原さん？」 異変に気づいた白井が、僕の表情を確認する。

「な、何かありましたの？」

「な、何にもないよ……悪い」 それに僕は力なく笑って答える。

「それより、お前ら……早くその子送って家に帰れ……その方がいいから……な……」

明らかにおかしい僕の態度に、彼女たちは心配そうな目つきをしたけれど、僕はそれさえ無視して彼女たちに背を向けると歩き出す。

しかし、

ぐっと僕の腕は強く引っ張られて引き戻される。

引っ張ったのは御坂だった。

「あんた……何があったの」

小さく呟いたその言葉が確信をつく。逃げようにも、御坂の手がしつかりと僕の腕を掴んでいた。

「だから……何にもないって……」

「そんなわけないでしょ！！」腕を掴む力がまた強くなる。御坂の表情は、心配と不安の色で歪んでいた。

「話して……何があったの……」

「ち、違っただ……御坂。ぼ……僕は……」

彼女に目を合わせられなくて、ふと視線が人混みを追う。

人混み。

「僕は……」

人混み。

「違……」

人混み。誰かの姿。人混み。

「……あ……」

今度こそ、頭の中が真っ白になった。

喉が枯れる。

重力がまるで、左右から僕を歪ませるような幻覚症状。  
早鐘の心臓が何度も嘘だと叫んだ。

「崩……!」

人混み。人混み。見慣れた姿。人混み。人混み。人混み。

喧騒。喧騒。喧騒。喧騒。聞き覚えのある声。

「……何で……」

御坂も察して、僕が見つめる方向へと頭を振り向ける。



「……どうして……」

理由なら簡単だった。

《嘘をつくのが下手》だったからだ。

「崩！ やつと見つけた！！」

僕の前に現れたのは、青葉だった。

「あ……青葉……」かすれた声が、よりいっそう空気を乾燥させる。

「コンビニから帰って来ないから心配してたんだよ」

「……どうして……」

「え？」

「どうしてここに来てるんだよ！？」

知らない内に、僕の声は青葉を怒鳴りつけていた。

「だ、だって、崩が……」

「僕がじゃない！！ 大丈夫だって言っただろ！！」

「でも、崩が心配で……」

「だから僕はいいんだ！！余計な心配はするんじゃないよ！！」

間髪置かずに飛んできたのは、御坂の両手だった。

「あんだねえ！！ そんな言い方はないでしょ！！」襟元をぐつと掴み上げ、御坂は僕を睨みつける。白井と初春に佐天の三人が、慌てて御坂をなだめに入るがそれすらあまり効果を發揮しない。

「あんたのことを心配してくれている人に向かって何よその言い方！！おかしいでしょ！！」

「何も知らないくせに、勝手なこと言ってんじゃないよ！！」

「あんだこそ、何も言わないで人の好意無駄にして、何でそんなことするのー!？」

少し弱さの入り混じった御坂の瞳が僕を見た。

「お願い、話して」

「……いいから、お前らはもう帰れ……」

「桐原!」

「うるさい……しょうがないだろ!! こつするしかないんだ!!  
もう他には何も残されちゃいないんだよおっ!」

怒鳴ったはずみで、携帯が僕の手から滑り落ちる。

落ちた拍子にボタンが押されて、携帯の画面が表示された。

デジタル時計が、

10時59分を示す。

第七学区の時計台の秒針が、10秒差で、10にある短針を抜き去り12にある長針を追う。

賑わいの絶えない、街の中央。

喧騒に溢れかえるその中でボソッと、

その不気味な開幕宣言は、携帯電話から発せられたのだ。

『さあ、始まりだ』

11時00分。

第七学区で、爆発が起きた。

†

「始まったか」第七学区のとある道、学園都市の中で数少ないオフイスビルの並んでいる、それゆえに日曜日であるから人気もあまりないその道で、

金髪にサングラス。短パン、アロハシャツにビーチサンダルの高校生。

土御門は呟いた。

通りの真ん中で前方へと目をやれば、先ほど爆音が鳴り響いた場所から、大量の煙が上がっている。

まさに、後半戦開始の狼煙であった。

「、」

土御門のポケットで携帯電話が震える。無造作にその携帯を耳へと押し当てた。

「海原か」

『ええ、定時報告に』爽やかな雰囲気漂う少年の声。海原は、ただ続ける。

『裏ノ裏表は垣根帝督を撃破しました』

「、……そうか」意外な表情を全面には押し出さない土御門。しかし、彼にとって予想外であるのは確かだった。

『戦い方の違いが、裏目に出たようです。垣根帝督は、第十九学区で暴走したことにより、行動は制限されています。あとはもう大丈夫でしょう』

「わかった。なら、俺はそっちの援助には行かずに、これから桐原の方に行く」

『そちらは大丈夫ですか？』

「派手には暴れないさ。それに結漂がもう向かっている。あいつの力が、この戦況では有利に働くだろっよ」

『わかりました。では』

「ああ、後は作戦通りに」

『作戦通りだと、困るんだがな』

「!?!」

突如、電話の音が明らかに変わった。いきなりの、不意な出来事に、土御門はまず携帯の画面を確認しようとするが、それを電話の音が止めた。

『大丈夫。合ってるよ。これは海原光貴の携帯電話だ。ちょっとジヤックしただけさ。まあ肝心の海原はそれにさえ気づいてないだろうけど』簡単な言い草。少年の声。土御門はあまり詳しく知らない情報を頭の中でかき集め、一瞬のうちに答えへとたどり着く。

「思談：未冬か」

『正解！ さすがだねえ、頭脳派』

「一瞬、最悪の人間を考えたが、まあこれならまだマシな方だな」  
『マシか、ははは！ お前も面白いことを言うよな』 思談は笑う。  
まるで挑発を受け流すように、のらりくらりとした発言だった。

『うん、まあ一言言うならお疲れ様。なんか色々助けようとしてくれてるんだね。だけど』  
思談の答えは、逆接で導かれた。

『単刀直入に言うと、悪いけどさ、お前には退席をお願いしたいわけ』

「何だと……？」 土御門の表情が怪訝なものとなる。

『わかるだろ？お前に作戦があるように、こっちにも作戦があるんだ。ちょこまかと動かれると、迷惑なんでね』

「わかってるのか、お前らの相手は暗部組織のリーダーたちだぞ？  
いくら何でもこれは危険過ぎる、」

『何回も言わせないでくれるかな？』

呆れたような思談の声。しかし、『じゃあ言い方を変えさせてもらうよ』と言った思談の言葉が土御門の耳に反響した。

『おとなしく言う通りにしろ。さもないと、土御門舞夏に危害を加える』

「なっ！？……」 土御門はあまりにも衝撃的な一言に固まってしま

土御門舞夏。

土御門の義妹であり、学園都市に人質として取られている、何よりも大切な少女の名前だ。

『何驚いてんだよ』それとは裏腹に、思談は笑った。

『こつちが、そつちの情報を知らないとでも思ったのか？』

『どうだ？まだ俺は最悪よりマシか？』と挑発するような問いに「お、お前……」とかすれた声で抵抗の意思を示す土御門。しかし、思談はそれすら笑い飛ばして土御門に告げた。

『簡単な話だろ。お前は手を引くだけでいいんだ。もし、条件を呑むんなら、そうだな……お前の後ろにいるうちの執事に従え』

「っ！？」土御門の慌てて振り返った先にいたのは、一人の老人だった。

黒のタキシード姿。身長は土御門とさほど変わらないし、何より六十代であるうにも関わらず、背筋が真っ直ぐしている。優しい細目に白髪、白髭のその御老人は、まさに漫画に出てくるような模範的な執事そのものだ。

携帯電話の通話は、すでに切られていた。

選ぶ選択肢は、すでに一つしかなかったのだ。



「……わかった」

土御門は、執事に向かって小さく呟く。

「かしこまりました」そして執事は、一つお辞儀をして、執事たる対応で土御門に答えたのだ。

「どうぞ此方へ、未冬お坊っちゃんがお待ちです」

案内されたのは、このオフィス街の中で一番高い高層ビル『エンパイヤビルディング』だ。エレベーターは、止まることなく二人を最高階まで送り届ける。

最高階のフロアは全てが吹き抜けになっていた。壁という壁が取り払われてあり、『エンパイヤビルディング』の大きさが、はっきりと目でわかる。円周のように、モダンチックな窓ガラスが張り巡らされていた。

「よく来た」

土御門から直線で50メートル程前方、大きな円卓を挟んだその先

に、窓ガラスの方へと食い入るようにパソコンをいじる一人の少年がいた。まだ残暑だというのに長袖長ズボンの服装。割れた卵の殻をすっぽりと被せたような鬱陶しい髪型がそれを助長している。

「テンポラリーマイスペース  
一時的本拠地へようこそ」

彼のいじるパソコンには、それこそまだノートパソコンではあるものの、何十本というコードが蛸足回線を通して、この大きなワンフロアの四分の一を占めるであろう巨大な機械に繋がっている。最後にパンツ、とキーを叩く音がして、

「土御門元春」

思談は、椅子を回転させて土御門と向き合った。

「舞夏に手は出すなよ……」

「わかつているさ。まあもう少し遅ければ、俺の『トラスティック時空さえ断ち切る剣』が彼女をめった刺しにしていたかもしれないがな」

（トラスティックソード？ 奴の能力か？）土御門は思考する。

執事は無口を貫いた。

「ふん、だがいいだろう。俺はこれでも『ナイトオブナイト英国騎士団英雄』でもある。『ノンフリック不意打ち』はあまり好まないんだよ」

（何だ……こいつまさか、暗号を使って執事に何か伝えているのか

?) 土御門はチラッと横を見る。

執事は無口を貫いた。

「ふふふ、まあ困惑するのも無理はない。『次元を越えた存在』オーバーヒューマンである俺を恐れているのだろう。気にするな。それが普通なのだから」

(おい……) 土御門はチラッと横を見る。

執事は無口を貫いた。

「ではもう一度自己紹介を」

そしてピシッと、思談は決めた。

「『フィールド』の右腕、そして学園都市の『カオスエンペラー狂い咲く皇帝』思談未冬だ!」

「おい、」土御門は我慢できなくなって、執事を凝視した。

「何だあの厨二病は」

「ぐわああああああああああっ!」

土御門の言葉に反応したのは、執事ではなく思談だった。悲鳴を上げて椅子から飛び出し、呻きながら右腕を抑える。

「そ、その言葉はあまり口にしない方がいい。じゃないと、俺の『ダークライトハンド』が暴れるぜ……」

「……………」

「や、やめろ！！そんな虚ろな目で見るんじゃない！！」

「未冬お坊っちゃまは、中学生の時に味わった経験から、以来そういった痛い子を見る目を向けられるのがトラウマになっているので  
す」

「お前、よくできた執事だな」

「ありがとうございます」

「こ、こら！！権造までどうして……お、おいやめろ、やめてくれ、やめてください二人とも！！」

閑話休題。

「くそつ、『自分だけの現実』バーチャルリアリティを……」思談はそう呟いて俯き加減  
倍増のままパソコンに向かう。

「一つ聞いていいか、思談」

「……何だ？」ジロツと土御門を睨む思談。

「お前には勝算があるのか？ この戦いに」

「さあね」

「なっ……！？」一度言葉を失ってしまった土御門。しかし、「じゃあ何故俺を止めた！？俺は味方なんだぞ！？」と言った土御門の言葉に、思談はいたって単調に答えた。

「お前みたいに、戦略を練ってタイプの奴は、扱いづらいんだよ。by裏ノ裏先輩。こっちの戦略まで壊されちゃたまったもんじゃないからな」

「お前らの戦略とは何だ？」

「各個撃破」

それを聞いて、土御門の態度は急変する。

「そんな作戦が通じるわけがないだろ！！」

「馬鹿かお前は。どう考えてもこれが最善の策だ。相手はそれぞれ、相手を決めて狙ってきている。無理に合わせてみる、レベル5だぞ？それこそ何が起きるわからない。被害は甚大じゃないはずだ。だから、それぞれが離れた場所で、誰も関与しない状況下で1対1の決闘形式を取る。これが最大限に力を発揮できる方法なんだよ」

「、」

「何よりも、これは裏ノ裏先輩が考えた案だ。信憑性はあるだろ？」

ニヤリと笑った思談。しかし、土御門の苦い表情は完全には消えない。

「けど、相手はレベル5だぞ！？ いくら何でも……」

「逆に聞くけど、レベル5だから何？」

子供のような、禅問答。

しかし今、この言葉に説得力があった。

「現に、レベル2の裏ノ裏先輩はすでに、レベル5の垣根帝督を倒している。それも聞いて呆れるような、のっぴきならない方法で。

こんなビッグな先例があるんだ。何が起きてもおかしくないよな？」

「そんな、確率的な問題じゃねえだろ！ 運任せっていいのか!？」

「違う」そう言って決まり顔の思談は、

パンツ、とエンターキーを叩いた。

次の瞬間、

土御門と思談に挟まれた巨大な円卓が、突然淡く光る。様々な色が重なり合って円卓の上に何かを作り出す。

「『フィールド』って言うのは、特殊なんだよ。他の暗部組織が、各個人の保有する能力の強さだけで成り立っているのに対して、『フィールド』はそれぞれが分野別に、役割分担をしているんだ。裏ノ裏先輩は、『参謀』。戦況の中、勝つための作戦を考えてそれを実行に移す、『動く指令塔』。そうやって先輩を表現するんだとしたら……」

「なっ……!？」言葉を失った土御門を見て、思談はニヤリと笑った。

「俺の役割は『統括』だ」

円卓に現れたのはモニタリングされた立体図だった。円卓の周囲に取り付けられてある何百個という小さなレーザーから放たれた彩りのある光がそれを作っている。そして何よりも、土御門はこれに見覚えがあった。

「これは…第七学区じゃねえか!！」

見たことのある建物が至る所に並んでいる。土御門の通う学校もだ。しかし、土御門が言葉を失った理由はそこではない。

「どうということだ……」

モクモクと、光で作られたある建物から流れ出る煙。火事。そして、米粒のように小さな夥しい数のアイコンが地面を埋め尽くしている。

「リアルタイム……!！」

「そういうことさ」「さらっと言ってしまふ思談。しかし土御門は食いつかないではいられなかった。

「お前……一体何者なんだ……!?!？」

「……おかしいとは思ったが、本当に気づいてないとは……鈍感だな」「やれやれと溜め息をつく、思談は執事に命令した。

「権造、説明してやってくれ」

かしこまりましたと一息ついて、執事は土御門に向き直った。

「思談末冬様は、『SHIDAN社』の創設者思談秋弘様のお孫様、現社長思談冬輝様の御長男でございます」

「なっ!?!」土御門は、権造の言葉に驚愕して二の句が継げない。しかし、頭の中で反復するにつれて、『思談』という言葉が至る所に溢れていることに気づいた。

学園都市において、その言葉は誰にとっても知られたものだ。

『SIDAN社』

創設されて未だ50年ながら、学園都市においてパソコン業界の70%のシェアを誇るカリスマ的一大企業。学生のための安くて質の高いパソコンから、大学や研究機関におけるスーパーコンピュータまで、ありとあらゆるニーズに富んでいて、学園都市の幅広い層から信頼を得ている。さらには、インターネットサービスまで手を出しているのだから、まさに学園都市で不動の地位を確率した一流企業だ。

「その御曹司が、まあ『僕』なのだが」

退屈な回想が終わるのを待って、思談はようやくパソコンから顔を上げた。

「言つたらう! そんなのは俺じゃない! 本当の俺は『カオスエンペ狂い咲く皇帝』思談末冬である!」

彼のその一言と同時に、土御門の視界が一気に別なものとなった。

円卓の頭上を下から照らしていただけの光が、突如扇形に広がり、円卓よりも幅広い領域を有する。そしてそこに、まるでちきれん



ばかりに袋に入ったスーパーボールが溢れ出したかのように、あらゆる画面が飛び出してきた。日本語の説明。英語の注釈。パラメータ表示に波状グラフ。連続で、立て続けに、それら全てがたった五秒の間に、大画面を塗りつぶした。

「ではまず、我がプランの仕組みを担う有能な機械たちを紹介しよう！！」

それぞれのモニター映像に解釈を加えた画面が、ピックアップされる。

「まず、愛用する我がパソコン、『SIDAN社製《empero r》ver.4』。市場に出回ることのない、我が『未冬グループ』最高傑作のノートパソコンだ。学園都市の技術を最大限に応用して作られた、『イノベートコア7.235GHz』を搭載する、銀白色のボディがかっこいい超ハイスペックパソコンである！そしてさらに、お前の隣にある巨大な機械！」

土御門の離れた隣にあつてなおかつ、このフロアの4分の1を占める謎の物体だ。

「それこそ今回の作戦の要、『<sup>フィジック</sup>賢才頭脳』！SIDAN社のエンジニアグループ総員により作り上げた珠玉のスーパーコンピュータだ！！天文学的数字の計算に特化した、現代、この世界で、最先端の機械だ！！！」

ほんの一瞬の静寂。そのうちに大画面のモニターから、多くの画面が消えてなくなっていた。そして一つ、中央に一段と大きな画面が、その姿を現した。

「では、とっても繊細でなおかつ、大体不敵なこの仕組みを教えよう。土御門、電磁波って知ってるよな？」

「ああ……当たり前だろ」

「『電場』と『磁場』が重なって生み出されるのが電磁波だ。どんな材質であろうと帯電する。人間だってそうなんだ。電化製品なら尚更だよな。そう、だからこの業界の中で過去に、ある一つの議題が取り上げられたんだ。それが、『電磁波の有害』だ」

「聞いたことがある……確か発ガン性の可能性があると言われた話だろ」

「そう」

思談の声に、追隨するグラフ。

「全部がそうではないけれど、電磁波というのは、有害性を持つ。

今となつては昔の、WHOが定めた基準、50〜60V/mの極低周波で危険ランク『2B』や、世界で最も厳しい規制とされたスイスの25V/mという数値が、それを物語っている。だが、日本の電化製品はそれを遥かに凌ぐ電磁波を飛ばしていた。日本で供給される電圧は100V、世界平均の二分の一だ。だから、電気を消費した時、電流に比例する電磁波は世界のおよそ二倍日本の方が強いんだよ。だというのに誰もがそれを知らなかった。今じゃアースを付けたりして対策をするが、まだ普及したとは言えない。だからな、SIDAN社は特別なことをしたんだよ」

「特別なこと……」

「電磁波の拡大を抑え弱体化を図るために、パソコンにある機能を加えたんだ。発生する電磁波に対して特殊な磁場をぶつけて相殺することにより、安全性を確保したのさ」

「……それが何だというんだ……」

「わからないのかい？別に我が社を自慢している訳じゃない。大事なのはこの機能だ。この機能がどういう役割をするかなんだよ。例えばほら、過保護な親が自分の子供をいつでも見守れるようにしたり、」

「！、まさかお前！？」

「そう、言わばこの電波が『GPS機能』になるのだ」

あー、心配するなよと、思談は取り乱しかけた土御門を手で制する。

「知ってるのは、SIDAN社の人間、それも限られたたった数人だけだよ。悪用はしないさ、利用するけれど」

思談はしたり顔で答えた。

「つまり、この特殊な電波をSIDAN社が逆探知するのだ」

「しかしそんな……!!」

土御門はようやくやく気づく。

「そう」

条件はもう揃っているのだ。

「SIDAN社は、学園都市においてパソコン関連からインターネットサービスまで、70%以上のシェアを占めている。学生の、4人に3人がうちの製品だ。教育機関、民間会社では3つのうち2つが我が社の製品を導入していて、さらに研究機関はほぼ90%の割合を占めているんだよ。それによって、学園都市全てがモニタリングされる。まあそれも全盛期、ツリーダイアグラム『樹形図の設計者』があつた時の話だけれどね。今となつては夢のような話だけど、まあフィジック『賢才頭脳』のおかげで、2学区までならモニタリングは可能だ。その全てをたった一人が支配する!!」

バツ、と思談は両手を広げた。

「今のこの俺には、全てが可能なんだ！！ 学生の携帯を通じてイタズラ電話をかけるのも、お掃除ロボットを狂わせて爆発させることも、<sup>バウドスィッチ</sup>駆動鎧を誤作動させて混乱を招くことも、銀行のパスワードを解析してお金をばらまくことも、交通機関を麻痺させることも、研究施設を丸ごと爆破させることも！！！」

立ち上がった思談が叫ぶ。

「そう、第7学区の『命運』は俺が握っているのさ。これこそ『プランA』の正体、『absolute monarchy（絶対君主政体）』だ」

オフィス街でずば抜けた高さを誇るビル『エンパイアビルディング』。

そこからは、第7学区全てが見渡せる。

そこに思談は、立っていた。

彼の後ろには、第7学区が広がっている。

彼の手には今全てが、嘘でもまやかしてもなく、

第7学区全てが彼の手中にあるのだ。

土御門はその言葉に、立ち上がってニヤリと笑った思談に、恐怖した。

「な、何だ……お、お前は一体？……」

決まり文句が、ありきたりな言葉が、土御門の口から発せられる。

次に出る言葉は、誰もが予想した言葉であろう。

しかし、そんな一筋縄ではいかないのが彼だった。

思談未冬、彼は厨二病患者である。

それもただの厨二病患者ではない。

末期厨二病患者である。

だからこそ、厨二病患者として規律正しく模範的な解答を彼は用意していた。わかりやすく言えば彼は言いたくて仕方なかったのだ。

『能ある鷹は爪を隠す』を実行した、『全てを知っている』ような癪にさわる歪な笑み。

目は少し細めてから大事な所でキリッと決める。やれやれといった感じ、『今まではただセーブしていただけで、本当は有り得ないくらい強い』ということを示すのではなく、暗示したいのだ。

しかし今、土御門は気づいた。

彼が、末期厨二病患者が、

学園都市第7学区を支配していることに。

口先だけでなく、

思談未冬は、本当に恐ろしいやつであることに。

「雲蒸竜変。全く、嫌な感じに言ったもんだよね」

態度を変えずに、高鳴る気持ちを抑え、落ち着いて。ここでテンションを上げてしまうのは真の厨二病患者ではないからだ。

ふっ、と迷惑そうなため息に、ちよつとしたシニカルな笑みをのせて、ごく自然のように、何事もないように、まるで大したことのないようにして、自分の強さを強調する。

彼にはそれが、あまりにも似合すぎていた。

「何って、」

決めゼリフはかえって自虐的にお決まりだ。

第7学区を手の中で持て余しながら、彼は笑う。

彼こそが、『フィールド』の右腕にして、『カオスエンペラー狂い咲く皇帝』、

思談未冬なのだ。

「お前らが笑う厨二病の、成れの果てだよ、馬鹿野郎」

+

突然の爆発が、余波を伴って僕たちを襲う。強い爆風が、横からまともに通行人へとぶち当たった。

「くっ……あ、ああ……！！？」

五秒経つてようやく、かろうじて確認できた視界。そこには車椅子が無残にも横に投げ出されて横転していて、

その先で、青葉が倒れていた。

「おい、青葉……！」

「く…崩…、…あ」

青葉は僕を見る前に、小さく、そのかすれた声で叫んだ。

道路標識が、地面を蹴って鋭く跳ねている。それはまるで、三塁線を破るような痛烈な打球だ。サードの守備を突き抜けたその道路標識は、

迷うことなく青葉へと襲いかかる。

「危ないっ!!」

コンマ五秒、僅かに僕の方が打球より早かった。青葉と道路標識の対面している間を縫うように、僕の体がかろうじて身を挺した壁となった。

「がつ!!!!」

まるで鈍器で思い切り殴られたような、執拗にじりじりとした痛みと道路標識がまともに当たった中心の、一番強い衝撃が背中を支配する。雷が走ったような衝撃が脳内を駆け巡り、視界を霞ませた。

「崩!!」

「あ…青葉…大丈夫か…?」

(……………)



蜘蛛の子を散らしたような人、人、人。散在する瓦礫。目の前に広がる、炎。

その中で、僕は言葉を失った。

「桐原さん！！」「ちよつとあんた！！」と、御坂に初春、佐天、白井がこっちに駆け寄ってくるのがわかる。思い思いの、心配して自然と早口になる言葉がたくさん僕に降りかかる。

だけれど、それに答える余力がなかった。

僕は炎の広がる前方を、ただただ見つめて恐怖する。

言葉が出てこなかった。

どうして？

上手く呼吸ができないからか？  
口から血が溢れてくるからか？

僕を恐怖させたのは、声だった。

大混乱の中で、周りの声が入り混じる中で、

みんなに混じって、誰かが僕を呼んだのだ。

(・・・おい、いっら・・・)

「……………」

(・・・聞こえてんでしょ？ 桐原朔。早くこっちに来てよ。じゃな  
いよ、・・・)

「……………」

(・・・また、爆発が起きちまうだろ？)

僕はその言葉に全てを悟った。

時間の問題でも何でもない。これは最初から決められていたんだと。

逃げ場はもう、どこにもないんだと。

「御坂……」ボソツと呟いた僕の言葉に、御坂はすかさず「どうしたの！？大丈夫！？」と反応する。

そんな優しい御坂に、僕は言った。

「青葉を頼む」

その言葉に御坂は間もおかず何かを言おうとしたが、僕はそれに被せるように、もう一度言った。

「お願いだ、御坂」

「き、桐原……」

「青葉を、頼む……」

何も言えなくなった御坂に、心配ないと笑う。「初春、白井……お前らは仕事があるだろ？僕は生憎研修生だから……手伝わないぞ？佐天……その子もしっかり守ってあげるよ」、僕が言うと、彼女たち三人は一段と表情を引きつらせた。

肺に溜まった違和感を引きずって立ち上がるうとする。しかしそれは、膝立ちになったその時、ぐっと服の裾を引っ張られて止められ

た。

初春でも

佐天でも

白井でも

御坂でもない。

裾を掴んだのは、青葉だった。

「崩……どこ行くの……？」

「ちょっと……用事だよ」

「でも、怪我してるよ……口から血も出てるよ……きっと私をかばったときに、もっと怪我してるはずだよ……病院行かなきゃだめだよ……」

「青葉……」

「ねえ……帰ろう。みんな心配してるよ……」

ぎゅうっと、裾を掴む力が強くなって、

その掠れた声で、青葉は呟いた。

「遠くに……行かないでよ……」

「青葉……」

初めてもらった青葉の本音だった。泣き声にも似た、青葉の悲痛な叫びだった。うっ、うっ、と小さな泣き声が聞こえる。

心が痛くなって、

何かが溢れそうになって、

僕はそれをぐっと押さえて、

「えっ」

青葉を強く、抱きしめた。

芯の細い、女性らしい線の体。こんな華奢な体に、今までどれだけつらい思いを、心配をさせてしまったのか、それを考えるだけで、僕の抱きしめる力は強くなった。

「く……崩……？」

「ごめんな……でも、必ず帰ってくるから……」

忘れない。

自分の背負っているものを、忘れるわけがない。

四年前に決めた約束を胸に、今度こそ、大切なものを、僕の家族を、青葉を守ってみせる。

「だから、ちゃんと待っていてくれよ！ そうだなあ、今日は僕カレーが食べたいなー、もし夕飯がカレーなら、五倍速で帰ってくるかも」

「……ふふ、だめだよ」青葉がぎゅうつと僕の肩口を握り返した。

「エバンス君とカルマちゃんと扇さんに、ちゃんと自分で許可とらないとね」目尻に涙を浮かべた青葉。

ごめんな、そしてありがとう。

こんなにも辛いのに、笑ってくれてありがとう。

「ははは、じゃあ七倍速だな」確認するように、僕はもう一度呟いた。

「必ず帰ってこないとな」

青葉を残して、ゆっくりと立ち上がる。

やれやれと、いつもの溜め息をつく白井。やる気に満ち溢れた目の佐天。いつものように優しく笑う初春。少し照れてる……思い出して僕まで恥ずかしくなるから照れるな御坂。

「死ぬんじゃないわよ」

「もちろん」御坂の言葉に僕は力強く答える。

そして僕は、燃え盛る炎へと一步を踏み出した。

「遅かったじゃんか」

火炎のその先、誰もいない道路の中央に、その女性は立っていた。夏物の半袖コートに長い髪の毛。まるでお嬢様のような、およそ大學生ぐらいの女性だ。

「別に待ち合わせなんてしてないだろ」

「つれないこと言うなよ。時間はやったんだからさ」その女性は笑う。

「私、学園都市第4位の麦野沈利って言うんだけど、」しかし、一転してその鋭い目つきが、僕に向けられた。

「あんたさ、『フィールド』の桐原崩でしょ。能力を偽って、強さを偽っている人間」彼女の口元に、歪な笑みが現れた。

「本当は、どれくらい強いのかしら？」

「そんなの、自分で確かめろよ」

バン！と、地面を踏みつける。残骸と一緒に転がっていた細長い鉄パイプが、先端を踏まれたことよって、もう片方が僕の方へと勢い良く飛び上がってきた。それを片手で掴み取り、麦野へと突きつける。

それに呼応して、麦野が笑った。

「いいね、そうしようじゃないか！」

僕の持つ鉄パイプが指し示す延長線上、

麦野沈利は、その不敵な笑みを持って開戦宣言としたのだ。

「せめて楽しませなさいよ。自信がないなら今のうちに、死んで詫  
びろ」

‡

「くそっ！…！」



第七学区のとある街道。

チンピラを絵に描いたような一人の男、

浜面仕上は、悔しさをビルの壁にぶつけていた。

「どういうことなんだよ！ 第七学区で起こすはずだった暴動は中止になるし、代わりに起こした第十九学区の暴動は一扫されちまうし……！」

携帯を何度も開いて通話を試みるが、相手は一向に出ない。それが、浜面を余計焦らせた。

「っ……！」

携帯から目を離して振り返れば、先ほどあった大規模な爆発を示す煙が、ビルとビルの間から伸び上がり、空を汚している。

今日起こすはずだった暴動が第七学区から第十九学区に変更された。そして、まるで見計らったように起きた第七学区爆発事件。

浜面は何か、自分たちの知らない大きなものに操られている気がしてならなかった。一抹の不安が、浜面の心をもどかしくする。

「駒場のリーダー………一体どうなってるんだ………」

ズムズムズム………

「っ……！」

突然のその着信音に、浜面はすぐ携帯画面を開く。

待ちに待った相手、駒場利徳からの着信であった。

「お、おい！ 大丈夫か駒場！！」

携帯電話に必死になって叫ぶ浜面。しかし、それに対して返答は返ってこない。

「駒場？ 聞こえてるか、とにかくこっちは助かってるけれど、第十九学区の方は全滅だ。半蔵もなんとか態勢だけでも立て直すとは言ってるが、確信はない。とにかくあなたの指示が必要なん……駒場？」

返事どころか、電話の向こうは物音一つたてない。浜面は焦っている上に、まるで悪戯電話のような駒場の対応について、怒鳴ってしまった。

「おい、聞いてんのか駒場！？ ふざけてないで、早く喋ろよ！！」

「だって、」

やっと、電話の向こうから聞こえた声。

「だって、駒場利徳じゃないんですもの」

「えっ?.....」

浜面はすぐに違和感を覚えた。それこそ、相手が駒場でないことは、言葉の意味からではなくその声でわかってしまう。

駒場利徳は女性ではない。2メートルを越す大男なのだから。

それでも聞こえてきた声は女性の声。

綺麗で、まるで水が流れていくようなその流暢な声は、

浜面の心臓を締め上げた。

途端に、まるでテープを再生したように、突如何の兆候もなく鳴り始めた、靴のヒールが地面をつつく、甲高い足音。

それは、浜面がゆっくりと振り向いた先にある、道から枝分かれする一本の細長い通路からだった。

「でしよう?」

電話の声がかき刺激となつて、浜面の体からどつと汗が噴き出す。脳が答えを導き出すのは造作もないことだつた。その答えは至つて単純なもの。なぜなら、それだけ大きな存在で印象が強かつたからだ。

「あああ……………お前は……………」  
浜面は思わず呻いてしまう。

その先で、彼女は細い路地に蔓延る闇を切り裂いて現れた。

上下の繋がつた藍色の修道服。その修道服は右足の側面部分に膝辺りまで裂け目が入つているため何一つ不自由はなく、黒の高いハイヒールの靴が、白い肌の脚先端で強調される。胸元には真っ白な生地で十字架が描かれており、学園都市においてその服装はまさに、異風を宇に書いた通りだ。銀縁でかたどられた十字架に赤いルビーを散りばめた、アシンメトリの二対で一つであるピアスが、赤い光を反射して揺れる。

そして彼女は、浜面に笑いかけたのだ。

「浜面君?」

「紀夜井坂……………水簾……………!!」

「あら、覚えていてくれたんですね。嬉しいです。忘れてしまっているとはかり思っていました」電話を切った水簾は、笑顔で浜面に答えた。

「忘れる……ねえ。生憎、そんな簡単にはできてないぜ……。スキルアウトの中で『伝説』とされた、最も強いやつのことを忘れるしまうぐらいな……」

数々の称号を手にし、『黄金時代』の担い手の一人であった、駒場利徳、浜面仕上とともに並んで、スキルアウトのリーダーを務めた唯一の女性。彼女こそが紀夜井坂水簾だ。

「ということは……まさか駒場の奴は……!!」

「ふふふ、駒場君も少しも変わらないですね。私を見て驚いていましたよ。だから、携帯を貸してくださいって言ってもなかなか貸さないのです、三発も殴らないと行けませんでしたが……」

「いろいろと接続詞が間違っている!？」

「半蔵君も一応殴っておきました」

「半蔵おっ!!……!!」

一番のとばっちりである。

「……水簾。お前、どうして表に出てきたんだ?」浜面の中で、彼女に会い、恐怖よりも先に出た疑問を口にした。

「俺たちは今……もうバラバラな状況なんだ。お前は何か知っているんじゃないのか？　これはお前の仕業なのか？」

「……いいえ。私はもうスキルアウトをやめて隠遁する、ただの高校生です。私もできれば……昔の仲間を潰すことなんてしたくありませんでした。もう表舞台には、立ちたくありませんでした」

やはりか、と浜面は納得した。第十九学区に配置されたスキルアウトは確かに全滅だった。しかし、その意味は戦闘不能であるという意味であって、奇跡的に一人の死者も出なかったのだ。それが紀夜井坂水簾の仕業であるとすれば納得がいく。そして彼女一人で、スキルアウト100人を打ち負かしたという事実も理解出来るのだ。

「深くは言えません。私にも大事なものがあって、そのために動いています。すいません、結果、あなたたちを利用することになってしまいました」

「そうか……なら、いいさ。しょうがねえよ」

浜面は、はははと、安心したような溜め息を漏らした。

「確かに、俺たちを利用したことは悪いことだけど、その仲間思いの性格は、変わらないんだな」

その答えに、水簾は小さく笑った。

「ふふふ、馬鹿でのろまでただのチンピラ浜面君の割には、なかなかかっこいいことを言うんですね」

「もはや救いようが皆無である」

浜面は知っていた。昔の紀夜井坂水簾のことを。たとえどんなに悪い口を聞いたって、ちゃんと仲間を思う、その優しい心を……

「それでは、浜面君。早速ですが、車を一台パチツてきてください」

「……………はい？」

いやいや何かの聞き間違いではと、聞き直そうとする浜面。しかし、水簾はただ笑っていた。

「つべこべ言わずに、早く車を用意しなさいと言ってるのですよ、ゴミクズ浜面君」

威圧感が、まるで浜面にかかる重力を加速させる。そうだったと、浜面は過去を思いだした。

彼女を思いだしたのだ。

「あ……………あの、水簾さん？」

「軽々しく呼んでいると、軽々しく蹴り飛ばしますよっ。」

「い、いま用意しますっ!!」

浜面は、すぐに車を調達するために、走りだす。

そして、紀夜井坂水簾は立ち上る煙を見て、呟いたのだ。

「さあ、行きましようか。後半戦の始まりです」



雲蒸竜変（後書き）

いや〜濃い。

一応確認ですが、主人公は崩ですwww

次は本格的な戦闘になります。

御覧になった皆様、ありがとうございますm) | | ( m  
いつも遅れる更新ですが、また次回も見てくださいね。

感想、指摘も待ってます。

それでは、冷えピタでした。

悪鬼羅刹（前書き）

どうも、冷えピタです。

女子バレーの試合を見ながら、サーブとスマッシュの時に一人で『ぶしゅつづつづつ』とか『ずばこおおおん』って効果音をつけてます。

親は無口を貫くみたいです。

さて、音響暗部編も後半です。

今回、少し前の『背影』に関することが出てきてます。恐れ入りますが、もしわからなかつたらその部分をご覧ください。

では、最後までどうぞお付き合いください。

## 悪鬼羅刹

学園都市には、窓もなければ出口もない、そんな疑惑つきのビルがある。大胆不敵に佇むそのビルは、様々な噂が飛び交うけれど、時間が経てば綺麗に忘れてしまいうくらい、もはや学園都市の一部と化してしまっているのだ。誰もそこで、自分たちの将来が、学園都市の行く末が、淡々と一人の人間によって決められていることを知らない。

「計画は順調かい？」

そのビルのあるワンフロア、真っ黒な屋内に、天井と床をぶち抜いて設置された大きな液体カプセルの中で浸され浮いている、その人間は呟いた。彼の周りには、オレンジ色の蛍光色の光があらゆる情報を提示する。

『私に指図をするなよ』

そんなぶっきらぼうな答えを返したのは、まぎれもなくその蛍光色が作り出した小さな電光板だった。発せられる声に合わせて、線で描かれた円が、水の波紋のように震える。

『計画は至って順調だ。アレイスター、お前が心配する余地なんてない』

「頼もしい限りだね」

『七年だ。七年も前から、この計画は始まっているんだ。綿密に組んだ路線から、もはや外れることもできない』

「そうかい」

『覚えているだろうな、アレイスター。この計画が成功すれば、七年前のあの約束、必ず果たしてもらおう』

「いいだろう。ただし、成功したら、だがな。七年前の計画が寸分違わず、完璧に成功したら」

『……何が言いたい』

棘のある、しこりの残るアレイスターの言い草。反発精神を今まで以上に剥き出しにして食いかかろうとするが、ふふふとその不気味な微笑みに、電話の声は少しの沈黙と舌打ちを持って会話の幕引きとした。

ブツツ、と回線の切れるような音が反響する。

「まだ、君は理解していないよ」

アレイスターは、液体カプセルの中でひっそりと、不気味に笑って呟いたのだ。

「変わったのは計画じゃなくて、君自身だということだね」

アレイスターは静かに瞳を閉じる。たとえ失敗したところで、他のプランに乗り換えればいい。そう考えて、彼は瞼の裏に思い描いた。奔走する少年と、過去に囚われた人間の、交わらない現実を。行く末に見る、悲しい結末を。

そう。全ては、彼の手の内に。

†

「ほらよおっ！！」 麦野沈利はただ、僕に向かって掌を向ける。

彼女からの先制攻撃で、戦いの幕は切って落とされた。

薄い紫色の光の束が、彼女の掌に収束していく。そしてそれは堰を切ったように、一直線に僕へと向かって高速で吐き出された。

「っ！？」 かるうじて身を転ばせ、それを避けきる。しかし、避けきったという事実だけで安心できるような、そんな生半可なものではないことを、僕の元居た場所が生々しく語っていた。

轟音を立てて突っ切ったその光線の軌跡は、まるでアイスクリームをスプーンですくった後のように、コンクリートでできたアスファルトが簡単にえぐり取られていた。僕の後方にあつたビルは、光線の断面に従って穴が空いていて、その圧倒的な破壊力を誇っている。避けきつて助かったのではない。避けきらなかつたら死んでいたのだ。

「戦いづらいんでしょう？」

麦野が突然、僕に向かってそう言った。そして僕の表情は予想していた反応にそっくりだったようで、彼女は小さく笑う。

周りを見れば、それは一目瞭然過ぎた。

燃え盛る炎。人混みの悲鳴。ビルの崩壊音。それこそ、枚挙にいとまがないぐらいの音の量。

「音が多過ぎるんだよな。あなたの能力は『聞いた音を自在に操る』能力らしいけれど、攻撃や高速移動をするとき、『聞いた音を自分の演算能力によって衝撃やエネルギーに変える』んだろ？だから、お前は鉄パイプを使う。『特定された、そして響きやすい音』だから。あなたは自分の声を使う。『いつも聞き慣れていて、演算しやすい音』だからだ。だけれどそれは、ある特定の条件下、『充分に自分の扱う音が大きな時』だけだ。今の状況じゃ、騒音が邪魔してとてもじゃないけど、演算なんて完璧にできないよな？」

「……なるほど、もう僕の能力は理解済みってことか」

麦野沈利の言っていることは、その全てが核心をついていた。確かに一見すると、隙がないように見えるだろうが、この能力は麦野が言ったように特定の条件下でしかあまり力が発揮されない。無理をすれば演算能力の負荷が何かしら体に対しての悪影響になってしま

う。麦野が第七学区で爆発を起こしたのも、納得がいった。

「どうなんだ？『音使い』なのに『騒音』の中じゃ力を発揮できない矛盾の感想は」

「馬鹿言つなよ」逃げる際にそばに落ちてあつた、ゴミ箱が散乱して出てきたであろう飲み捨てられた小瓶を手に取る。

「それなら、できるだけ近い場所で音を鳴らせば」ビルの壁に向かって軽く瓶を投げつける。割れこしないが、それだけでは止まらない。鉄パイプを棒高跳びの要領で利用し、地面から少し飛び上がった。勢いよく叩きつけた左足から鉄パイプごと体を持ち上げ、壁と垂直になる。

そして、すかさず出した右足が勢いよくその小瓶を叩き割った。パリン！と、甲高くて鋭い音が、僕の鼓膜を揺らす。

「ある程度カバーできる！！」

僕は高速移動して、麦野の後ろに回る。

「あれえ？」

そして背後からの音撃で、一発で決める、

はずだった。

「なっ!?!」

僕は絶句する。

「お前つて、こんなに遅いんだ」

麦野が、こちらを向いていた。

ゆっくりと、彼女の掌がこちらに向けられる。

有り得なかった。

見えないくらいの速度で移動したはずなのに。

「ほら、5秒与えたぞ」

麦野の言葉で、僕は我に返る。

その掌から、全てを消し飛ばす圧倒的な破壊力を持つあの光線が吐き出された。

「くそっ!!」最大限に、収縮、屈折していた筋肉を無理やり引き伸ばして、身を転ばせるように回避する。遅れてしまった鉄パイプは薄紫色の光に飲み込まれる。

しかし、それだけで済むほど優しくはなかった。



「誰が一人だけなんて超言いましたか？」

「!？」

避けきつたその先。

目と鼻の先の距離に、一人の少女が立っていた。

「 unnecessary ガードは、超お勧めしません」

僕が身構えるよりも早く先手を取って、少女は僕の腹部を思い切り殴る。まるで突き刺さるかのようなその威力は、明らかに少女としての力量を超えていた。

「がぁっ!!！」

体が大きく宙に浮いて飛ばされ、辺り一帯の瓦礫を巻き込みながら、地面を引き摺られる。早く止まれと思ったが、停止をすれば、体の激痛が追いついてきた。呼吸ができない。逆流してきた血が口にたまって、隙間から異物と混じり流れた。まるで内蔵をごちゃ混ぜにされたようで、内側の異変が痛烈な痛みとなって体の中を駆け巡った。

「な……あ……」 視界が霞む。確認できるのは、ぼやっとしか見えない瓦礫と唯一鮮明に映る自分の血の色だ。

「弱い」

はつきりと言いきったその声。目を凝らして見つめる先にいたのは  
麦野沈利だった。

「何だ、こんなに弱いのか。肩書きだけのしょうもない奴」呆れ果  
てたような言い方。しかし、彼女には、麦野沈利にはそれを言える  
権利があった。

僕のように、序列を与えられなかったlevel5じゃない。偽物  
のlevel5じゃない。

ある程度カバーできて意味がない。それだけ弱いなら、彼女にと  
ってあとは同じ。

学園都市に君臨するlevel5。

「くそみたい」彼女は笑う。

麦野沈利は、青天白日、正真正銘の学園都市level5第四位な  
のだ。

「……っ」無理やり腕で体を押し上げる。腹部の悲鳴を無視してで  
も、何とかしてでも、起き上がらないといけなかった。

「約束通りだ」

薄紫の光が、次第に強くなる。それはいとも簡単に、僕の終わりを告げていた。

「死んで詫びろ」

地響きのような揺れが体を伝わって、何かの接近を知らせる。視界の紫色がずっと濃くなった。こんな時なのに、僕の腕は何もしようとしない。僕の脚は動こうとすらしない。無力。空っぽのその言葉が、何故か重みを増して響く。大切な人を守れない。約束の一つすら守れない。こんなことになった運命を呪った。何で僕なんだ。何で僕大切なものを奪うんだ。反復して反芻して繰り返して、答えがないことに絶望して、焦点のない目が紫色を映す。

「くそ……」

やめてくれ。

壊さないでくれ。

平和な日常を。

大切な家族を。

大事な友人を。

大切な人を。

奪わないでくれ。

やめろ。

やめろやめろやめろやめろやめろやめろやめろやめろやめろやめろ  
やめろやめろやめろやめろやめろやめろやめろやめろやめろやめろ  
やめろやめろやめろやめろやめろやめろやめろやめろやめろやめろ

やめろやめてくれよおっ！！！！！！

《ナラ、ウバイカエセバイイジャネエカ》

誰かがそんなことを呟いた。

キ

「あの、東雲さん、でしたよね？」  
第七学区のある道。そこはもう爆発が起きた場所から離れているため、騒々しいということとはなかった。

御坂美琴は、東雲青葉の乗る車椅子を押して歩いている。少し気を使った、先輩であることを意識したお堅い御坂の口調に、青葉は優しく、うんと頷いた。

「ごめんね、送ってもらっちゃって」  
「い、いえ！ そんなことないですよ！」

御坂美琴の頭の中は、こんな時だと言うのに、少し不謹慎なことを考えていた。

(こ、この人が噂に聞く、あいつの彼女か!……)

《注意書き》

ソース：初春

吹聴：佐天

無関係：桐原

女子の噂は怖いものである。

「ねえ、御坂さん」

「何ですか?」

「崩は……元気にしてる?」

「えっ?」

唐突な、要領を得ない質問。それは何より聞いてきた彼女自身が一番知っているはずのことだと思っただけだ。戸惑う御坂に、「私ね……」と小さなその思いを紡いでいった。

「ほらこんな状態だから。車椅子の生活だから。学校と家以外の崩を知らないんだ。きつとね、負担にはなっていると思う。それも申し訳ないことだけど、何より私が怖いのはそれを黙っていられることなの。もしかしたら私の見えないところで、もう疲れたような顔していないか、怖くてしょうがないんだ。さっき怒ったのにも、そんな気持ちがあるからじゃないのか、不安で不安で……」

わざわざ話かけるために、後ろの御坂へと態勢を傾けて喋る青葉。優しく語ろうとするけれど、御坂の目に映るその横顔は、今にも泣きそうな目を綺麗な髪の毛で隠し、ぐっと我慢していた。

そんな彼女の顔を見て、御坂は大きく息を吸う。何を言うかは、彼女の中で明確に決まっていたのだ。

「あーあ！　こんなに優しい人を泣かせるなんて、あいつは罪な男だわ！」

「ふえ？」

突然、大きな声を出した御坂。青葉はいきなりの出来事に目を丸くする。

そして御坂は、青葉に言ったのだ。紛れもない、桐原崩の彼女に対する思いを。

「あいつはいつも、アパートの家族のことを言うんですよ。無邪気に、楽しそうに、嬉しそうに、兄妹と小さな喧嘩をしたことから、あなたとどこにいったなんてことまで。私たちはいつもその話を聞いて、いいなあって思っちゃうんです。羨ましいなあって思っんですよ」

御坂は、青葉に笑顔で答えた。

「そんなあいつが、あなたを邪魔に思うわけないじゃないですか！　あいつは、東雲さんのことが大好きなんですよ！」

「え、えー！　！」　ぽかんとした表情が一気に蒸気を上げる。「え、え、え、それは、その、ぬわわわわわわ！」と一人で大変な

ことになっている青葉だ。御坂には心当たりがない。

「だから、東雲さん。待っててあげてください。帰ってきたら存分に殴っちゃいましょう!」

御坂の言葉に、青葉は一瞬止まってしまいが、同じように笑顔をこぼす。

「うん、そうだね。これはきつーい一発が必要かも」

そんな中、「青姉!」と大きな声で叫ぶ一人の少年が、前方から走ってくる。続くように小さな女の子が一人と、大人である女性がついてきていた。

「あっ!」と御坂は呟いて青葉を見る。青葉もそれに頷くと「何も言わずに飛び出してしまつて……」と申し訳なさそうに頭を掻いた。

そして、手を使って大きな声で呼ぼうとしたその時、

「……!?!」

『みんな!』と叫んだはずのその声が、出なかった。

いや、声を通らなかった。

前からアパートの住人が呼ぶ声も、御坂が喋っていた声も聞こえなくなる。

無音の世界が広がっている。

違和感を覚えた青葉はすぐに、何か言葉を発しようとした。しかしそれは発せられない。音声として発せられないのだ。だけれどそれはたった数秒間の出来事で、突然、堰を切ったように音が辺りに溢れ出した。

「あ、あれ……？」

エルギオンス兄妹の兄であるエバンスも、「今は……」と困惑しており、扇は喉元を押さえて、その違和感をすでに考察し始めている。

「……崩？……」

青葉は恐る恐る後ろを振り返る。御坂は車椅子を動かして、青葉の見つめる方向を正面にしてやった。

その先にあるのは、すでに遠くなった第七学区の中心部。爆破の煙が、今もごうごうと上空へ上っていつている。

そしてそこには、桐原崩がただ一人で残っているのだ。

「青葉、崩は……一緒じゃないのか？」

扇のその問いに、御坂と青葉は黙り込んだ。御坂は「あの……その……」と、齒がゆい思いを散り散りになって、なかなか言葉にするこ



とができない。

「大丈夫です」

そんな中、はつきりと言い切ったのは青葉だった。

全員が青葉に目を向ける。もちろん、さっきの彼女の言葉には何の確信もなく、むしろ聞いている方には、何か事の重大さを知らせるような、そんな響きにも聞こえるほどだ。

しかし青葉は、全員が自分に注目していることさえ忘れて、ただ前を見つめていた。

第七学区の中心部を。

桐原崩の、いる場所を。

「崩は、心配ないです」

『信じましょう』、御坂の言葉を反復する。

そして青葉は、ぐっと手を握りしめ、呟いたのだ。

「だから待ちましょう。約束しましたから。崩はすぐ戻ってきますよ。必ず、帰ってきます。何があっても、きっと……」

+

「、」休符を一つ置いて、麦野沈利は目を見開く。彼女のその表情が一瞬にして、先ほどの余裕から一転、一抹の緊張感を滲ませた。

「ほう、何だ？新手のマジックショーかよ」

彼女が撃ちはなつた、能力『メルトダウン原子崩し』の一撃。それは比類ない圧倒的な破壊力で、桐原崩という少年を完膚無きまでに消し飛ばすはずだった。

しかし、彼女の目に映った光景が意にそぐわぬものであったのは言うまでもない。

アスファルトの地面が綺麗にえぐり取られた場所から、視線を上空へと移す。

一人の少年が、ビルの壁に対して垂直に立っていた。

目の前で、人間が決して抗えないと歌われたはずの物理法則が、これこそ完膚無きまでに踏みじらられている。しかしここは学園都市だ。麦野沈利はあらゆる例外を知っていて、無論彼女もその例外であるのだから、変な話、目の前の奇っ怪な現実に多少の免疫力があったというのはさほど驚くことではないだろう。けれど、麦野は彼らの能力を知った上で、第七学区爆破を考えた。つまり、彼の『音を操る能力』の唯一の欠点であり最大の矛盾となる『騒音』を辺り一帯に撒き散らし、相手の能力効果を半減させることでこのふざけたような茶番劇を、上からの命令であるこの馬鹿みたいな仕事を一瞬で片付けようと考えていたのだ。

麦野沈利は、おそらくあの少年の能力であろうと推測する。彼の能力を抑圧していたにも関わらず、まだ重力に逆らえる程残っている不可解な力だと。

避難勧告が辺り一帯細部にまで行き渡ったのだろうか。第七学区の中央であるこの場所から、人の気配が全て消し去られていた。その不気味なほどの静けさが、目の前の光景を助長する。

「、」

そして麦野は、その不気味な雰囲気有助長するものに気づいてしまった。

「超かっこつけられてますね。もしかして、若干ねじの外れた……」  
「絹旗」静かに、端的に、麦野はその一言で隣にいる絹旗を制する。  
「どうしたんです？」と問いかける絹旗にも伝わるぐらい顕著な緊張感を、麦野は語尾に滲ませた。

「あいつ……何かおかしいぞ……」

そのとき、二人の見つめる先、ビルの壁に垂直に立つ少年が、

「……キビィ」

こちらを向いて笑った。

「「っ!?!?」」

麦野と絹旗は、その一瞬の笑みにゾツとする。

身の毛もよだつ程の曲がりに曲がったその凶悪的表情。

白目に対する黒目の割合が余りにも少ない。

そして、まるで鋭い三日月のように口を歪めてニタツと笑う。

ケラケラケラと、ワラウ。

もはや、最初の少年の面影が、そこにはなかった。

「な、何ですか…あいつ、っ!？」

目があったのを合図に、少年は何一つ待たずスタートダッシュをきった。壁に対して垂直なまま、まるで壁を地面のようにして踏み鳴らし進む。余波が少年の後を、ビルの外壁を余すところなく破壊して追尾し、有り得ないくらい早いスピードで彼女たちに突っ込んでいく。

「くっ、さつきより厄介な移動方法しやがって!!」

麦野は瞬時に判断して、先を予想した場所に、光線を打ちつける。少年はただ、ギリギリになって壁から飛び降りそれを避けた。

しかしもちろん、飛び降りる先の地面に立つのは、少年を待ち受ける絹旗だ。

「!!!」少年は何の躊躇いもなく、近くに現れた絹旗に対して荒れた暴力を振るう。

だけれど、そんな鍛錬もされていない粗末な暴力は絹旗の前ではただの赤子同然だった。

「全く、超大人しくしてくださいよ」

少年の暴力をかいくぐった絹旗の重い一発が、彼の鳩尾に深く突き刺さる。

少年の体かくの字に曲がって、地面から離れた。絹旗の能力『オフエン素装甲』によって生み出されたその拳の衝撃は、男性の力を遙かに凌駕し、車に激突された以上の圧倒的な攻撃力を誇っている。

絹旗はその確かな感触に、終わりを予想した。

しかし、

「……キシィ」

ぐるんと、絹旗の顔の横にあつた頭がこちらに勢い良く振り向いた。

「なっ!!??」

その狂つたような目が絹旗を捉える。

三日月のカーブはより急なものとなる。

それは、根源を揺さぶる、文字通りの意味を表した、邪悪な……

『恐怖』。

恐怖におののき、固まってしまった絹旗。考えることもままならぬ  
彼女の頭が、ゆっくりと伸びてくる少年の右腕に気づくのは、も  
う遅い。

「キシィ!!」

パン!!と、まるで風船が破裂したような軽快音。それは少年の

右手と彼女の頭の間で、鳴り響いた。

「……あ……」絹旗は状況を理解できない。平行感覚も、視覚も、全ての感覚は現状を処理出来なかったのだ。頭を中心にして、彼女の体が勢いよく宙へと飛び立った。止まることがないとさえ思えたその勢いは、彼女の障害として立ちはだかったビルに突き刺さって、停止を余儀なくされる。

「キシキシシ！」

少年はその不気味な笑みをやめない。間髪置かずに、絹旗の飛ばされた方へと、とどめをさすために走り出す。

「おいこら」

その一言の後、少年を薄紫の光線が捉えようとした。おそらくその少年には彼女の声が聞こえてないだろう。しかし、注意をひくには充分だった。

振り向いた少年と、麦野は対峙した。

一秒の睨み合い。

一瞬の殺気の殺し合い。

もはや二人に言葉はいらなかった。

少年は方向を変え、麦野に向かって突っ込んでいく。

「おい、狂ったままでいいのかよ？」麦野のその嘲笑うような笑みの直後、道路に横たわる瓦礫に衝撃が加えられ、大量の砂煙が巻き起こる。まるで壁のように、砂煙は麦野と少年の間に立ちはだかった。

少年は、何の躊躇いもなく、砂煙を突き破って向こう側の麦野へと手を伸ばす。

しかし、そこに麦野はいない。

「考えるよ」

微かに響く彼女の声。

「私の能力は、確かに圧倒的な破壊力を誇るかもしれないが、その分扱い方は慎重にしくちゃいけない」

そう考えれば、この砂煙は相手の気を逸らし、距離を取らせる。充分過ぎるほどの役割を果たしていた。

彼女は土煙のその向こうから、焦点を定め、掌の中に砂煙を捉えた。目標に標準を合わせるのはいだけいい。

勝敗は、一瞬の気の緩みと機転で決してしまうのだ。

「この二秒が、命取りなんだよ！！」

そして、薄紫の光線は彼女の手から発せられる。



「キシキシシ」

ただし、それは少年とは真逆の方向だった。

「っ!!??」

頭ごと振り向くほど、彼女に猶予は与えられていない。最小限の動きでとどめた頭から、眼球だけが、理解不能のこの状態を嘆くように上下すると、理屈が引っ込み暴走した現実のまかり通るその先を捉えた。

ケラケラケラと、笑う少年。

考える時間はなかった。すぐさま態勢を崩して、リアアットのよう  
に乱暴に振るわれた少年の手から抜け出すと、少しでもいいからで  
きるだけ距離を開けて、少年と対峙しようとする。

「、何だよ…そんなに早く移動できるなら、そうしろよ天の邪鬼！  
」

見つめる先、やっと少年にピントが合ったその時、

「な……………」

麦野は言葉を失った。

「な……………何だ……………それ、」

少年の後ろにある『それ』に、麦野は絶句する。

その一瞬の気の緩みは、

「キシキシシ」

少年が麦野のそばへと走り込むのに、充分過ぎるものだった。

「くそっ!?!……………」

目にも止まらぬ速さで打ち出された右拳が、捻るように麦野の腹部へと突き刺さった。ぐうの音も出さず暇もなく、勢い良く吹っ飛ばされて、周りの瓦礫を巻き込み、30メートルほど引きずられたとこ

るで、連れ添っていた瓦礫が重なってストップパーとなり、停止する。

「が、がはあ！……はあ、はあ、……おい、一体……何なんだよ？……」まるで内蔵をミックスされたような、不快な痛みが彼女の痛覚を刺激した。鉛でも入っているぐらい重たい腹部を無理矢理持ち上げ、震える膝を手で押さえつけ立ち上がる。吹き出る汗も吐血にも全く目もくれず、「ははは……」と力無い笑い声と共に、

前方を仰ぎ見た。

「……冗談でしょ……」

ひゅんひゅんひゅんと、何かが空を切った。

麦野の見る世界全てが、不明瞭なものとなっている。まるで無数の磨り硝子の破片が、空中を舞っているようだった。しかしそれは、最初に確認した少年の後ろだけではない。

麦野の見える視界全て。

左も。

右も。

上も。

何もかも全て。



悲鳴より金切り声で、

耳をつんざくその笑い声が、辺り一帯を飲み込んだ。

麦野は一つの仮説を導く。

これがもし、音の結晶だとしたら。

あの時の不気味な静けさが、消音されていたものだとしたら。目の前のあいつが、音を吸収したとしたら。

人の声も。

車の走る音も。

爆破の音も。

信号機の音も。

工事現場の音も。

電光掲示板のアナウンス音も。

もしあいつが、騒音と思われていた音を全部吸収したとしたら。

第七学区の音という音全てを、たった数秒間のものであっても全て吸収したとしたら。

「……………嘘でしょ……………」

あの不気味な静けさは成り行きなんかじゃない。一般市民の避難が終わったわけでも、爆破の余波が収まったわけでもない。

あの時、

第七学区は消音されたのだ。

そして数秒間の間に生じた全ての音は今、

目の前に、具現化されている。

音を操る音使い。

非公認のlevel5。

『じつじつことなのよ』

彼女の頭に甦ったのは、電話の女が、ファミレスで言い残したあの言葉だった。

『桐原崩っていうのはね、どんでもなく《恐ろしい》、新たなlevel5らしいのよ』

『それこそ悪鬼羅刹さながらの、』







## 悪鬼羅刹（後書き）

崩をほったらかしにしてたら、怒っちゃったWWW

んなわけではなく、崩の見せた黒い部分。どんどん物語が進み始めます。

今回はそんな序章と戦いました。

最後までお付き合いくださりありがとうございます。

また次回も見ていただけると嬉しいです。

感想、指摘なども待っています。

では、冷えピタでした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4833p/>

---

とある無題の音響（トーンレンジ）

2011年11月5日20時37分発行